

九州大学留学生センター紀要

第19号

目 次

(論 文)

- 中国の市場経済期における公費派遣政策の考察 白 土 悟 ... 1
- 体験型短期研修における日本語の授業
マヒドン大生短期研修を事例として 吉川裕子・菊池富美子・山田明子 ... 45

(報 告)

- 九州大学留学生のための日本語コース (JLCs) 大 神 智 春 ... 57
- 日本語研修コース 吉 川 裕 子 ... 71
- 全学教育科目の日本語 清 水 百 合 ... 83
- 日本語 CAI(Computer Assisted Instruction)コース 鹿 島 英 一 ... 87
- プレースメントテストのオンライン化の試みと問題項目の分析評価 小 森 和 子 ... 89
- 日本語・日本文化研修コース 清 水 百 合 ... 107
- 九州大学における春季プログラムの実践
AsTW(Asean in Today's World)の概要と今後の課題 郭 俊海・高原芳枝 ... 113
- 九州大学におけるサマーコースの実践
2010年プログラムの概要と報告 岡崎智己・高原芳枝・西原暁子 ... 119
- Unexpected Japan Early Impressions of Sojourning Students Jordan I. Pollack ... 129
- 2009年度 九州大学留学生センター・留学生指導部門報告
..... スカリー悦子・白土 悟・高松 里 ... 155

Research Bulletin
No.19
International Student Center
Kyushu University
2011

CONTENTS

(Articles)

- The Policy of Students and Scholars Abroad Supported Officially
at the Period of Market Economy in China SHIRATSUCHI Satomi ... 1
- Japanese Language Class at a Experience-based
Short Term Program: Mahidol University Students
..... YOSHIKAWA Hiroko • KIKUCHI Fumiko • YAMADA Akiko ... 45

(Reports)

- Japanese Language Courses for International Students (JLCs) OHGA Chiharu ... 57
- Preliminary Japanese Training Course YOSHIKAWA Hiroko ... 71
- Japanese Language Classes for Undergraduate Students SHIMIZU Yuri ... 83
- Computer Assisted Instruction Course for Japanese KASHIMA Eiichi ... 87
- Project of onlinization of placement test and evaluation of test items KOMORI Kazuko ... 89
- Japanese Language and Culture Course (JLCC)..... SHIMIZU Yuri ... 107
- Report on the ASEAN in Today's World (AsTW) 2010 Guo JUNHAI • TAKAHARA Yoshie ... 113
- Report on the 2010 Asia in Today's World (ATW) Program
..... OKAZAKI Tomomi • NISHIHARA Akiko • TAKAHARA Yoshie ... 119
- Unexpected Japan Early Impressions of Sojourning Students Jordan I. Pollack ... 129
- Review of International Students' Advising and Counseling Division
..... SCULLY Etsuko • SHIRATSUCHI Satomi • TAKAMATSU Satoshi ... 155

中国の市場経済期における公費派遣政策の考察

白 土 悟*

序

1978年12月末、中国共産党第11期中央委員会第3回総会（中共十一届三中全会）において、階級闘争路線の終結を宣言し、改革開放路線を採ることが決議された。これ以後を「改革開放期」と呼ぶ。楊暁京・苗丹国（2000）は改革開放期の留学政策の展開を2つの段階に区分している。第一段階は改革開放の決定から1991年末のソ連崩壊までの13年間で「改革開放前期」と呼ぶ。第二段階は1992年以降、冷戦後の市場経済化が進展した時期で、「市場経済期」と呼んでいる。⁽¹⁾

第一段階の「改革開放前期」の公費派遣政策については既に別稿で考察した。⁽²⁾ 本稿では、第二段階の1992年から2007年現在までの「市場経済期」の留学政策の展開を検証することにした。この「市場経済期」に公費派遣政策は改革されたが、それは1989年6月に起こった天安門事件にそもそもの発端がある。この事件が学生・知識人の中国政府への失望を招き、在外留学者の不帰国現象を助長したのであった。中国政府が対策を模索している最中、冷戦が終結した。国際政治・経済は大きく変動し、世界の留学交流も新しい展開を見せ始めた。

第1節 冷戦後の世界における留学潮流

東西冷戦は終焉に向かっていった。天安門事件から僅か5ヵ月後、1989年11月にベルリンの壁

が崩壊、東西ヨーロッパ再統合の動きが始まった。同年12月にはマルタ会談にて米ソ冷戦終結宣言が出された。そして、1991年12月、ソ連は崩壊した。社会主義国家の中心的存在が消滅し、中国の指導層は大きな衝撃を受けた。

さて、留学交流の方面でも大きな変化が生じた。1987年6月、西ヨーロッパでは新しい形態の留学交流が創設された。EC（欧州共同体）によるエラスムス計画（ERASMUS PLAN：European Community Action Scheme for the Mobility of University Students）である。これはEC委員会の奨学金によって域内大学間で実施する学生・教員の短期交換留学制度である。1989年にヨーロッパ単位互換制度（European Credit Transfer System：ECTS）が導入され、学生は1年間留学しても在学期間を延長することなく卒業できるようになった。当時、EC12カ国の高等教育人口は650万人、その10%の65万人を毎年交換留学させるという遠大な目標が掲げられた。⁽³⁾

冷戦終結後、1993年11月、ECはEU（欧州連合）に展開し、ヨーロッパ統合の枠組みが強化されるや、エラスムス計画は1995年度からソクラテス計画に含まれて継続実施されるようになった。2005年度には参加者は15万人に増えている。

1999年、ボローニャ宣言が29カ国の高等教育担当大臣により採択された。これは2010年まで

*九州大学留学生センター准教授

に各国独自の学位制度を整理し、また欧州高等教育の質保証基準を作成、域内の学位が正当に評価されること等を目指して、欧州高等教育圏 (European Higher Education Area) を成立させるものである。2007年現在、参加国は46カ国に拡大している。

EUの動向に対抗して、同じ1993年、米国、カナダ、メキシコの3国はNAFTA (北米自由貿易協定) を締結し、EUと並ぶ単一市場を形成した。この3国間の留学交流の規模は倍増された。他方、アジアでは1989年、APEC (アジア太平洋経済協力会議) が、参加国18カ国の貿易・投資の自由化や経済・技術協力を推進するために動き出していた。アジア地域の経済統合が構想されるなかで、1991年にUMAP (University Mobility in Asia and the Pacific : アジア太平洋大学交流機構) が発足、域内29カ国の学生交流の活発化が提起され、1997年には単位互換による交換留学制度の創設が決議された。これはエラスムス計画を範として、アジア・太平洋域内の経済統合を進めるための、広域経済圏で活躍できる国際的人材の育成と相互理解の促進を目的としたものである。以上のように、ヨーロッパ、北アメリカ、アジア・太平洋地域という三地域において経済統合の基盤づくりとして域内留学交流が推進された。

表1は、1990年から2007年現在までの先進諸国と中国における外国人留学生受け入れ数の推移を示している。⁽⁴⁾

米国では1990年の受け入れ数は約8万人であったものが、2005年には約56万人へと7倍に増えた。ヨーロッパの受け入れ先進国であるイギリス・フランス・ドイツでは、各国とも2～3倍増である。これに比べて、ソ連崩壊後のロシアは約7万人台で推移し、大きな伸びは見られない。アジア・太平洋地域では、日本が1984年6

月29日、『21世紀への留学生政策の展開について』を策定、2003年に10万人に到達したのが際立っている。オーストラリアは国策として教育産業化を打ち出し、オフショア・プログラムを香港・シンガポール・マレーシアなどアジア各地で展開、留学生受け入れ規模を急速に拡大した。わずか全39大学で21世紀直前、日本を追い抜き、2005年現在、16万人に達した。⁽⁵⁾

ところで、このような先進諸国の留学生受け入れ政策が強力なプル要因となって、中国からの海外留学、特に自費留学が急増した。裏を返せば、中国の留学生市場は先進諸国の高等教育のターゲットであり、将来もそれは続くと考えてよいだろう。

他方、世界の留学動向に合わせて、中国も外国人留学生 (来華留学生) の受け入れを拡大してきた。80年代初めから大学の短期語学研修プログラムを中心に受け入れ数を伸ばし、2006年現在、長期・短期の留学生を含め年間16万人に達した。各国留学生は主として中国語学習のために留学している。先端科学・技術によって留学者を惹きつけている先進諸国とは異なるが、受け入れ規模から言えば、中国は留学生受け入れ国としての相貌をすでに持っているのである。

第2節 知識人政策に対する天安門事件の影響

1. 「知識人」の概念

中国政府の留学政策の背後には常に中国共産党の知識人政策 (知識分子工作) がある。中国語の「知識分子」は一般に 知識人 と日本語訳されているので、ここでもそれを使用するが、そもそも中国における「知識分子」とはどういう人々を指すのであろうか。馬嘶 (2003) によれば、清朝末に西洋文化が流入した結果、特に海外留学した青年たちが新しい知識や観念を摂取して普及させたことにより、科挙制度を背景

表1 冷戦後における先進諸国と中国の留学生受け入れ数の推移(人)

年	米 国	ロシア	ヨーロッパ			日 本	オーストラリア	中 国
			イギリス	フランス	ドイツ			
1990	407,530	66,809	80,183	136,015	92,016	41,347	24,988	8,495
1991	-	-	88,141	136,306	-	45,066	-	11,645
1995	453,787	67,025	197,188	134,418	141,460	53,847	39,685	32,758
1996	453,785	-	196,346	129,761	146,472	52,921	46,773	-
1997	457,984	-	198,064	125,205	151,870	51,047	52,897	-
1998	481,280	-	213,264	121,624	158,435	51,298	56,810	43,084
1999	490,933	61,137	219,285	149,295	165,994	55,735	60,914	44,711
2000	514,723	57,907	224,660	-	175,065	64,011	72,717	52,120
2001	547,867	53,918	230,870	174,604	187,027	78,812	86,269	61,869
2002	582,996	60,674	242,655	196,706	206,141	95,550	116,504	85,829
2003	586,323	64,341	275,265	221,491	227,026	109,508	136,125	77,715
2004	572,509	75,786	300,050	245,298	246,136	117,302	151,798	110,844
2005	565,039	-	318,390	255,589	246,334	121,812	163,930	141,087
2006	564,766	-	-	-	-	117,927	-	162,695

出所) IIE 『Open Doors』、ユネスコ文化統計年鑑、日本文部省 『我が国の留学生制度の概要』、日本外務省 『主要国・地域における留学生受け入れ政策』2003年、各年度 『中国教育年鑑』また、Kemal Guruz (2008) 所収の統計表より作成。なお、各国の「外国人留学生」の概念は若干異なる。例えば、短期語学研修の学生を中国では含めるが、米国や日本では含めない。

に培われてきた伝統的な「士」(官吏)概念が近代的な「知識分子」概念に変化した。辛亥革命前後には「知識分子」は増加して重要な独立した社会階層をなし、各種の職業の様々な局面で異彩を放つようになった。また人文・社会科学、自然科学、工程技術、実業、法律、教育、文化、新聞、出版など多種多様な職業を出現させた。現在は「学歴の高低、知識の多寡、職業の尊卑、収入の高低によって、知識分子は高級知識分子と一般知識分子の両種に分かれる。前者は大学教授、学者、科学者、エンジニア、作家、芸術家、弁護士、主任医師、編集者、記者、高級職員等々である。後者は小中学校の教員、エンジニア、公的機関の職員、事務職員、医療従事者、大学生等々である。」⁽⁶⁾

すなわち、中国でいう「知識分子」とは「高級知識分子」と「一般知識分子」の両方を包摂する総合的概念である。従って、中国でいう

「知識分子」とは、簡潔に言えば、一定の科学的・文化的知識を有する人々であると言えるだろう。なお、「知識分子」を知識人と訳せば、誤解を招くかもしれない。日本語の知識人は「高級知識分子」だけを指すからである。しかし、ここでは「一般知識分子」も含めた総合的概念としての「知識分子」を知識人と訳すことにしたい。

さて、中国共産党の知識人政策は紆余曲折してきた。階級闘争路線下では、知識人層の中の「ブルジョア階級の知識人」を標的とする大衆運動が起こされ、1957年の「反右派闘争」から1976年の文革終結まで20年間、知識人に対する冷遇と迫害が続いた。しかし、改革開放路線下では、経済発展をもたらす科学技術と教育において知識人の必要性が全面に主張され、「知識人尊重」が唱導され、待遇改善が図られてきたのである。

2. 天安門事件の勃発

改革開放の中で「知識人尊重」が唱導されて10年、再び知識人と学生が中国政府に失望する出来事が勃発した。1989年6月4日の天安門事件である。国際情勢は冷戦終結に向かっていたときであった。

中国では1976年4月に生じた政変を「第一次天安門事件」、今度のを「第二次天安門事件」と呼ぶが、ここでは「天安門事件」とだけ記すことにしたい。この天安門事件は自費留学を増大させ、すでに問題視されていた在外留学生者の不帰国現象を助長する原因となった。

さて、天安門事件の概略を次に述べておきたい。1989年4月15日、中国共産党の前総書記・胡耀邦が急逝した。胡耀邦は「官倒」（汚職を行う官僚）とその背後にいる党長老派に対して非常に批判的であったため、党長老派によって失脚させられたと、胡耀邦を支持する多くの民衆は考えた。⁽⁷⁾

4月27日、胡耀邦の追悼と「官倒」を排除するための政治の民主化という二つのテーマを掲げて、北京の学生たちは学生だけによる約3万人の非暴力デモ行進を粛々と行った。さらに続けて、5月4日には五・四運動70周年記念デモ行進を行った。このデモ行進の勢いに乗って、5月6日、中国政府に対話を要求する請願書を提出し、天安門広場に数千人が座り込んだ。だが、政府の対応は遅々として進まず、5月13日、数千人の学生はハンストを決行した。5月15日にソ連の政治改革を推進するゴルバチョフ大統領が北京を訪問して中ソ和解するという歴史的行事が予定されており、世界のマスコミの目が中国に集まっていた。その機を利用して世界にアピールするためであったと思われる。

学生たちのハンストは、その純粋さによって教員や研究者や作家などの知識人および一般市

民の心情を揺さぶりながら100時間以上続き、ついに飢えと暑さで卒倒するものが出た。この様子を見ていた市民・労働者・農民は学生支援のため5月17日・18日に天安門広場に向けて四方八方からデモ行進し、広場は総勢100万人の群衆で膨れ上がった。全国各地の学生も北京のデモ行進に参加してきた。しかし、規模が大きいかかわらず、暴力沙汰は一切起こらなかったという。また、全国68都市で学生・市民によるデモ行進や座り込みがなされ、香港・台湾でも学生支援集会が行われた。世界各国に滞在する在外留学者も天安門広場の学生たちを支持するデモ行進や資金調達などの活動を行った。5月19日、党総書記・趙紫陽が学生たちにハンストを中止するよう説得するが、効果はなかった。

中国政府は5月20日、軍を投入して戒厳令を布告し、ついに6月4日未明、天安門広場での座り込み・ハンストを軍・武装警察からなる戒厳部隊を投入して鎮圧した。中国では「血の日曜日」と呼ばれる惨劇が起こった。世界のマスメディアは、学生や市民が「多数虐殺された」と報道したが、報道された死者数は数百人から数千人まで大きな差異があり、実際の数ははっきりしていない。中国政府は天安門広場での死者は皆無だったと国内外に発表している。だが、天安門広場以外でも衝突が起こっており、戒厳部隊と学生・市民双方に死傷者が出たことは事実として中国政府も認めている。欧米・日本など各国政府は中国政府に対する批判声明を出し、輸出入および投資を一時停止するなど、経済制裁を行ったのである。6月23日、中国共産党第13期中央委員会第4回総会（中共第13届四中全会）が開催され、この事件を「反革命暴乱」と規定するとともに、学生との対話による対応を主張した党総書記・趙紫陽を解任した。

3. 知識人の要求と挫折

国内の学生・知識人はもちろん、在外留学者もこの鎮圧行動に深い失望を味わった。彼らの失望がどのようなものであったか。心の内側を知ることは難しい。彼らの文章を手がかりにして推し量る以外にない。加々美光行編『天安門の渦潮』（岩波書店、1990年）は天安門事件に関する資料集である。その第4章は、方励之、嚴家其、劉再復、劉賓雁など国内外の知識人によって事件前後に発表された言論を集めている。⁽⁸⁾

1989年6月4日直後、6月18日に滞留中の米国から香港を訪れた劉賓雁（作家）はいずれ中国に帰国するつもりであったが、記者会見で次のように述べた。「今となっては、帰国することは絶対に不可能でしょう。…もともと自分が根無し草であると思ったことはないのですが、国内情勢の変化により、徐々に根無し草になってきました。…この傷口は20年たっても癒えることはないでしょう。たとえ政府が交代したとしても、なぜならこれほど残忍な事件は、歴史上起こらなかったのですから。20世紀にもなかったし、秦の始皇帝でも、これほど大規模な自民族の虐殺は行いませんでした。私の人生でも耳にしたことはありません。」と述べて、中国政府指導部を痛烈に批判したのだった。⁽⁹⁾

また、事件から1ヵ月後の7月5日、『聯合報』（台湾）に記載された論稿「国殤日1ヵ月宣言」（国殤日週月宣言）は、民主化運動のリーダーである北京市大学学生自治連合会の責任者・ウルケシと北京知識界連合会の責任者・嚴家其によって書かれたものである。「今日は『六・四大虐殺』からちょうど1ヵ月目に当たる。我々は全世界の中国人が、犠牲となった同胞に黙祷を捧げるよう呼びかけるものである。…鄧小平一派が反動的であるのは、とりもなおさず彼らが初めからこの世界史的潮流に対立する立場に

あったという点にある。彼らは魏京生を逮捕し、民主の壁を閉鎖し、いわゆる『精神汚染除去』、『ブルジョア自由化反対』などを発動し、さらに最近の常軌を逸した『六・四大虐殺』にまで至ったのであるが、その目的は彼らが公言するように、『国際的大気候』を逆転させ国際共産主義運動に別の模範を打ち立てることにある。…『89年中国民主運動』は…名実ともに全世界の華人による愛国民主運動である。古い歴史をもつ中華民族は『自由、民主、法治、人権』の旗印によってのみその生命力のすべてを発揮するということが、そこにははっきりと示されている。海峡兩岸の平和的統一であれ、香港、マカオの祖国復帰であれ、さらには故郷を離れ海外にいる者の報国の志であれ、まず中国の大地で『自由、民主、法治、人権』を実現するという原則があって、はじめて真の意義をもちうるのである。これ以外に中華民族生存の道はないのだ。」と述べている。これら中国の民主化運動を推進する知識人の言論は、背後にいる大勢の知識人・学生そして市民の意思を一定程度、代弁していると考えてもよいだろう。⁽¹⁰⁾

では、一般の在外留学者の心情はどうであったのか。当時のマスコミへの簡単なコメントの記事や映像はあるが、文献としてはほとんどない。世界各国の在外留学者の活動はどこでも同じようなものであったらしい。在日留学生も同様に全国で募金活動を行い、中国大使館・領事館にデモ行進して、天安門の学生たちを支援しようとした。それだけに6月4日の鎮圧に対する在日留学生たちの落胆はかなり深いものだった。学生たちは泣き声をあげて、政府の非道を非難した。その錯乱せんばかりに悲しむ様子は、彼らの憂国の情として留学関係者の目に焼きついたのである。

鎮圧から1ヵ月後、7月4日『西日本新聞』

(福岡本社)に中国人留学生の投稿文「わが祖国に春は来るか」が掲載された。この一文に当時の留学生の心情の一端を窺うことができる。投稿者は「常思郷」(常に故国を思う)と名乗る。文革中、高校生だった彼は農村に下放され、セミを食べて飢えをしのいだ経験もあるという。⁽¹¹⁾

「6月4日の『血の日曜日』、私は日本のある都市の私のアパートでテレビにかじりついていた。『ひどい!』という衝撃と、『やっぱりそうか』という思いが頭の中をぐるぐる回った。翌日、大事な用事で出かけねばならなかったが、私は着替える気力もなく、一日中寝ていた。…民主化運動が鎮圧された後の天安門広場に、何万という子どもたちが集められ『愛国・愛党』と叫ばされている。何の意味があるのか。私たちと同じように彼らもやがて共産党に絶望するのだと私の胸は痛む。…今回の事態の中で、解放軍が市民に向けて発砲したこと以上に私に大きなショックを与えたことがある。流血の弾圧の後、当局は市民たちに密告を奨励した。アメリカのテレビ局が撮影したフィルムを放映し、その中で市民を煽動している男を密告するよう呼びかけた。すると、約1時間後に、この男が大連で逮捕されたのである。密告したのは中年女性だ。中国のテレビは彼女が『あの男は近所の人だからすぐ分かった』と得意げに語るのを英雄扱いで放映した。彼女には罪の意識も後ろめたさもなかった。日本のテレビでその姿を見て、私は言いようのない衝撃を受けた。悲しいがこれが中国の民衆の実像だと私は思う。人間として何がただしいのか。いま何をなすべきなのか、なすべきでないのか、分かっていない。しかし、それは彼女の罪ではない。…彼女は何一つ正しい情報を知らされていない。更に言えば、この数十年間、社会状況に関して正しい判

断ができるような情報を知らされていないのだ。」と述べ、「日本にいる中国人留学生の大部分は今の中国に帰りたくないと思っている。日本の物質的豊かさが魅力なのではない。多様な情報の中で自分の価値観を持つ喜び、自分の意見を自由に表現する喜び、生き方を自分で選択できる喜びがいかに大きいかを知ったからである。…民主化に向けて動かなければ、中国に未来はない。何をどうすればよいか、私は途方にくれるばかりだが、いずれは中国に帰る。帰って少しでも中国を変えたい。」と結んでいる。

この記事から、中国共産党への不信、大衆に情報が与えられていない状況(報道統制)、知識人に言論の自由が許されていない状況(言論統制)、この3つの国内事情に対する在外留学生の挫折感を読み取ることができる。

4. 頭脳流出の発生

(1) 米国その他の受け入れ国の対応

ロサンゼルス・タイムズ紙の外交担当記者ジェームズ・マン(1999)によれば、米国ワシントンD.C.では、天安門の武力弾圧の翌日6月5日、在米中国人留学生たちによって議事堂正面で5,000人とも1万人とも言われる抗議集会が行われた。ホワイトハウス前を行進するなど、彼らの反中国政府的な行動は全米の注目を集めるところとなった。6月7日、抗議集会を組織した留学生リーダーらは、米国その他の国に対して、第一に中国に経済的圧力を加えること、第二に1990年の北京アジア大会をボイコットするよう説得すること、第三に米国政府が中国人の国家派遣留学生の帰国義務を免除して米国に残留できるよう規則を改めること、この3つの目標を留学生運動によって追求することを決議した。⁽¹²⁾

1989年6月11日、ジョージ・ブッシュ大統領

は在米中国人留学生の人権保護を目的として滞在期間を1年間延長すると公式発表した。しかし、延長を認められた者は1年過ぎれば例外なく帰国しなければならず、再延長は認めないという内容だった。当時の在米中国人留学生のほとんどが帰国義務のある国家派遣の理工系大学院生であり、米国は中国との協議によってこのことに同意していた。しかし、1年間の滞在延長後に必ず帰国しなければならないことに不安を抱く中国人留学生たちは世論の後押しを受け、連邦議会（特に、反ブッシュ派）に米国滞留を許可する法案の成立を訴えた。

ブッシュ政権は1978年以降の20年間の良好な米中関係を維持したいと願っていたとジェームズ・マンは言う。「1989年6月を通じて、中国政府は大掛かりな弾圧を行って全国の動揺を抑えた。数千人の活動家が逮捕され、なかには直ちに裁判にかけられた者もいた。中国のテレビはほぼ連日のように裁判の様相を中継し、頭を刈られ、身体中のあちこちに傷を負った被告たちが弱々しい声を発する様子を放送した。判事の前に引き出された彼らには、重い懲役刑やときには死刑が言い渡された。」このような映像が米国でも放映され、米国民の怒りをかった。これによってブッシュ政権の願いは打ち砕かれた。⁽¹³⁾

その頃、天安門広場の民主化運動を支援して、海外でデモや集会に参加した各国の在外留学生の間に、帰国すれば厳罰に処せられるという噂が流れていた。中国の在外公館が海外でのデモや集会の報道映像を分析して、「反政府活動」の参加者名簿を作成し、母国に報告済みだというのである。この真相は分からない。というのも、中国政府はこの噂を否定しているからである。⁽¹⁴⁾

中国は反政府活動の首謀者の捜査に乗り出し

ていたであろうが、デモに参加した在外留学生を悉く逮捕することまでは考えていなかったのではないかと推測される。だが、米国だけではなく、世界中の在外留学生はこの噂に恐怖を感じたのである。筆者がある留学生から直接聞いたところでは、中国の家族への国際電話は盗聴され、国際郵便は開封検閲されているようなので、事件後の本当の様子を国内の家族から詳しく聞くこともできず、海外から何も相談できない状況に陥ったという。

かくして在米中国人留学生のロビー活動等が奏効して議員たちによる法案がいくつも提起された。その中で下院議員ナンシー・ペロシの提出した、公費留学生の帰国義務を一時停止する案が在米中国人留学生たちには穏当に思われた。しかし、ペロシ案が法制化されれば、中国政府の反撥は免れない。1989年11月、ブッシュ政権は法制化に反対、将来の教育交流が不可能になりかねないと主張して、廃案にしようとした。だが、逆に世論の反撥を買い、法案は下院で可決、翌日上院で承認された。

そこで1989年12月、ブッシュ大統領は拒否権を発動した。しかし、議会で再議決されれば拒否権は無効になる。そうならないよう、自ら大統領命令で中国人留学生の学業修了後の帰国義務規定を削除することを発表したのである。ペロシ案とほとんど同じ内容であった。その内容は4項目からなる。1994年1月1日まで、交換学者や留学生のビザをもつ中国人は米国に滞在できる。1989年6月5日から合法的に米国に居住する個人はその合法的居住権を継続して保証する。1989年6月5日以前より米国にいる中国人は就労する権利を付与される。不法滞在の身分で米国を出国すべき人に対して、通知した期限が来ても、強制退去は実施しない、というものであった。

翌1992年5月、下院において中国人留学者が帰国して政治的迫害を受けまいよう「中国人学生保護法」(Chinese Student Protection Act of 1992)を可決。同10月9日、ブッシュ大統領がこれを批准、正式に発布した。この法律は、1993年7月1日までに在米中国人留学生や研究者が中国に安全に帰国できることを大統領が議会で証明できなければ、そのとき発効するというものであった。その内容は、中国人留学生・研究者のビザが切れても1994年1月までは強制退去を求めないこと、また中国政府発行のパスポートが期限切れなどで失効した場合、米国滞在や第三国への旅行に支障がないようにパスポートに代わる特別文書を発行するなどの処置を取るといったものであった。⁽¹⁵⁾

かくして1993年7月1日に中国人留学生・研究者の安全な帰国が証明できなかったため、「中国人学生保護法」は発効した。同年9月13日『南洋商報』(シンガポールの新聞)は、「今年7月1日以来、4万9000人の中国人留学者が米国移民帰化局に永住権を申請、その大多数が今月中に認可される見込みである」と伝えている。1年間で申請件数は5.7万人まで膨らんだ。数万人の留学生家族も永住権(グリーンカード)を獲得した。彼ら配偶者の多くもまた中国で高等教育を受けた高学歴人材であった。留学生とその家族は永住権を得て華僑となったのである。このような米国政府の処置に対して、中国政府は頭脳流出を招いたとして厳しく批判した。まさに大量に人材が流出してしまった。⁽¹⁶⁾

米国のみならず、その他の留学先国でも、中国人留学者は自衛的手段として、専攻学科の変更や他大学への編入、卒業の引き伸ばし、研究の延長、永住権の取得、外国籍の取得(移民)、第三国への進学・就職など様々な方法で帰国を回避し始めた。逮捕されるという恐怖もあった

であろうが、心底には中国政府への不信が生じていたと思われる。

カナダ政府は1989年9月、帰国後に政治迫害を受けるとされるカナダ在住の中国人留學生に永住権申請を承認するという移民政策を取った。表2はカナダ移民局の統計であるが、新中国からは1989年から1992年までの4年間で3万6000人余が移民している。また、オーストラリア政府は1989年12月、移民法を改定。従来、留學生は10年以上滞すれば長期居住権の申請資格を得るものとし、移民は2年以上オーストラリアを離れ国外から申請しなければならないとされていたが、それを廃棄し、また1990年12月19日以後にオーストラリアで正規教育を終える留學生は職業を得れば永住権を申請できるものとした。こうしてオーストラリアで学ぶ3万6000人の中国人学生(3万人は語学学校生)の居住権を承認した。当時、全留學生数の85%が中国人学生であった。

米国・オーストラリア・カナダなど移民国と違って、日本政府は特別に留學生保護措置を取らなかった。しかし、程希(2003)は、「1990年、日本は出入国管理及び難民認定法を改正、学歴があり専門分野に長じた外国人留學生が日本で就職することを奨励した。日本のこの措置は六四事件と必然的關係はないというものの、専門家でない中国人留學生にもびったりと当てはまる。疑いなく中国人留學生が日本に滞留するための方便を提供したのである。以後、中国人自費留學生(在日中国人学生の90%は自費)の絶対多数が日本での就職を選択できるようになった。」と述べている。⁽¹⁷⁾

すなわち、1990(平成2)年5月24日、日本法務省は「出入国管理及び難民認定法第7条第1項第2号の基準を定める省令」を公布し、在留資格「投資・経営」、「会計・法律」、「医療」、

「研究」、「教授」、「技術」、「人文知識・国際業務」、「企業内転勤」、「興行」などの就労資格基準を明記し、資格基準を満たせば日本で就労（起業も含む）できるようにしたが、これは中国人留学生を吸収する移民政策だというのである。⁽¹⁸⁾

(2) 中国における出国留学の増加

他方、留学名目による出国は国内においても生じていた。国家教育委員会は次のように述べている。「1989年春から夏へ移る頃、政治風波が発生した。国内の出国熱は再び上昇した。自費留学申請者が大量に増加した。この年、TOEFLとGREの受験者は4万人に達した。1988年の同時期に比べ、1万人余多い。その50%は大学教員と大学院生であり、すでに教員と学生の隊伍の安定に悪影響を及ぼした。全国で200余の機関において派遣人数が増加した。一部の人材開発・交流機関は関連する国家政策に則って厳格に審査せず、甚だしきは出国手続きで暴利を得ていた。出国の道程の混乱は激しくなっていた。これと同時に、一部の西側資本主義国は反中国・反共産党の波を起し、機会に乗じて露骨にわが在外人材を押さえ留め、掠奪した。各種の法令、例えば四つの行政措置や特殊移民政策などを通して、わが留学人員、特に優秀な人材に永住権を獲得させた。わが留学人

員の不帰国現象は日々厳しくなっていた。」⁽¹⁹⁾

以上のように、天安門事件は留学者が祖国に戻らず外国に定住することを真剣に考える契機となった。同時に、国内の知識人や学生も海外留学を手段として、海外定住あるいは移民を強く意識するようになった。すなわち、政治的理由で多くの高等教育を受けた人々が流出したと言えるであろう。すべての人々の不帰国が頭脳流出（Brain Drain）、中国語でいう「人材流失」の概念に含まれるわけではないが、不帰国者の中には「人材流失」と呼べるような優秀な人材が多数いたに違いない。特に、国家派遣・機関派遣の留学者が帰国義務を放棄すれば、それは明らかに「人材流失」と言えるであろう。また、帰国義務を守らないで済むように滞在許可を出した先進諸国に対して、中国政府は「人材掠奪」であると抗議声明を出した。中国政府にとって憂慮すべき事態であった。

5. 知識人政策の強化

天安門事件から1年2ヵ月後、1990年8月14日、中共中央は「知識分子工作を更に強化し改善することに関する通知」（關於進一步加強和改進知識分子工作的通知）を發布した。これは中央政治局常務委員会および政治局会議などで議論された内容を公示したものである。この「通知」は9項目からなる。以下、要点を列記

表2 1990年代初期の中国からのカナダ移民者数（人）

年	大陸	香港	台湾	計
1989	4,430	19,908	3,388	27,726
1990	7,989	29,261	3,681	40,931
1991	13,915	22,340	4,488	40,743
1992	10,118	37,787	7,213	55,118
計	36,452	109,296	18,770	164,518

出所) 范瀛 (1998) 所収

することにしたい。

第1項目の見出しは「全党は知識分子工作を高度に重視し、それを重要な日程に据えること」というものである。国家主席・江沢民の「愛国主義と我国知識人の使命」と題する、五四記念報告会（青年紀念五四報告会）での講演以後、知識人の反応は良いので、この機会に知識人工作をさらに強化し改善しようと述べる。

第2項目は「党の知識分子隊伍についての基本的計画と基本的政策を堅持することが、知識分子工作をしっかり行う立脚点である」という。改革開放後、知識人は社会主義の祖国のために功績を挙げてきた。知識人の大多数は天安門事件の動乱に反対したのである。「知識を尊重し、人材を尊重する」という方針のもとに進められた中国共産党の知識人政策を変えてはならないという。

第3項目は「知識分子は労働者階級の一部であることを深く理解し、党の知識分子政策を正確に把握すること」という。知識人は労働者の中の頭脳労働に従事する人々であり、「知識分子を労働者階級の外に排除したり、彼らに不信を抱いたり、甚だしくは蔑視するような態度を取るのとは全く間違っている。また、知識分子を労働者階級の上にいる独立した階級であると説いたり、労働者階級から引き裂いたり、産業労働者と広大な労働者大衆が対立するようなことは全く間違っている。」と述べる。各レベルの党委員会や地方政府は知識人を政治的に信任し、その生活に配慮し、彼らに労働者階級の歴史的使命を担うよう指導せよと述べる。

第4項目は「知識分子工作を強化し改善する目的は、広大な知識分子に現代化と改革開放の中で重要な役割を果たしてもらうことにある」という。そのために中央政府や地方政府は科学研究や教育事業に対する財政投入を従来通り増

加ししなければならない。また、適材適所に配置するために合理的な人材流動を促し、かつ優秀な青年人材を輩出する政策を講じなければならず、教育・科学技術・文化・衛生事業の発展のために知識人が十分に力を発揮できるようにしなければならないという。

第5項目は「党の中央委員会から地方委員会まで、責任ある態度で、知識分子の生活条件を改善するよう努力せよ」という。ここで、党中央委員会は各官庁や地方政府にすぐに知識人の給与・職称・住居・医療などの問題を専門的に検討して、改善措置を講じるよう指示している。

第6項目は「広大な知識分子が実践と結びつき、労農と結びついた道を歩むよう積極的に指導すること」である。知識人や青年学生が社会的実践や生産実習に参加するために企業や農村は機会を提供し、大中企業は青年学生のための生産実習の基地となるようにする。また、大学は教育計画の中に生産実習や社会的実践活動を取り入れ、地方政府の許可を得れば、受け入れ企業等に大学が実習費を支払わないで済むようにしたり、遠方で実習する学生の交通費を安価にしたりするなど、関係官庁や地方政府に具体的方法を制定するよう求めている。

第7項目は「長期にわたって気をゆるめずに、『四つの基本原則』を堅持し、ブルジョア階級の放任的政治思想（資産階級自由化）を基盤とする教育に反対しなければならない」という。ブルジョア階級の放任的政治思想は社会主義制度や共産党の指導を否定し、資本主義社会に進むよう主張するもので、「四つの基本原則」（社会主義の道、プロレタリア独裁、共産党の指導、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想を堅持すること）と対立する政治思想である。その思想との対立と闘争は今後も長く存在する。特に、「青年知識人については愛国主義教育を強化し、

マルクス主義哲学を学習させ、弁証法的唯物論と史的唯物論の立場を理解できる」まで指導するよう指示している。⁽²⁰⁾

第8項目は「百花斉放・百家争鳴の方針を実行し、科学文化事業を発展させるよう決意を固めること」である。百花斉放・百家争鳴として、様々な見解を自由に述べることは、「四つの基本原則」と相容れない方針ではない。「四つの基本原則」を守るという前提の下に学術の自由と創造の自由を保障するようにする。知識人が学術活動と政治活動を区別して、政策の限界を把握して、学術研究で祖国建設に努力することを奨励するよう述べる。

第9項目は「各レベルの党委員会の責任者は、意識形態の工作を自ら行い、指導的幹部は知識分子と広く交友しなければならない」という。「意識形態の工作」とは、社会主義に反対する政治思想を浸透させないという意味であるが、そのことを重視すること。また、幹部は知識人と親しく交友し、彼らの意見や提言を聴き、中国共産党や政府の工作批評も真摯に受け止めること。党委員会には多くの知識人のいる民主党派に状況を説明したり、また意見交換したりして協力し合うことを指示している。そして、中共中央は地方政府の党委員会に毎年、知識人工作の進展状況の報告を求めることにしたという。

以上のように、中共中央は全国の黨員間に天安門事件後に再燃した知識人に対する不信や蔑視を警戒して知識人尊重を呼びかけると同時に、知識人の意見を聴取し、また学生に対する社会主義教育を強化するよう指示した。知識人排撃の風潮が再び党内に広がりつつあったのではないかと思われる。

なお、天安門事件の翌日1989年6月5日、北京の米国大使館に亡命を求めて駆け込んだ反政府活動家・方励之とその夫人は1年後の1990年

6月25日、米中交渉を経て、漸く解放され、北京からイギリスに向けて出国することが許可された。この方励之の解放を契機に、同7月から西側諸国は停止していた銀行融資を再開。1992年1月31日、中国は国連安全保障理事会に久しぶりに参席して、国際社会に復帰したのである。⁽²¹⁾

第3節 国家派遣政策における政治条件の厳格化

1. 公費留学生の政治思想工作の強化

1989年6月4日の天安門事件は「反革命暴乱」とされた。海外では中国共産党の一党独裁と人権軽視に対する批判的意見が数多く表明されたが、国内でも同じ憤懣や批判が潜在したことは想像に難くない。こうした政治思想の「問題」（反体制的思想）に対処するために、全国の大学や教育機関等の党委員会は、「四つの基本原則」など党の政策に関する教職員の学習会を一斉に実施して、政治思想を引き締めた。

この引き締め策の影響は国家派遣留学制度にも及んだ。1989年9月、国家教育委員会は「全国培訓部工作会議」を成都で開催した。国家派遣による留学予定者の短期語学教育や海外生活のオリエンテーションなどを行っている全国の「培訓部」関係者が集められた。会議は留学予定者の外国語教育の経験交流が主目的であるが、加えて政治思想教育の方針も話し合われた。なお、表3は、教育部指定の「培訓部」である。「培訓部」は比較的年齢の高い留学予定者を対象とする留学準備教育コースで、海外での外国語訓練に支出しなければならない外貨を節約する目的で1978年以降、北京、上海、広州など国内11ヶ所に設置された。その他にも、中央官庁や地方政府管轄の大学・研究機関に「培訓点」

が多数設置されている。⁽²²⁾

さて、「培訓部」においては外国語訓練とともに政治思想および道德教育が行われる。殊に政治思想教育が重視されるようになった理由は、郝二奔（1994）によれば、青壮年の知識人の間にニヒリスティックな思想状況が生じたからであるという。⁽²³⁾

「改革開放以来、各種の西側の思潮が我国に勢いよく入ってきて、多くの学徒に曖昧模糊とした、甚だ混乱した思想認識の問題が生じた。例えば、我国はなぜ社会主義制度を建設しなければならないのか。社会主義と資本主義は結局、どちらの制度がより良いのか。もし社会主義が資本主義制度に比べ優越しているというならば、我国はなぜ改革開放するのか。なぜ西側資本主義国家のものを学習しなければならないのか。東欧での巨大な変化やソ連の解体以後、ソ連や東欧の社会制度に変化が生じているのに、我国はなぜ『四つの基本原則』を堅持しなければならないのか等々である。どの留学生も出国前に必ずこれらの問題をはっきりと認識しなければならない。そうすれば、きっと留学する目的や

任務や責任を正確に理解できるし、西側敵対勢力の平和を装った陰謀（和平演変）を見破り、西側の価値観や生活方式を自覚的に排斥し、進んで我国の社会主義建設に有用な知識を努力して学習し、帰国して祖国の四つの現代化建設のために貢献するだろう。」という。

北京語言学院出国留学予備人員培訓部（現在、北京語言大学出国留学人員培訓部）の実践報告では、政治思想教育は次の6つの内容で行われた。国際情勢教育（国際形勢教育）、近現代史教育、二つの道・二つの制度についての教育（社会主義と資本主義）、中国共産党の基本路線教育、愛国主義教育、特別講座の開講などである。その内容は表4に示すとおりであるが、天安門事件以来、「紅であり、専である」（社会主義の自覚をもち、かつ専門分野の基本的知識を習得しているという意味）という人材を育成するためのカリキュラムが強化されたのである。

2. 不帰国抑止対策の指示

1989年12月、党総書記・江沢民は中央政治局

表3 2008年現在の出国留学人員培訓部の名称と訓練言語

名 称	訓 練 言 語
北京語言大学出国留学人員培訓部	英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、イタリア語
北京外国語大学出国人員培訓部	英語
上海外国語大学出国留学予備人員培訓部	英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語
同濟大学留徳予備部	ドイツ語
広東外語外貿大学出国人員培訓部	英語、フランス語、ドイツ語
中山大学外語学院英語培訓中心	英語
西安外語学院出国留学人員培訓部	英語
東北師範大学出国留学人員培訓部	日本語、英語
大連外語学院出国培訓部	日本語
四川大学出国留学人員培訓部	英語、ドイツ語、ロシア語
四川外語学院出国培訓部	英語

出所) 教育涉外服務与管理叢書編集委員会編 (2005)

表4 1994年北京語言学院出国留学予備人員培訓部における思想政治教育課程

課 程	内 容
国際情勢教育	東ヨーロッパの変化とソ連解体の原因と過程、西側帝国主義の和平転覆の戦略などの講義。
近現代史教育	中国が半植民地状態から脱却し社会主義を選択するまでの近現代革命史の講義。および映画「歴史は未来を教える」(讓歴史告訴未来)・「桃園之路」などの学習。また、中国歴史博物館、抗日戦争紀念館、航空博物館、円明園、天安門樓閣の見学。
二つの道・制度についての教育	中央党校教師陣による、社会主義と資本主義の区別、社会主義が資本主義に取って代わる必然性、中国の特色ある社会主義、社会主義初級段階における党の基本路線などの講義。
党の基本路線教育	改革開放の現状を理解するために、工場・農村見学。
愛国主義教育	留学後に帰国して祖国に貢献している先進的な人物を学習する。
特別講座	「留学史講座」：孫文、廖仲愷、秋瑾、陳天華や周恩来、朱德、鄧小平、陳毅、聶榮臻などの革命家の救国精神、錢学森らの科学的貢献に関する講義。 「宗教知識講座」：唯物論の観点からのキリスト教・仏教の形成と発展に関する講義。 「出国後の安全と機密保持の知識講座」：外国の政治闘争に参加しないこと、現地の法律を遵守し、風俗習慣を尊重すること。党と国家の機密を守ること。健康と安全を守ることなどの講義。 「対象国の情況紹介」：各国の社会情況や修学・生活に必要な準備についての講義。

出所) 郝二奔 (1994) より作成

常務委員会において、留学問題に関する幾つかの提言を行った。トップリーダーの提言は至上命令的な指示である。会議紀要は内部資料であり通常閲覧できないが、楊曉京・苗丹国 (2000) によれば、次のような提言であったという。⁽²⁴⁾

公費留学生の荣誉感と義務感を強め、公費留学生に必ず帰国義務を果たすという観念を持たせること。

機関派遣の留学生は公費留学生の一部であるので、管理を強化し、盲目性を克服すること。

国家派遣計画は現在の予算総額を保持するが、構造を調整して、厳しく選抜し、「定人定向」、努めて質を保証し、帰国を保証すること。

留学生の選抜派遣仕事を改善して、彼ら

の政治思想の考察を強化すること。

原則として、学位取得のための留学生は派遣しない。米国とカナダに派遣する留学生の人数を減らす処置を取ること。

要するに、
・ ・ のように、公費留学生の政治思想と祖国奉仕精神を強化する教育指導を要請した。また、 のように、帰国を保証するために「定人定向」という派遣方針を取ることが提言された。「定人定向」とは、留学派遣にあたって、あらかじめ就職先(復職を含む)を決めておいて、海外留学で自己の仕事に必要な専門分野を学習させることである。就職先が決まっていれば、学習にも集中して取り組み、不帰国もある程度抑止できると考えられたのである。さらに、 では、移民政策を警戒して、米国やカナダへの公費留学を減らすこと、学位

取得を目指すような長期派遣をしないことが提言されている。これらはすべて公費留学生の不帰国抑止対策である。それほどまでに公費留学生の不帰国問題は重大視されたのである。

思うに、中国を含め新興国家は社会建設に国民一丸となってエネルギーを注いでいる。このような国家総力的エネルギーは先進諸国では過去のもので、今では見られないものである。中国が公費留学生の不帰国問題に取り組む、やや執拗な姿勢は民族主義的エネルギーの為さしめるところであろう。

3. 第三世界からの外国人留学生受け入れ制度の改革

一方で、外国人留学生の受け入れ制度が改革された。1990年2月1日、国家教育委員会国際合作司は「第三世界国家から外国人留学生を招致し養成する方法の改革に関する意見」（関于改革和培养第三世界国家来華留学生辦法的意見）を提出。冒頭に、中国は文革期の1973年に留学生受け入れを再開して以来、第三世界国家（主にアフリカ諸国）から留学生を受け入れてきたが、「彼らの年齢が低く、学業の基礎と文化的素養が乏しく、中国滞在が長くなりすぎる。また管理が難しくなり、取得する学位も低く、帰国後の就業も難しいので、養成効果は高くないなどの問題がある。」と述べる。そこで今後、第三世界国家からの留学生に関しては、「受け入れる留学生のレベルを上げ、滞在期間を短縮し、養成の質を保証する」（提高培養層次、縮短培養周期、保証培養質量）という方針に転換し、行政・教育・科学研究関係の「高級人材」を養成することにした。以下は、関連部分の訳である。

《一．文科・医科及び特別な国家以外は、

一般にアジア・アフリカ・ラテンアメリカと南太平洋諸島の国々の高校卒業生に対して、本科では奨学金は給付しない。これらの国家の大学専科以上の学歴を有する在職者（大学や高校の教員、政府官吏、工程技術者、医療従事者など）や大専の卒業見込みの学生や大学の本科卒業生を募集し採用することに改める。

二．第三世界国家の留学生を養成するのに学歴教育を主とし、短期研究やトレーニングを従とする方針である。自国で既に大学専科・本科の卒業証書や修士学位を得ている者は中国で一定の期間学習すれば、我国の学士、修士或いは博士学位を授与できる。自国で大学教授や准教授である者は中国で短期の学術研究をすることができる。

三．第三世界国家の留学生を受け入れる大学や学科は集中させなければならない。第三世界国家の実際の需要と国内の大学の状況を見て、若干の大学を第三世界国家のために国際政治・経済・管理・法律・農学・牧畜・獣医・水利・機械・建築・紡績・食品・製糖・道路・採鉱・無線電話・医学・針灸・薬学・数学・物理・化学などの専門の高級人材を養成する重点校にする。

四．教育は留学生だけのクラスを単独編成し授業を受けるのを主とし、中国人学生と合同クラスで授業をするのは従とする。自国で既に大学専科・本科の卒業証書を得ている人の場合、通常、単独クラスを作り授業を受ける方式を取る。

五．授業では、中国語及び外国語（英語、フランス語。目下は主に英語）を用いて直接に教育する方式を実行する。中国語を用いる教育については、学生は中国に来てから1年間中国語を学習することを求める。しかる後

に専門の学習に転入する。外国語を用いる教育では、学生は中国に来た後すぐに専門の学習を開始してよいが、同時に中国語も（入学時から）学習する。生活用語などの問題を解決するためである。

六．第三世界国家の留学生に我国の学歴証書や学位証書を与えるには、厳格に学習水準を要求し、また中国学生とは区別しなければならない。大学専科卒業の学歴保持者には、中国で2年間専門を学習し成績が合格に達すれば、本科卒業証書と学士学位を授与できる。大学本科卒業の学歴保持者には、中国で1年間修士課程において学習し、かつ資格試験を通過した後、更に1年間学習して成績が合格に達すれば、修士学位を授与できる。成績が要求水準に達しなければ、「進修証書」を発給してよい。修士学生は論文型の養成以外に、課程型や学位型の養成でも良い。

第三世界国家の留学生、殊にアフリカ諸国の留学生に我国の学士・修士学位を授与するには、世界各国（特にイギリスとフランス）の通常の方法を参照し、第三世界国家の実情を十分に考慮しなければならない。もし我々がこれらの国家の実情とはかけ離れた基準を要求するならば、これらの国家からの留学生に対する吸引力を失うだけでなく、彼らの帰国後に好ましい影響を与えられず、我々にとって益がない。

七．特別な国家の高校卒業生が中国で理・工・医・農の本科で学習する場合は以前の通り現行試験で採用する方法を取るが、それ以外の国家の者が中国で学習する場合には、その国の試験で採用する方法を取ってはならない。派遣国の関係機関や専門家或いは一定の職務資格を有する教師の推薦によって、又はわが受け入れ大学及び指導教員が申請者の学

歴証書・成績表・推薦書などの材料を審査することによって採用する。採用後は、国家教育委員会国際合作司が在外公館に中国での学習ビザを発給するよう通知する。

八．積極的に工作を行い、既にわが大学の優秀な卒業生が再び中国に来て深く研究しているが、そうなるように頑張ってもらいたい。》（国家教育委員会国際合作司「關於改革和培養第三世界国家来華留学生辦法的意見」）

中国は第三世界諸国の留学生を採用する基準を引き上げ、行政・教育・科学研究に携わるような「高級人材」を養成する方向に転換した。しかも、彼らに対して特別クラスを設け、外国語（主に英語）で授業を行う方式を取るよう指示している。アフリカを中心にアジア・ラテンアメリカの国々との留学交流を展開し、それによって政治・学術面における影響力の拡大を企図したのである。

第4節 海外留学の全面的な自由化政策と人材争奪戦

1. 鄧小平の南巡講話

天安門事件から5ヵ月後、1989年11月にベルリンの壁崩壊、同年12月にマルタ会談にて米ソ冷戦終結宣言が出された。チェコスロバキアやルーマニアでは民主化運動により共産党政権が倒れ、1991年12月にソ連解体。社会主義国家の中心的存在が消滅したことに中国の指導部は大きな衝撃を受けた。

鄧小平は1992年1月18日から2月21日まで南方の経済特区を訪れ、相次いで談話を発表した。いわゆる「南巡講話」（重要談話とも言う）である。その要点がまとめられて、「中共中央1992年第2号文件」として印刷され、地方政府の党

委員をはじめ国務院・中央官庁・全軍の党委員会などに配布、全党員に通達された。

この中で鄧小平は、マルクス主義は消滅も失敗もしておらず、改革開放により資本主義先進国の経済方式を大胆に借用して豊かになり、豊かさを共有することが社会主義の本質であると述べ、経済発展のためには科学技術と教育の発展が必要であることを強調している。その一環として、天安門事件以来の人材の不帰国現象を改善するべく、在外留学者に帰国を呼びかけた。⁽²⁵⁾

《経済発展を速くするには科学技術と教育に依拠しなければならない。私は科学技術が第一の生産力だと言っている。過去10、20年来、世界の科学技術の発展はなんと速かったことか。ハイテク領域のひとつの突破が一群の産業の発展を主導した。…ハイテク領域で中国も世界で地位を占めなければならない。私は素人だが、科学技術工作者が国家のために貢献し、栄誉を勝ち取ったことに感謝しなければならない。皆は、あの当時、銭学森、李四光、銭三強ら老科学者があのように困難な条件の下で、原水爆・ミサイル・人工衛星（両弾一星）など、たくさんのハイテクをやったことを銘記すべきである。…知識人は労働者階級の一部だと私は語ったことがある。老科学者、中年科学者は重要であり、青年科学者も重要だ。外国で学習しているすべての人々が帰国することを希望する。彼らの過去の政治的態度がどうであれ、すべて帰国できるし、帰国後は妥当に按排してよい。この政策は変えてはならない。貢献するにはやはり帰国したほうが良いと彼らに告げよ。皆が力を合わせて、我国の科学技術と教育事業の

発展を加速するために実際の事をたくさんやるよう希望する。》(鄧小平の重要談話、1992年3月1日)

ここで鄧小平が知識人・在外留学に対して「過去の政治的態度」は問わないと明言した点は非常に重要であった。天安門事件に発した政府と知識人との不信の溝を埋めるきっかけを作ったのである。

1992年7月10日、国家教育委員会は「鄧小平同志の重要談話を深く学習することに関する通知」(關於深入学习鄧小平同志重要談話的通知)を發布、「各地、各大学は鄧小平同志の重要談話の深い学習を各部署で真剣に実施し、各層別に若干の専門的組織を配置して、党员や幹部や広大な教職工員(教師・事務員・用務員)の学習を実施しなければならない。夏期休暇中、各地は大学の指導幹部の学習を組織し、中堅を訓練しなければならない。…教職工の学習は政治学習の時間に行い、学生の学習は『形勢と政策』課で行う。大学党校は重要談話の学習を主要内容にしなければならない。哲学・社会科学の課程、特にマルクス主義理論課、思想政治教育課における教育では鄧小平同志の重要談話の精神を貫徹しなければならない。理論的学習を教師と学生による社会実践活動と結合させなければならない。」と述べる。鄧小平の南巡講話を全国の教育関係者が学習するよう指示したのである。

2. 在外留学者の問題処理

鄧小平の南巡講話を受けて、同1992年8月14日、国務院辦公庁は「在外留学者関連問題に関する通知」(關於在外留学人員有關問題的通知)を發布した。いわゆる「44号文件」と呼ばれる重要文献である。以下は全訳である。

《各省、自治区、直轄市人民政府、國務院各部門、各直屬機関：

広大な留学生は祖国を熱愛し、中華民族の繁栄と富強に貢献したいと考えている。彼らは外国で努力して学習し、多くの人々が喜ぶべき成果を得、栄誉を勝ち取った。留学生は国家の貴重な宝であり財産（宝貴財富）であり、党と政府は一貫して広大な在外留学生を熱心に思いやり、団結教育を行ってきた。祖国は彼らが早く学業成就して帰国し、功業を立てることを希望している。党中央の出国留学工作に関する精神を貫徹して実現し、改革開放の発展の需要に適合するように、出国留学工作を一層充実させよう。我国の社会主義建設事業に貢献するために、ここに在外留学生の問題について以下の如く通知する。

- 一．留学生の帰国就業を歓迎する。公派による在外学習者は学業成就後に帰国して奉仕する義務を有する。在外にて学習している者は彼らの過去の政治的態度がどうかを問わず、学术交流・協力、親類訪問、休暇など短期帰国を含めて、すべて彼らが帰国することを歓迎する。国外で間違っただ話をしたり、間違っただ事をしたことについて、一律に追及しない。すなわち、中国政府に反対する組織に加わり、国家の安全や栄誉や利益に危害を加えたことがある人も、もし彼らがその組織を退き、再び我国の憲法と法律に違反する反政府活動に従事しないならば、すべて一律に帰国就業を歓迎する。
- 二．期限切れの公的旅券あるいは一回のみ出入国できる公的旅券を持っている留学生に対しては、彼らのために旅券延期あるいは新旅券への切り替えを行う。公的旅券を私的旅券に切り替えることも可能である。既

に外国籍を取得した者は中国国籍を退出することを申し出れば、我国の国籍法の規定に従って処理し、外国籍の華人（外籍華人）とする。

- 三．留学生が旅券延期、新旅券への切り替えおよび中国国籍退出の手続きを申請する時には処理をしてやらなければならない。元の派遣部門や機関と金銭その他の未決事項があれば、その部門や機関と協議して解決し、上述の手続きの処理に影響しないようにする。
- 四．留学生が短期帰国後、我国の有効な旅券と外国の再入国ビザを持っている場合のみ、再び審査手続きを履行せずに、随時出国できる。
- 五．送り出し機関は在外留学生との関係を強化し、彼らの仕事や生活に積極的な関心を持たなければならない。留学生は帰国後、「双向選択」の原則によって、元の機関に復職したり、自分で就職したりすることができる。また「三資」企業に就職したり、自分で企業を起こしたりすることなどでもできる。もし国際交流と協力を促進するならば、所属機関の同意を得て、国外で兼職することもできる。
- 六．留学生の家族は留学生に会うために出国を申請すれば、公安機関によって「中華人民共和国公民出境入境管理法」に照らして審査を行い、当然許可すべきである。
- 七．各地区、各関係部門は本通知の精神に照らして具体的措置を行い、在外留学生の帰国に便宜を与え、出入国手続きを簡略化し、留学帰国者の就業・生活上の具体的問題を妥当に解決すること。
- 八．我国の在外公館は国家を代表して留学事務を管理し、我が留学生の合法權益を保護

し、彼らの学習と研究および日常生活に対して援助を与え、彼らの憂いを除き困難を解決し、かつ適時に我国の国内事情を紹介してやらなければならない。彼らが滞在国の法律を遵守し、努力して学習し、自尊自愛し、現地の人民と友好を結び、祖国を熱愛し、祖国の榮譽と利益を維持し、国家の名誉のために頑張るよう教育しなければならない。》(國務院辦公庁「關於在外留學人員有關問題的通知」)

この中で特に重要なことは、天安門事件以降、中国に帰国することを躊躇していた在外留学者に対して、政治的処罰を一切せず歓迎することを政府として宣言し、旅券や国籍に関する問題の解決策を提示して、「鼓勵回国、來去自由」という言葉こそ使用していないが、出入国自由化の方針を明示したことである。

3. 社会主義市場經濟体制下における知識人政策

1992年10月12～18日、中国共産党第14回全国代表大会(党十四大)が北京で開催された。出席者は党関係者1,989人、特別招待46人、また民主党派・無党派・全国工商連合会等々の代表者も列席、計2,007人であった。この会議は、90年代の改革の方針や新しい情況への經濟的対応を決め、また第14期中央委員会の新委員を選出することが主要な目的であった。1987年10月の中国共産党第13回全国代表大会から5年を経過していた。

党総書記・江沢民は、10月12日、第13期中央委員会を代表して大会報告「改革開放と現代化建設の歩みを加速して、中国の特色をもつ社会主義事業の更なる大きな勝利を勝ち取るう」(加快改革開放和現代化建設步伐、奪取有中国

特色社会主義事業的更大勝利)を行った。この大会報告は7ヶ月前から草稿が準備され、全国代表大会直前の1992年10月5日～9日の第13期中央委員会第9回総会(中共十三届九中全会)において採択されたものである。

ここにおいて、中国の經濟体制改革の目標は「社会主義市場經濟体制」の確立にあることが明言された。以降、資本主義の經濟手法が部分的ではなく、全面的に取り入れられることになった。冷戦後の國際經濟は大きく変動し始めていた。この変動の一つは、グローバリゼーション(ヒト・モノ・資本・知識・技術・価値観などの国境を越える流動化現象)である。中国政府は市場經濟化を加速することによってこの新しい趨勢に対応しようとしたのである。但し、その対応方針や政策は「中国の特色をもつ社会主義の理論」(有中国特色社会主義的理論)から逸脱することは許されない。

ところで、「中国の特色をもつ社会主義の理論」については、既に1990年12月30日、中国共産党第13期中央委員会第7回総会(中共十三届七中全会)で通過した「國民經濟と社会發展の十年規畫及び“八五”計畫の制定に関する建議」(關於制訂國民經濟和社会發展十年規畫和八五計畫的建議)において、「中国の特色をもつ社会主義」を建設するための12条の原則が打ち出されている。江沢民報告はこれを基にしたものである。その内容は次の8項目にまとめられた。⁽²⁶⁾

外国をモデルにするのではなく、中国の実情に則して中国独自の社会主義をつくりあげること。

中国は社会主義の初級段階にあり、この段階は100年間続く長期的なものであり、一切の方針・政策はこの基本的国情に基づいて考えられるべきであること。

社会主義の任務は国力を伸ばし、人民の生活を引き上げることであり、これに有利かどうかは経済活動の基準となること。現段階では生産力の発展を最優先させ、経済建設を中心に据えること。

社会主義の発展のためには絶えず改革(革命)が必要であり、経済体制改革は社会主義市場経済体制を確立することを目標にすること。政治体制改革は民主政治を発展させることを目標にすること。また、社会主義精神文明を建設すること。

社会主義建設では一部の地方や人々が先に豊かになり、次第に多くの地方や人々を牽引して、ともに豊かになるので、それを許容し奨励すること。

社会主義の政治的保証として「四つの基本原則」を守ること。

社会主義建設の外交においては、平和外交政策を行い、平等互惠の立場で世界各国と経済交流、科学技術協力、教育交流、文化交流、スポーツ交流、医療衛生協力など各方面の交流を展開する。即ち、対外開放政策を行うこと。

祖国統一については、一つの中国を前提にして、香港・マカオ・台湾に対しては資本主義制度を維持して長期間変えないことを原則とする「一国二制度」を行うこと。

さて、このような「中国の特色をもつ社会主義の理論」をもとに、江沢民報告では1990年代における10の任務を掲げている。以下に、その項目だけを訳すことにする。⁽²⁷⁾

第一は、社会主義市場経済体制の確立を目指して、経済改革の歩みを速める。

第二は、対外開放をさらに拡大し、国外の資金・資源・技術・管理経験をより多く、よりよ

く利用する。

第三は、産業構造を調整し最適化を図る。農業を大いに重視し、基礎工業・基礎的インフラと第三次産業の発展を速める。

第四は、科学技術の進歩を速め、教育を大いに発展させ、知識人の役割を十分に発揮させる。

第五は、各地の優勢的条件を十分に発揮し、地域経済の発展を速め、全国の経済配置の合理化を促進する。

第六は、政治体制改革を積極的に推進し、社会主義の民主と法制の建設をかなり大きく発展させる。

第七は、行政管理体制と機構の改革を進める決心であり、職能を再編成し、それらの関係を調整し、人員を精鋭化して政務を簡素化し、効率を高めることを確実に達成する。

第八は、「両手に力を入れて、両手とも緩めない」方針を堅持し、社会主義の精神文明の建設を新たな水準にまで高める。これは、改革開放と犯罪摘発、経済建設と法秩序の確立、物質文明と精神文明の建設という両方のバランスを取るという意味である。

第九は、人民の生活を絶えず改善し、人口増加を厳格に抑制し、環境保全を強化する。

第十は、軍隊の建設を強化し、国防力を増強し、改革開放と経済建設の順調な進行を保障する。

この十大任務の中で、第四の「科学技術の進歩を速め、教育を大いに発展させ、知識人の役割を十分に発揮させる」は本論のテーマに関連する箇所である。ここでは「教育を優先的に発展させるべき戦略的地位に据える」と述べて、1985年に中共中央が公布した「教育体制改革の決定」において4分類された基礎教育、職業技術教育、成人教育、普通高等教育という現行の教

育事業に対して、政府の財政投入を増加するという方針を示している。特に、知識人に関して次のように述べる。以下はその箇所の訳である。

《知識分子は労働者階級の中で科学文化知識を比較的多く掌握している一部の人々であり、先進的な生産力の開拓者であり、改革開放と現代化建設において特に重要な作用を持っている。広大な知識分子の才能を十分に発揮させることができるか否かは、我が民族の盛衰と現代化建設の進展を大きく決定する。知識分子が聡明な才知を発揮するのに有利で良好な環境を創る努力を行い、社会全体に知識を尊重し、人材を尊重するという良風を更に形成しなければならない。重大な政策と措置を取る決心をして、知識分子の仕事・学習・生活の条件を鋭意改善する。抜群の貢献をした知識分子を表彰し、かつ規則正しく運営される奨励制度を作る。我々は出国して学習した人々が祖国の現代化建設に関心を持ち、支持し、参加することを熱烈に歓迎する。彼らの過去の政治的態度がどうであったかは問わない。帰国して社会主義建設に参加することを歓迎し、妥当に按排し、出入国自由で、来去に便利な政策を実行する。広大な知識分子はすでに社会主義現代化事業において巨大な貢献を行ってきた。今後も国家と人民の厚い期待と負託に背くことなく、奮闘精神を振るい、新しい貢献をするであろう。》(江沢民の党十四大における大会報告)

その主張は鄧小平が南巡講話ですでに述べた考えを繰り返したものであるが、この中国共産党第14回全国代表大会において正式に全党の承認を得たのである。なお、ここで江沢民は正式に党中央委員会総書記、党中央軍事委員会主席に就任。さらに、翌1993年3月、第8期全国人

民代表大会において、国家主席と国家中央軍事委員会主席に選任された。これにより江沢民を中心とする第三世代指導グループによる政治が開始された。なお、江沢民については毛沢東以来、再び党・軍・国家の最高権限を集中させた形となった。これは政治的安定を何より重視した鄧小平の意向であった。鄧小平は1994年9月の中国共産党第14期中央委員会第4回総会(中共十四届四中全会)で引退が承認され、3年後の1997年2月20日死去した。⁽²⁸⁾

4. 科教興国戦略と「支持留学、鼓励回国、来去自由」の方針

このようにして「社会主義市場経済体制」を確立するという国家目標が決定された。その目標実現のために、教育事業は優先的に発展させるべきものと位置づけられた。早速、1993年2月、中共中央と国務院は『中国教育改革と発展綱要』を發布、中国政府の教育事業の方針を示した。その中で「当今の世界の政治は風の動きのようにとりとめもなく変化しており、国際競争は日増しに激烈となり、科学技術の発展は速い。世界の経済競争、総合的国力の競争とは、実質上、科学技術の競争であり、民族の素質の競争である。」と述べ、21世紀の国際競争において優位に立つためには国民の素質を高め、また科学技術人材を育成することが教育事業の重要な任務であるとしている。更に、1995年5月6日、中共中央と国務院は「科学技術の進歩を加速することに関する決定」(关于加速科学技术进步的決定)を發布、科学技術の発展と労働者の素質向上が経済発展をもたらすとして「科教興国」(科学と教育による興国)の方針を打ち出した。

このように教育体制改革が開始されるなかで、1993年11月11日～14日、中国共産党第14期中央

委員会第3回総会（中共十四届三中全会）において、「社会主義市場経済体制の建立についての若干の問題に関する決定」（關於建立社会主義市場經濟体制若干問題的決定）が採択された。この決定は11月7日、党機関紙『人民日報』に掲載され、全国民に告示された。

その第8章「科技体制と教育体制を更に改革する」（進一步改革科技体制和教育体制）は第40～49項目までである。第40項目の冒頭には「科学技術は第一の生産力である。経済建設は必ず科学技術に依拠しなければならず、科学技術工作は必ず経済建設に向かわなければならない。」と述べ、ここでも科学技術の発展が経済発展に直結する体制を作るとし、科学技術研究の成果を現実の生産力に積極的に転化するという方針を掲げている。この方針に則して、留学派遣政策に関して第43項目に次のように述べる。

《(43)知識を尊重し、人材を尊重する、さらに進んで、人が才能を発揮でき、人材が輩出するような環境と条件を創造する。多種多様な形式と方法を取って、大量に熟練労働者と各種の専門人材を育成しなければならない。同時に、世界の科学技術のフロンティアとなるような、21世紀の学術と技術のリーダー（带头人）を作らなければならない。人材育成とその合理的な活用のために、労働人事と幹部選抜の制度をワンセットにして改革しなければならない。各種の職業の資格基準と採用基準を制定し、学歴文凭と職業資格の両方の証書制度を實行し、徐々に公募（公開招聘）と平等な競争を實行し、人材の合理的な流動を促進しなければならない。「支持留学、鼓励回国、来去自由」の方針を實行し、多種多様な形式を取って、海外人材が祖国のために奉仕するのを奨励する》（『關於建立社会主義

市場經濟体制若干問題的決定』より）

この第43項目の中に「支持留学、鼓励回国、来去自由」という12文字の留学政策の方針が初めて提示された。また、この中で「多種多様な形式を取って」、在外留学者の祖国奉仕（為国服務）政策（一時帰国して国家社会に貢献する方策）を実施すると述べている。

特に注目すべきは「来去自由」の方針である。それは軍事関係や特殊分野の専門家を除いて、誰でも自費留学することができることになり、学業修了後にそのまま海外に定住したり、移民したりすることも個人の自由であることを認めたものである。換言すれば、在外留学者が帰国したいと思うような魅力ある就業条件・生活条件を提示しない限り、留学人材は中国から流出してしまうことになるので、中国政府は在外留学者の帰国を促す国内環境の整備に否応なく着手せざるを得なくなったのである。

第5節 新しい国家派遣政策の展開

1. 国家留学基金方式による派遣方法

「支持留学、鼓励回国、来去自由」の方針に基づき、国家派遣制度が改革された。以下の3点である。

(1) 担当部署の法人化

第一に、国家派遣制度の業務が、中央政府の国家教育委員会から法人組織の国家留学基金管理委員会(CSC ; the China Scholarship Council)に移管された。すなわち、1994年7月11日、國務院は「『中国教育改革と發展綱要』に関する実施意見」（關於『中国教育改革和發展綱要』的实施意見）の中で、非営利の法人組織である国家留学基金管理委員会の新設を提案した。国家留学基金管理委員会が国家教育委員会の委託

を受けて国家派遣制度における選抜・派遣・管理の三業務を行うのである。新設理由は、不帰国現象で徒に国費を消耗している現状に鑑み、国費を消耗しないように留学基金を創設して、それまで国家教育委員会が取り扱えなかった自費留学に対する奨学金給付や留学資金ローン制度を開始するためであるという。法人組織ならばそれができるのである。

(2) 違約賠償制度の導入

第二に、派遣前に帰国率を上げるための措置が講じられた。すなわち、1995年2月、国家教育委員会は「全国出国留学人員選派工作会議」において、ひとつの方案を提出した。「国家公費留学の選抜派遣の管理方法を改革する法案」(改革国家公費出国留学選派管理辦法的方案)である。ここで打ち出された新原則は、「公開選抜、平等競争、専門家評審、擇優録取、籤約派出、違約賠償」であった。訳せば、「公募によって公平な競争を行い、専門家によって審査し、優秀者を選考して採用、派遣契約に署名させ、違反者に賠償を求める」というのである。この法案は1995年度に江蘇省、吉林省で試行されたのち、1996年度に全国で実施されることになった。

かくして、1996年2月29日、国家教育委員会は「1996年国家公費留学者の選抜派遣方法を改革して、全面的に試行することに関する通知」(關於做好1996年国家公費出国留学人員選派辦法改革全面試行工作的通知)を関係機関宛に発布した。これには「1996年国家留学基金の資金援助による留学者の選抜規則」(1996年国家留学基金資助出国留学人員選抜簡章)を添付して、新しい規則による選抜方法を告知している。それによれば、派遣するのは、表5のように、高級訪問研究者(高級訪問学者)、訪問研究者()、

訪問研究者()の3種類に絞られた。学部留学・大学院留学を送り出さないことになったのである。その理由は、「80年代半ばから、国家公費留学者の質が落ち、学業を修了しても期限通りに帰国しない」という現象が現われたので、新しい選抜方法では「派遣者の質を保証し、派遣効果を高める」ことが第一目標に据えられたのである。しかしながら、その後、ポストドク学生派遣(1~2年)、大学院博士課程派遣(2~3年)も加えられている。

1996年6月、国家留学基金管理委員会が新設され、派遣手続きは次のように変更された。国家派遣採用者には国家留学基金管理委員会が「出国留学資格証書」を交付し、新聞紙上に名前を公表する。また、「資助出国留学協議書」に国家留学基金管理委員会と派遣採用者が署名する。協議書において、派遣採用者は努力して留学計画を完成させ期限内に帰国すること、違約すれば留学費用全額と違約金を支払うことを誓約するのである。この違約賠償制度によって国家派遣の帰国率は高まった。中央官庁や地方政府等の行う機関派遣についても、国家派遣に準じて違約賠償制度が導入され、帰国率を高めることに成功した。

(3) 帰国奨励政策の実施

第三に、公費派遣・自費留学を問わず、在外留学者のための帰国奨励政策が本格的に実施されるようになった。言うまでもなく、留学者の不帰国防止が第一目的である。その具体的内容については別稿に述べたのでここでは繰り返さないが、中国の中央及び地方政府における高度人材の流出対策は徐々に効果を発揮していった。⁽²⁹⁾

表5 国家留学基金による留学種別の派遣条件

留学種類	資 格 要 件	資金援助の内容	
		留学期限	援助内容
高級訪問学者	大学・研究機関や大中企業の重点学科・重点実験室・重点科学プロジェクトの学術リーダーとその候補者等 55歳以下の高級専門技術職務者、45歳以下の副高級専門技術職務者 学術・科学研究・技術等で相当の成果を上げた者 教育・科学研究・管理・生産建設で突出した成績を上げた者	3ヶ月 半年 1年	往復国際運賃 国外生活費 学術活動補助費
訪問学者()	学科領域で研究を深め、一定の成果を上げた教育者・科学技術者・管理者 博士学位取得者あるいは高級専門技術職務者 一般に45歳以下	1年	往復国際運賃 国外生活費
訪問学者()	実際の業務で成績を上げ、海外で育成する必要がある教育者・科学技術者・管理者および珍しい言語の学習、地域問題や特定の専門研究をしている者 大学以上の学歴で、卒業後2年以上就業した者 一般に45歳以下 交換奨学金を申請し、政府間の交流協議と奨学金給付条件に符合する者	1年	往復国際運賃 国外生活費

出所) 国家教育委員会「1996年国家留学基金の資金援助による留学者の選抜規則」

2. 在外留学者の管理問題の改善

1996年12月23日、国家教育委員会は「国家公費留学の改革後の派遣人員の国外管理工作に関する通知」(關於好国家公費留学改革后派出人員国外管理工作的通知) および附件「若干の問題の規定(試行)」(国家留学基金資助人員国外管理若干問題的規定《試行》)を在外公館宛に発布。これによれば、国家留学基金管理委員会による新しい派遣方法によって1996年度に全国で選抜試験を行い、1997年度から大量に派遣する予定になったが、それに先立ち、在外留学者の管理について以下の点を在外公館宛に通知したのである。⁽³⁰⁾

すなわち、新しい方法では「資助出国留学協議書」を作り、違約賠償制度を実施して、留

学者には3ヶ月に1度、在外公館に学習状況を報告すること、祖国の利益を損なう活動を行わないこと、留学先国・留学身分・留学計画を変更しないこと、学習計画を完成させるよう努力すること、協議規定以外の活動をしないこと、期限を守って帰国すること、違約すれば経済的責任を負うことを誓約させること。在外公館にその監督を委託すること。また、在外公館は上記の違約に注意すると同時に、受け入れ側(大学、指導教員等)にも今度の新しい留学規定を説明して、理解と支持を得ることであった。

次に、1997年5月22日、国家教育委員会は「国家留学基金の資金援助方式で派遣した留学者の国外管理工作の若干の問題をうまく解決することに関する通知」(關於做好国家留学基金

資金援助方式派出留学人員国外管理工作若干問題的通知)を在外公館宛に発布。97年5月末で帰国率は80%であり、まだ問題があると思われたからである。即ち留学延期申請が多いこと、在外公館が新しい方法に不慣れで、自己の責任を重視していないこと、ある部門が「違約賠償させれば他の工作は必要ない」「留学基金管理委員会の仕事だ」と口走るなど認識が不十分であること等である。そこで、在外公館に留学者が違約しないように、留学者に学習・生活状況を報告させて監督し、期限の延期申請は断固拒否するなど、法律に従って対処するよう求めたのである。

しかしながら、まだ十分に新しい留学政策は軌道に乗らなかったようである。1997年8月20日、国家教育委員会は「国家留学基金の資金援助による留学者の国外管理工作を強化することに関する通知」(關於進一步加強国家留学基金資助留学人員国外管理工作的通知)を在外公館教育処(組)宛に発布。これによれば、1995年度に江蘇・吉林両省で試行してから1997年6月末までに留学基金で303人を送り出し、帰国率は第1期80%、第2期89%であったが、まだ十分ではないとして、それが100%でなかった原因を3点指摘し、対応強化を指示したのである。

新法による留学者の違約問題とは、主に延期申請を出して未だ承認されないまま期限を越えてしまい帰国していないのが実情である。主に米国で発生している。

国外管理について、国家教育委員会は1996年12月23日「国家公費留学の改革後の派遣人員の国外管理工作に関する通知」(關於做好国家公費留学改革后派出人員国外管理工作的通知)と1997年5月22日「国家留学基金の資金援助方式で派遣した留学者の国外管理工作の若干の問題をうまく解決する

ことに関する通知」(關於做好国家留学基金資金援助方式派出留学人員国外管理工作若干問題的通知)を出したにもかかわらず、在外公館が延期申請を拒絶できていない。留学者の国内の所属機関が新しい留学政策について理解が乏しい。そのために過去の管理方法に則って、留学者の延期申請に同意している。これが違約問題を発生させている原因のひとつである、という。

更に、2年半後、1999年10月30日、教育部は「国家留学基金の資金援助による留学者の国外管理工作の若干の問題に関する補充通知」(關於進一步加強国家留学基金資助留学人員国外管理工作若干問題的補充通知)を在外公館教育処(組)宛に発布。これによれば、新しい方法で1999年6月末までに2,300人を送り出した中で、期限を守って帰国した者は2,140人であった。帰国率は90%以上になった。しかし、これに満足することなく、在外公館教育処(組)が提起した問題について幾つかの対策規定を補充し、帰国率を更に高めようというのである。以下は、規定部分の全訳である。⁽³¹⁾

《一、国家公費留学者の研修報告制度について。近年の实践と各在外公館の工作が十分に説明しているように、CSC留学者の学習・研修報告制度は、留学者の国外管理を強め、定期的に留学者の国外留学の進捗と研究成果を検査し、国内外の緊密な接続とトレース管理を保障する有効な措置である。今までの経験と在外公館の建議を基に、手続きを簡略化し、工作効率を高めるため、以下のように関連規定を明確にした。

1. 普通の訪問研究者の《CSC 出国留学人員学習 / 研修情況報告表》は毎季1回報告し、半年毎に指導教員或いは共同研究者が

- 署名しなければならない。高級訪問研究者の研修報告表は指導教員或いは共同研究者の署名を免ずるが、毎季、規定によって研修報告表は提出する。
2. 国内において留学者の情報を掌握し、照合するのに便利なように、各在外公館は毎季、適宜に《国家公費出国留学人員報送CSC 学習 / 研修情況報告信息統計表》を国家留学基金管理委員会に送ってほしい。留学者が毎季提出する《CSC 出国留学人員学習 / 研修情況報告表》の原本は各在外公館に置き、国家留学基金管理委員会に送る必要はない。
 3. 研修報告制度は、留学者の国外生活費（包干費）の支給と厳格にリンクさせなければならない。期限通りに研修報告を提出しない者には批判して教育し（批評教育）、教育した後、期限通りに研修報告を提出しないことが累計2回を越えた者は、国外生活費を停止しなければならない。内容が空虚で、うわべをごまかして間に合わせたような研修報告については、厳しくチェックし、不合格であれば留学者にもう一度書かせなければならない。教育と催促の後も、報告を提出しない者は国外生活費を停止してよい。
 4. 交換奨学生や外国奨学金を受けている留学者には、厳格に要求して管理し、日常的連絡と監督を強め、彼らが必ず我が公費留学の管理規定を遵守するよう教育しなければならない。期限を守らない、あるいは研修報告を提出しない留学者には批判して教育すると同時に、適宜に奨学金を援助している先方と連絡を取り、我が関連規定を知らせ、必要なときには先方に奨学金を停止するよう、甚だしくは奨学生の資格を取り

消すよう協力を請う。

二. 一部の留学者が時間を切り詰めて学習せず、主な精力を旅行と観光に使い、甚だしきは学業と無関係なアルバイトを行い、留学成績や留学効果に直接影響する場合、教育処(組)は事実調査を経て、批判し教育するが、情況がひどい者は厳粛に処理し、国外生活費を停止しなければならない。

各在外公館教育処(組)は留学者に対する組織紀律の教育を強化し、在外留学者の自己管理と自己防備意識を高めなければならない。社会治安の悪い国にある在外公館教育処(組)はその国の情況に即応して、留学者の安全に対する防備教育を強化し、患事を未然に防がなければならない。

三. 留学期限の延長申請の問題について。留学者が期限通りに帰国する制度をさらに厳格にし、「欠陥を残さず（不留缺口）」という管理原則を堅持し、留学者やその指導教員との連絡を強化する。日常的に連絡を取るなかで、もし期限通りに帰国できない傾向を発見したならば、まず正面から指導し、留学者に主体的に学習計画を調整させなければならない。延期を申請すれば、まず法律を教え、国家留学基金管理委員会は厳格に法を執行することを明らかにし、違約の結果を強調し、利益と弊害を示す。

四. 期限を早めて帰国する問題について。既に留学計画を完成し、《資助出国留学協議書》で約束した留学義務を履行し、1～3か月ほど期限を早めて帰国することを申請する場合、在外公館は受理し審査して国家留学基金管理委員会に報告する。3ヶ月以上（3ヶ月を含まず）期限を早めて帰国することを申請する場合、在外公館が国家留学基金管理委員会に報告し、委員会が審議する。身体が不調なた

め期限を早めて帰国する者は、病院の証明を提出しなければならない。国内での業務のために期限を早めて帰国する者は、国内の就業機関が申請を提出しなければならない。期限を早めて帰国する公費留学者の国外生活費については、「公費留学者の経費支出規定（公費出国留学人員経費開支規定）」に照らして支給する。政府交換奨学金を受けている留学者の留学期限は厳格に先方の資金援助期限を基準としているので、12ヶ月を切る場合、生活費は支給されない。

税関(海関総署)は、留学期間が1年に満たない留学者に対しては、国産車の免税基準を当てはめて検査し通過させることはない。

五. 違約した留学者の教育工作を注意して行い、国家の「支持留学、鼓励回国、来去自由」の留学政策と国家公費留学の関連政策規定を宣伝する。留学者が違約責任を負い、国家留学基金費用を賠償し、国家留学基金管理委員会と署名して結んだ協議の義務を履行すれば、一般の在外留学者と同等に取り扱うべきである。国家は彼らが随時帰国して就業し、あるいは各種の方式で短期帰国して祖国奉仕することを歓迎する。

国家留学基金管理委員会と在外公館教育処(組)は留学者の国内就業機関と連絡を強め、元の機関は追跡管理の職能を発揮し、同時に留学者の帰国後における各工作をしっかりと行わなければならない。

六. 国家留学基金管理委員会は国家公費留学工作の改革をさらに深め、厳格に選抜派遣の質をチェックし、派遣者の政治と業務の素質を保証するよう努める。同時に、在外公館教育処(組)には適宜に選抜派遣工作进行を改善する意見や建議を提出するようお願いする。

七. 本通知の発布後、既存の規定が本通知と

抵触するならば、本規定を基準としなければならない。》(「關於進一步加強国家留学基金資助留学人員国外管理工作若干問題的補充通知」)

この補充規定を見ると、違約行為には厳しく対処する姿勢が伝わってくる。例えば、国家派遣留学者が学習・研修の報告義務を怠れば、国家留学基金からの奨学金をすぐに停止するだけでなく、外国から受けている奨学金も停止させるというのである。

このような細かな注意努力を重ねた結果、国家留学基金による国家派遣留学者の帰国率は更に高まった。2006年5月30日付『人民日報(海外版)』によれば、1996年から2005年末までの10年間に国家留学基金管理委員会による国家派遣留学者は22,031人、その中の帰国者は18,098人となり、帰国率は2005年に98%に到達したのである。⁽³²⁾

以上が先進諸国との人材争奪戦という厳しい状況に立たされた発展途上国・中国の対応策であった。他の多くの発展途上国では留学者が帰国せず、深刻な頭脳流出問題を抱えているが、中国の対応は頭脳還流のモデルケースと言えるだろう。但し、自費留学についてはまだ十分に統御できているとは言えない。

3. 第11次5カ年計画期間における国家派遣プロジェクト

2006年度から第11次5カ年計画が開始された。この計画期間内に、以下のような国家派遣プロジェクトが行われる。

(1) 2020年までの科学技術発展計画

2005年12月20日、國務院は「国家中長期科学と技術発展計画綱要(2006-2020年)」(国家中

長期科学和技术發展规划綱要 2006 - 2020年) を発布した。以下、「05年綱要」と略すが、その序言には次のように述べられている。

「新中国成立50余年来、数世代の人々が甚だしく艱苦し奮闘を続けて、我国の科学技術事業は人を鼓舞するような巨大な成就を成し遂げた。“兩彈一星”、有人宇宙飛行、水稻の品種改良(雜交水稻)、沖積土からのオイル生成理論と応用、高性能コンピュータなどが示すように重要な科学技術の成果を上げ、我国の総合国力を大いに増強し、我国の国際的地位を高め、我々の民族精神を振起してきた。同時に、先進国と比べて、我国の科学技術の全体的水準はまだ大きな格差があることも認識しなければならない。主に次の点に現われている。すなわち、鍵となる技術の自給率が低い、発明特許数が少ない。：ある地域、特に中西部の農村では技術水準が遅れている。：科学研究の質が十分に高いとは言えず、優秀な抜群の人材が欠乏している。：同時に、科学技術への財政投入が不足し、体制・制度には多くの短所が存在する。目下、我国は経済大国であるが、経済強国ではない。根本の原因は创新能力の薄弱にある。」と。

かくして、2020年までに様々な分野における重要な科学技術研究に大いに財政投入し、科学技術体制の改善や科学人材の育成を行うというのである。

(2) 海外の大学院博士課程への国家派遣プロジェクト

この「05年綱要」の方針に従って、2007年1月25日、教育部は財政部の協力を得て「国家の建設する高水準大学からの大学院国家派遣プログラム」(国家建設高水平大学公派研究生項目)を開始した。まず、高水準大学である「985工程の大学」(北京大学、清華大学など49校)及

び「211工程の大学」(8校を選出)が、高水準の大学教員を育成する目的で2007年から2011年までの5年間に毎年5,000人(総数25,000人)を海外の大学の博士課程に直接派遣する計画である。

このプログラムには2つの派遣類型 学位取得博士学生(攻読博士生)と共同養成博士学生(聯合培養博士生)がある。両方とも個人が申請し、大学が推薦し、専門家が審査して選抜するという方式である。前者の応募資格は、本科卒業生あるいは修士課程の在籍学生又は博士課程1年生であり、その際、外国の大学の入学許可書を提出しなければならない。留学期限は36ヵ月から48ヵ月である。後者の応募資格は博士課程の在籍学生であり、外国の大学で課題研究を行うもので、外国の大学の研究指導者の招聘状と研修計画を提出しなければならない。留学期限は6ヶ月から2年間までである。両方とも奨学金は1ヵ月当たり1,000ドル(往復国際旅費を別途支給)である。この両派遣はそれぞれ2,500人を予定している。

派遣領域は、エネルギー、資源、環境、農業、製造技術、情報などの「鍵となる領域」、生命、空間、海洋、ナノテクノロジー、新材料など「戦略的領域」、人文・応用社会科学である。実際の派遣実績は、実施2年にして表6の通りである。これまでのところ、共同養成博士学生(聯合培養博士生)の派遣人数が比較的多い。

ところで、このプログラムは外国の大学の協力を得なければならないが、その協力大学を更に増やすために国家留学基金管理委員会は、世界各国の大学に個別に打診している。これまでのところ、ハーバード大学、エール大学、ミシガン大学、カリフォルニア大学、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学、日本では早稲田大

学、その他カナダ・オーストラリア・フランス等々の有名大学と協定を締結した。⁽³³⁾

この2年間で約8,000人がこのプログラムで留学しているが、今後5年で外国滞在者数は20,000人に達する。大多数が一人っ子で、生活経験が乏しく、安全の問題（交通事故、溺死など）が憂慮されている。在外管理政策が今後も拡充されていくだろう。

表6 博士学生の国家派遣プログラムの実績(人)

年度	学位取得博士学生 (攻読博士)	共同養成博士学生 (聯合培養博士)	計
2007	403	3,549	3,952
2008	1,303	2,753	4,056
計	1,706	6,302	8,008

出所) 『神州学人』10月号、2008年、6・7頁

(3) 「创新型国家」建設のための国家派遣留学辦法

2006年1月9日、国家主席・胡錦涛は全国科技大会において、「中国の特色ある自主創新の道を行くことを堅持し、创新型国家を建設するために努力奮闘しよう」（堅持走中国特色自主創新道路、為建設创新型国家而努力奮闘）という講話を行った。その中で、中国は2020年までに「创新型国家」にならなければならないと述べた。⁽³⁴⁾

その2ヵ月後、2006年3月、第10期全国人民代表大会第4次会議において、「中華人民共和国国民經濟と社会發展の第11次5ヵ年計画綱要」（中華人民共和国国民經濟和社会發展第十一个五年规划綱要）を採択。ここで「创新型国家」建設が正式に標榜されることになった。「創新」とは、「イノベーション」（innovation）の中国語訳である。すなわち、中国が自ら発明・発見する創造的な科学技術力を持った国家になることを目標としたのである。先進諸国から既成の

ものを借用することに甘んじていては、いつまでも先進諸国に追いつくことはできない。多くの開発途上国が全く同じ課題を抱えているが、中国はこの課題に挑戦することを宣言したと言えるだろう。

この方針に従って、国家派遣政策も様相を新たにすることになった。かくして2008年2月5日、「国家派遣留学辦法」（国家公派出国留学選派辦法）が發布された。以下、「08年留学辦法」と略すが、その全訳である。

《「中華人民共和国国民經濟と社会發展の第11次5ヵ年計画綱要」及び「国家中長期科学と技術發展計画綱要（2006 - 2020年）」を貫徹し、创新型国家の建設を促進し、国家公費留学工作进行を規範化するために、本辦法を制定する。

一．派遣類別と留学期限

1. 博士課程学生（国外で博士学位を目指す）：留学期限は36～48ヶ月
2. 共同育成博士課程学生（博士在学中に国外で課題研究に従事）：留学期限は6～24ヶ月
3. 修士課程学生（国外で修士学位を目指す）：留学期限は12～24ヶ月
4. 高級研究学者：留学期限は3～6ヶ月
5. 訪問研究者（ポスドク研究を含む）：留学期限は3～12ヶ月

二．優先的に資金援助する学科や専門領域

エネルギー、資源、環境、農業、製造技術、情報などの「鍵となる領域」および生命、宇宙（空間）、海洋、ナノテクノロジー、新材料など「戦略的領域」および人文・応用社会科学を優先的に支持する。

三．申請の条件

- (1) 申請者について

大学・企業事業単位・行政機関・科学研究機関の正規職員と優秀な在籍学生で、下記条件に符合すれば、本辦法によって申請できる。

1. 祖国を愛し、社会主義を愛し、良好な政治資質と業務素質をもち、仕事や学習で群を抜いており、学業修了後には帰国して祖国建設のために奉仕する。
2. 良好な専門領域の基礎力と発展する潜在力をもち、外国語の水準が「国家留学基金資助出国留学外語条件」の規定に到達している。
3. 心身ともに健康である。
4. 奨学金プログラムの選抜規定に符合する。

かつて国家留学基金資助を受けたことのある留学者は、帰国後、一般に5年就業すれば、再度申請できる。国家出国留学基金の資金援助の範囲に、境内の者（香港・マカオ・台湾）や国外で学習したり仕事をしたりしている者は暫時含まない。

(2) 申請類別と要求について

1. 博士課程学生：申請時の年齢は35歳を超えないこと。修士学位を有するか、優秀な博士課程1年生か、あるいは修士課程卒業見込みの優秀な学生でなければならない。申請時に国外の教育機関の入学許可書を提出すること。
2. 共同育成博士課程学生：申請者は優秀な博士課程1年或いは2年生で、申請時の年齢は35歳を超えないこと。申請時に、国外教育機関による正規の招請状および国内外の指導教員が共同で制定した研修計画を提出すること。
3. 修士課程学生：申請時の年齢は30歳を超えないこと。学士学位を有するか、優秀な本科卒業見込みの学生でなければならない。

申請時に国外の教育機関の入学許可書を提出すること。

4. 訪問研究者(ポスドク研究を含む)：申請時の年齢は50歳を超えないこと。大学・企業事業単位・行政機関・科学研究機関の正規職員であること。本科卒業後に一般に5年以上の就業経歴があること、修士課程修了後に一般に2年以上の就業経歴があること。博士課程を修了した申請者については就業年限の要求はない。

ポスドク研究の申請者は、大学或いは科学研究機関の博士学位を有し、具体的に教育や科学研究に従事している優秀な在職青年教員や科学研究員であること。申請時、博士課程修了から3年以内であり、年齢は40歳を超えないこと。

5. 高級研究学者：申請時の年齢は55歳を超えないこと。訪問研究者の申請条件に符合する以外に、以下の条件の一つを有していなければならない。

- (1) 国家重点實驗室、教育部重点實驗室、国家工程（技術）研究センターの中堅。
- (2) 「長江学者」特別招聘教授或いは教育部が当年支持することが確定した創新団体の中の中堅、あるいは「新世紀優秀人材計画」に選ばれた者及びその他の国家級の人材計画に選ばれた者。
- (3) 教育部が承認する国家重点学科の学術リーダー。
- (4) 中央政府官庁、地方政府の行政管理部門、大中型国有企業の高級行政管理人員。その中の教育・科学研究者は教授や博士課程指導資格を有する教員（博士導師）でなければならない。中央政府の官庁、地方政府の行政管理部門の管理者は副司局（副司局を含む）以上の行政職に就い

ていること。大中型国有企業の高級行政管理人員は副司局（副司局を含む）以上の行政職に相当すること。

四．選抜方法

- (1) 「公開選抜、平等競争、専門家審査、擇優録取、籤約派出、違約賠償」（公募によって公平な競争を行い、専門家によって審査し、優秀者を選考して採用、派遣契約に署名させ、違反者に賠償を求める）の方式で選抜する。申請条件に符合する中国公民は、均しく規定の手順に則って申請できる。
- (2) 申請時期：一般に毎年2月20日～3月20日。
- (3) 申請方法：ウェブ上で申し込む方式を取る。申請者は国家留学基金管理委員会のウェブ上の申込みサイトに登録して申し込む。かつ規定に則って申請資料を提出する。
- (4) 具体的な選抜方法は「国家留学基金資助出国留学選抜簡章」の規定によって執行する。

五．資金援助の内容

一般に往復国際旅費と海外期間の奨学金と生活費とする。具体的な援助項目と基準は採用時に確定する。

六．採用

博士・修士課程学生と共同育成博士課程学生の採用結果は毎年5月に公布する。高級研究学者と訪問研究者（ポスドク研究を含む）の採用結果は毎年7月に公布する。採用通知は申請者の所属機関に発送する。

七．派遣と管理

留学者は派遣される前に、国家留学基金管理委員会と「資助出国留学協議書」に署名し、公証や保証金保存等の手続きを行う。

派遣後、国家留学基金による派遣留学者に関する規定および「資助出国留学協議書」の約定を遵守しなければならない。

留学期間、留学者は自覚して在外公館の教育処（組）の管理を受け、派遣機関は真剣に措置を講じて、留学者の在外管理と帰国奉仕工作を強化しなければならない。》（2008年2月5日「国家公派出国留学選抜辦法」）

この「08年留学辦法」を見ると、国家派遣する対象が修士学位や博士学位の取得を目指すものから、ある程度業績のある訪問研究者や55歳以下の高級研究学者まで広げられたこと、また特徴的なのは奨学金を優先的に給付する研究分野を明示したことである。すなわち、自然科学分野のエネルギー、資源、環境、農業、製造、情報などの「鍵となる領域」および生命、宇宙（空間）、海洋、ナノテクノロジー、新材料など「5つの戦略的領域」に重点が置かれた。人文・社会科学は一応給付対象となっているが、恐らく採用数は少ないであろう。つまり、国家派遣は最先端の科学技術分野に絞られたのである。2007年度に第1期を派遣した「国家の建設する高水準大学からの大学院国家派遣プログラム」（国家建設高水平大学公派研究生項目）はこの方針に沿ったものであった。

4．国家派遣制度の実績

(1) 送り出し実績

1996年以降、国家留学基金管理委員会による国家派遣制度の運営が行われた。国家派遣は主として研究者を6ヶ月から長くて2年間留学させるものであり、すでに国内で高い評価を得ている研究経験の豊富な人物を選抜するので、より高い留学成果が期待できた。しかし、不帰国

による「人材流出」が一時危惧されたが、国家留学基金管理委員会の厳しい対応策で帰国率は一気に高まった。そのことが安心して派遣枠を拡大できた最大要因であると思われる。表7の通り、国家派遣人数は安定的に年々増加されていった。他方、中央官庁・地方政府等が行う機関派遣においても違約賠償制度が導入されて帰国率が高まり、派遣規模は国家派遣を越えるようになった。

国家派遣留学者の専攻学科の比率は、表8のように過去13年間、ほとんど変わっていない。毎年、工科が約30%を占めて最も多い。次いで、文科約23%、医科約15%、理科約13%、農科約10%の順である。2008年度を見れば、文科系(文科・経営管理)の約33%に対して、理科系(理科、工科、医科、農科)は67%を占めている。⁽³⁵⁾

表9は、2003年現在の大学専任教員の中で大学院の学歴を有する者(修士・博士課程修了者)

の比率を示している。北京・天津・上海という大都市(高学歴社会)の大学において約50%を占め、東部・中部地区の大学で約30%、西部地区の大学では約20%であり、地域格差が見られる。例えば、米国・日本など先進国の大学に比べるとその格差は明らかである。近年、国内の大学院が拡充されてきたとはいえ、やはり改革開放後ずっと拡大されてきた国家派遣・機関派遣が大学専任教員の中で大学院の学歴を有する者の比率をかなり引き上げたと言えるであろう。なお、大学は「教職工」(教員・事務職員・労働者)で運営されているが、恐らく教員以外の者の学歴も向上していると思われる。⁽³⁶⁾

(2) 国家派遣奨学金の標準額

国家派遣の奨学金額については、受け入れ国としても彼らの留學生活の経済的基盤の実状を把握するために承知しておきたいものである。留學中において、大学が安価な宿舎を提供する

表7 1990～2008年の市場経済発達下の留學資金別送り出し実績

年度	国家派遣(人)	機関派遣(人)	自費留學(万人)	計(万人)
1990	2,244	5,403	-	0.29
1991	2,495	-	-	0.29
1992	2,574	-	-	0.65
1993	-	-	-	1.07
1994	1,962	363	1.26	1.49
1995	1,616	-	-	2.04
1996	1,905	5,400	1.36	2.09
1997	2,110	5,580	1.47	2.24
1998	2,639	3,540	1.14	1.76
1999	2,661	3,204	1.79	2.37
2000	2,808	3,888	3.23	3.89
2001	3,495	4,426	7.60	8.39
2002	3,500	4,500	11.7	12.5
2003	3,003	5,149	10.91	11.73
2004	3,556	6,882	10.43	11.47
2005	3,979	8,078	10.65	11.8
2006	5,580	7,542	12.1	13.4
2007	8,853	6,957	12.9	14.5
2008	11,400	6,800	16.16	17.98

出所) 各年度『中国教育年鑑』より作成。年鑑に記載のない部分もあり、現在不明である。

表 8 1996～2008年国家派遣留学生の学科比率

年度	文 科	経営管理	理 科	工 科	医 科	農 科
1996	20.7	9.4	13.1	33.8	13.7	9.3
1997	18.9	9.5	14.5	30.8	14.5	11.8
1998	20.1	10.4	10.3	33.9	15.2	10.1
1999	17.6	9.0	13.0	33.8	17.7	8.9
2000	19.4	9.2	12.4	31.9	16.9	10.2
2001	18.3	9.9	12.9	28.8	15.4	9.6
2002	23.9	12.8	11.0	30.5	14.0	7.8
2003	22.1	9.7	13.2	30.0	15.0	10.0
2004	21.8	9.0	13.0	31.0	15.2	10.0
2005	23.0	10.2	12.8	29.0	14.8	10.2
2006	23.2	10.2	12.8	29.3	14.7	9.8
2007	22.9	9.1	13.0	30.0	15.3	9.7
2008	23.4	9.9	12.9	28.8	15.4	9.8

出所) 原資料は国家留学基金委員会秘書処

表 9 2003年現在の地区別の大学教員の学歴水準

地 区	大学専任教員の中で大学院の学歴を有する者の比率
北京・天津・上海 東部地区	49.2%
中部地区	32.6%
西部地区	27.3%
	21.6%

出所) 関維方主編 (2006)。

必要性、授業料減免の必要性、アルバイトの必要性などを考える材料となるものである。

教育部は1992年『国家派遣留学生の学習・生活費用の状況資料』(国家公費留学人員学習生活費用状況匯編)を発刊した。国別の奨学金標準額を決定したものであるが、その後、各国の状況変化に合わせて数年ごとに金額を調整している。⁽³⁷⁾

奨学金標準額とは、毎月、国家派遣留学生に支給される学習・生活の費用であり、それには家賃、食費、交通費、電話料、医療費と医療保険、交際費、小遣い(零用費)、書籍・資料の購入費や複写費、引越し費(生活安置費)などが含まれるものとして

いる。この奨学金以外に、各国の在外公館までの往復交通費、休暇や学業終了後の帰国のための国際運賃を実費で支給している。この他に、「艱難辛苦地区のための補助費」(艱苦地区補填費)があった。これは上述の1992年『状況資料』において規定されたもので、派遣先地域が高原であったり、疾病が多かったり、高温であったりする場合に支給されるものである。この補助費はもともと在外公館職員に支払われていたのに合わせたものであった。

だが、1994年以後、在外公館では給与制度を改革し、「艱難辛苦地区のための補助費」を廃止、代わって各地の苦勞の程度や物価の高低を考慮して支給される「手当て制度」(津貼制度)を採用した。これに合わせて、国家派遣でも同様の措置を取り、従来の補助費を廃止して、特殊補助として奨学金標準額の中に含めることになった。更に、中国政府と各国政府との協定によって各国政府から奨学金を支給された国家派遣留学生に関しては、その個人が奨学金全額を受給できるものと規定し、かつ別途に

奨学金補助を支給している。

以上のような奨学金制度に基づいて、各国ごとに支給額が決められている。表10は、1999年度時点での派遣の多い国家の例である。この種の資料は入手困難なので、やや古い数字である。なお、西側諸国には学部生は国家派遣していないので記載されていない。

第6節 留学政策の評価研究

1. 留学政策研究の推進

(1) 全国出国留学工作研究会の設立

1989年6月の天安門事件の影響で人材流出が生じた。現行の留学政策にはどのような問題があるのか、どのように改善すべきか、外国の留学政策はどのように変化しているのか等を研究しなければならない必要性が高まった。こうして1991年9月3日、「全国出国留学工作研究会」が天津の南開大学の大会において設立された。設立大会には約80の大学、23の省・市・自治区の出国留学工作機関、30余の中央官庁関係者、中国科学院や留学サービスセンターの関係者が出席した。「全国出国留学工作研究会」の正式名称は、「中国高等教育学会出国留学工作研究专业委员会」である。中国高等教育学会の下部組織である。⁽³⁶⁾

構成員は、全国各地の省庁、大学等の留学関

係部門である。発足当時、約100の団体会員が加入した。その中には既に活動していた2つの支部研究会（分会）があった。「中央国家機関出国留学工作研究会」と「北京高等学校出国留学工作研究会」である。「中央国家機関」とは中央官庁とその所属の研究機関や中国留学サービスセンターなどの外郭団体を指す。また「北京高等学校」とは北京の高等教育機関の意味である。すなわち、中央官庁関係の人々の小規模な研究会と北京の高等教育機関の留学関係部門の人々による大規模な研究会という既存の2つの支部研究会を基礎として、さらに地方政府の留学関係部門、全国の大学や研究機関等の留学関係機関が加入して全国的な団体として発足したのである。

発足から1年後、1992年度に団体会員は約400団体に増えた。支部研究会も更に5つ増えた。成立順に、「四川省高等学校出国留学工作研究会」、「中国科学院出国留学工作研究会」、「山東省高等学校出国留学工作研究会」、「天津市出国留学工作研究会」、「湖北省高等学校出国留学工作研究会」である。1995年1月の総会報告によると、「江蘇省高等学校出国留学工作研究会」も成立した。

この1995年には団体会員は約450団体となり、また全部で8つの支部研究会を擁する大組織になった。支部研究会は専門職務別ではなく、省・

表10 国家派遣奨学金の標準月額（1999年現在）

	米 国 (ドル)	日 本 (円)	イギリス (ポンド)	フランス (フラン)	ロ シ ア (米ドル)
高級訪問学者	800～900	125,000	400～450	5,200	400
進 修 生	700～800	105,000	410～360	4,300	360
大 学 院 生	600～700	90,000	410～360	3,800	350
学 部 生					320

出所) 教育部財務司編(1999)。米国・イギリスでは物価の地域差を考慮して地区別に支給額を決定している。

直轄市という行政地区別もしくは中国科学院のような研究機構別に組織されている。

2001年の総会報告でも、その構成員は全く変わらず、団体会員約450団体、支部研究会8つであった。すなわち、全国出国留学工作研究会の輪郭は、成立4年目の1995年の段階で、すでに出来上がったのである。中央政府の支持があるので、中国では組織の創設は極めて早い。

(2) 全国出国留学工作研究会の活動状況

全国出国留学工作研究会（2004年「中国高等教育学会出国留学教育管理分会」と改称）の活動は年々盛んになっている。列举すれば、次のようなものがある。

全国総会（年会）は2年に1回、開催される。総会では、執行部である理事会を代表して理事長の事業報告がなされる。1993年から95年、97年、99年総会では楊家慶氏、また2001年総会では閻維方氏（北京大学）が行っている。⁽³⁹⁾

支部研究会（各会が年3～4回）では研究大会を開催している。支部研究会では海外視察を組織したところもある。研究会の重要な使命の一つは中央政府の政策のために時宜を得た意見、建議を行うことである。政府も研究会のそういう研究に基づく意見・建議を重視しており、総会や支部研究会には必ず官吏を派遣して、現場の担当者や研究者と対面しての交流を促進している。政府の新しい政策が発表されるときに、その背景や思想について政府関係者を講師として解説してもらう研究会を開催する。

1992年から会誌として『出国留学工作研究』（年3冊）を発売している。全国で唯一の出国留学に関する専門誌である。発行経費は北京市、中国科学院の支部研究会、教育

部留学服務センターなどの支援を受けている。1995、97、99年に優秀論文あわせて約50篇を表彰した。執筆者は研究者だけではない。担当の事務職員も多数の論考を載せている。同研究会の設立10周年には、『全国出国留学工作研究会成立十周年紀念文集』（北京大学出版社、2001年）を発行した。ここには70数篇の良質の論文が掲載されている。

中央政府が発布前の規定や通知について、意見を求めてくることがあり、研究会の代表が意見を具申している。

中央政府の調査研究に協力する。例えば、1995年に中央教育科学研究所（教育部附属）と連名で、「中国留学生帰国状況アンケート調査」を行ったこともある。

(3) 中国の留学政策研究の特徴

『全国出国留学工作研究会成立十周年紀念文集』をみると、留学政策研究、留学事業の実践と改革、留学制度の構築、留学効果の評価研究、在外留学生の意識調査などが報告されている。そこでは大学の研究者や留学関係部門の事務職員が実質的に活動し、留学政策・海外留学問題を学術的かつ実践的に論じている。彼らの論文・報告等は中国の研究動向を知るうえで重要な文献と言える。理事長の総会報告では、こうした研究報告が政府の留学政策に少なからず影響を与えたと自負が述べられている。すなわち、政策立案者である政府部門と政策実行者である大学等の機関が、この研究会を通して意見交換をしているのである。これは中国の特徴といえるであろう。

このような中国の国家主導の留学政策研究の推進方法と日本の公益法人・学会主導の現状を比較すれば、次のようなことが言えるだろう。

中国の論文集では現場の留学交流担当者が執筆しているものが多いのに比べて、日本では担当者である事務職員が論文・報告等を公的な場において執筆することが極めて少なく、その機会もあまり与えられていない。文部省（現文部科学省）の外郭団体である（財）日本国際教育協会（現在は（独）日本学生支援機構）編集の月刊誌『留学交流』が事務職員に現場の経験を執筆する機会を与えているが、執筆数はやはり少ない。全国出国留学工作研究会の会誌『出国留学工作研究』は1992年創刊以来、10年間で論文・報告・資料等で約800篇を掲載している。中国の留学交流担当者たちは、現場を分析し記述することで、政府の留学政策に少なからず影響を与えてきたのである。

日本の留学生教育の学術研究と実践的な経験交流の状況は次のようになっている。異文化間教育学会、日本比較教育学会、多文化間精神医学会、異文化コミュニケーション学会、日本語教育学会、留学生教育学会があり、それぞれの学問分野からのアプローチにより学術的な留学生教育研究がなされている。また、学会ではないが、大学の留学生担当教員の集まりである国立大学留学生指導研究協議会が結成され、研究誌『留学生交流・指導研究』を発行している。

他方、実践的な経験交流は、文部省（現文部科学省）の指示で各都道府県別に大学・行政・民間団体により構成される留学生交流推進協議会において、各地域で職員研修や特徴ある支援活動を行っている。だが、県境を越えた横のつながりはほとんどなく、留学政策に対して提案するなど政府に働きかけを行うことはほとんどない。

また、1968年に成立したJAFSA（国際教育

交流協議会）は、留学交流担当者の経験を集約して受け入れノウハウの交換と次世代の育成を目指している。JAFSAは2008年現在、40周年を迎え、約200の大学等の団体会員と400人の個人会員を擁しており、全国的な留学交流担当者のネットワークになりつつある。『留学生担当者の手引き』（凡人社）やブックレットシリーズ出版によって現場で蓄積された経験を普及している。JAFSAにはかなり多くの大学の研究者が会員となっており、学術的研究を促進している面もあるが、現状では事務職員の実践的な経験交流が主流である。

このように見えてくると、中国において学術的かつ実践的な研究を推進する全国的団体が存在するのに比較して、日本ではアカデミズムと非アカデミズムとが分離し、学術的かつ実践的な性格をあわせもつ団体がまだ成長していない。今後の課題であろう。

2. 公費留学の評価研究

(1) 評価研究の概要

教育部の国際交流・合作局（国際交流与合作司）と財務局（財務司）は2001年度「教育部重大研究プロジェクト」として課題研究「改革開放以来、我国の公費留学の効果に関する評価研究」に助成することを決定した。1978年末の改革開放以降、2000年末までに、世界100余カ国（地域）に約16万人の公費派遣を行った。そのうち国家派遣は約5.7万人、機関派遣は10.2万人に上った。中央政府や地方政府等は、公費派遣を高レベル人材の大量育成事業と位置づけ、計画的に多額の財政投入を行ってきた。その財政投入（cost）に見合うだけの利益（benefit）は得られたのか。公費留学制度の評価研究を政府主導で行うことにしたのである。この研究課題に対して研究チームを公募し、専門家による

選考を行った結果、北京大学教育学院および中山大学高等教育科学研究所による共同研究とすることが決定された。

さて、具体的な研究目的は、20年余りの公費留学のコストとベネフィットはバランスが取れているのか。現行の公費留学政策にはどのような問題があるか。国内はもとより国際社会の急激な変化に対応して、公費留学政策には今後、どのような調整がなされなければならないか。どのような対策を採用することがベネフィットをさらに高めるのかという点を明らかにすることであった。

研究は2001年3月初めに開始された。定量・定性的分析が総合的に用いられた。すなわち、120余りの大学や中国科学院、中国社会科学院の5000名以上の留学帰国者と管理者に対して数度にわたるアンケート調査が実施された。また、10の大学および科学研究院・研究所において重点的に面談調査も行われた。さらに、駐日、駐米の中国公館教育処（組）の幹部や在外留学生を対象とする面接調査も実施している。すなわち、調査対象は大学・研究機関に所属する教職員・研究員に限定されたのである。政府機関や一般企業等々に所属する者には及んでいない。この点を注意する必要がある。

研究は、第一に公費留学帰国者のもたらした効果を個人的ベネフィットと社会的ベネフィットの二つの観点から分析している。「非生産領域では、ベネフィットは最も一般的には、ある計画、政策、活動の予期的あるいは実際の結果」と定義し、留学派遣という非生産領域のベネフィットを分析したのである。第二に、経済的ベネフィットと非経済的ベネフィットの観点から海外滞在中の留学生が海外居住したまま祖国奉仕（為国服務）する方式によってもたらされた効果を分析している。

研究成果として、『教育部重大研究項目：公派出国留学効益評価研究摘要』（2002年5月）という要約版が発行された。次に、成果全体を報告する著作として、陳学飛等『留学教育的成本与効果：我国改革开放以来公派留学効益研究』（教育科学出版社、2003年8月）が刊行されている。以下、その調査結果を見ることにしたい。⁽⁴⁰⁾

(2) 個人的ベネフィットは大きい

公費留学のベネフィット概念には、公費留学によって留学生個人にもたらされたベネフィット（個人的ベネフィット）と社会全体にもたらされた実際のベネフィット（社会的ベネフィット）が含まれる。そのうちの個人的ベネフィットには、留学生本人とその家族が得たベネフィットが含まれ、社会的ベネフィットには個人的ベネフィット以外のさまざまなベネフィットが含まれる。

調査の結果、公費留学生の個人的ベネフィットには個人差があるが、総体的には見れば個人的ベネフィットはかなり大きいことが示された。海外留学は留学生本人に次の8つの面において重要な影響を与えたという。すなわち、視野の拡大、外国語レベルの向上、知識を更新する能力、情報の獲得と取捨選択の能力、学術の発展方向の認識、学術水準の向上、国際交流の能力、社会活動の能力である。

また海外留学が、多くの留学生の帰国後の昇進にとって有利な条件になったことを示している。ほとんどの留学生とその家族の生活水準は出国前に比べて明らかに向上したと考えられている。

(3) 社会的ベネフィット

調査結果では、公費留学の「社会的ベネフィッ

ト」は「個人的ベネフィット」より大きいことが示された。現在、それは次のような側面に現れているという。

公費留学は、教育と科学技術分野において国際的学术界と対話できる学術集団を新たに育成した。調査対象の100校の大学では、留学経験者の比率は院士76%、博士課程指導教官の45歳以上で55%、45歳以下で58%を占めた。

「有名大学の学術指導者の中で留学帰国者の割合は、一般の重点大学に比べてはるかに高い。例えば、1999年、北京大学では教授の65%、博士課程指導教官の80%、院士の79%、国家レベルの貢献者の90%、国家重点実験室主任の95%が皆、留学帰国者である。1998年、清華大学では、院、系、所、研究センター・国家重点実験室と開放実験室の132名の主要な学術責任者のなかで、留学経験者は102人おり、77%を占める。」という。

大学・研究機関において国際的経験豊かな責任者が養成された。調査対象の100校の大学では、学長・副学長など全学レベルの責任者の51%、院・系など学部レベルの責任者の35%が、留学経験者であったという。ほとんどの研究分野の知識（学術思想、理論と研究方法などを含む）が大幅に更新され、以前空白となっていた学科が創設された。「さまざまな新教材、新教授法を続々と取り入れることによって、我国における研究学科の発展と高等教育水準を向上させ、高等教育機関が養成した人材の質に大きな影響を与えた」という。

中国の科学研究の水準が向上し、世界の水準との距離が縮まり、ある分野ではすでに世界水準に到達した。「ある留学帰国者に

よれば、留学以前、科学研究水準が国際的水準と同じレベルにあったのはわずか4.8%であったが、帰国後、それはすでに8.7%に達した」という。但し、この数値の根拠は明確にされていない。

公費留学帰国者は、国際共同研究や委託研究、また科学研究成果の移転、さらに戦略的研究支援などを通して、国家に直接的に膨大な「経済的ベネフィット」をもたらした。すなわち、「留学帰国者の44.9%は、自分の科学研究の成果が直接的な経済的ベネフィットを創り出したと考えている。調査結果からみると、一人当たりの留学帰国者が創出した直接的な経済的ベネフィットは平均144.2万元であり、国費留学への財政投入と直接的な経済的ベネフィットとの比率は、1：10以上となっていることがわかる。」という。

(4) 長期的・潜在的ベネフィット

また調査された大学・研究機関においては、公費留学による「非経済的ベネフィット」は「経済的ベネフィット」よりも大きく、また「長期的・潜在的ベネフィット」は「短期的・顕在的ベネフィット」よりもはるかに大きいことが分かった。次のような理由からである。

留学帰国者は幅広い国際的学術交流のネットワークを形成するのに貢献したのである。彼らは中国と国際学术界との交流に欠かすことができない「架け橋」となっていた。「留学帰国者の77.3%は、自分の留学経歴が職場の国際交流と協力関係に大きな影響を及ぼしたと思っている。」という。

世界中に中国文化を広め、民間外交を展開し、「台湾独立反対」に貢献した。中国と外国の相互理解と交流を促進し、中国の国

際社会の中での地位向上と祖国統一に極めて大きく貢献したという。

中国の高レベルの専門人材が海外に蓄積された。「統計では、現在、米国と日本にいる中国人留学生はおよそ20万人であり、そのうち、7万人がすでに米国のグリーンカードと日本の永住資格を申請している。このようなグリーンカードや永住資格をもつ者の中で、『トップレベルの人材』は3～5%、『優秀な人材』は10%である。その一部は1990年以前に公費留学した者であるが、自費留学生が90%以上を占める。これらの絶対多数が極めて強烈な愛国の情と報国の志を有しており、しかも帰国して貢献できる資本をもっている。彼らは、我国の現在と将来の潜在的に利用できる巨大な高レベル人材資源庫である。」と述べて、海外に定住する元自費留学生の重要性も強調している。

海外に定住する数多くの元公費留学生（一部の自費留学生を含む）は、さまざまな方法で直接的・間接的に祖国に貢献している。「国内でさまざまな形で創立したハイテク・ニューテック企業が4000社以上あり、年商は100億元を超える。彼らの我国の文化伝播、民間国際交流の展開等における役割は国内の人々には取って代われないものである。また彼らは海外で我国の利益を擁護し、我国の影響力を拡大するのに重要な政治力を発揮している。」と述べる。つまり、と

のように、華僑となった元留学生に対してかなり肯定的な捉え方をしている。

3. 公費派遣政策への提言

以上のように、公費派遣政策の成果（ベネフィット）を検討した上で、報告書では結論として、

以下のように大きく4つの提言を行っている。少し詳しく見ておきたい。

(1) 留学規模を早期に拡大する

国家派遣留学生の帰国率は1996年以降、90%以上であり、人材流出の心配がなくなった。公費留学生は帰国して様々な分野で中核的人材になっている。「国家の高レベル人材の不足、特に国際的知識・経験をもつ高レベル人材が非常に足りないという状況を解決するには、今後、相当に長い時間、主に国費留学に頼らざるを得ない。現在、自費留学生の帰国率が低い状況にあるからこそ、公費留学生の規模を拡大する必要がある。」という。「政府のみが全国から優秀な人材を計画的に選抜し留学派遣する力をもっており、しかも留学生の帰国貢献を法律で定め、国家に必要な人材の不足を解決する力をもっているからである。と同時に、帰国した公費留学生はまだ海外に居住する人材の回帰に模範として大きな影響を与えると考えられる。留学教育は、我国の現代化事業の推進器であり、国家の飛躍的な発展を実現するための重要な戦略的方策である。」とも述べている。

(2) 国家の財政投入を増やすことにより国家公費留学生の給付水準を引き上げる

留学派遣への国家財政投入については「戦略的投資」であり、「その効用は道路建設、広場修築、工場建設などへの投資」よりも重要だとして、財政投入の早期拡大を提言する。

「国内の100校の高等教育機関の留学管理者に対する調査で、国家派遣留学のどの方面をすぐに改善すべきかについて質問したところ、82%の人がまず給付水準を高めるべきと回答した。その中の78%の人は『適当に高める』と答え、14%の人が『大幅に高める』と答えた。また、

駐日、駐米の8つの中国在外公館および100人の留学者に対する調査では、国家派遣留学者の生活費の基準は、当地の訪問研究者の最低生活水準を下回ってはいけないという意見で一致した。もし国家が派遣経費の総額を増やすことができないならば、派遣人数を減らすことによって、公費留学者、特に高レベルの訪問研究者の生活費の標準を高くすべきである。」という。

また政府が全額支給する国家派遣の訪問研究者を除いて、国家留学基金を柔軟に活用して、地方政府等の機関派遣あるいは個人の自費留学に対して公費を支給する方式も開発するよう提言する。例えば、国費を地方政府等による機関派遣留学者にも配分する方式、あるいは、全額支給ではない国有企業や事業体の若手管理者と業務者の海外研修の経費の一部に国費を配分する方式、また新たに「大学院博士学位奨学金」を設立し、重要な専門学科の博士学位取得を目指している在外留学者に支給する方式などである。この最後の提案は2003年に教育部「国家優秀自費留学生奨学金」制度によって実現されている。

(3) 需要に応じて派遣、留学者の質を高め、「国家チーム」というブランドを形成する

中国の国家派遣政策では1986年に「需要に応じる派遣、質の保証、学んだ事が実際に役に立つこと」(按需派遣、保証質量、学用一致)という方針を確認し、「レベルが高く、専門分野に精通し、最優秀な留学者」(高・精・尖)により構成される「国家チーム」(国家隊)を作るために実施すると位置づけられた。国家派遣はこの方針を堅持すべきであるという。

同時に、国家留学基金管理委員会が1999年に設立した「チームでの配当方式による留学者奨学プロジェクト」と「重点大学の系主任および

研究所・実験室の中核的人材の海外研修プロジェクト」は、高い評価を受けているとして、「これらの2つのプロジェクトの共通する特徴は、国家と地方の緊急な需要に応じていること、派遣された者の質が高いこと、研修した知識が実際に役立つことである。そこで、我国の国家派遣留学は、さらに『緊急な需要を満たすこと、重点を強調すること、質を保証すること、実際の効果を重視すること』(満足急需、突出重点、保証質量、注重実効)という選考方針を堅持して、プロジェクトを中心とする国家派遣留学の新たな局面を形成していくべきである」と提言している。

また、次のようなプロジェクトを設けるべきであると提言する。

WTO プロジェクト：WTOの規則に詳しい国際経済、法律、金融、経理、貿易、管理などに精通した高レベルの人材を育成する。

西部大開発プロジェクト：国家「西部大開発」戦略のために必要な人材を支援する。

重点学科プロジェクト：国家重点学科に基づいて留学派遣計画を制定し、高レベルの技術創造と知識創造の人材を速やかに育成する。

ロシアおよび東欧プロジェクト：ロシアと東欧への公費留学者数を増加し、世界政治の多極化の趨勢に対応する。

さらに、博士課程留学者数を拡大するよう提言する。毎年、重点大学の大学院生の中から300~500人を選抜し、政府間の協定や契約という方式で海外有名大学の博士課程で勉学させ、将来の国家需要に備えるべきであるという。

(4) 留学者の帰国就業あるいは適当な方式による祖国奉仕を積極的に奨励する

現在の在外留学者数の大半は自費留学者であ

る。彼らを単純に「滞留」と見るのではなく、祖国に貢献したいと考えている人々も多いと見る。「実際に我国はWTO加盟に伴い、開放はさらに全方位に拡大し、幅広い領域で経済のグローバル化の過程に参与していこう。科教興国戦略（科学と教育で国家を振興させる戦略）の実施によって、中央と地方が次々と一連の優遇的で、緩やかでかつ柔軟な留学生の帰国創業のための政策措置を出している。我国の人材環境と創業条件はまさに大きく改善されようとしている。このようなさまざまな改善は、留学生たちに千載一遇の機会を与え、かつ極めて大きな吸引力となっており、留学生が帰国する黄金時代が到来している。」と述べ、在外留学生に帰国奉仕（回国服務：帰国して就業すること）や祖国奉仕（為国服務：海外居住のままに貢献する）を促すことを「国家の発展戦略計画に取り入れるべきである」として、以下の6項目を提言している。

国家の留学人材戦略を計画し、指導する機構を設立する。

新しく留学人材戦略について統括する機構を設立するべきであるという。この新機構は国家の経済・社会発展の全体計画に基づいて国家派遣計画および在外留学生の開発計画を制定するものである。「今まで、国内には戦略上から全体計画を統括し、また留学生の派遣と帰国事業を調整する専門機構は1つもない。」と述べる。

現状は次のようであると分析する。

「派遣に関して言えば、国家留学基金管理委員会は単なる国家派遣留学の具体的な管理部門であり、戦略的な計画部門ではない。機関派遣は、各省・市・自治区の外事辦公室と各機関によって調整されている。自費の場合は、各機関の人事部門と公安部門によって手続きが行われ

ている。帰国後の就職事業は、人事部門、組織部門、また教育部門のいずれもが管理しているが、実際にはいずれもが管理しても管理しなくてもよい状況にある。在外留学生の帰国奉仕と祖国奉仕に関する組織化と動員業務は混乱状態にある。教育部門は派遣事業に、人事部門は帰国招聘事業に責任を負っており、さらに科学技術部や國務院華僑辦公室や共產主義青年団などの組織もそこに関わっている。…近年、省・市や地区・県までも海外に人材募集に出かけている。このように人材を求める現象は喜ばしいとはいえ、情報の混乱や行政の多数の部門が関わるなどの局面を生じ、全体的効果に影響を及ぼしている。」として、「今回の調査で、ある留学生や在外公館員からは、最も良いのは専門的機構を設立し、すべての留学生の選考・派遣、帰国の動員と組織化、帰国後の就職斡旋などを統括させるべきであるという提言が出された。彼らはまた国家は外国人専門家を管理する専門機構を設立するべきであり、同じように大量の留学生を管理する専門機構を設立すべきだと提案している。」という。国家教育委員会の中国留学服務センターは、国内では20あまりの下部機構があり、国外ではニューヨーク、サンフランシスコ、ベルリンなどにセンターを有し、留学生という人的資源、知的資源を開発するために、外国の先進計器や設備や資金を導入し、国内外の留学生を吸収して技術相談や学術研究交流などを展開してきたが、「これらの機構は基本的にサービス機構に属するもの」であり、全面的に統括し管理する機能を果たすことは難しいという。すなわち、国家留学基金管理委員会も、地方政府の各機関も、それぞれに分担した業務を行っているが、情勢を把握し全体的な対応を企画し実行する機関が存在しないのである。⁽⁴¹⁾

留学生のためのホームページを設立する。

在外留学生の共通の意見として中国内の求人情報が分からないと感じている。そこで在外留学生向けのホームページを公式に設立することを提案している。「ホームページは、国内の改革開放の進展状況および政府の留学に関する方針政策を伝える窓口になるだけでなく、国内外の求人情報が交流するプラットフォームにもなるのである。現在、国内にある多くの単位（在外大使館・領事館教育処を含む）は自分の「人材庫」を設けているが、互いに交流を行っていない。また、多くの政府部門や企業・事業体のホームページにも求人が載っているが、情報はまばらであり、しかもかなり古くなっている。したがって、国内外から相互にアクセスが可能で、また権威のある在外留学生のためのホームページを創って、求人情報を交換できるルートを提供することは、在外留学生の帰国と祖国貢献の効果を高めるうえで焦眉の課題である。」という。

「春暉計画」等の留学生短期帰国プロジェクトの資金援助をさらに拡大する。

国家自然科学基金委員会の「留学生の短期帰国工作・講義特別基金」、その後、教育部の「春暉計画」、人事部の「留学生短期帰国基金」、中国科学院の「高級訪問学者計画」等の政策措置が次々と出されている。これらの政策措置が、在外留学生の間で非常に歓迎され、大きな効果をあげているが、資金が未だ十分ではない。「したがって、国家の関係部門は、既存のプロジェクトの資金援助を続けて増加させなければならないし、より多くの在外留学生の帰国視察や帰国交流を実施するために、関係地区や部門に新たな資金援助プロジェクトを設立させるよう提案したい。これらのプロジェクトは投資が

少なくとも長期的、連帯的な効果をもたらすと考えられるからである。」という。

祖国奉仕(為国服務)に海外定住者を動員するため在外公館の機能を十分に発揮する。

留学後に海外に定住している元留学生の祖国奉仕事業を行うために在外大使館・領事館教育処(組)の役割を強化する必要があるという。「多くの大使館・領事館教育処(組)はすでに積極的、主体的に大量の業務を行っており、大きな成果をあげている。しかし、これらの業務を統一的に管理する組織がないため、目下、その展開状況はアンバランスである。多くの地区では一生懸命にしたりしなかったり、放置したりしなかったり、あるいは自然に任せたり任せなかったりという状態である。...留学生の帰国奉仕と祖国奉仕を組織することを長期的な戦略的任務とし、大使館・領事館教育処(組)に適時に明確に要求し、また業務評価を行うべきである。そして彼らがこの業務の中で突き当たる具体的問題を解決するのを支援しなければならない。在外留学生が集中する地区の定員枠を適当に増加したり、大使館・領事館教育処(組)間の情報交換制度などを作り上げたりすることが求められる。」という。

国際協力を強化し、共同行動を取るようになる。

中国のみならず発展途上国の人材流出を減少させる方策として、中国の取り組みだけでは不十分であり、国際的組織や人材の受け入れ国に協力を求めていく必要があり、WTOにおいて国際的人材流動の方面では、国際社会がそれに関連する規則を制定するよう要求しなければならないと述べ、「それによって発展途上国の人的資源の建設と開発能力を高めることができる。

同時に、政府間の双方の協力も強化する必要がある。」という。

「米国や日本などのように、双方で文化教育交流協定を結び、双方がこれらの協定を厳格に守ることによって、我国の公費留学者の帰国を確保する。この他にも、多様なルートを通して国外の人材育成機関や交流機関との間に必要な協定を締結し、あるいは必要な理解を求める。」これによって、中国の留学人材を確保するよう求めている。

留学効果に対する評価を強化する。

公費留学評価機構を設立するか、あるいは関係機関に依頼して公費留学効果の定期的・不定期的な評価を行い、随時、改善していくことを提言している。これは当然の提案であるだろう。多額の国費を投入する以上、特定の観点到偏ることなく、総合的な観点から公費留学政策の効果について評価研究がなされなければならない。

以上、2001年3月に実施された公費留学効果の評価研究を概観した。特に、その調査結果から出された提言に注目してきた。第一に、国家派遣留学の規模を「さらに拡大すること」が、最も重要な提言であったと思われる。実際に、その後、拡大し続けているのである。第二に、提言では、派遣された者が帰国して、就業あるいは創業するための環境整備が重要だとする。この点もその後、急速に進められた。第三に、海外定住した留学者が「春暉計画」等により短期帰国奉仕を活発にする制度整備も重要だとする。そして最後に、出国から帰国までの留学教育事業を総合的に管轄する公的機構の設立の必要性と公費留学評価を定期的に行う必要性を説いている。この提言がすべて実施されたとは限らないが、中国のその後の留学政策の重点的な

方針に大きな影響を持ったことは間違いないだろう。

【注】

- (1) 楊曉京・苗丹国「新中国出国留学教育政策的演变過程及对策研究」、『出国留学工作研究』2000年4月号参照。
- (2) 白土悟「中国の改革開放前期における公費派遣政策の展開について」、『九州大学留学生センター紀要』第18号、2010年、1-44頁。
- (3) 江淵一公「ヨーロッパにおける大学の国際化の潮流 ERASMUS 計画の動向を中心として」、広島大学・大学教育研究センター『大学論集』第21集、1992年、31-64頁。
- (4) Kemal Guruz, *Higher education and international student mobility in the global knowledge economy*, State University of New York Press, 2008, pp.171-207. 参照。
- (5) 横田雅弘・白土悟『留学生アドバイジング』ナカニシヤ出版、2004年、11-16頁。
- (6) 馬嘶『百年冷暖 20世紀中国知識分子生活状況』北京図書館出版社、2003年、3頁。
- (7) 第二次天安門事件に関しては、張良編『天安門文書』（文芸春秋社、2001年）が発刊されている。但し、この書は偽書の疑いもあるという。また、知識人の思想に関しては、方励之『中国よ、変われ』（学生社、1989年3月）、王廣武ら『中国の挫折と命運』（学生社、1991年）など参照。
- (8) 加々美光行編『天安門の渦潮』岩波書店、1990年参照。
- (9) 同上書、171-176頁。
- (10) 同上書、176-182頁。
- (11) 『西日本新聞』1989年7月4・5日夕刊。
- (12) ジェームズ・マン (James Mann) 『米中奔流』共同通信社、1999年、304頁。
- (13) 同上書、308頁。
- (14) 1989年12月5日、党機関紙『人民日報（海外版）』および『中国日報』において、中国人学生が帰国すれば政治的迫害に遭うというのは米国議会が撒き散らしている謬論であると批判している。
- (15) 黄潤竜『海外移民和美籍華人』南京師範大学

- 出版社、2003年、69頁。
- (17) カナダ移民に関しては、范瀛「従情報時代高度談留学人員回国趨勢」『出国留学工作研究』1998年（全国出国留学工作研究会編『全国出国留学工作研究会成立十周年紀念文集』北京大学出版社、2001年、321 - 327頁所収）。また、日本の入国管理政策に関しては、程希『当代中国留学生研究』香港社会科学出版社、2003年、130・131頁参照。
- (18) 留学交流事務研究会編『留学交流執務ハンドブック平成11年度』第一法規、1999年、305 - 313頁。
- (19) 国家教育委員会外事司編『教育外事工作歴史沿革及現行政策』北京師範大学出版社、1998年、63頁。
- (20) 「資産階級自由化」とは、ブルジョア階級の自由を追求する政治思想を意味し、ブルジョア階級の主張する議会制度、言論の自由、結社の自由、個人主義、道徳や芸術の基準、公益より私益の重視、資本主義社会の崇拜等々を含むものである。これに対して、弁証法的唯物論（弁証唯物主義）では、事物の運動・変化・発展は事物の内部の矛盾が引き起こすものであると考え、理論は実践によって証明され、更に実践を導くとする。これがプロレタリア階級の世界観であり、唯一の科学的世界観であるとする。史的唯物論（歴史唯物主義）は、この弁証法的唯物論を社会生活と社会史に適用したもので、社会発展の原動力は物質的諸条件と、生存に必要な物質的財貨を産み出す生産様式にあるとする。因に、生産様式とは生産力と生産関係（人と人の社会的関係）が統一された様相をいう。従って、生産力の発展によって、生産関係が変化し、やがて階級関係が生まれ、階級闘争が生じることで社会は発展するとする。
- (21) ジェームズ・マン、前掲書、360・361頁参照。
- (22) 教育涉外服務与管理叢書編集委員会編『自費出国留学指南』高等教育出版社、2005年、103 - 106頁。因みに、1980年1月26日、教育部は「出国留学生予備部を増設し、早く建設することに関する意見」（關於出国留学生予備部併加快建設的意見）を發布、当時の北京語言学院に出国留学生予備部を新設して、1600人規模の語学・政治訓練をすることを通知した。（李滔主編、前掲書、529 - 530頁所収）また1982年1月30日、教育部は「出国留学予備人員培訓工作进行強化することに関する意見」（關於出国留学予備人員培訓工作的意見）および「出国留学予備人員培訓部の管理教育工作的暫定的規定」（出国留学予備人員培訓部管理教育工作暫行規定）を發布。英語・日本語・ドイツ語・フランス語の予備生に対する教育管理、政治思想教育、修了試験等々について規定している。（李滔主編、前掲書、564 - 567頁所収）
- (23) 郝二奔「従實際出發、有針對性組織好対出国留学人員的思想政治工作」、北京語言学院出国留学予備人員培訓部編『出国留学人員短期培訓論集』北京語言学院出版社、1994年309 - 317頁。
- (24) 楊曉京・苗丹国、前掲書、2000年4月号。
- (25) 矢吹晋『図説中国の経済』蒼蒼社、1992年8月、211 - 222頁。
- (26) 『14回党大会と中国の改革』新星出版社、1993年、10・11頁。
- (27) 同上書、13 - 20頁。
- (28) 矢吹晋『鄧小平』講談社、1993年、200・201頁参照。矢吹氏は、毛沢東のような権限集中を批判してきた鄧小平がここにきて江沢民に最高ポストを集中させた理由を2点挙げている。ひとつは天安門事件が教訓となっている。総書記・趙紫陽と國務院総理・李鵬が対立し、官僚・全人代常務委員会・人民解放軍にまでその対立が及んだこと。もうひとつはソ連解体が教訓となっている。経済的・社会的条件に欠けた政治的民主化が党と国家を解体させてしまったこと。この2つを教訓として、鄧小平は党が一丸となって経済改革に当たるために、党総書記にポストを集中させたという。
- (29) 白土悟「第6章 中国政府の海外人材受け入れ政策と留学人材帰国政策」、2007年度トヨタ財団研究助成報告書『福岡における国際的拠点都市形成に関する研究～留学生を中心とした海外高度人材の集積～』（研究代表者 白土悟）、2010年、101 - 137頁参照。
- (30) 教育部国際合作与交流司『教育外事工作文件匯編1995～1998』1999年所収。
- (31) これら法律は『中華人民共和国重要教育文献1998～2002』に掲載されているが、これを見る限り、2002年末までにはこれ以後の補充規定は

- ない。その後、2008年現在まで補充されているかもしれないが、今は明らかではない。
- (32) 2006年5月30日付「人民日報（海外版）」の一面トップ記事、「公派出国留学生97%回帰」参照。
- (33) 『神州学人』10月号、2008年、6・7頁。
- (34) 胡錦濤「堅持走中国特色自主创新道路、為建設創新型国家而努力奮闘」（全国科学技術大会における講話）、改革開放30年中国教育改革与發展課題組『教育大国的崛起1978 - 2008』教育科学出版社、2008年、260頁参照。
- (35) 潘晨光・婁偉「中国留学事業的回顧与展望」、潘晨光主編『中国人材發展報告 No. 1』社会科学文献出版社、2004年、399 - 422頁。及び潘晨光・楊新育・長江「出国留学事業的回顧与展望」、潘晨光主編『中国人材發展60年』社会科学文献出版社、2009年、263 - 264頁参照。
- (36) 閔維方主編『中国教育与人力資源發展報告 2005 - 2006』北京大学出版社、2006年、199頁。
- (37) 教育部財務司編『国家公費出国留学人員經費管理工作手冊』中国人民大学出版社、1999年、65・66頁。
- (38) 白土悟「中国における留学生教育に関する学術研究団体について」『九州大学留学生センター紀要』第13号、2003年、91 - 99頁。『中国教育年鑑1992』人民教育出版社、1993年、265・266頁参照。
- (39) 全国出国留学工作研究会編『全国出国留学工作研究会成立十周年紀念文集』北京大学出版社、2001年参照。
- (40) 『教育部重大研究項目：公派出国留学効益評價研究摘要』（2002年5月）および陳学飛など『留学教育的成本与効果：我国改革開放以来公派出国留学効益研究』教育科学出版社、2003年参照。
- (41) この提案に関する外国の成功事例として、インド及び台湾を挙げて、次のように述べている。「例えば、インドの学者たちは、総理大臣の下に内閣企画委員会（steering cabinet committee）を設立し、国の高レベル人材を利用する政策を段階的に改善していくことを提案した。この委員会の委員には、人的資源開発部と科学・技術

部の部長、計画委員会副主任、工業部副部長および教育、科学、医学、その他の公共生活に関連した企業・事業体の知名人が参加している。委員会は、実施した政策が教育セクター、人材計画、研究と開発、工業セクターと職業計画などの領域でもたらした変化を評価し、改善策を提出する。そして今後の国家計画や重点プロジェクトにおいて、国内の高レベル人材を開発し利用するよう提案したのである。

1958年、インド科学・工業研究理事会は「科学技術者備蓄局」を設立して、帰国した科学者、エンジニア、技術者、医療従事者のために就職を斡旋している。その後、人材流出を防ぐために、その業務範囲を広げて、国内の高レベルの科学者とエンジニアにも就職を斡旋するようになった。1959年、インド政府は「科学人材庫」計画を立て、先進国に滞留するインド人のエンジニアと科学者の帰国を促した。さらに、人材回帰政策を貫徹するために「長期帰国計画」、「一時的帰国計画」、「外国人学者訪問計画」を実施した。

一方、台湾当局は台湾に人材を回帰させるために「国家青年委員会」という内閣レベルの政府機構を設立し、具体的計画の制定とそれを実施する責務を課している。この委員会の基本的な職能は、第一に、在外の専門家や学者と幅広いネットワークを作り上げることであり、米国に3つのネットワークポイントを常設し、「海外華人専門家・学者の個人別ファイル」を作成している。ロサンゼルスネットワークポイントでは台湾から米国に来ている約3000人のエンジニアやコンピュータ専門家の個人資料を収集している。第二に、台湾に帰って来る者が適当な仕事を探すのを援助し、また人材を求める台湾の企業が適当な人材を見出すのを援助している。第三に、「台湾に帰ってニューテック産業を興すつもりのある専門家やエンジニアに必要なローン、生産用地、その他の必要な施設が得られるよう援助することである」と。（『教育部重大研究項目：公派出国留学効益評價研究摘要』2002年5月）

体験型短期研修における日本語の授業

マヒドン大生短期研修を事例として

吉川裕子*

菊池富美子**

山田明子**

<要旨>

九州大学ではタイ・マヒドン大学との教育連携プログラムを実施している。その一環として、マヒドン大生への短期研修を2008年から毎年実施してきた。本短期研修は2週間で、体験を中心とした研修を行っている。本稿では、短期研修中の日本語の授業に焦点を当てて、実施方法を述べ、考察した。日本語の授業は短期研修の体験をサポートすることはできている。しかしより深い体験にするためにはさらに工夫が必要である。

キーワード：短期研修 日本語の授業 体験のサポート 準備・体験・振り返り
相互作用

1. はじめに

九州大学では、タイのマヒドン大学との大学間協定により、2007年から教育連携プログラムを実施している¹⁾。本プログラムは、両大学の教員の交換の部と学生の交換の部から成り、相互に連携しつつ、一年間に下記の集中講座と短期研修を行う。まず8月にマヒドン大学の教員が九州大学（以下、九大）の学生に九大でタイ語の集中講義をする（5日間2単位）。続いてタイ語の受講生が9月にマヒドン大学へ行ってタイの言語と文化について学びマヒドン大生チューター（翌年の訪日予定者）と交流する（2週間）。

翌年3月に九大留学生センターの教員がマヒドン大学で日本語の集中講義をする（5日間2単位）。最後に3月から4月に2週間マヒドン大の学生が九大に来て、日本語と日本文化について学び、九大生チューター（9月のマヒドン訪問経験者）と交流する。本プログラムは、「両大学における学術・学生交流の更なる活性化を図ること」を目的としている。マヒドン大学側では、文学部とMUIC（Mahidol University International College）が関わり、九州大学側では、言語文化研究院と留学生センターが関わっている。両大学の学部および組織間、教員間、学生間の連携を両大学の事務局が支えている。

*九州大学留学生センター准教授

**九州大学留学生センター助教

本稿では、前記教育連携プログラムの中で、九大留学生センターが担当する「マヒドン大生短期研修」²⁾ (以下「短期研修」) について、これまでに実施した2008年から2010年まで3年間の事例を背景に、2010年の短期研修を中心として、短期体験型研修における日本語授業の実施方法とその工夫について報告し、考察する。

2. 短期研修の概要

本短期研修は、前記教育連携プログラムの一環として、マヒドン大学から学生を受け入れ、日本語と日本文化に関して体験型の研修を行うものである。本章では、まず短期研修全体について2010年のスケジュールを例として概要を述べる。さらに短期研修における日本語の授業の

位置づけと内容について概略を述べる。

2-1. 2010年スケジュール

短期研修の期間は2週間で、15名の学生を受け入れる³⁾。第1回目(2008年)の短期研修時より、見学旅行や体験による学習を主としており、特に、マヒドン大学側の要望により、長崎見学は必ず組み込んでいる。表1は、2010年のスケジュールである。

スケジュールは大きく分けて、教室での日本語の授業、文化講義と文化実習、見学・グループ活動の3部から構成されている。日本語の授業7回(計15時間)、文化講義5回(計6時間)、文化実習4回、見学(グループ活動の訪問を含む)4回で、その他にプレゼンテーションを2回行う。プレゼンテーションはタイ

表1. マヒドン大生短期研修(2010年)

	日にち	午 前	午 後
1	3/28 日	8:00 福岡空港到着、入寮	オリエンテーション、チューターと自由行動
2	3/29 月	開講式 日本語(福岡市について)	日本語(会話 買い物) 伊都キャンパス見学
3	3/30 火	文化講義(歴史年表・寺・神社)	太宰府、九州国立博物館見学
4	3/31 水	日本語(会話 レストランで注文)	うどん屋で昼食 文化講義(音楽)、文化実習(三味線)
5	4/1 木	日本語(グループ活動準備)	文化講義(食住・マナー)、文化実習(座禅)
6	4/2 金	日本語(長崎について調べる)	プレゼンテーション(タイ文化の紹介)
7	4/3 土	長崎見学	
8	4/4 日	自由行動	
9	4/5 月	日本語(長崎見学について)	文化講義(茶道)、文化実習(茶道)
10	4/6 火	グループ活動 希望の場所訪問	日本語(グループ活動報告準備)
11	4/7 水	グループ活動報告会	文化講義(季節の言葉・書道) 文化実習(書道)
12	4/8 木	閉講式	
13	4/9 金	自由行動	
14	4/10 土	帰国	

文化の紹介（個人による）とグループ活動報告（グループによる）である。2週間という短期であるが、滞在中に役立ちそうな会話の練習に始まり、体験をまとめて発表する報告会で締めくくる流れとなっている。

2 - 2. 短期研修の参加者および担当者

マヒドン大学からの参加者はマヒドン大学の文学部とMUICで日本語を学んでいる学部生で、2010年は文学部から6名（男子2、女子4）、MUICから9名（男子3、女子6）参加した。文学部では外国語科目として、MUICでは副専攻として日本語を学習しており、文学部は初級前半終了程度、MUICは初級後半から中級入門程度のレベルの学生が多い。レベルにより一応2クラスに分けているが、ほとんど合同、または混成グループでの研修を行う。

短期研修を担当するのは、コーディネーター（日本語教育部門）、日本語教師2名、事務⁴⁾（国際交流推進室）および文化講義と文化実習のための学内外講師である。また、前年の9月にマヒドン大学で短期研修を受けた九大生が、チューターとしてマヒドン大生を支援する。チューターは文化実習と見学・グループ活動をサポートし、プレゼンテーションにも出席する。

2 - 3. 短期研修の内容の変遷

短期研修は2008年から「教室での日本語の授業より見学旅行や体験」を中心とした内容の研修となっている⁵⁾。2008年は、日本語の授業と見学旅行が独立しており、相互の関連をあまり意識していなかった。例えば、2008年は1日がかりの見学旅行が4回あったが、日本語の授業での事前学習などは特に行わなかった。その後毎年反省を重ね、日本語の授業と体験とができる限り相互に連携するよう改善している。それ

に伴って、日本語の授業の内容は体験のための事前準備が多くなり、日常会話の練習が減少した。また、2009年からはグループ活動を立ち上げ、見学と日本語の授業の連携を図っている。

2 - 4. 日本語の授業の概要

本短期研修における「日本語」の授業は、文法や表現、ことばを教えるという日本語自体にフォーカスしたのではなく、日本での体験のサポートとして位置付けている。特に2010年の短期研修では、2008年からの反省を踏まえ、「ただ体験するだけでなく、体験から学びが生じること」を意識し、日本語の授業の流れおよび内容を考えた。そして、体験から学びが生じることを目指し、「体験」を挟む形で日本語の授業を組み込んだ。

短期研修中において日本語の授業と直接関係する体験は、「日常生活（買い物、食事など）」と「体験学習」の2つである。「体験学習」には、1日がかりの見学旅行である「長崎見学」と、学生自身が訪問先に出向いて見学・インタビューをする「グループ活動」の2つがある。これらの「体験」をサポートするために、2010年は表2の内容で日本語の授業を行った。

「体験」の前の日本語の授業では、体験で必要になると予測される情報を与えたり、事前学習などを取り入れるなど、体験に対する理解を促進し、より体験を深められるような授業内容を組み込んだ。また、指導の際、ただ教師側が情報を与えるのではなく、学生が主体的に授業活動に取り組むようにロールプレイや調べ学習などを取り入れた。

次に「体験」の後についてであるが、本短期研修では「日記・語彙リスト」が体験のフィードバックとして大きな役割を果たしている。日記・語彙リストは、表2に挙げた「日常生活、

表2. 日本語の授業内容

体 験	日本語の授業	
	体験前の授業	体験後の授業
日常生活	1日目：福岡市について 会話 買い物 4日目：会話 レストランで注文	毎回：日記・語彙リストの共有
長崎見学	6日目：長崎について調べる	9日目：長崎見学について 情報共有、日記・語彙リスト作成。
グループ活動	5日目：グループ活動準備 10日目のグループ活動訪問に向けて。	10日目：グループ活動報告準備 翌日のグループ活動報告会に向けて。

「長崎見学」の他に、短期研修に組み込まれている「文化実習」や「太宰府見学」といった体験の後にも提出させている。学生が宿題として書いてきた日記・語彙リストは、日本語の授業で回収し、教師が添削およびコメントの記入を行った（「長崎見学」については、使用方法が少し異なるため、第3章で詳しく述べる）。日記・語彙リストに書いてくる内容は特に規定していないため、学生それぞれが自分の視点で書いてくる。したがって、クラスメートとその内容を共有することにより、体験を違った視点で見つめなおす機会になるのでないかと考えた。そこで、回収前に日本語の授業で、語彙リストの紹介・確認と日記の口頭発表をさせ、クラスでの体験・情報の共有を図った。また、グループ活動報告準備では、見学内容だけでなく感想・考察を盛り込むよう指導することにより、報告会の発表準備をする中で体験について再考し、他の学生と体験・情報を共有できるようにした。

また、学生が短期研修で学んだことを帰国後の日本語学習、あるいは日本人との交流でも活かせるように、研修初日にクリアファイルを一冊渡し、「記念」として持ち帰らせる。クリアファイルには日記・語彙リストや調べ学習のワークシートなどを入れるよう指示している。

3. 日本語の授業の内容と方法

本章では、表2の「日常生活」「長崎見学」「グループ活動」に関して、その3つの体験の前後にある日本語の授業について取り上げ、具体的な授業の内容と方法について報告する。

3-1. 日常生活

2週間の短期研修の間、学生たちは大学から離れた寮に宿泊しており、電車通学をする。よって、通学途中で買い物や外食をすることが予想された。また、休日はチューターと観光などに出かける機会もある。そのような滞在中の日常的な生活場面の一つ一つが、タイで学習してきた日本語を実際に使用する良い機会となると考えられた。そこで、特に街における日常生活行動を「体験」と捉え、そこでの日本語使用・理解を促し、必要な情報を与えるために授業を行った。会話表現自体はすでにある程度学んでいると思われたが、表現の整理、社会文化情報の導入、ロールプレイ活動を通して、すぐに使える実用的な会話を練習することを授業の目的とした。

レベル等を考慮して7名のクラスと8名のクラスに分け、それぞれ1名の教師が担当したが、

授業内容や教材は両クラスで同じである。会話教材は『すぐに話せる日本語 日本で暮らす』（2002年、アスク）を使用した。本教材は、英語による文化・文法解説があること、場面シラバスを採用しており会話文が学習項目になっていること、学生のレベルに合っていることから選定に至った。日本ででの生活の記録については、日記・語彙リストを活用するよう勧めた。

授業の方法は表3のとおりである。

学生たちは国で基本的な場面会話を学んでいるものの、特に語彙や流暢さの点からみて、授業に取り入れた意義は十分にあったと考えられる。使いそうな表現を教師に確認したり、ロールプレイを楽しんで行ったりと、みな意欲的であった。習った表現が実際に使えるものであることをさらに意識させるよう、スケジュール上も工夫してある。例えば、「買い物」の授業でみやげ物を買う表現を学習すると、翌日には神社の見学があり、みやげ物の店に行く機会に遭遇する。「レストランで注文」の場合は授業後に全員でうどん屋に行く時間を設けたが、入店から会計まで、習った表現を積極的に使う様子が見られた。

2008年は、この日常会話の練習を重視し、日

本語の授業の半分以上の時間を充てていた。「買い物」「レストランで注文」のほかに「道を聞く」「お礼を言う」等の場面・機能会話を扱い、学生からは「日本ででの生活に役立った」という評価が得られた。2009年からは、2 - 3節で述べたとおり、見学をサポートする日本語の授業の割合を増やすため、日常会話に充てる時間を減らしている。

3 - 2. 長崎見学

1日がかりの見学旅行は、マヒドン大学側の意向により、長崎で原爆や平和について学ぶことを目的として、2008年からスケジュールに組み込まれている。2008年は長崎の他に雲仙、2009年以降は嬉野温泉に寄っているが、やはり一番の体験は長崎で平和について考えることにあるため、日本語の授業では主に長崎にターゲットを絞った。長崎見学の授業の流れは表4のとおりである。

長崎見学の前についてであるが、2008年は教師が口頭で授業中に長崎で見学するものの名称や見学先についての簡単な説明を日本語で提示しただけで、紹介程度の扱いであった。それも影響してか、2008年の体験後の日本語の授業で

表3. 「日常生活」に関する日本語の授業

	日本語の授業	内 容
1	福岡市について理解する	3～5人のグループを作る。英語の市内観光パンフレットを参照し、白地図に主なランドマークの紙を貼る。市役所で配布されている福岡市の紹介DVD（英語音声あり、15分程度）を見る。
2	日常会話：買い物	導入、語彙・会話表現（服を買う）の練習、ロールプレイ。応用としてみやげ物を買う場面の練習をする。
3	日常会話：レストランで注文	導入、語彙・会話表現の練習。『ビデオ講座日本語 新・日常生活に見る日本の文化』（2005年、東京書籍）のレストランに行く場面（10分程度）を見る。大学の近くのうどん屋のメニューを使ってロールプレイ。（授業後、教師の引率でそのうどん屋へ行き、昼食をとる。）

表4. 長崎見学の授業の流れ

	流 れ	内 容
1	調べ学習	2～3人1グループでワークシートの答えをインターネットで調べる。 ワークシートは教師が作成し、地理や見学先に関わる設問を10問用意した。
	答え合わせ	クラスに分かれてワークシートの答え合わせ。
2	体験	長崎見学
3	語彙リスト作成	クラスで語彙を出し合わせ、確認しながらリストを作成する。
	感想を述べる	クラス別にお互いに自由に感想を述べ合う。
	日記作成	個人で作成。
	日記提出	作成後、教師に提出。
4	日記返却	教師が個別に添削し、コメントを書いたものを個別に返す。

は、長崎で見たものについて英語の表現しか覚えておらず、体験内容のフィードバックというよりも日本語での表現・語彙の確認で終わってしまい、肝心の感想や学生が考えたことなどを授業でゆっくり共有できなかった。これらの反省をもとに、2009年からは見学の前に長崎についての調べ学習を取り入れた。調べ学習を取り入れたのは、実際に見るものを事前に調べることで学生に興味を持たせるため、また、先に知識を得ておくことで見学先に対する理解を深め、長崎での体験をより深い学びにつなげてほしいと考えたためである。

調べ学習について、2009年は答え合わせにあまり時間をとっていなかったが、2010年にはクラス別のワークシートの答え合わせを入れた。答え合わせをクラス別にしっかりすることにより、調べが足りなかった学生は新たな情報が得られ、他の学生からタイ語で説明を受けることでさらに理解を深めるなど、体験の前に情報を共有できたのはよかった点である。

体験後のフィードバックについては、2008年、2009年は語彙リストの確認と口頭で感想を聞くだけに終わっていたが、2010年は語彙リストを全員で確認した後、感想を言わせ、その後日記

を書かせた。2010年に感想を言わせたのは長崎見学のフィードバックをする時間が十分にあったためである。感想を言わせてから日記を書くことで、学生の知識も整理され、また、日本語のレベルが十分でない学生に他の学生がタイ語で説明するという学生間の相互作用も生まれ、学生にとっては、日記を書きやすかったようであった。

3 - 3. グループ活動

2010年は、日本語・日本社会文化に関する総合的体験学習として、グループ活動（訪問・インタビューおよび報告会）を実施した。報告会では、見学してきたことについて15分程度のグループ発表を行った。この活動の目的は、他者と協力しつつ能動的に事前学習およびまとめを行うことによって、訪問先で体験したことを一人ひとりにとってより深い学習とすることである。グループ活動の内容・方法は表5のとおりである。日本語の授業では、訪問の準備および報告会の準備を行った。

グループ分けは教師が行い、協力し合って活動を進められるよう、日本語のレベルや性格等を考慮してグループを組んだ。訪問先ではメモ

表5. 「グループ活動」の方法

	流れ	内容	備考
1	(教師の準備)	学生のグループ分け (5人×3グループ)。 訪問先の候補を4つ探し、見学可能かどうか予め問い合わせておく。	訪問先候補： 九州エネルギー館 博多人形製作所 菅崎宮 (八幡宮) 臨海リサイクルプラザ
2	訪問の準備	グループに分かれ、話し合っ訪問先を選ぶ。 インターネットを参照しながら、準備シートを作成する。 インタビューで使いそうな表現を確認する。	準備シートの内容： メンバーの名前 訪問先 どうしてそこを選んだか 訪問先の場所 (行き方) と 電話番号 タイムスケジュール 質問 (1人2つ以上) 使いそうな語彙のリスト
3	(教師の準備)	訪問先に見学の申し込みをする。引率 (各グループにつき教師1名・チューター数名) の担当を決める。	
4	(訪問)	説明を聞きながら見学、インタビュー。教師引率。	
5	報告会の準備	全員で発表のアウトラインを確認する。グループに分かれ、写真選び、発表内容相談、原稿作成、PPT作成、発表練習。	1グループにつき発表15分 + 質疑応答15分。スライド約8 枚のPPTを使用する。発表 は分担して全員で行う。 発表のアウトライン： 訪問先の紹介 見学内容の紹介 インタビュー報告 感想
6	(報告会)	発表と質疑応答。教師、コーディネーター総評。	

をとりながら話を聞いたり盛んに質問したりと、自主的な学習活動が見られた。報告会では3グループいずれもよく協力し合い、他の学生にも理解できる形にまとめ発表できていた。

なお2009年の研修では、訪問から報告会までを1日で行い、翌日の最終活動日は別テーマの個人スピーチを行った。その結果、報告会準備の時間が短く、見学したことをまとめきれない、あるいは時間があればもっと深い発表ができそうな様子が見られた。また、翌日の最終スピー

チは、一人一人の総括を参加者全員で共有できる反面、準備の時間が短く負担が大きいようであった。これらの反省点を踏まえ、2010年はグループ活動報告を研修の最終活動とし、報告会準備の時間を確保するため、「訪問の準備」「訪問・報告会準備」「報告会」をそれぞれ別の日に行った。

4. 考察

これまで、タイ人大学生に対する2週間の短期研修について、研修全体の概要と日本語の授業の概要および方法について報告した。

訪日短期研修に関する研究は、熊野 (2008)、石井・熊野 (2008・2009)、稲葉 (2009)、城他 (2010) などがある。これらと比較すると、本短期研修の特徴は、研修期間が2週間と短いこと、体験活動型の研修であること、初級の学生が多いこと、学生の背景が同じ (タイ人大学生) であることの4点にまとめられるだろう。本章では、本短期研修に対する学生の評価に触れ、日本語の授業の特徴と反省点をまとめ、最後に今後改善すべき点について考察したい。

4 - 1. 体験型短期研修に対する評価

短期研修の終了時に行ったアンケート結果の一部を示す。表6は、短期研修全体に関する学生による評価の過去3年分をまとめたものである。

学生からの短期研修全体に対する評価は概ね高い。自由記述形式の回答では、以下のようなコメントが記されている。(日本語の授業と体験との連携を強めた2009年2010年のコメントから筆者が翻訳して要約)

授業の会話は本当に日常生活で使うことが

できた。

授業は日本での学習と生活をよくサポートしていた。

授業と実地見学を通して多くの新しいことを学ぶことができた。

日本語の講義と活動が組み合わさっているのがとてもいいと思う。

クラスの講義と体験の両方が含まれているので、本当にこのプログラムはいい。日本の文化を見て、体験して、感じることでこの方法が好きだ。

文化講義によって活動の前に予備知識が得られたのはよかった。

私たちが見学した場所はすばらしかった。よりよい人間に成長するのに役立つ多くの新しいことを学ぶことができた。

授業からたくさんのことを学んだ。授業は私の書く力の向上に役立った。

グループ活動は非常に冒険的で多くのことを学んだ。

～ は、「授業の会話は本当に日常生活で使うことができた。」「授業は日本での学習と生活をよくサポートしていた。」等、こちらが意図して組んでいる体験型の学習の流れに関して記述している。「体験」の事前学習として準備のクラスを設けていることが評価されていると言える。

表6. 短期研修全体に関する評価

年	大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然よくない	備考
2008	5	4	0	0	0	4.5が1名
2009	10	0	0	0	0	
2010	8	8	0	0	0	5と4重複が1名

数字は人数。参加者は2008・2009年が10名、2010年が15名。

その他、～ は、見学やグループ活動での「学び」「自己の成長」、また「書く力の向上」に関して記述している。書く力の向上は、日記・語彙リストの課題が役立ったものと思われる。

城 (2010) には、体験型短期研修でも授業での文法導入を求める学生の声が見られたという報告があるが、本短期研修の評価では、文法をもっと勉強したいという声は全然出ていない。これは、本短期研修の場合、2週間という短期間に日本でできるだけたくさん体験をしたいという参加者の目的があり、本研修の日本語の授業がその体験を支えているからだと考えられる。なお、MUICの日本語担当者からのコメントによると、日本語クラスが副専攻となっているMUICでは、本短期研修に参加したいために日本語を副専攻に選ぶ学生も出ているということである。

以上のように、本短期研修は学生から高い評価を受けており、研修に参加することが日本語学習の動機づけになっているようである。本研修は教育連携プログラムの中で相互の交流促進にも寄与していると言えるだろう。

4 - 2. 本短期研修における日本語の授業の特徴

本短期研修における日本語の授業の特徴は、体験のサポートとして位置付けていること、学生の相互作用を活かした活動を取り入れていること、の2点にまとめられる。以下、この2点について詳しく述べる。

体験のサポートとしての日本語の授業

本短期研修の中心は「体験」である。そして、日本語の授業は、その体験をサポートする場として、体験の前後に配置してある。2010年の本短期研修を振り返ると、体験の前の日本語の授業は主に知識を得たり、調べ学習をするなど、

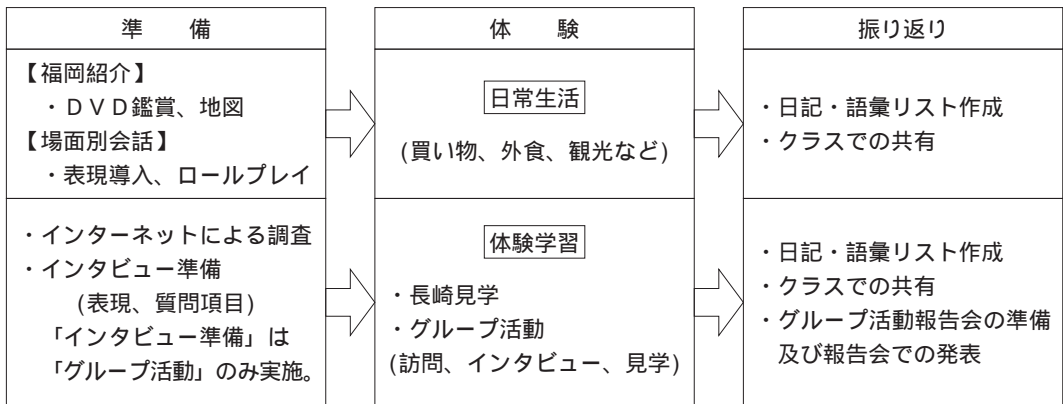
体験の「準備」として機能し、また、体験の後については、日記・語彙リストの作成やその共有、報告会など、体験を「振り返る」場として機能していたと言える。このように、体験と日本語の授業を結びつけ、また、日本語の授業を体験のサポートとして位置付けることによって、ただ体験をさせるだけの研修から、学生が体験と向き合い何かを学びとれるような研修へと移行できたのではないかと考える。

熊野 (2008) においても、体験交流型の研修で体験から日本・日本人への理解を深めるためには、体験交流活動と日本語の授業をつなぎ、日本語の授業において前準備や振り返りを行うことが重要であると述べられている。本短期研修は、熊野 (2008) や石井・熊野 (2009) のような自律的学習者の育成までは目標としておらず、体験を振り返って考え、また次の体験につなげるという循環的な研修内容とはなっていない。しかし、学生のアンケートにも「日本語の授業が体験をサポートしていた」というコメントや、「学び」「自己の成長」に関するコメントがあったことから、体験を振り返り考えるというプロセスを意識した学習の流れは、2週間という短期間であっても、体験を通して日本に対する理解を深め、学びを得てもらうのに有効であると言えるだろう。

以上より、熊野 (2008) における「準備」「振り返り」という言葉を用い、「体験」を研修の中心に据え、その前後に日本語の授業を組み込んだ本短期研修の学習の流れを示すと表7のようになる。

現段階では、「準備 体験 振り返り」という横の流れはできているが、熊野 (2008) で述べられているように、それが次の準備、体験につながり、さらに次へとつながっていく循環的な学習の流れにはなっていない。今後、学習の

表 7. 短期研修の学習の流れ



流れを振り返りで途切れさせないような循環的学習を意識し、研修内容を見直す必要がある。

学生の相互作用を活かした日本語の授業

本短期研修では、調べ学習や日記・語彙リストの共有など、学生の相互作用を活かした教室活動を目指した。学生たちがすでに顔見知りであったということもあるが、日本語の授業において、お互いに援助・補助し合う姿が見られた。体験の「準備」では、日本語のレベルが低い学生を他の学生が助けたり、パソコンが得意な学生が調べ学習で他のグループメンバーを引っ張るなど、お互いに協力しながら体験の「準備」に取り組んでいた。特にこの「準備」での協力体制はグループ活動でも発揮されており、初級レベルの学生でも積極的に日本語を媒介とする活動に参加する姿が見られた。体験の「振り返り」として行った日記・語彙リストによる情報の共有では、日記を書く時点では個人で表現できなかったことを他の学生の助けで引き出せたり、他の学生のコメントから書き忘れていたことを思い出すといった場面が見られた。日記・語彙リストの共有は、学生が新たな視点を得たり、体験をさらに深めるということまではい

かなかったが、学生の体験の振り返りに一役買っていたと言える。また、第3章で述べたとおり、情報の共有は長崎見学のフィードバック、グループ活動後の報告会準備においても体験の振り返りとして機能していた。

このように、授業活動において学生の相互作用を活かすことができたのは、学生が同じタイ語という母語を持っており、お互いに助け合おうとする姿勢があったからであろう。母語が同じであり、初級から中級入門までのレベルの学生を対象にした体験型短期研修においては、「準備」「振り返り」の両方において学生同士の相互作用を活かしたクラス活動を取り入れることも体験のサポートとして有効だと考えられる。

4-3. 体験の振り返りに関する反省点

日本語の授業で体験の準備を行ったことで、学生たちが体験に主体的に臨み、初級から中級入門のレベルでも日本語を運用しつつ体験に取り組む様子が見られた。これは体験型短期研修の主たる目標から見て、良い授業の流れだったと言えるだろう。日本語の授業の大きな反省点としては、体験を通して何を学んだか、どんな感想を持ったかについて、学生の十分なアウト

プットが得られなかったということがあげられる。

学生たちは、この短期研修を通して、日本文化と日本語への理解を深めることを求められている。そのため、体験を「見るだけ、ただけ」で終わらせないための工夫として、日記に記録する、クラスで話し合う、発表の形にまとめるなどの機会を授業で設けてきた。前節で述べたとおり、クラスで共有することによって、相互作用を生かした振り返りを行うことができた。しかし、一人ひとりの日記では「～をした。～を見た。楽しかった。」といった、単純な記述にとどまる例が多く見られた。本研修のメインの体験である長崎見学については、クラスで話し合ってから作文を書かせたが、体験から何を考えたかが作文に十分に表れていたとは言えない。グループ発表では、日本語力のある学生が感想の部分を担当するグループが多く、訪問先の説明などを担当した学生には、所感をアウトプットする機会を与えることができなかった。

2009年の短期研修の最終活動は「この短期研修で最も印象に残ったこと」をテーマとした個人スピーチであった。2010年はグループ活動報告会の準備に十分時間を充てるために個人スピーチを削ったが、短期研修に対する学生一人ひとりのまとめを参加者全員で共有し、また全員に等しく日本語運用の機会を与えることができるという点で、個人スピーチは良い活動であった。

体験をより深い学習にするための「準備」については、これまでの試みが成功していると言える。今後は、各体験で感じたことや学んだことを各自に表出してもらい、参加者で共有することが必要である。気づきをどのような形で学生に表現してもらうか、そのための時間やカリキュラム上の仕掛けをどのように作るかが今後の課題である。これについては次節で具体的な改善案を述べる。

4 - 4 . 日本語の授業の改善に向けて

2週間という限られた時間の中でより深い体験ができるように、また日本への理解をより深めるために、「振り返り」の内容を充実させることが今後も引き続き課題となる。体験で学んだことや感じたことを表出してもらうために、まずは個々の気づきを促し、深める必要がある。そのための改善策は2点考えられる。一つは、気づきを深めるための工夫をコース開始時から取り入れることである。これまでは、研修の初日にコーディネーターが個人面談をして、短期研修に望むことなどを聞いていた。これを日本語の授業の中に取り込み、クラスメートと話し合いながら各自の目標を設定させるように改善する。まず初日に短期研修全体の流れを教師が説明し、全体の目標を意識化させる。その後クラスで各自の目標設定ができれば、自主的な学習の方向付けにつながると考えられる。また、短期研修の終わりに、2週間の研修を振り返る時間を日本語の授業の中に設け、コース開始時の目標に照らして何が得られたかを自己評価させる。このように全体の流れを意識したスケジュール構成とすれば、段階を踏んで、体験を通して得た「気づき」を一人一人が語るようになるのではないかと。

気づきを深めるためのもう一つの対策として、日記・語彙リストシートの改善が考えられる。日記・語彙リストは、A4一枚の紙に6行程度の短い日記と、10語の語彙リストを書くような紙面になっている。2010年は、宿題で書いてきた日記について授業中に話し合うことにより、体験の感想や関連する情報をクラスで共有することができた。この活動をより活性化するため、単純な日記ではなく、「気づいたこと」「考えたこと」を書くように明示的に指示するなどの工夫を今後検討する。

このように授業の流れを柔軟に修正しつつ、「準備・体験・振り返り」の蓄積と循環によって気づきと学びを促すような授業を目指し、改善を重ねたい。

5. おわりに

本稿では、九大とマヒドン大学の教育連携プログラムにおける2週間の短期研修について、日本語の授業に視点を置いて、報告と考察を行った。3年間の3回実施の報告に過ぎず、方法は年々改善されているとはいえ、まだ改善の余地がある。日本語の授業の内容を整備すること、振り返りを充実させること、気づきを促す仕掛けを取り入れることなど、より深い体験をさせるための課題が残っている。今後は、考察から見てきた反省点を踏まえて、体験を一層効果的にサポートする日本語の授業を考え、2011年の短期研修に生かしていきたい。

<参考文献>

- 石井容子・熊野七絵 (2008) 「日本語・日本文化社会への気づきを促す『研修活動の記録』 自律学習の意識化を目指して」WEB版『日本語教育 実践研究フォーラム報告』日本語教育学会
- 石井容子・熊野七絵 (2009) 「体験交流活動を中心としたコースにおける自律学習支援とポートフォリオ」第15回海外日本語教育研究会シンポジウム「JF日本語教育スタンダード その活用と可能性」第2セッション資料 国際交流基金日本語国際センター
- 稲葉みどり (2009) 「短期研修留学生のための日本語教育 日本文化理解と国際交流の推進をめざして」『教養と教育』9, pp.1-8. 愛知教育大学

- 熊野七絵 (2008) 「大学生短期訪日研修における体験交流活動型のコースデザイン」『広島大学留学生センター紀要』18, pp.31-46
- 城保江ほか (2010) 「体験型短期日本語研修における課題 レベル別対応の観点から」『2010世界日本語教育大会予稿集』No268
- ジョンソン,D.W.・ジョンソン,R.T.・ホルベック,E.J. (杉江修治・石田裕久・伊藤康児・伊藤篤訳) (1998) 『学習の輪 アメリカの協同学習入門』二瓶社
- 藤川美穂・桑野幸子・大江淳子 (2006) 「大学協定校間における短期日本語研修 「協学」を実践するための設計・評価・改善」WEB版『日本語教育 実践研究フォーラム報告』日本語教育学会
- Kolb,D. (1984) *Experiential learning : experience as the source of learning and development*. Englewood Cliffs: Prentice-Hall.

<注>

- 1) マヒドン大学は、タイで初めての医学学校が前身で、1943年に医科大学となった。現在は、学生数が約26000人で、学部17、単科大学6、研究所7、センター9、そして4つの病院を持っている。そのうち、本プログラムに関わっているのは、文学部とMUIIC (Mahidol University International College) である。タイ語の講義は文学部、受け入れの企画等はMUIICが担当し、プログラム全体は大学の事務局が統括している。
- 2) 英語の名称は、「Short Term Immersion Program for Mahidol University Students」。
- 3) 2008年、2009年は各10名であったが、2010年より15名になった。
- 4) 2008年から2010年の担当者は、コーディネーター：吉川裕子、日本語教師：菊池富美子・山田明子、事務：佐藤伸一郎 (2008年)、幸野達也 (2009年・2010年)。
- 5) この体験型の内容は九大とマヒドン大学との協議で決められており、九大学生がマヒドン大学で短期研修を受ける際も同様の内容となっている。

九州大学留学生のための日本語コース (JLCs)

大神智春*

1. コースの概要

全学補講 (Japanese Language Course 以下 JLCs) は総合・漢字・会話・読解・作文・専門 (ビジネスマナー) の6コースで構成されている。九州大学に在籍している外国籍の学生・教員・訪問研究員であれば JLCs が受講できるため、受講者のタイプとニーズは多岐に渡る。当センターに所属し日本語を学習しているのは、短期プログラム Japan in Today's world program の留学生 (以下 JTW 生)、日本語日本文化研修プログラムの留学生 (以下日研生)、広州市職員派遣プログラムの研修生、予備教育プログラムで日本語を受講する日本語研修コース生 (以下研修生)、日韓共同理工系学部留学生 (以下日韓プログラム生) である。他部局の所属で JLCs を受講している受講者は、大学院生、研究生、特別聴講生、学部の交換留学生、訪問研究員である。

1 - 1 コース編成・1週間あたりの授業開講数

近年、学習者数が急増したにも関わらず、当センターの組織は1996年 (平成8年) に JLCs が開始された当時と大きな変化がないため、2008年度 (平成20年度) までの構成では学習者の増加に対応しクラス数を増やすことができないという問題が生じた。そこで、今年度はコース編成や開講授業数に以下の変更を加えた。

- 1) 筑紫キャンパスと大橋キャンパスではそれぞれ別の日本語コースを開講していたが、両キャンパスが距離的に近く受講者数も多くないため、両キャンパスの日本語コースを合体させ一本化した。
- 2) 箱崎キャンパスと伊都キャンパスでは1レベルあたりのクラス数を増やす代わりに、昨年度までは1週間あたり4回開講されていた J1レベル (入門) ~ J4レベル (中級入門) の授業開講数を、1週間あたり3回の授業数に変更した。また、J1 (入門) ~ J3 (初級2) では、1週間3回の授業数で効率よく学習できるよう使用教科書を変更した。
- 3) 中級については、受講者数が増加することにより学習者のレベル差が目立つようになったため、中級入門レベルと中級1レベルの間に新たなレベルを設定した (表1)。

*九州大学留学生センター准教授

表1 2008年度までのレベルと今年度のレベルの対応

2008年までのレベル	新レベル	2008年までのレベル	新レベル
J4 下レベル	J4	S3a	S3
J4 上レベル	J5	S3b	S4
J5	J6	S4	S5
J6	J7	S5	S6
J7	J8	S6	S7
R5	R6	S7	S8
R6	R7		
W6	W7		
W7	W8		

以上をふまえ、年度は次のようにコースを編成した（表2）。

表2 JLCsのコース編成

	日本語コース					
	総合	漢字	会話	読解	作文	専門
入門	J-1(3)					
初級1	J-2(3)	K-2(2)	S-2(2)			
初級2	J-3(3)	K-3(2)	S-3(2)			
中級入門	J-4(3)	K-4(2)	S-4(2)			
中級1	J-5(2)	K-5(2)	S-5(2)			
中級2	J-6(2)	K-6(2)	S-6(2)	R-6(2)		
上級入門	J-7(2)	K-7(2)	S-7(2)	R-7(2)	W-7(2)	
上級	J-8(1)	K-8	S-8(2)		W-8(2)	T-8(1)

()内は1週間の授業回数

1 - 2 教材

2009年（平成21年度）に使用したテキストや教材は表3の通りである。

表3 各クラスでの使用教材

総合	使用教材	漢字	使用教材
J-1	『初級日本語げんき』	K-2	『Basic Kanji Book vol.1』
J-2	『初級日本語げんき』	K-3	
J-3	『Total Japanese』	K-4	『Basic Kanji Book vol.1, 2』
J-4	『J. Bridge』	K-5	『Basic Kanji Book vol.2』
J-5	『日本語2ndステップ』	K-6	
J-6	『日本語中級J301』	K-7	『Intermediate Kanji Book vol.1』
J-7	『文化中級』	K-8	『Intermediate Kanji Book vol.2』
J-8	自主作成教材を使用	読解	使用教材
会話	使用教材	R-6	『大学生と留学生のための論文ワークブック 読解編』
S-2	『聞く・考える・話す 留学生のための初級日本語会話』	R-7	『大学生と留学生のための論文ワークブック 論文編』
S-3		作文	使用教材
S-4	『J Bridge for Beginners vol.2』	W-7	『大学生と留学生のための論文ワークブック 作文編』
S-5	『聞いて覚える話し方 日本語生中継 初中級編2』	W-8	『小論文への12のステップ』
S-6	『日本語上級話者への道』		
S-7	『自主作成教材を使用』		
S-8			

先に述べたが、初級レベルでの授業数の変更に対応し、使用教科書も変更した。今年度は、J1およびJ2で『初級日本語げんき』を先行して使用したが、来年度から全初級レベルで採用する予定である。

1 - 3 開講スケジュール

昨年度に引き続き、各学期を6週間とした4学期制を採用している（表4）。春学期は第1期と第2期に、秋学期は第3期・第4期に分かれる。春学期・秋学期ともに開講期間は12週間（第1期～第2期、第3期～第4期）である。

表4 JLCsの開講スケジュール

	学期	開講期間
春学期	第1期	平成21年4月9日～5月27日
	第2期	平成21年6月1日～6月27日
秋学期	第3期	平成21年10月13日～11月21日
	第4期	平成21年12月1日～1月29日

1 - 4 受講申し込みオンラインシステム

伊都キャンパスにおける日本語コースが軌道に乗り学習者数が増加してきたことから、伊都キャンパス用の受講申し込みオンラインシステム（以下オンラインシステム）を開発し、2009年度の秋学期が

ら始動させた。箱崎キャンパス用のオンラインシステムと伊都キャンパス用のオンラインシステムを分離させたことで、各キャンパスの受講者に必要な情報を必要に応じて提供できるようになった。

1 - 5 プレースメントテスト

当センターでは、総合テスト（文法・聴解・読解）、漢字テストおよびインタビューテストを実施している。新規の受講者は全員総合テストを受験する。漢字テストおよびインタビューテストは技能別コースを受講したい学習者が受験することになっている。

1 - 6 複数キャンパスへの対応

九州大学は、箱崎、馬出、六本松、大橋、筑紫、伊都の6つのキャンパスに分散している。日本語コースが開講されているのは箱崎、伊都、筑紫、大橋の4キャンパスである。

1 - 1で述べたように、今年度は筑紫キャンパスと大橋キャンパスで開講されていた日本語コースを一本化した。

表5に各キャンパスで開講された日本語コースの内容、レベルおよび1週間あたりの授業回数をまとめる。

表5 各キャンパスで開講された日本語コース¹⁾

キャンパス	開講コース	開講レベル	1週間当たりの 各クラスの授業回数
箱 崎	総合(J)	1 ~ 8	1 ~ 4レベル : 3回 5 ~ 7レベル : 2回 8レベル : 1回
	漢字(K)	2 ~ 8	2回
	会話(S)	2 ~ 8	2回
	作文(W)	6, 7	2回
	読解(R)	7, 8	2回
	専門(T)	8	1回
伊 都	総合(J)	1 ~ 4	1 ~ 3レベル : 3回 4レベル : 2回
筑紫・大橋	総合(J)	初級前半	2回
		初級後半	2回
		中級	2回

1) レベルの詳細については表1を参照。

2. 受講者数および受講者の内訳

2 - 1 受講者数

図1に2002年度（平成14年度）以降の学習者数の推移をまとめる。

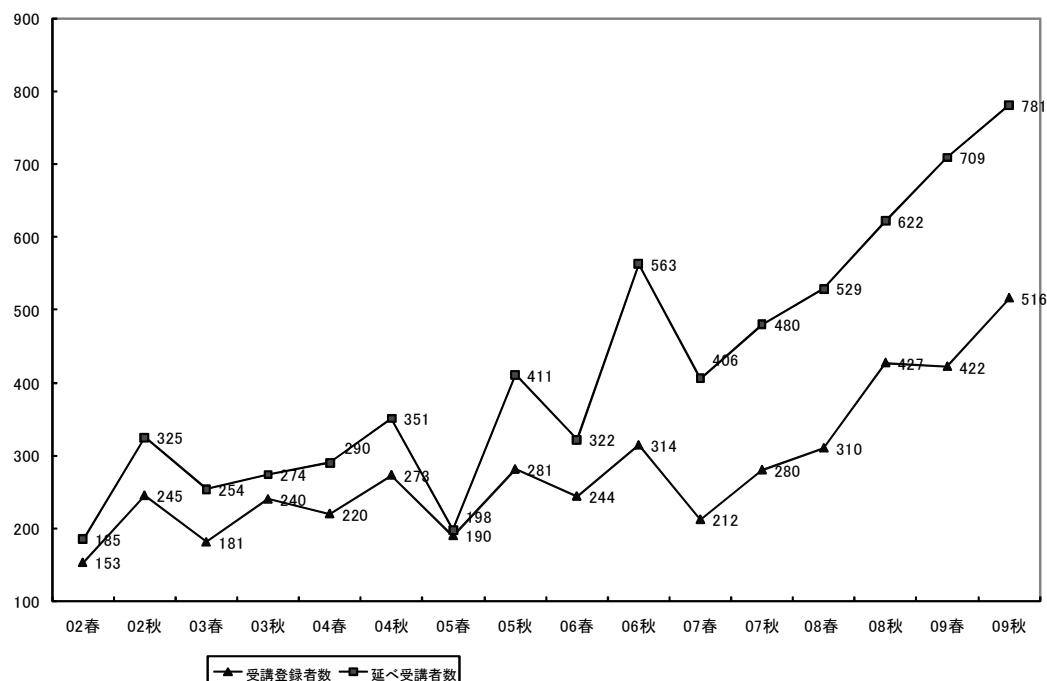


図1 JLCs 受講者数の推移

2007年度（平成19年度）以降学習者数が急激に増加しており、2007年度からの2年間は1年間に100名近い規模で増えていることが分かる。今年度の秋学期は、当センター開設以来初めて受講登録者数が500名を上回り、述べ受講者数も800名に迫る人数となった。2002年度（平成14年度）の秋学期と今年度の秋学期を比較すると、受講登録者数は約2.1倍、述べ受講者数は約2.4倍の増加となっている。

留学生受け入れ30万人計画が打ち出されたこともあり、今後も受講者数の増加は続くと考えられるが、当センターの現体制ではこれ以上日本語コースの規模を拡大することは困難である。組織のあり方を昨年度から引き続き検討しているが、同時に、誰を対象にした日本語コースを開講すべきかなど、受講対象学習者と開講日本語コースを整理しなおす必要があるのではないかと考える。

2 - 2 受講者の内訳

下に受講者の所属（表6）、身分（表7）、受講暦（表8）、出身地域（表9）をまとめる。

学習者の所属については、留学生センターに所属する学習者が春学期では全体の21.8%、秋学期は18.4%を占めており、全学補講コースとはいっても当センター所属の学習者が最も多い。

次に多いのは工学部および工学府に所属する学習者である。これらの学習者は伊都キャンパスの日本語コースを受講しているが、その他にも比較社会文化学府、システム情報科学府、総理工学府、数理学府、理学部の一部が伊都キャンパスの日本語コースを受講しており、学習者の約27%が伊都キャンパスに在籍することになる。今後、伊都キャンパスの日本語学習環境を更に整備していく必要がある。

表6 受講者の内訳（所属別）

所 属	春学期		秋学期		所 属	春学期		秋学期	
	人数	%	人数	%		人数	%	人数	%
留学生センター	92	21.8%	95	18.4%	歯学府・歯学部	9	2.1%	8	1.6%
人文科学府・文学部	25	5.9%	34	6.6%	薬学府・薬学部	2	0.5%	3	0.6%
比較社会文化学府	15	3.6%	24	4.7%	工学府・工学部	61	14.5%	78	15.1%
人間環境学府・教育学部	20	4.7%	34	6.6%	芸術工学府・芸術工学部	18	4.3%	31	6.0%
法学府・ロースクール・法学部	38	9.0%	44	8.5%	システム情報科学府	26	6.2%	26	5.0%
経済学府・ビジネススクール・経済学部	18	4.3%	32	6.2%	総理工学府	7	1.7%	7	1.4%
理学府・理学部	7	1.7%	6	1.2%	生物資源環境科学府・農学部	51	12.1%	66	12.8%
数理学府	8	1.9%	7	1.4%	システム生命科学府	4	0.9%	4	0.8%
医学系学府・医学部	21	5.0%	17	3.3%	その他		0.0%		0.0%

学習者の身分（表7）は例年通り「研究生」および「大学院生」が多い。また、近年、当センターの日本語コースを受講し単位認定を受ける各部局所属の交換留学生が増えている。

表7 受講者の内訳（身分別）

身 分	春 学 期		秋 学 期	
	人 数	%	人 数	%
研究生	168	39.8%	169	32.8%
修士課程学生	83	19.7%	109	21.1%
博士課程学生	28	6.6%	63	12.2%
交換留学生	31	7.3%	42	8.1%
Japan in Today's World Program 生	46	10.9%	53	10.3%
日本語・日本文化研修コース生	31	7.3%	35	6.8%
日本語研修コース生	9	2.1%	10	1.9%
日韓理工系プログラム	0	0.0%	13	2.5%
その他の身分の学生	8	1.9%	6	1.2%
訪問研究員	18	4.3%	16	3.1%
計	422	100.0%	516	100.0%

受講歴（表8）については、春学期は継続受講者が多く秋学期は新規の受講者が多い。秋学期に日本に来て翌年の夏に帰国する学習者や、秋学期に日本に来て1年間ほど日本語を学習しその後研究活

動を本格化させる学習者が多いためである。

表8 受講者の内訳 (受講歴別)

	春 学 期		秋 学 期	
	人 数	%	人 数	%
新規受講者	163	38.6%	354	68.6%
継続受講者	259	61.4%	162	31.4%
計	422	100.0%	516	100.0%

出身地域 (表9) は、1年を通して中国・台湾が最も多く、全体の43~48%を占める。次に他のアジアが全体の23~24%を占め、韓国の11~12%と続く。出身地域はアジアだけで学習者全体の80%以上を占めていることが分かる。

表9 受講者の内訳 (出身地域別)

出 身	春 学 期		秋 学 期	
	人 数	%	人 数	%
中国・台湾	185	43.8%	247	47.9%
韓国	51	12.1%	58	11.2%
他アジア	105	24.9%	121	23.4%
ヨーロッパ	47	11.1%	48	9.3%
北米	10	2.4%	14	2.7%
その他	24	5.7%	28	5.4%
計	422	100.0%	516	100.0%

3. 受講者による授業評価

JLCsでは、春学期末(6月)と秋学期末(2月)に、学習者による授業評価を行っている。授業評価はオンラインシステムで入力することができ、コース終了日までに学習者がオンラインシステムで評価を入力する。以下に2009年度(平成21年度)の結果をまとめる。

3-1 授業について

(1) 授業の難易度

質問：この授業の難易度は全体としてどうでしたか。

- a. とてもやさしかった b. やさしかった c. どちらとも言えない
d. むずかしかった e. とてもむずかしかった

表10 授業の難易度

			易しい	やや易しい	丁度よい	やや難しい	難しい
総合	初級	春学期	2.7%	14.4%	60.6%	20.7%	1.6%
		秋学期	1.8%	21.4%	58.3%	16.7%	1.8%
	中上級	春学期	0.0%	19.8%	57.5%	20.8%	1.9%
		秋学期	3.6%	27.4%	45.2%	22.6%	1.2%
漢字		春学期	1.9%	18.9%	60.4%	18.9%	0.0%
		秋学期	4.5%	23.9%	56.7%	14.9%	0.0%
会話		春学期	3.1%	20.3%	65.6%	10.9%	0.0%
		秋学期	2.7%	18.9%	63.5%	13.5%	1.4%
読解		春学期	0.0%	26.3%	57.9%	15.8%	0.0%
		秋学期	0.0%	15.4%	84.6%	0.0%	0.0%
作文		春学期	7.1%	21.4%	64.3%	7.1%	0.0%
		秋学期	0.0%	16.7%	75.0%	8.3%	0.0%
専門		春学期	0.0%	11.5%	76.9%	11.5%	0.0%
		秋学期	0.0%	8.3%	58.3%	33.3%	0.0%

(2) 宿題の量

質問：宿題の量は適当でしたか。

- a. 少なかった b. もう少しあったほうがよかった c. ちょうどよかった
d. 少し多かった e. たいへん多かった

表11 宿題の量

			少ない	やや少ない	適量	やや多い	多い
総合	初級	春学期	1.9%	5.7%	72.6%	19.8%	0.0%
		秋学期	1.2%	8.3%	78.6%	10.7%	1.2%
	中上級	春学期	3.8%	9.4%	67.9%	17.0%	1.9%
		秋学期	0.0%	4.8%	71.4%	20.2%	3.6%
漢字		春学期	4.7%	7.8%	76.6%	7.8%	3.1%
		秋学期	3.0%	6.0%	67.2%	17.9%	6.0%
会話		春学期	0.0%	10.5%	84.2%	5.3%	0.0%
		秋学期	0.0%	12.2%	81.1%	6.8%	0.0%
読解		春学期	0.0%	14.3%	78.6%	7.1%	0.0%
		秋学期	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
作文		春学期	11.5%	3.8%	84.6%	0.0%	0.0%
		秋学期	0.0%	8.3%	91.7%	0.0%	0.0%
専門		春学期	11.5%	3.8%	84.6%	0.0%	0.0%
		秋学期	8.3%	0.0%	91.7%	0.0%	0.0%

(3) 授業の回数

質問：1週間の授業回数は適当でしたか²⁾

- a. 少なかった b. もう少しあったほうがよかった c. ちょうどよかった
d. 少し多かった e. たいへん多かった

表12 授業の回数

			少ない	やや少ない	適量	やや多い	多い
総 合	初 級	春学期	2.7%	23.9%	67.0%	6.4%	0.0%
		秋学期	1.8%	19.6%	71.4%	7.1%	0.0%
	中上級	春学期	0.9%	9.4%	89.6%	0.0%	0.0%
		秋学期	1.2%	11.9%	82.1%	4.8%	0.0%
漢 字	春学期	0.0%	11.3%	81.1%	7.5%	0.0%	
	秋学期	0.0%	13.4%	83.6%	3.0%	0.0%	
会 話	春学期	1.6%	17.2%	79.7%	1.6%	0.0%	
	秋学期	4.1%	13.5%	77.0%	5.4%	0.0%	
読 解	春学期	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	
	秋学期	0.0%	15.4%	76.9%	7.7%	0.0%	
作 文	春学期	0.0%	14.3%	78.6%	7.1%	0.0%	
	秋学期	0.0%	0.0%	91.7%	8.3%	0.0%	
専 門	春学期	0.0%	23.1%	76.9%	0.0%	0.0%	
	秋学期	25.0%	33.3%	33.3%	8.3%	0.0%	

(4) 開講期間

質問：コースの長さ（5週間）は適当でしたか。

- a. 短かった b. もう長いほうがよかった c. ちょうどよかった
d. 少し長かった e. たいへん長かった

表13 開講期間

			少ない	やや少ない	適量	やや多い	多い
総 合	初 級	春学期	5.3%	21.8%	69.1%	2.7%	1.1%
		秋学期	3.0%	19.6%	72.6%	4.8%	0.0%
	中上級	春学期	0.0%	6.6%	91.5%	1.9%	0.0%
		秋学期	0.0%	14.3%	75.0%	10.7%	0.0%
漢 字	春学期	1.9%	15.1%	81.1%	1.9%	0.0%	
	秋学期	1.5%	7.5%	80.6%	10.4%	0.0%	
会 話	春学期	4.7%	17.2%	75.0%	1.6%	1.6%	
	秋学期	0.0%	13.5%	78.4%	8.1%	0.0%	
読 解	春学期	5.3%	10.5%	73.7%	10.5%	0.0%	
	秋学期	7.7%	7.7%	84.6%	0.0%	0.0%	
作 文	春学期	0.0%	28.6%	71.4%	0.0%	0.0%	
	秋学期	8.3%	0.0%	91.7%	0.0%	0.0%	
専 門	春学期	3.8%	15.4%	76.9%	3.8%	0.0%	
	秋学期	8.3%	33.3%	50.0%	8.3%	0.0%	

2) 各コースの1週間当たりの授業回数は表1にまとめてある。

(5) 授業の進度

質問：授業のスピードは適当でしたか。

- a. 遅かった b. もう少し速いほうがよかった c. ちょうどよかった
d. 少し速かった e. たいへん速かった

表14 授業の進度

			遅い	やや遅い	適当	やや速い	速い
総合	初級	春学期	2.1%	11.2%	62.8%	20.7%	3.2%
		秋学期	6.0%	22.6%	56.5%	13.7%	1.2%
	中上級	春学期	0.9%	4.7%	79.2%	15.1%	0.0%
		秋学期	1.2%	10.7%	72.6%	14.3%	1.2%
漢字	春学期	0.0%	20.8%	71.7%	7.5%	0.0%	
	秋学期	3.0%	13.4%	79.1%	4.5%	0.0%	
会話	春学期	4.7%	3.1%	87.5%	4.7%	0.0%	
	秋学期	1.4%	12.2%	81.1%	5.4%	0.0%	
読解	春学期	0.0%	15.8%	73.7%	10.5%	0.0%	
	秋学期	0.0%	7.7%	92.3%	0.0%	0.0%	
作文	春学期	0.0%	28.6%	57.1%	14.3%	0.0%	
	秋学期	0.0%	8.3%	91.7%	0.0%	0.0%	
専門	春学期	0.0%	3.8%	88.5%	7.7%	0.0%	
	秋学期	8.3%	8.3%	75.0%	8.3%	0.0%	

(6) 1クラスあたりの受講者数

質問：クラスの大きさ（学生の数）は適当でしたか。

- a. 小さい b. もう少し大きいほうがよかった c. ちょうどよかった
d. 少し大きかった e. たいへん大きかった

表15 1クラスあたりの受講者数

			少ない	やや少ない	適量	やや多い	多い
総合	初級	春学期	0.5%	3.2%	72.3%	23.4%	0.5%
		秋学期	0.0%	4.2%	72.6%	23.2%	0.0%
	中上級	春学期	0.9%	2.8%	67.0%	23.6%	5.7%
		秋学期	1.2%	3.6%	61.9%	25.0%	8.3%
漢字	春学期	1.9%	5.7%	84.9%	7.5%	0.0%	
	秋学期	1.5%	3.0%	74.6%	16.4%	4.5%	
会話	春学期	0.0%	6.3%	78.1%	15.6%	0.0%	
	秋学期	1.4%	1.4%	67.6%	25.7%	4.1%	
読解	春学期	0.0%	10.5%	73.7%	15.8%	0.0%	
	秋学期	0.0%	7.7%	84.6%	7.7%	0.0%	
作文	春学期	0.0%	21.4%	64.3%	14.3%	0.0%	
	秋学期	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	
専門	春学期	3.8%	3.8%	84.6%	3.8%	3.8%	
	秋学期	8.3%	0.0%	33.3%	50.0%	8.3%	

開講されたコースは、難易度、宿題の量、開講期間、授業回数、進度についてはほぼ適当であったといえる。

今年度、1クラスあたりの受講者数の改善を求めてコースを再編成したが、クラスサイズについてはどうであろうか。コース評価の結果(表15)は、1クラスあたりの受講者数について「適量」とする回答が全体的には多いながら、春学期・秋学期ともに「やや多い」「多い」という回答も目立つ。特に秋学期の専門コースでは「やや多い」という回答が「適量」を上回った。

先にも述べたが、現体制ではクラス数や教員数を増加させることが難しいため、今後、これ以上の受講者の受け入れも難しくなると思われる。早急に対応を検討する必要がある。

3 - 2 学習者の自己評価

(1) 予習にかかる時間

質問：授業の予習するのにどのくらい時間がかりましたか。 毎回平均 _____ 時間ぐらい

表16 予習時間

*() 内の数値は時間

	初 級	中上級	漢 字	会 話	読 解	作 文	専 門
春学期	2.0	3.1	2.3	1.9	1.5	0.8	0.9
秋学期	2.5	3.1	3.0	1.2	1.0	1.0	2.6

(2) 復習にかかる時間

質問：授業の復習するのにかかった時間はどれぐらいでしたか。 毎回平均 _____ 時間ぐらい

表17 復習時間

*() 内の数値は時間

	初 級	中上級	漢 字	会 話	読 解	作 文	専 門
春学期	1.7	3.0	2.1	1.2	1.4	3.3	1.1
秋学期	2.2	2.6	2.5	1.5	1.0	1.1	2.7

予習時間および復習時間については、どのコースも予習と復習に1～3時間程度費やしている。例年ほぼ同時間の自習時間を確保している学習者が多い。

3 - 3 教師に対する評価

各項目ともに、数値が高いほど高い評価である。最大値は4.0で、3.0以上が一応の目安となる。

(1) 授業時間の厳守

質問：授業は時間どおり行われましたか。

- a. 強くそう思う (4.0) b. そう思う (3.0) c. どちらとも言えない (2.0)
d. そう思わない (1.0) e. 全くそう思わない (0.0)

表18 授業時間の厳守

	初 級	中上級	漢 字	会 話	読 解	作 文	専 門
春学期	3.1	3.3	3.5	3.4	3.2	3.3	3.1
秋学期	3.3	3.3	3.4	3.4	3.7	3.4	3.1

(2) 教育への熱意

質問：教師に授業への熱意が感じられましたか。

- a. 強くそう思う (4.0) b. そう思う (3.0) c. どちらとも言えない (2.0)
d. そう思わない (1.0) e. 全くそう思わない (0.0)

表19 教育への熱意

	初級	中上級	漢字	会話	読解	作文	専門
春学期	3.4	3.5	3.5	3.6	3.7	3.4	3.3
秋学期	3.6	3.5	3.5	3.6	3.7	3.8	3.8

(3) 授業の準備

質問：(教師の) 授業の準備は十分になされていたと思いますか。

- a. 強くそう思う (4.0) b. そう思う (3.0) c. どちらとも言えない (2.0)
d. そう思わない (1.0) e. 全くそう思わない (0.0)

表20 授業の準備

	初級	中上級	漢字	会話	読解	作文	専門
春学期	3.5	3.5	3.6	3.6	3.7	3.4	3.2
秋学期	3.7	3.5	3.6	3.6	3.7	3.8	3.7

(4) 説明の分かりやすさ

質問：先生の指示・説明はどうでしたか。

- a. とてもわかりやすかった (4.0) b. わかりやすかった (3.0)
c. どちらとも言えない (2.0) d. 少しわかりにくかった (1.0)
e. わかりにくかった (0.0)

表21 説明の分かりやすさ

	初級	中上級	漢字	会話	読解	作文	専門
春学期	3.1	3.2	3.5	3.6	3.5	3.6	3.1
秋学期	3.3	3.3	3.5	3.4	3.7	3.6	3.4

どのコースも全項目で3以上の評価を得ており、当センターの日本語コースは今年度も学習者から高い評価を得ているといえる。また、春学期・秋学期ともにほぼ同数値の評価を得ていることから、教員が質の安定した内容を提供していることが分かる。

3 - 4 総合評価

数値が高いほど評価が高いといえる。最大値は100%で、80%以上が一応の目安である。

質問：あなたはこのコースの授業にどのくらい満足していますか。 _____ %

表22 総合評価

	初 級	中上級	漢 字	会 話	読 解	作 文	専 門
春学期	86.2	83.6	88.4	87.9	90.4	90.6	89.2
秋学期	86.6	85.7	88.5	85.7	95.1	96.0	90.6

昨年度に引き続き、今年度も全てのコースにおいて80%以上の高評価を得た。

また、読解コースと作文コースは春学期・秋学期ともに満足度が90%以上となっており、学習者の評価が非常に高いことがわかる。両コースとも2005年度（平成17年度）に開講されて以来授業内容の改善が重ねられてきた。今年度の総合評価の結果は教員の努力の成果の表れといえるのではないだろうか。

4. 今後の課題

今後の課題としては以下の点を挙げるができる。

1) 学習者数増加への対応

当センターの組織は1996年度（平成8年度）以来大きく変化しておらず、現体制で今後の留学生数の増加に対応していくのは極めて困難であろう。今年度まではコースを再編成するなどして学習者の受け入れに最大限の努力を払ってきたが、今後は方向転換を考える必要があるのではないかと。例えば、コースを定員制にするとともに優先的に受講できる学習者の条件を設けるなど、現在の「来る者は拒まず」の方針を変更する時期にさしかかっているのではないだろうか。

2) オンラインプレースメントテストの開発

現在、プレースメントテストは紙媒体で行っているが、学習者数の増加にともない定められたテスト日に来られない学習者が増加している。また、九州大学は現在6箇所にキャンパスが分散しているため、プレースメントテストの作業は教員にとって非常に煩雑で負担が大きいのが現状である。

上の問題に対応するために、プレースメントテストを早急にオンライン化し、学習者にとって利用しやすいシステムにするとともに教員が効率よく業務を行えるようにする必要がある。

参考文献

大神智春（2009）「九州大学留学生のための日本語コース（JLC）」『九州大学留学生センター紀要』第18号 pp.53-68

日本語研修コース

吉川裕子*

1. はじめに

日本語研修コースは、九州大学および九州北部地域の大学院に入学予定の国費研究留学生を主な対象として来日後の半年間予備教育を行うコースである。日本語研修コース（以下研修コース）では、日本語教育、日本事情教育、大学院への適応を促進するための教育と支援を行っている。半年の間に会話を中心とした初級の日本語を習得させること、研究の場において円滑にコミュニケーションができるようにすることを目標としている。

研修コースは、留学生センターの独立したコースとして運営されてきたが、九州大学の留学生数が増加したことから、平成20年度に研修コースとJLCをJ1クラスの部分で融合させる改編を行った。平成21年度においても引き続き融合させた方法で運営した。以下に平成21年度の実施状況を報告する。

2. 実施概要

平成21年度研修コースの実施期間、主な日程は下記の通りである。

- 1) 実施期間
- | | | | |
|----|-------|---|--------------|
| 前期 | 4月8日 | - | 9月10日 (第48期) |
| 後期 | 10月8日 | - | 3月11日 (第49期) |

2) 主な日程

前期	
開講式	4月8日
授業開始	4月9日
健康管理についての講義 (健康科学センター: 上園慶子)	4月21日
防災センター・百道浜見学	5月1日
見学旅行 (熊本城・阿蘇山)	5月30日
三者面談 ¹ (指導教員・留学生・コーディネーターの三者)	6月 - 7月
書道の授業 (学外講師)	6月24日
小学校訪問 (福岡市立香陵小学校)	6月29日
夏休み	7月13日 - 31日

*九州大学留学生センター准教授

夏季ラウンド (J1終了の研修生を対象としたJ2 クラス)	7月13日 - 8月7日
発表会 ² (文集『世界の輪40号』に収録)	9月3日
授業終了	9月4日
閉講式	9月10日
後期	
開講式	10月8日
授業開始	10月13日
健康管理についての講義 (健康科学センター：上園慶子)	10月27日
見学旅行 (熊本城、阿蘇山)	11月2日
太宰府見学	11月15日
三者面談 (指導教員・留学生・コーディネーターの三者)	12月
冬休み	12月21日 - 1月8日
書道の授業 (学外講師)	1月19日
小学校訪問 (福岡市立香陵小学校)	2月1日
冬季ラウンド (J2、J3、中級入門レベル)	2月2日 - 26日
発表会 (文集『世界の輪41号』に収録)	3月3日
授業終了	3月5日
閉講式	3月11日

3) 研修生

研修生は、国費外国人留学生のうち九州大学及び北部九州の大学に配属された研究留学生と、福岡教育大学で研修予定の教員研修留学生 (後期) である。本年度は、来日時に日本語を学習していた (J2～J4レベル) 研修生が目立ち、前期は約半数、後期は3分の1が既習者だった。

前期 23名

日本語既習者10名を含む。既習者はJLCでレベルの相当する3種類のクラスを受講。

出身：アラブ首長国連邦、インドネシア (2名)、イラン、オーストラリア、オランダ、韓国、コロンビア、シリア、タイ、チェコ、フィリピン (2名)、ブルネイ、ベトナム (4名)、ペルー (2名)、ラオス、リベリア、ロシア

進学先：九州大学21名、九州工業大学2名

後期 12名

日本語既習者4名を含む。既習者はJLCでレベルの相当する3種類のクラスを受講。

出身：イラン (2名)、ウズベキスタン、エルサルバドル、タイ、中国、ナイジェリア、ハンガリー、ブラジル、ペルー、ミャンマー、メキシコ

進学先：九州大学 5 名、福岡教育大学 6 名、九州工業大学 1 名

JLC では前期・後期の途中（第 1 ラウンド・第 3 ラウンド終了後）でプレースメントテストを行い、入国遅れ等でクラスに入れなかった学生及び上のレベルに上がりたい受講者に対応している。研修生も本人の希望でこの時期にプレースメントテストを受け、上のクラスに移動できる。しかし、J1 から J2 に移動した研修生はこれまでいなかった。本年度は前期に 1 名後期に 2 名が J1 から J2 に上がった。

4) 時間割

前期（初心者クラス）

4 月 9 日～7 月 10 日 第 1 ラウンド・第 2 ラウンド（JLC と同じ日程）

限	時 間	火	水	木	金
2	10 : 30 - 12 : 00	J1c		J1c	J1c
3	13 : 00 - 14 : 30	文化	K1	文化	K1
4	14 : 50 - 16 : 20	S1	文化	S1	文化

J1c は JLC のクラスで、JLC の受講者と研修生の混成クラスである。「S1」（会話入門）、「K1」（漢字入門）、「文化」の 3 種類のクラスは研修生だけを対象として独自に運営している。

7 月 13 日～8 月 7 日 夏季ラウンド

限	時 間	月	火	水	木	金
2	10 : 30 - 12 : 00	J2	J2	J2	J2	J2
3	13 : 00 - 14 : 30	J2	J2	J2	J2	J2
4	14 : 50 - 16 : 20	J2	発表会準備	J2	発表会準備	J2

JLC の第 2 ラウンド終了後に夏季ラウンドを立ち上げ、J1 を終了した研修生を対象として、J2 レベルのクラスを毎日実施した。これは、研修コースが J2 レベルの終了をコースの到達目標としているからである。JLC の J2 の授業が 12 週間となっているのに比べ、3 分の 1 の 4 週間で J2 レベルを終了した。

後期（初心者クラス）

10 月 13 日～1 月 29 日 第 3 ラウンド・第 4 ラウンド（JLC と同じ日程）

限	時 間	火	水	木	金
2	10 : 30 - 12 : 00	J1d		J1d	J1d
3	13 : 00 - 14 : 30	文化	K1	文化	K1
4	14 : 50 - 16 : 20	S1	文化	S1	文化

後期はJLCのJ1がa~dの4クラス編成になった。J1dは研修生と2限目を希望するJLCの受講生との合同クラスである。

2月2日～2月26日 冬季ラウンド

限	時間	月	火	水	木	金
2	10:30 - 12:00	J2	J2	J2	J2	J2
3	13:00 - 14:30	J2	J2	発表会準備	J2	発表会準備
4	14:50 - 16:20	J2	J2	発表会準備	J2	発表会準備

後期はJLCの第3ラウンド終了後に冬季ラウンドを立ち上げ、J1を終了した研修生を対象として、J2レベルのクラスを毎日実施した。

後期 (冬季ラウンドの既習者クラス)

冬季ラウンドでは、既習者クラスも2クラス体制 (J3レベルと中級入門レベル) で実施した。夏季冬季の特設ラウンドに既習者クラスを設けるのは初めての試みである。

2月2日～2月26日 冬季ラウンド (既習者)

限	曜日	月	火	水	木	金
2	10:30 - 12:00		J3			
3	13:00 - 14:30	J3	中級入門	発表会準備	J3	J3
4	14:50 - 16:20	中級入門		発表会準備	中級入門	中級入門

3. 授業内容

1) 授業時間数

前期

(1コマは90分)

レベル	期間	週のコマ数	週	時間小計	時間合計
初心者	ラウンド1 & 2	11	12	198.0	310.5
	夏季ラウンド	15	4	90.0	
	発表会の週	15	1	22.5	
既習者	ラウンド1 & 2	7	12	126.0	139.5
	発表会の週	9	1	13.5	

後期

レベル	期 間	週のコマ数	週	時間小計	時間合計
初心者	ラウンド3 & 4	11	12	198.0	307.5
	冬季ラウンド	15	4	90.0	
	発表会の週	13	1	19.5	
既習者	ラウンド3 & 4	7	12	126.0	181.5
	冬季ラウンド	6	4	36.0	
	発表会の週	13	1	19.5	

前期は来日時にJ2～J4レベルの日本語力のある既習者が23人中10人いた。既習者の受講しているJLCは第2ラウンド終了後に夏季休暇となる。この時期初心者には4週間の夏季ラウンドが開講されることから、既習者からも特設のクラスを望む声が聞かれた。そこで夏季ラウンド期間に既習者には発表会の準備を課題とし、定期的（週2コマ）にコーディネーターが指導したが、これは授業ではなく、個別の支援という位置づけであった。後期は、冬季ラウンド期間にも授業を行ってほしいという既習者からの強い要望があった。既習者がJ3と中級入門のほぼ2グループに分けられたため2クラス立ち上げることを検討し、各クラス24コマの授業を実施した。

2) 使用教材

使用した教材の主なものは以下の通りである。21年度前期に、JLCのJ1のテキストが『TOTAL JAPANESE Conversation』から下記に変更された。それに伴って研修コースの使用教材も変更した。

- J1：『初級日本語げんき』 坂野永理他 The Japan Times
『初級日本語げんき ワークブック』 坂野永理他 The Japan Times
- S1：『初級日本語げんき』 坂野永理他 The Japan Times
プリント教材
- K1：『初級日本語げんき 読み書き編』 坂野永理他 The Japan Times
プリント教材
- 文化：『はじめのいっぽ』 春原憲一郎他 スリーエーネットワーク
自主作成教材
- J2：『初級日本語げんき』、『初級日本語げんき』
『初級日本語げんき ワークブック』、『初級日本語げんき ワークブック』
坂野永理他 The Japan Times
- 冬季ラウンドの既習者クラス
- J3：『初級日本語げんき』
『初級日本語げんき ワークブック』 坂野永理他 The Japan Times
- 中級入門：『みんなの日本語中級』 スリーエーネットワーク

3) 授業内容

初心者レベルのクラスの授業内容は下記の通りである。

J1：1回90分の授業を週3回行う。日本語学習経験の無い学習者を対象に、基礎的な文法や語彙を勉強し、簡単な日常会話ができるようになることを目指す³。

S1：J1のクラスと連携させながら、テキストの会話部分を補足発展させて、十分に会話の練習をする。聴解練習、ディクテーションも行う。

K1：ひらがな・カタカナの表記から始まり、3週目から漢字の学習を開始する。J1クラスの進捗の後を追う形で進める。総学習漢字数約100字。

文化：教室での活動の他に見学・訪問などを実施しつつ、日本文化と研修生それぞれの国の文化の違いに気づき、異なる価値観を理解すること、日本の大学や日本社会での生活に適應できる力をつけること、アカデミックな発表の方法を学ぶことを目標とする。研修コース終了前の発表会の準備も含む。

J2：対象は動詞、形容詞の過去、非過去の活用がわかる人。日常会話に必要な基本的文法や語彙を学び、身近な話題で会話ができる日本語能力を養成する⁴。

4. 成績の認定と報告

成績は各クラスの得点を総合して判定した。(既習者の成績はJLCの各受講クラスの成績の総合点)前期・後期それぞれ下記の通り全員合格であった。センター委員会の承認を得て修了が認定された。

総合評価	A	B	C	D	不合格
数値 (%)	90～100	80～89	70～79	60～69	60未満
前期 (人)	9	11	3	0	0
後期 (人)	6	3	3	0	0

5. 研修生からの評価

コース終了前に研修生による評価をアンケート形式で実施した。以下に評価の結果をまとめる。

1) 研修生による評価

前期 9月4日実施 回答者：12名(初心者のみ)(記述部分は英文から和訳して抜粋)

質問1 日本語のクラスに関して

初心者 クラス (数字は人数)

クラス名	大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然よくない	無回答
J1	9	3	0	0	0	0
S1	7	5	0	0	0	0
K1	11	1	0	0	0	0
文化	7	5	0	0	0	0

J2 クラス (夏季ラウンド)

大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然よくない	無回答
4	5	3	0	0	0

コメント：

- ・大変速く学ぶシステムだが、私はこのシステムがいいと思う。
- ・大変だったが、語彙が増えて日本語が上手になった。
- ・J2の時期に日本語の進歩を実感した。しかし、期間はとても短かった。
- ・クラスの内容はよかったが、授業のペースが非常に早く、よく理解できなかった。
- ・テキストの練習をする時間が十分ではない。
- ・非常に速くて練習の時間が足りなかったので、夏休みの後多くを忘れてしまった。
- ・語彙が使えるようになるだけの十分な時間がない。
- ・期間が短すぎる。

クラス間のバランス

大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然よくない	無回答
4	8	0	0	0	0

コメント：

- ・J2の期間が短い。
- ・J2もJ1と同じペースにすべき。
- ・文化クラスの時間がちょっと多い。
- ・S1とK1の時間を増やした方がいい。(2)

質問2 もっと勉強したかったこと (複数回答可)

会話	文法	漢字	聴解	発音	読解
11	7	9	7	3	2
作文	文化	スピーチ	語彙	その他	
2	5	5	5	1	

その他：カジュアルな会話

質問3 授業以外の活動について

	大変興味深い	興味深い	どちらとも言えない	興味が持てない	全然興味が持てない	無回答
防災センター・百道見学	7	5	0	0	0	0
熊本城・阿蘇山旅行	10	2	0	0	0	0
書道	6	5	1	0	0	0
小学校訪問	7	5	0	0	0	0

質問4 「三者面談」について

大変役に立つ	役に立つ	どちらとも言えない	役に立たない	全然役に立たない	無回答
6	3	2	0	0	1

無回答：三者面談なし

質問5 「発表会」について

大変役に立つ	役に立つ	どちらとも言えない	役に立たない	全然役に立たない	無回答
6	6	0	0	0	0

質問6 学習者自身が日本語の学習に意欲的に取り組んだかどうか

大変意欲的	意欲的	まあまあ	不足	全然足りない	無回答
2	8	1	1	0	0

質問7 毎日何時間ぐらい自宅学習に取り組んだか

4時間以上	4	平均3時間
3時間以上	4	
2時間以上	4	
1時間以上	0	

質問8 コースへの満足度

100%	1	平均91%
90%以上	8	
80%以上	2	
70%以上	1	

質問9 コースへの提案

- ・研修コースは今後も学生たちが日本の社会に適應するのを助けるコースであってほしい。
- ・J1で勉強した言葉を練習できるように、S1の内容がJ1の内容と連携しているといい。
- ・夏季ラウンドの授業のペースをもっとゆっくり。
- ・J2はJ1より役に立たない。夏季ラウンドはもっと長くするか、文法を部分的に省く。
- ・J2レベルは難しかった。J2の全ての日本語を吸収するには短すぎる。期間の延長ができるといい。
- ・J2クラスの期間を見直し、できれば延長する。

後期 3月4日実施 回答者：12名（初心者6名、既習者6名）

質問1 日本語のクラスに関して（初心者レベルの回答）

初心者クラス（数字は人数）

クラス名	大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然よくない	無回答
J1	5	1	0	0	0	0
S1	6	0	0	0	0	0
K1	6	0	0	0	0	0
文化	6	0	0	0	0	0

J2 クラス（冬季ラウンド）

大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然よくない	無回答
3	3	0	0	0	0

コメント：

- ・クラスのペースは非常に速かったが、理解はできた。
- ・よかったが、速すぎた。各課の単語をなかなか覚えることができなかった。

クラス間のバランス

大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然よくない	無回答
5	1	0	0	0	0

コメント：

- ・クラス間の構成はとてもいい。
- ・J1の時にもっと時間をかけて練習し、文法の補強がしたかった。
- ・漢字をもっと勉強したほうがいい。

日本語のクラスに関して（既習者レベルの回答）

J3・中級入門 クラス（冬季ラウンド）

大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然よくない	無回答
2	3	0	0	0	1

コメント：文法はたくさん勉強できたが、もっと話す練習がしたかった。

クラス間のバランス

大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然よくない	無回答
3	3	0	0	0	0

質問2 もっと勉強したかったこと（初心者レベルの回答）（複数回答可）

文法	会話	聴解	スピーチ	漢字	語彙
5	4	5	0	3	2
発音	文化	読解	作文	その他	
1	0	3	2	0	

もっと勉強したかったこと（既習者レベルの回答）（複数回答可）

文法	会話	聴解	スピーチ	漢字	語彙
1	4	3	3	3	0
発音	文化	読解	作文	その他	
0	1	1	2	0	

質問3 授業以外の活動について

	大変興味深い	興味深い	どちらとも言えない	興味が持てない	全然興味が持てない	無回答
熊本・阿蘇旅行	9	1	1	0	0	0
太宰府見学	5	3	0	0	0	0
書道	8	0	0	0	0	0
小学校訪問	11	1	0	0	0	0
九大生との会話	6	4	0	1	0	0

既習者は自由参加となっているため合計人数が異なる。

質問4 「三者面談」について

大変役に立つ	役に立つ	どちらとも言えない	役に立たない	全然役に立たない	無回答
8	0	1	0	0	3

無回答：三者面談なし

質問5 「発表会」について

大変役に立つ	役に立つ	どちらとも言えない	役に立たない	全然役に立たない	無回答
10	2	0	0	0	0

質問6 学習者自身が日本語の学習に意欲的に取り組んだかどうか

大変意欲的	意欲的	まあまあ	不足	全然足りない	無回答
2	7	2	0	1	0

質問7 毎日何時間ぐらい自宅学習に取り組んだか

4時間以上	3	平均2.6時間
3時間以上	3	
2時間以上	3	
1時間以上	3	
無回答	0	

質問8 コースへの満足度

100%	2	平均93.2%
90%以上	8	
80%以上	2	
70%以上	0	

質問9 コースへの提案

- ・会話のクラスを増やす。
- ・作文の授業を増やす。
- ・宿舍の会館を出なければならない時期と発表会の準備の時期が重なっているのはよくない。
(2名)
- ・文化クラスでも勉強したかった。(既習者)
- ・もう一つ会話のクラスがあるといい。(既習者)
- ・文法は理解できたが、大切なのはそれを使うことだ。そのためには会話クラスが週に3回か4回あるといい。(既習者)

2) 評価のまとめ

研修コースの6か月間の構成と運営に関しては、概ね高い評価を得ているとすることができる。研修生の満足度も20年度と比較すると上がっている⁵。しかし、日本語の授業のJ2クラス(夏季ラウンド・冬季ラウンド)の部分に関しては、前年度と同様に他のクラスに比べて評価が下がっている。例えば、前期のJ1とJ2を比較すると下記の通りである。

21年度前期Jクラス	大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然よくない	無回答
J1	9	3	0	0	0	0
J2(夏季ラウンド)	4	5	3	0	0	0

J1に比べJ2では「大変よい」より「よい」の方が多くなり、「どちらとも言えない」が3名ある。コメントを見ると、「内容がよかった」「日本語が上達した」という声がある一方で、依然として「期間が短い」「スピードが速い」というコメントが並んでいる。「J2もJ1と同じペースにすべき」や「J2クラスの期間の延長を」という意見もある。研修コースのJ2レベルの運営にはなお問題がある。

6. 今後の課題

今年度は二つの新しい試みを実施した。一つは、2 3)で述べたとおり、第1ラウンド終了後にプレースメントテストを受け、第2ラウンドでJ1からJ2に移動する学生を出したことである(第3ラウンドから第4ラウンドも同様)。J2に移動するためには、J1の範囲を習得しているだけでなくJ2の前半の文法を習得していなければJ2後半への合流が難しい。学生の頑張りや教師の特別な支援が必要となる。希望者には補助教材のワークブックを自習させた後、解答の間違いを指導するなど手当てを行った。今年度は3名がJ1からJ2に上がり、その後J2クラスではほぼ問題なく学習を継続することができた。もう一つは、後期に既習者レベルにも冬季ラウンドを開講し、授業を行ったことである。3 1)で述べたように、既習者はJ3と中級入門レベルに分かれて24コマの授業を受けた。後期の研修生のうち2名は、ラウンド3でJ1、ラウンド4でJ2、冬季ラウンドでJ3を学習し、コース期間にJ1からJ3までの学習を終えることができた。

研修コースは、初心者に初級レベル(J2程度)の日本語を習得させることを目標としているが、来日時に既にJ2以上のレベルの研修生が増加する傾向にある。また、J2には達していないが国で多少学習して来日する研修生も増加している。今年度の前期は約半数、後期は3分の1がJ2以上の既習者だった。今後はこうした既習者の日本語学習への要望も考慮し、今年度の試みを踏まえ、対策を考えていきたい。

さらに、既習者に対応する一方で、夏季ラウンドと冬季ラウンドのJ2レベルの運営方法を検討することが、今後の大きな課題である。平成20年度に実施された研修コースとJLCとのJ1部分の融合によって、研修コースではJ1の進度に比べJ2の進度が非常に速いというバランスの悪い状態が続いている。5 2)で述べたとおり、J2に関しては研修生の評価が下がっており、「J2もJ1と同じペースにすべき」「J2クラスの期間の延長を」という要望が出ている。これら研修生からの指摘を受けとめ、J2レベルの運営の問題点を検討する必要がある。

注

- 1 三者面談に関しては、「日本語研修コースにおける「三者面談」の実施と効果」『九州大学留学生センター紀要』第16号 pp.13-21参照。
- 2 発表会は毎学期末に行う口頭発表である。各自の専門に関して、今まで研究してきたことまたは今後研究したいことについて、専門外の人に日本語で分かりやすく説明する。一人質疑応答を含めて15～20分。指導教員他関係者を招待して行う。発表の原稿は文集『世界の輪』としてまとめる。
- 3 留学生センターホームページ <http://www.isc.kyushu-u.ac.jp/center/home.htm> のJLC参照。
- 4 留学生センターホームページ <http://www.isc.kyushu-u.ac.jp/center/home.htm> のJLC参照。
- 5 20年度の研修コースに関しては、「日本語研修コース」『九州大学留学生センター紀要』第18号 pp.79-90参照。

全学教育科目の日本語

清水 百合*

はじめに

平成21年度に留学生センターの日本語教育部門の教員が担当した全学教育科目は、学部留学生対象の「日本語」である。言語文化科目・言語文化基礎科目に分類されている「日本語」である。日本語は、留学生センターの教員6名と芸術工学部の教員1名が担当し、17コマを以下の表のように1年生の前期と後期、2年生の前期に振り分け、各クラスが10名前後で指導ができるように構成されている。

1. 平成22年度の学習内容

現在使われている時間割での授業は、平成16年度からで6年目にあたる。また平成20年度は、六本松キャンパスでの最終年度であった。平成21年度からは新しい伊都キャンパスでの授業なるため、引越しに備え全学教育の教務課から授業を担当する部門に対して、21年度はできる限り20年度と同じように授業を行うようにという要請があった。そこで21年度もそれ以前と同じように担当し、学習項目を同じように定めた授業を2コマずつ担当した。

例えば、上の表にあるように、1年の前期では1人の教員が月曜日の2限と3限の「聴解」の授業を2コマ、別の教員が火曜日の2限と3限の「聴解」の授業を2コマ担当している。この2人の教員はあらかじめ授業計画について話し合っているが、担当する学部の違いから学生の傾向も異なるため、必ずしも全く同じ事をしているわけではない。また、同じく1年の前期に行われる「総合基礎」のように1人の教員が4コマを担当するというやり方で行われることもある。

以下が時間割とその学習内容である。

前期				
1年生対象				
1	月	2限	聴解(日)	法学部 理学部 薬学部 工学部(1部)
2		3限	聴解(日)	工学部 芸術学部
3	火	2限	聴解(日)	経済学部 経工学部 工学部 21Cブ 医学部
4		3限	聴解(日)	文学部 教育学部 医学部 歯学部 農学部
5	木	2限	総合基礎(日)	法学部 理学部 薬学部 工学部
6		3限	総合基礎(日)	工学部 芸術学部
7	金	2限	総合基礎(日)	経済学部 経工学部 工学部 21Cブ 医学部
8		3限	総合基礎(日)	文学部 教育学部 医学部 歯学部 農学部

*九州大学留学生センター教授

前期					
2年生対象					
9	月	1限	社会文化(日)	文学部	教育学部 法学部 21Cブ 薬学部 工学部 農学部
10	水	4限	社会科学(日)	文学部 理学部	教育学部 工学部 法学部 経済学部 経工学部 21Cブ
11	金	4限	自然科学(日)	文学部 医学部	教育学部 工学部 法学部 経済学部 経工学部 21Cブ 歯学部 芸術学部

また2年生対象の日本語では、第一外国語として日本語を履修する場合、文学部・教育学部・法学部・経済学部の学生は、3単位を取らなければならない。しかし21年度の時間割りでは経済部の学生はこちらが出している社会文化の日本語の時間（月曜日）は箱崎日に当たるため、社会科学の日本語（水曜日）と自然科学の日本語（金曜日）の2単位しか取れないので、実質上第一外国語をとって選択するのが困難な状況となっている。しかし21年度は、この点に関して、経済学部の留学生から、問い合わせや要請はなかった。

その他の学部では学生が必要と思われる科目を、1年前期に2コマ（聴解、総合基礎）、1年後期に2コマ（作文、会話・発表）を全て受講できるようになっている。

以下に示すのが、1年生後期の時間割りと学習内容である。

後期					
1年生対象					
1	月	2限	作文(日)	法学部	理学部 薬学部 工学部
2		3限	作文(日)	工学部	芸術学部
3	火	2限	作文(日)	経済学部	経工学部 21Cブ 医学部 工学部
4		3限	作文(日)	文学部	教育学部 医学部 農学部
5	木	3限	会話・発表(日)	工学部	芸術学部
6	金	3限	会話・発表(日)	文学部	教育学部 医学部 歯学部 農学部

2. カリキュラムの長所と短所

入学したばかりの留学生が、一年生で全ての技能、前期に聴解と総合、後期に作文と会話・発表を履修できるように分けて科目とした。このような形で日本語を受講できるようになったことの長所は、まず大学において専門を勉強するために必要不可欠な日本語の力を集中して強化することで、ある程度まで引き上げることができるようになったことである。

留学生は日本語の勉強において、大学に入るまではただ入学試験を目的として「より速く読む」「考えをまとめてすばやく書く」練習に集中してきた。そのため、これからの4年間の大学での学習において必要な日本語のスキル、例えば「講義を聴く」「レポートを書く」とはどのようなものかということが分かっているとはかぎらない。

16年度の改編では日本語を担当する教員たちが、過去に教えた学生の日本語における問題点を分析

し、学部留学生が欠如している日本語の力を補強する授業構成を考え、上記のような時間割を作成した。大学で講義を聴く力、レポートを書く力やゼミで発表する力をつけることを目的としたこのカリキュラムは、既にある程度力があり、授業についていける学生には、バランスよく日本語の力が加わり最適である。

しかし、留学生の中には、様々な理由で日本語の聴く力、話す力、読む力、書く力のバランスがよくない学生が少なくない。特に聴く力が弱い学生は、先生の講義が理解できないので、講義に出て何もできない。後で友達にノートを見せてもらったり、自分で図書館に行き本を読んで勉強したりすることになるが、努力の割に効果は少ない。また知っている語彙の数が少ない学生は、聴いても、読んでもわからないことばかりである。このような学生は、上記の時間割で日本語を勉強しても、いつも足りない技能が学習の妨げとなり、急速に力をつけることは望めない。現在の全学教育科目の日本語では、このように総合点では良いが、全てがよい訳ではなく、むしろバランスが著しく悪い学生に対処できないのが短所となっている。

3. 今後の課題

留学生にとって日本の大学での専門科目の学習は、日本語の力、特に聴きと書きの力がないとかなり難しい。加えて、たかだか2～3年しか勉強していない外国語である日本語で学習するのであるから、当然大学での専門の講義に慣れるまで、日本人学生より時間がかかることが予想される。もちろん、留学生は大学に入学したからには、努力を重ね、大学の定めたカリキュラムののりこった単位履修を行うべきではあるが、今のように大学の国際化が叫ばれ、G30の英語による学部留学生のプログラムも始まったこの時期に、改めて学部の留学生に対して少し緩やかなカリキュラムを考えてみるのもいいのではないだろうか。

今後も各学部の入学試験における日本語能力の受け入れ基準が低く、入学しても充分勉強していけないレベルの留学生が入ってくるという問題は続いていくと思われる。加えて山の上の伊都キャンパスでの留学生生活は、六本松キャンパスに比べてさびしく、アルバイトを探すのも困難という留学生にとっての学習環境の変化もある。

留学生にとっての「留学」とは、大学での授業に加えて、より好ましい人間関係を教員や学生同士で構築すること、そして日本社会という異文化社会に身を委ねることで、自国では体験できないを通して「適応」を学ぶことでもあると思う。

留学生の中には日本人の学生と互角であろうと思われる優秀な学生もいる。そのような学生は、学習に余裕があり、部活動やアルバイトを通して、将来社会人として必要となる視野を拓けているように見受けられる。上記に述べたように、日本語の上達に時間がかかる学生は、努力してもすぐには効果が出ない。大学の4年間を日本語の学習、専門の学習のみに明け暮れるのは、留学生として「社会を学ぶ」チャンスを逸することになるのは、残念である。

日本語 CAI (Computer Assisted Instruction) コース

鹿島英一*

CAI コースは、通常の補講コース（週2回以上）と時間的に合わない、定期的な時間が取れない、来日時期が通常と異なる、など諸事情のある本学の留学生や客員研究員を対象とした日本語補講コースで、学習内容の入ったコンピュータの使い方を理解し、各学習者が自分に合った進捗と目的に応じた、学習できる点に特徴がある。

初歩からサバイバルが可能なレベルまで対応できるだけでなく、中級レベルなどに達した（漢字圏出身などの）既習者にもコンピュータで復習できる充分好い機会にもなる。担当教員は（機材の使い方外に）教室で、各学習者個人からの日本語やその学習方法に関する質問にも細かく対応している。尚、コース選択はニーズに応じてある程度柔軟に対応している。

平成21年度のコース概要は以下のとおりである。

後期: 平成21年10月14日～平成21年12月16日

CAI 水曜日 13:00～14:30 (第3時限)

担当教員: 鹿島英一

教室: 情報サロン室 (留学生センター1F)

定員: 学習に利用可能なコンピュータの台数 (5台)。

教材: 以下の7種類。

1. ひらがな (HIRAGANA)
2. かたかな (KATAKANA)
3. 漢字 (KANJI) — 漢太郎 (KANTARO) 1
4. 漢字 (KANJI) — 漢太郎 (KANTARO) 2
5. 漢字 (KANJI) — 漢太郎 (KANTARO) 3
6. 動詞活用 (Verbal Conjugations) — まなびや (Manabiya)
7. 中級入門までの総合練習 (General Japanese Drills up to Intermediate Learners)

申込方法: 留学生センター (箱崎キャンパス) の情報サロン室 (教室) で、所定の申請用紙に書き込んで、担当教員に直接提出する。

*九州大学留学生センター教授

概要：学習者ニーズの多様化が一層進んでいる。曾てはひらがなの既習を前提としていたが、今はそれもない。また、いつからでも、また可能な時だけでも参加できる。学習者数は、3名（後期のみ）で、学習者のレベルは極く初級から中級（復習）までバラエティに富んでおり、進度もコースの目的に沿ったものであった。

最近では学習者は通常の補講コース（週2回以上）と併用する者の方が以前の能力の回復を目指す者より多い。また、日本語の漢字の読みの学習に違和感を示さない漢字圏出身者が増えてきた。尚、箱崎地区から伊都地区へのキャンパス移転の進展に伴い、本年度からは後期だけの開設とした。

プレースメントテストのオンライン化の試みと 問題項目の分析評価

小 森 和 子*

1. はじめに

九州大学留学生センター（以下、センター）では、留学生のプレースメントに、筆記試験と口頭試験を用いている¹⁾。このうち、筆記試験は、文法、聴解、読解、漢字の4科目から成り（但し、漢字は特定コースの受講希望者のみが必須で、その他の者は任意）、センターで開講されている日本語の授業（以下、JLCs）の受講を希望する者は、レベルや授業のいずれに関わらず、全員、この筆記試験を受けることになっている。しかし、ここ数年の留学生数の増加の影響を受け、JLCsの受講者、受講希望者も急増している。それに伴い、プレースメントテスト実施の負担も大きくなってきた。受講者は、2008年春学期は469人（延べ数、以下同）であったが、2009年春学期は729人と、1年間に1.5倍以上の大幅な増加を見せた（過去10年の経年変化は大神・郭（2010）に詳しい）。加えて、九州大学は、2009年に国際化拠点整備事業（グローバル30）にも採択され、2013年には2,300名、2020年には3,900名の受入れを目標としており、今後、JLCs受講希望者は増加の一途を辿ると予想される。

さらに、現在、JLCsは箱崎キャンパス、伊都キャンパス、筑紫キャンパス、大橋キャンパスの4か所で開講されているが、プレースメントテスト（以下、プレテ）は、センターが設定する特定の日に、箱崎キャンパスと伊都キャンパスでのみ実施されている。そのため、プレテ受験者の中には、自分の所属していないキャンパスに移動して、テストを受けなければならない者や、時間の都合がつかずに、受験を諦める者もいる。

こうした現状を鑑み、センターではプレテのオンライン化を試みることにした。センターが考えるオンライン化とは、インターネットに接続できる環境であれば、一定期間中「いつでも」「どこからでも」プレテが受験できるというものである。コンピュータによるテストは、実施者側の作業（試験問題の印刷、実施、採点、分析等）を効率化するというメリットがあるが、本オンライン化は、それだけでなく、受験者側にとってもメリットが大きい。時間と場所を選ばずに、受験者が自らの都合に合わせて受験できるからである。

オンライン化は、実施者側にも、受験者側にも、利便性が高いが、実施に至るまでの道程は平坦ではない。オンラインのテストシステムを構築するという技術的な処理に加えて、オンラインという形式によって起こり得る様々な問題を解決する必要がある。そこで、センターでは、2010年10月からの実施を目指し、2009年10月からオンライン化に着手した。本稿は、このプレテのオンライン化の取り組みと、2010年10月に実施した実際のテストの分析結果に関する報告である。なお、プレテのオンラ

*九州大学留学生センター講師

イン化はセンターの常勤教員、非常勤教員が協力して進めたプロジェクトであり、筆者はその一担当者として、ここに概要を報告するものである。

2. オンライン化の取り組み

本節では、どのような手順でオンライン化を進めたか、また、オンライン化によって生じる課題に対してどのように取り組んだかを述べる。

2.1 テストシステムの構築

テストシステムの構築は専門業者に依頼して行った。テストシステムは、テスト受験者用のサイトと、テストを作成、実施する管理者用のサイトから成る。受験者用のサイトは、ウェブによるJLCsの受講登録を済ませた者のみが入れるようになっている（受講登録システムについては大神・郭(2010)を参照のこと）。管理者用のサイトは、センターの教員全員がアクセス、操作できるようになっている。

受験者用のサイトでは、初めに音声チェック画面が現れる。この画面では、音声サンプルをクリックし、受験者に、使用するコンピュータの音声環境（サウンドデバイスのインストール、スピーカーの接続、音量、使用するメディアプレーヤーのアドオン等）を確認してもらう。これは、聴解テストの際、音声は正常に流れてくるかどうかを事前に確認し、必要があれば、調整してもらうためである。音声チェックが終了すれば、受験の仕方を解説したオリエンテーションが示される。これを全部読み終わらなければ、テストは受験できない仕組みになっている。オリエンテーションの後は、文法、聴解、読解、漢字（但し、漢字の受験は特定クラス受講希望者のみ必須で、その他は任意）の順番でテストを受験するが、それぞれのテストの前に、解説と例題が示される。オリエンテーションや解説等は、日本語の他に、英語、中国語、韓国語でも示され、受験者がテストの形式を十分理解した上で、受験を開始できるよう、配慮されている。

テスト画面は、それぞれの科目によって、レイアウトやデザインは若干異なるが、共通しているのは、1画面につき、設問1題と4つの解答選択肢が表示され、解答を選択したら、次の問題に移行するという点である。なお、全ての科目に時間制限が設定されているが、画面上に、当該科目の全問題数、現在解答している問題番号、および残り時間が表示されているため、受験者は時間配分を考えながら、解答を進めることができる。

一方、管理者用のサイトでは、全受験者の各テストへの解答状況（各問題項目で選択した選択肢番号、正答・誤答・無答の別、各科目の合計得点等）や、受験者が各テストを開始した時間と終了した時間が見られるようになっている。さらに、分析用として、問題項目毎の解答状況（通過率、選択肢選択率等）も閲覧、入手できる。

また、問題項目の入力は、管理者用サイトの中で操作するように設計されている。それぞれの科目で、大問、小問の階層構造を自由に設計することができる。なお、問題項目はhtml形式で入力するようになっている。

2.2 テスト問題の作成

テストの問題項目は、今回のオンライン化導入にあたり、全ての科目で新規に作成した。問題項目の作成は、これまでのプレテ（以下、旧プレテ）を参考にしながら、センターの常勤教員と非常勤教員が、科目別にプロジェクトを組み、3カ月から半年かけて行った。

文法は、旧プレテは多肢選択式の問題と記述式の問題を組み合わせで出題していたが、新しいプレテ（以下、新プレテ）では、全て4肢選択式とした。文法の出題範囲は、旧プレテと同様で、J1（入門レベル）からJ4（中級入門レベル）で、合計60問である。但し、60問というのは受験者一人当たりが解答する数であり、実際にはこの数倍の問題を作成し、テストシステムが、受験者によって、問題項目をランダムに選択し、出題するようになっている。具体的には、ターゲットとなっている文法項目1つにつき、語彙等を変えて作成された数種類の同程度の難易度の設問群の中から、システムがいずれか1問をランダムに選択し、受験者の画面に提示するという方法である。

聴解は、これまではJ5（中級前半レベル）からJ8（上級）を判定する際に、参考程度に参照していた。形式は、旧日本語能力試験（以下、旧JLPT）を踏襲しており、選択肢が絵や文字で提示される問題と選択肢が音声のみで提示される問題から成っていた。新プレテでも、絵や文字のある問題と、音声のみの問題を同数程度作成した。また、J1とJ2を旧JLPT 4級、J3とJ4を旧JLPT 3級、J5とJ6を旧JLPT 2級、J7とJ8を旧JLPT 1級相当と考え、旧JLPTに倣って、問題を作成した。但し、旧プレテでは、中級、上級レベルをうまく識別できていなかったため、新プレテでは、難易度の高い問題を多めに作り、全21問を作成した。なお、難易度の調整には、島田（2003、2004、2006）、島田・侯（2009）、（社）日本語教育学会（1998）、三國・小森・近藤（2005）などを参照し、選択肢が音声のみの問題を多くする、談話の前に流れる設問（例「男の人と女の人が話しています。二人はこれからどこへ行きますか。」）を不明確にする（例「男の人と女の人が話しています。」）、談話における未知語率を高くする、談話や選択肢を長くする等して、難易度を上げる工夫をした。

読解は、これまで、J5以上のレベル判定の主要な指標として用いられてきた。形式は、旧JLPTに類似した形式で、中文、長文を数問ずつ出題していたが、今回は、J5からJ8のクラス担当者が、当該レベルに匹敵すると考える文章を集め、設問を作成し、全38問となった。但し、コンピュータの画面で読解問題を解くという受験形式は、コンピュータで長い文章を読むことに慣れているか否かという個人的特性や、コンピュータの画面の大きさや明るさ等の物理的環境が、影響を及ぼす可能性がある。また、紙のテストであれば、文章にアンダーラインをひいたり、文章を指で追ったり、理解過程をメモしたりする等の認知的ストラテジーが利用できるであろうが、コンピュータではそうしたストラテジーが利用しにくい。このような特性や環境が、テストのパフォーマンスにどの程度反映されるかは不明であるため、実施後の分析に注目する必要がある。

漢字は、旧プレテでは、Jのレベルを参照しながら、漢字の得点に基づいて、Kレベルという指標を設定して、レベル判定を行っていたが、新プレテでもこれを踏襲することとした。Kレベルは、K2からK8まであり、この7段階を識別するために、全60問を出題する。但し、文法と同様に、問題項目をランダム提示するため、実際に作題したのはこの数倍の数である。漢字の新プレテも、これまでと出題形式が大幅に異なる。漢字の旧プレテは、基本的には記述式で、漢字の読み書き、送り仮名、

品詞性、造語成分、類義語、連語等、漢字や漢字語に関する多様な知識を測ってきた。筆記によって産出レベルの知識を測定していたことが奏功していたのか、漢字圏学習者でも、学習が進んでいる者とそうでないもののある程度識別できており、レベル判定の信頼度は高かった。ところが、オンライン化で多肢選択式となったため、読解と同様に、これが識別にどのような影響を及ぼすか、実施後に精査する必要がある。

2.3 課題への取り組み

本節では、オンライン化の導入によって、新たに生じる課題を整理し、それに対してどのように取り組んだかを述べる。

2.3.1 新基準の策定のための予備実験

オンライン化に伴い、テストを新たに作成したため、新ブレテによるレベル判定の基準も新たに策定しなければならなくなった。すなわち、新ブレテで何点から何点が、旧ブレテの何点から何点に相当するか、見通しを立てなければならない。そこで、予備実験を行い、旧ブレテと新ブレテの平行性を等価形式信頼性によって確認し、新ブレテの基準の目安を検討することとした。

予備実験の被験者は、2010年4月8日から開講しているJ1からJ8の受講者の中から募った希望者である。被験者には、2010年4月中旬から5月上旬にかけて、オンラインで新ブレテを受けてもらった(文法85名、聴解73名、読解60名、漢字54名)。この被験者のうち、20名程度が2010年4月5日と6日に旧ブレテも受験していたため(文法24名、聴解19名、読解18名、漢字17名)、そのデータから等価形式信頼性を検討した。具体的には、Brown (1996)に基づき、旧ブレテと新ブレテの科目内相関を等価形式信頼性の推定値とした。分析の結果、文法は $r=.91$ 、聴解は $r=.67$ 、読解は $r=.24$ 、漢字は $r=.72$ であった。読解がやや弱いものの、全体的に正の相関が認められたため、旧ブレテと新ブレテには一定の平行性があると判断した。

表1 予備実験における新ブレテの得点 (Jレベル別)

J-level	文法 (60点満点)		聴解 (21点満点)		読解 (38点満点)		漢字 (60点満点)	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
1	5.08	(4.56)	1.45	(1.75)	2.00	(2.88)	11.00	(12.82)
2	22.70	(6.90)	4.00	(3.28)	7.50	(6.28)	25.40	(17.40)
3	37.11	(6.10)	7.07	(4.58)	11.67	(5.63)	36.73	(15.71)
4	42.00	(5.39)	7.33	(4.27)	20.67	(3.06)	37.33	(11.24)
5	42.17	(13.85)	10.17	(3.19)	17.00	(NA)	46.33	(2.89)
6	48.45	(8.45)	10.50	(2.17)	27.00	(4.24)	47.75	(5.75)
7	47.33	(5.51)	15.50	(3.54)	19.50	(10.61)	49.00	(5.66)
8	53.00	(6.44)	18.67	(1.15)	28.00	(NA)	52.80	(4.44)
平均	33.93	(16.92)	6.94	(5.69)	10.60	(8.63)	35.28	(18.03)

注：Mは平均、SDは標準偏差、(NA)は該当者が1名

次に、新プレテのレベル基準の目安を検討するために、J1からJ8の各レベルの新プレテの得点を分析した(表1)。

分析の結果、文法はJ1からJ4まで段階的に得点が高くなっている。また、J1からJ4を対象として作成されたが、J5の得点がJ4とほぼ同じで7割程度しか正答していないことが分かった。聴解は、旧JLPTを参考に4段階で作成したのが影響したのか、J3とJ4、J5とJ6、が近似した得点となった。しかし、概ね、得点が段階的に上がっている。一方、読解は、J5以上の受験者が少なかったことも影響しているだろうが、J4、J5、J7で得点が近似しており、得点の評価が難しい。漢字は、ほぼ段階的に得点が推移しているのが認められた。

これらの結果を踏まえ、各レベルを受講するのに最低必要な、新プレテにおける得点の目安を検討した。各科目の問題作成者が、問題項目数、問題の難易度、各コースのレベル、および表1の結果から、総合的に判断して設定した(表2)。なお、聴解は、21問で所要時間が1時間近くになってしまったため、3問減らして、全18問で出題することとした。

次に、レベルの判定の際に参照する科目の優先順位を検討した。旧プレテに近い方法で、レベル判定を行うためには、科目の優先順位も旧プレテの方式に依拠するのが妥当であると考えた。旧プレテでは初級は文法の得点でレベルを判定し、中上級は読解の得点によって判定していた。そこで、新プレテでも、J1(入門レベル)からJ5(中級前半)までを、文法の得点でレベルを判定し、J6以上を、読解の得点によって判定することとした。なお、文法によるレベル判定を、J4まででなく、J5までとしたのは、予備実験の結果で文法のJ4とJ5の平均点がほとんど変わらなかったことや、予備実験において、読解の得点がやや不安定であったこと等による。

また、J6以上の判定には、聴解も判定指標に加え、聴解の得点が基準点を下回っている場合は、聴解で決まったレベルを1つ下げることとした。例えば、文法52点、読解27点、聴解10点、の場合は、文法と読解からJ7レベルに判定されるが、聴解が基準点を下回っているため、J6に下げ、という方法である。聴解をレベル判定に加えることにしたのは、予備実験で聴解の得点が段階的に推移していたことや、読解のみでレベル判定をすると、技能バランスの悪い受験者を上位レベルにブレースする

表2 2010年秋学期の各レベルの得点の目安

文法(60点満点)			聴解(18点満点)		読解(38点満点)			漢字(60点満点)		
J-level	最低点	最高点	J-level	最低点	J-level	最低点	最高点	K-level	最低点	最高点
1	0	12	1		1					
2	13	24	2		2			2	0	9
3	25	36	3		3			3	10	17
4	37	44	4		4			4	18	25
5	45	48	5		5			5	26	33
6			6	10	6	21	25	6	34	43
7			7	12	7	26	31	7	44	50
8			8	14	8	32	38	8	51	60

可能性があること等を考慮したことによる。

2.3.2 不正行為に対する対策

オンライン化による第二の課題としては、試験監督者の不在による不正行為への対処である。岡・Cha (2004) は、オンラインテストの実施による問題点として、試験会場以外での受験、他人になりすましての受験、受験者が試験中に他の Web サイトを閲覧したり、コンピュータ内の別のプログラムを起動したりするカンニング行為、および 試験問題のコピー & ペーストによる試験問題の流出、を挙げている。前述の通り、センターのオンライン化は、「いつでも」「どこからでも」受験できることが利点の1つであるが、不正行為が横行すれば、テストの信頼性が脅かされ、得点の解釈や適正なレベル判定が困難になる。そこで、可能な範囲で不正行為を阻止する対策を講じることとした。

まず、の試験会場以外での受験は、センターにおけるオンライン化では、問題点ではなく、利点であるため、考慮しない。の他人になりすましての受験については、監督者が不在である限り、統制は困難である。センターのシステムは、ID やパスワード等の個人情報によってログインするように設計されているが、これだけでは、ログイン後に別の者がテスト受験するのを阻止することはできない。しかし、バイオメトリクス認証 (指紋、虹彩、指静脈等の認証) のような厳密な本人認証システムを組み込むとなると、コストがかかりすぎる。加えて、仮に厳密な本人認証を行ったとしても、監督者不在であるため、電子辞書や参考書等の閲覧までは、制御できない。さらに、の Web サイトを閲覧したり、コンピュータ内の別のプログラムを起動したりするカンニング行為については、受験しているコンピュータに何らかのブロックをかけて対処しても、受験者が2台以上のコンピュータを所持していれば、意味がなくなってしまう。よって、とについては、特別な措置を行っても、回避することは不可能であると判断した。

但し、の試験問題のコピー & ペーストによる試験問題の流出については、Ctrl + C 等の操作によるコピーファンクションと、マウスの右クリックを無効にする措置によって、対処することとした。これによって、試験問題をコピーし、それをメール等で他の受験者に流出させることは、ある程度阻止することができる。また、文法と漢字は、問題項目をランダム提示するようにプログラムし、受験者によって出題される問題項目が異なるようにした。

プレテは本人の言語能力を証明したり、それによって単位認定が行われるような hi-stakes なテストではなく、自分のレベルにあったコースで効率的に学習を行うための便宜的な弁別指標である。また、仮に受講希望者が不正行為を行い、能力以上のコースに配置されたとしても、コース開始時にレベル調整のために学生にコース移動を促すことも可能である。さらに、テスト画面で不正行為に対する注意喚起を示すことで、ある程度の抑止も可能であろう。不正行為については極力阻止するべきものであることは十分に認識した上で、「いつでも」「どこからでも」受験できるという受験者にとっての利便性を最優先し、以上のような対策の下で、実施を進めることとした。

2.3.3 システムの耐性確認のための予備実験

第三の課題は、受験者が同じ時刻に一斉にテストを開始した場合、サーバーが耐えられるかどうか

という技術的な問題である。これを検討するために、業者と相談の上、50名の学生に同時刻に一斉にテスト画面にアクセスしてもらうという耐久性実験を行った。その結果、サーバーの機能に影響はなく、耐性には問題がないことが確認された。

3. 2010年秋学期のオンラインテスト実施報告

以上のようにして作成したオンラインテストは、2010年度秋学期に部分的に運用を開始した。本節では、実施の概要とテストの分析結果を報告する。

3.1 実施の概要

オンラインテストは2010年10月4日から11日までの8日間を実施期間とした。オンラインテストを受験したのは、九州大学に在籍する大学院生や研究生等で、箱崎キャンパスでの受講を希望する者181名、および伊都キャンパスでの受講を希望する者68名の、計249名であった。なお、受験者のコンピュータの仕様や回線の環境等を確認するために、テスト終了後に、受験環境に関する簡単なアンケートに回答してもらった。アンケートは、テストが終了すると、自動的に画面に表示され、オンライン上で回答する仕組みになっている。

また、留学生センターが所属先となっている学生（日本語研修コース、日本語・日本文化研修コース、日韓共同理工系学部留学生、センター運営の短期プログラム Japan in Today's World Program の学生）に対しては、新プレテを紙に印刷したテスト（以下、新プレテ紙版）を実施した。これはオンラインのシステムエラー等による試験事故が起こった場合に、混乱を極力減らしたいという意図があったからである。新プレテ紙版を受験した者は82名であった。また、10月4日から11日までに何らかの事情でオンラインテストに失敗した者に対しても、後日、救済措置として新プレテ紙版によるプレテを実施した。

3.2 分析結果

3.2.1 受験環境

オンラインテスト終了後に行った、受験場所、インターネット回線環境、コンピュータのOS、モニターサイズ、見にくかった科目、所要時間に関するアンケートの結果は、表3から表8の通りである。

結果を簡単にまとめると、受験場所は半数が学内（研究室、コンピュータルーム等）であり、回線も半数以上が大学のLANを使用している。また、モニターサイズは、12.1インチ以上が大半であったが、12インチ以下を使用している者も20%以上いた。また、見にくかった画面としては、3分の1が読解と回答しているが、文法や聴解もそれぞれ4分の1以上あり、分散している。画面の大きさと見にくかった科目の間に何らかの関係があるか否かを分析したが（表9）、最も多かったのは読解の14.1から15.0インチ（11.46%）、次に多かったのは聴解の12.1から14.0インチ（10.19%）であった。読解については、14.1から15.0インチが特段に小さい画面とは言えず、このサイズで見にくかったと

表3 受験場所

九大研究室	65	(39.16)
寮以外の自宅	46	(27.71)
九大寮	35	(21.08)
九大 PC ルーム	10	(6.02)
九大図書館	4	(2.41)
九大ラウンジ	3	(1.81)
ネットカフェ	1	(0.50)
その他	2	(1.21)
合 計	166	(100.00)

注：単位は人数、()は%

表4 インターネット回線

九大有線 LAN	81	(48.80)
九大無線 LAN	23	(13.86)
ADSL	23	(13.86)
NTT Flet's ひかり	19	(11.45)
一般電話	3	(1.81)
B-mobile	3	(1.81)
ケーブルテレビ	1	(0.60)
ISDN	1	(0.60)
E-mobile	1	(0.60)
その他	11	(6.61)
合 計	166	(100.00)

注：単位は人数、()は%

表5 OS

Windows XP	76	(45.78)
Windows 7	62	(37.35)
Windows Vista	16	(0.64)
Windows 2000	1	(0.60)
Windows Me	9	(5.42)
その他	2	(1.21)
合 計	166	(100.00)

注：単位は人数、()は%

表6 モニターサイズ (inch)

~ 10.0	7	(4.27)
10.1 ~ 12.0	28	(17.07)
12.1 ~ 14.0	48	(29.27)
14.1 ~ 15.0	37	(22.56)
15.1 ~ 17.0	34	(20.73)
17.1 ~	10	(6.10)
合 計	164	(100.00)

注：単位は人数、()は%

表7 最も見にくかった画面

文 法	41	(26.11)
聴 解	42	(26.75)
読 解	54	(34.40)
漢 字	20	(12.74)
合 計	157	(100.00)

注：単位は人数、()は%

表8 所要時間 (分)

~ 60	62	(42.47)
60 ~ 90	16	(10.96)
90 ~ 120	34	(23.29)
120 ~ 150	24	(16.44)
150 ~	10	(6.84)
合 計	146	(100.00)

注：単位は人数、()は%

表9 モニターサイズと見にくかった画面

	文 法		聴 解		読 解		漢 字		合 計	
~ 10.0	2	(1.27)	1	(0.64)	3	(1.91)	1	(0.64)	7	(4.46)
10.1 ~ 12.0	12	(7.64)	8	(4.57)	5	(3.18)	2	(1.27)	27	(17.20)
12.1 ~ 14.0	11	(6.29)	16	(10.19)	13	(8.28)	5	(3.18)	45	(28.66)
14.1 ~ 15.0	7	(4.46)	7	(4.46)	18	(11.46)	4	(2.55)	36	(22.93)
15.1 ~ 17.0	8	(4.57)	7	(4.46)	11	(6.29)	6	(3.82)	32	(20.38)
17.1 ~	1	(0.64)	3	(1.91)	4	(2.55)	2	(1.27)	10	(6.37)
合 計	41	(26.11)	42	(26.75)	54	(34.40)	20	(12.74)	157	(100.00)

注：単位は人数、()は%

いう回答が多かったのは、個人の好みや印象によるものだと考える。聴解については、選択肢が絵で提示されたものが見にくかった可能性があるため、絵のサイズを検討する必要がある。

3.2.2 テスト問題の分析結果

3.2.2.1 信頼性と識別力

テストの分析にあたり、各科目の信頼性係数（クロンバック α ）と識別力（点双列相関係数）を算出した。信頼性は、文法が $\alpha = .956$ 、聴解が $\alpha = .825$ 、読解が $\alpha = .912$ 、漢字が $\alpha = .978$ と、いずれも高かった。また、識別力の平均も、文法が0.532、聴解が0.500、読解が0.477、漢字が0.676と、いずれも高かった。但し、個々の問題項目の識別力を見ると、0.1から0.2程度の問題も数問あり、今後、修正や差し替えの検討が必要である。

3.2.2.2 各科目の得点

オンラインでの受験者と新プレテ紙版を受験した留学生センター所属の学生の合計331名（以下、全受験者と称す。救済措置の新プレテ紙版受験者は含まない²⁾）の各科目の平均点、標準偏差、最低点、最高点は表10の通りである。表10に示した漢字圏受験者（以下、漢字圏）、準漢字圏受験者（以下、準漢字圏）、非漢字圏受験者（以下、非漢字圏）の別は、母語背景と得点との関係を検討するために、分類したものである。受験者が自らで記した国籍に基づいて、中国、台湾、香港を漢字圏、韓国³⁾を準漢字圏、それ以外を非漢字圏とした。なお、全受験者331名の中には漢字テストのみ受験した者や、文法以外を受験しなかった者もいるため、表10の合計人数は331名とは一致しない。

次に、J1からJ8にブレースされた学生のテスト結果を、レベル別、科目別に示す（表11から表14）。

表10 全受験者の各科目の結果

		文法(60点満点)	聴解(18点満点)	読解(38点満点)	漢字(60点満点)
漢字圏受験者	M	39.32(13.00)	8.40(4.12)	20.13(7.34)	49.62(8.27)
	Min	0	0	0	0
	Max	59	18	33	66
	N	176	169	173	61
準漢字圏受験者	M	48.51(9.81)	12.74(3.36)	21.722(8.41)	44.65(8.74)
	Min	17	6	0	23
	Max	59	18	34	55
	N	37	35	36	26
非漢字圏受験者	M	30.45(18.53)	5.66(4.28)	9.26(7.32)	24.42(19.36)
	Min	0	0	0	0
	Max	59	15	34	56
	N	111	105	108	76
全受験者	M	37.33(15.88)	7.96(4.60)	16.61(9.14)	37.08(18.82)
	Min	0	0	0	0
	Max	59	18	34	66
	N	324	309	317	163

注：Mは平均、()は標準偏差、Nは人数を表す。

なお、授業開始から1週間の間で、学生の自己申告や教師からの助言等によってレベル移動が生じるが、以下は、レベル移動後の最終的な決定レベルによる。

まず、表11は文法の平均点を示したものである。前述したように、J1からJ5までは文法の得点に基づいてレベル分けを行ったため、平均点は段階的に高くなっている。また、J2からJ5までは漢字圏、準漢字圏、非漢字圏の間で、得点の差もあまり大きくない。なお、J1は非漢字圏に完全未習者が多かったため、平均点が極端に低くなっている。さらに、J1の準漢字圏は得点が高いが、これは本人の希望によってJ1クラスに移動したためである。

また、J7とJ8を比較すると、非漢字圏においては、J8の方が平均点が低くなっている。これはJ8クラスが日本語・日本文化研修コースのための特別クラスであるため、一般学生でJ8レベルの得点を取った者をJ7クラスに配置していることが影響していると考えられる。

なお、J7、J8で天井効果の可能性が示唆されるが、前述の通り、文法問題はJ1からJ5までを判定するための材料であるため、ここでは考慮しない。

ところで、得点結果を母語背景別に見ると、J5以上では、非漢字圏、準漢字圏、漢字圏の順で得点が高いことが分かる。このことから、中級以上にブレースされる非漢字圏は初級の文法知識を着実に

表11 Jレベル別全受験者の文法の平均点 (60点満点)

	J1	J2	J3	J4	J5	J6	J7	J8
漢字圏受験者	11.29 (7.79)	23.84 (7.95)	34.23 (5.27)	41.72 (3.10)	48.00 (4.19)	50.48 (3.12)	52.33 (2.50)	54.30 (3.83)
準漢字圏受験者	17.00 (NA)	24.00 (1.41)	36.00 (NA)	43.40 (1.67)	49.56 (4.64)	52.67 (2.50)	54.00 (2.76)	55.86 (3.13)
非漢字圏受験者	8.00 (8.89)	19.88 (4.50)	34.80 (8.21)	41.96 (4.12)	51.08 (4.23)	55.00 (4.00)	55.50 (2.52)	53.17 (3.19)
全 体	13.00 (8.12)	22.51 (6.64)	34.93 (6.15)	41.98 (3.41)	48.30 (4.39)	51.38 (3.35)	52.63 (2.76)	53.83 (3.45)

注1：単位は点、()は標準偏差

注2：受験者数は漢字圏176名、準漢字圏37名、非漢字圏111名、全体324名

表12 Jレベル別全受験者の聴解の平均点 (18点満点)

	J1	J2	J3	J4	J5	J6	J7	J8
漢字圏受験者	4.54 (3.05)	4.83 (3.31)	6.51 (2.29)	8.50 (3.23)	9.25 (3.31)	11.90 (3.55)	12.75 (5.45)	13.44 (2.30)
準漢字圏受験者	6.00 (NA)	6.50 (0.71)	11.00 (NA)	10.20 (2.39)	11.63 (1.77)	14.33 (1.97)	14.50 (2.35)	16.50 (0.84)
非漢字圏受験者	2.10 (2.73)	3.73 (2.46)	5.40 (3.38)	6.53 (2.41)	9.00 (2.56)	12.33 (2.89)	13.25 (1.50)	11.67 (3.45)
全 体	2.89 (3.01)	4.46 (2.92)	6.27 (2.74)	8.00 (3.10)	9.56 (3.05)	12.45 (3.29)	13.44 (3.85)	13.81 (2.98)

注1：単位は点、()は標準偏差、(NA)は該当者が1名

注2：受験者数は漢字圏169名、準漢字圏35名、非漢字圏105名、全体309名

積み上げ、習得しているが、漢字圏では、初級文法に化石化が起こり、不正確さが残っている可能性が推測される。

次に聴解の結果（表12）を検討する。聴解はJ6以上のブレースを決定する際の二次的指標であるが、J1からJ5も含めて、全レベルで得点が段階的に上がっており、レベル判定の有効な指標であることが分かる。母語背景別に見ると、J6、J7では、準漢字圏、非漢字圏、漢字圏の順に得点が高くなっている。よって、J6、J7の漢字圏は、文法も聴解も、3群の中で最も得点が低いということになる。

ところで、聴解はJ6、J7、J8の得点差が小さい。もし、J6からJ8レベルの学習者の潜在的な日本語能力特性が近似し、その差が極めて小さいのであれば、このように得点差が小さくなるのは必然的な現象であり、問題はない。しかし、もし、J6からJ8の学習者の能力特性に相当の差があるにも関わらず、得点の差が小さいのであれば、現在の問題数では数が少なく、内容的にも能力差を明確に反映できないと言わざるを得ない。このことは、次に見る読解にも指摘できる点だが、J6からJ8までの得点差が小さかった背景が、能力差の小ささにあるのか、それとも、能力差を反映するような問題数、問題内容になっていないことにあるのか、検討が必要である。

次に、読解の結果（表13）を検討する。読解は、J6レベル以上の第一次判定指標である。当初の判定基準では、J6は21点から25点であったが、実際には平均点が25.13点と、基準の最高点を上回った。これは、読解の得点が高くて、聴解の得点が低かったために、1段階低いレベルに判定された者が少なくなかったからである。よって、読解は、J6レベル以上の判定指標であるものの、最終的な判定には聴解が効いてくるということになる。これにより、漢字圏や準漢字圏で、読解力はあるものの、聴解力が低い者を、高いレベルに配置するのを妨げることができる。

また、聴解と同様に、J6からJ8を見ると、漢字圏と準漢字圏は平均点の差が小さい。また、読解の場合、満点が38点で、天井効果も認められていない。前述の聴解では、満点が18点で天井効果の可能性も示唆されるため、得点差の小ささが何に起因するかは、検討を要するが、読解の場合は、天井効果が認められないので、得点差が小さいのは、能力特性の差が小さいことに起因するというのが、可能性の1つとして挙げられる。すなわち、J6からJ8にブレースされた漢字圏と準漢字圏の受講者の潜在的な読解能力に、ほとんど差がないということである。もし、そうであれば、J6以上のレベル判定

表13 Jレベル別全受験者の読解の平均点（38点満点）

	J1	J2	J3	J4	J5	J6	J7	J8
漢字圏受験者	9.00 (6.67)	14.67 (7.59)	16.89 (5.61)	21.09 (4.95)	21.72 (5.44)	26.24 (2.79)	28.33 (2.06)	27.20 (4.94)
準漢字圏受験者	12.00 (NA)	5.50 (2.12)	12.00 (NA)	15.40 (9.50)	18.22 (3.93)	26.17 (4.40)	28.17 (2.71)	30.00 (3.16)
非漢字圏受験者	3.19 (5.14)	6.29 (5.21)	7.93 (4.22)	11.73 (5.09)	15.08 (3.26)	15.33 (2.08)	20.00 (6.98)	21.00 (6.63)
全 体	5.02 (6.17)	10.07 (7.68)	14.16 (6.58)	17.31 (6.94)	19.62 (5.48)	25.13 (4.48)	26.53 (4.90)	26.27 (5.97)

注1：単位は点、()は標準偏差、(NA)は該当者が1名

注2：受験者数は漢字圏173名、準漢字圏36名、非漢字圏108名、全体317名

には、漢字圏と準漢字圏については、聴解を優先させるという方法を検討しても良いであろう。

得点差の小ささの背景のもう一つの可能性としては、J6以上を判定するには、問題項目が段階的に難しくなるように作成されておらず、ある部分は易しすぎ、ある部分は難しすぎるとい、難易度の二極化が起こっている可能性である。易しすぎる問題項目に対しては、J6からJ8であれば誰でも正答できるため、得点差が無く、また、難しすぎる項目に対しては、J8であっても正答できないため、やはり得点差が無い、という現象である。これについては、母語背景との関係も踏まえ、問題項目の質的な分析を経て、今後の修正を検討する必要がある。

最後に、Kレベルに基づく漢字の結果を示す(表14)。Kレベルの決定には、漢字の得点だけでなく、Jレベルも参照する。このことが影響しているのか、漢字圏ではK3からK8まで平均点がほぼ横ばいになっている。確認のため、Kレベルと漢字得点について相関を求めたところ、漢字圏は $r=.222$ で、相関が極めて弱い(準漢字圏は $r=.845$ 、非漢字圏は $r=.931$)。なお、Jレベルと漢字得点の相関も求めてみたが、やはり、漢字圏は $r=.238$ で弱い(準漢字圏は $r=.746$ 、非漢字圏は $r=.892$)。このことから、現在の漢字テストが、漢字圏にとって必要な漢字知識を測定するように設計されているか否か、再考が必要である。特に、これまでは記述式であったため、漢字語の知識が産出レベルまで達しているか否かを測定したり、正確な字体で表記できるか否かを測っていたが、そうした知識が測定できなくなったことが、どのように影響しているか、検討が必要であろう。漢字圏にとって必要な漢字知識とは何か、それはどのような問題項目で、どのような形式で測れば良いか、慎重に検討する必要がある。但し、準漢字圏と非漢字圏は、漢字の得点がKレベルともJレベルとも相関しているため、準漢字圏と非漢字圏にとって、このテストとレベル判定の方法には一定の妥当性があると言える。

また、準漢字圏は、読解テストではJ6からJ8の得点差が小さいが、漢字テストではK6からK8の得点差が大きい。よって、漢字テストを義務化し、上位レベルの識別の指標に加えると、Jレベルの上位レベルの弁別の精度がより高くなるのではないかと考える。

3.2.2.3 科目間相関と重回帰分析

本節では、各科目の相互関係を検討する。まず、全レベルの受験者の科目間の相関と母語別の科目

表14 Kレベル別全受験者の漢字の平均点 (60点満点)

	K2	K3	K4	K5	K6	K7	K8
漢字圏受験者		49.50 (3.54)	48.50 (3.27)	52.33 (4.54)	49.23 (6.43)	49.67 (3.89)	53.92 (2.18)
準漢字圏受験者			30.00 (12.12)	37.00 (2.83)	40.33 (4.08)	48.89 (2.71)	52.33 (3.45)
非漢字圏受験者	8.00 (10.58)	15.11 (3.37)	24.11 (3.89)	37.00 (5.59)	43.56 (4.90)	47.60 (3.47)	54.00 (2.00)
全 体	8.00 (10.58)	21.36 (14.28)	33.22 (12.48)	44.08 (9.16)	45.50 (6.52)	48.77 (3.45)	53.50 (2.54)

注1：単位は点、()は標準偏差、空欄は該当者なし

注2：受験者数は漢字圏61名、準漢字圏26名、非漢字圏76名、全体163名

間の相関は、以下の通りである（表15～表18）。相関を見ると、いずれの母語背景の学習者においても、科目間相関が比較的高いことがわかる。特に、準漢字圏では全てが0.8程度と高く、知識と技能がバランスよく習得されていると考えられる。

次に、初級レベルのJ1からJ4（表19）までと、中上級レベルのJ5からJ8まで（表20）に分けて、相関を求めた。その結果、J1からJ4では、全科目間に高い相関が認められ、初級までの学習者は、知識や技能がバランスよく習得されていることが推測される。一方、J5からJ8については、文法と読解、文法と漢字に相関が認められなかった。これは、中上級の学習者の知識や技能がバランスよく習得されていないという可能性を示唆する。

次に、Jレベルを予測するのに有効な科目が何であるかを検討するために、Jレベルを予測変数とし、文法、聴解、読解、漢字の得点を説明変数とする重回帰分析（ステップワイズ法）を行った。その結果、表21の通り、J1からJ8までの全レベルについては、文法と聴解を説明変数とする予測モデルが求められ、この2科目の得点で、Jレベルの77%を説明することが分かった。すなわち、Jレベル全体として見た場合、文法が最も有力なレベル分けの指標となり、次いで聴解が有効であるということである。

次に、初級（J1からJ4まで）と、中上級（J5からJ8）までのそれぞれについて、同様の分析を行った。その結果、表22のように、初級では文法のみを説明変数とするモデルが求められたが、中上級では（表23）、聴解、次いで読解が、有効な説明変数であることが分かった。但し、中上級では聴解と

表15 全受験者の科目間相関

	文 法	聴 解	読 解
聴 解	.715**		
読 解	.742**	.719**	
漢 字	.831**	.781**	.847**

** $p < .01$

表16 漢字圏の科目間相関

	文 法	聴 解	読 解
聴 解	.553**		
読 解	.716**	.616**	
漢 字	.521**	.493**	.520**

** $p < .01$

表17 準漢字圏の科目間相関

	文 法	聴 解	読 解
聴 解	.799**		
読 解	.779**	.803**	
漢 字	.914**	.820**	.847**

** $p < .01$

表18 非漢字圏の科目間相関

	文 法	聴 解	読 解
聴 解	.750**		
読 解	.732**	.705**	
漢 字	.688*	.761**	.801**

** $p < .01$

表19 J1～J4全受験者の科目間相関

	文 法	聴 解	読 解
聴 解	.597**		
読 解	.670**	.621**	
漢 字	.744**	.731**	.846**

** $p < .01$

表20 J5～J8全受験者の科目間相関

	文 法	聴 解	読 解
聴 解	.319**		
読 解	.152	.480**	
漢 字	.168	.438**	.496**

** $p < .01$

表21 Jレベルの予測に関する重回帰分析(J1~J8)

ステップ	決定係数	説明変数	β	p
ステップ1	$R^2 = .744$			
		文法	.863	***
ステップ2	$R^2 = .774$			
		文法	.645	***
		聴解	.278	***

注1：重回帰分析はステップワイズ法で、2つのステップとなった。

注2： β は標準偏回帰係数で、 p は有意確率である。

注3： $n = 307$. *** $p < .001$.

表22 Jレベルの予測に関する重回帰分析(J1~J4)

ステップ	決定係数	説明変数	β	p
ステップ1	$R^2 = .876$			
		文法	.936	***

注1：重回帰分析はステップワイズ法で、1つのステップとなった。

注2： β は標準偏回帰係数で、 p は有意確率である。

注3： $n = 187$. *** $p < .001$.

表23 Jレベルの予測に関する重回帰分析(J5~J8)

ステップ	決定係数	説明変数	β	p
ステップ1	$R^2 = .259$			
		聴解	.509	***
ステップ2	$R^2 = .302$			
		聴解	.341	***
		読解	.276	***

注1：重回帰分析はステップワイズ法で、2つのステップとなった。

注2： β は標準偏回帰係数で、 p は有意確率である。

注3： $n = 119$. *** $p < .001$.

読解をあわせてもJレベルの30%程度しか説明しておらず、テストの得点以外の変数が影響していることが推測される。

4. 今後の課題

4.1 システムに関する課題

2010年秋学期からオンラインテストが一部導入されたが、特に大きな混乱もなく、実施することができた。また、受験者にとっても、実施者にとっても、以前より簡便にプレテを行うことができた。しかし、運用を続けるに当たっては、解決しなければならない課題も明確になった。

まず、テストシステムについては、聴解や読解の画面でフリーズしたという報告が数件あった。これは原因は特定できないが、受験者のコンピュータのメモリ不足の可能性が考えられる。フリーズしてしまった場合には、そこまでのデータがその受験者の得点として反映されてしまう。このような受験者に対しては、オンライン上で再テストできるようにするか、あるいは、今回の救済措置のような紙版のテストを実施するのが、今後検討しなければならない。また、聴解については音声が届かないという報告があった。メディアプレーヤーが無効になっていたため、音が聞こえない、というケースについては、最初の音声チェック画面でトラブルシューティングを示したため、ある程度解決された。

しかし、サウンドデバイスがインストールされていないというケースでは、それぞれのコンピュータの仕様に関わる問題であり、受験者が自ら対処しなければならない。

システムのトラブルは、受験者のコンピュータの仕様に起因する場合が少なくないが、これを解決するためには、1つには、受験期間をできるだけ長く設定し、その間に受験者がコンピュータの設定を行ったり、代替のコンピュータを探すことができるように、配慮することである。他の方法としては、仕様に問題のないコンピュータを学内の数か所に設置し、期間中はプレテ用に占有できるようにするという方法である。この点は、今後、学内での関連部門と協力して検討することが望ましい。

不正行為については、実態は明らかではないが、上のレベルから下のレベルへの移動を申し出る受講者が数名おり、その中に、辞書を用いて受験したことを申告した者もいた。よって、不正行為は、ある程度、行われている可能性が推測される。不正行為を極力阻止するためには、テスト会場を設定し、監督者のもとでテストを実施するのが最善であろうが、これによって、どこからでも受験できるという利便性を放棄するのは、オンライン化導入の本来の趣旨に反する。また、監督者不在によって起こり得る不正行為が、どの程度深刻な混乱を引き起こしているかは良く分かっていない。よって、今後も引き続き、不正行為の実態とその対応策を考えていきたい。

さらに、コンピュータでテストを受けることの影響、特に、コンピュータへの慣れやコンピュータによる疲労等が解答に及ぼす影響については、今回は調査ができなかった。McNamara (2000) は、コンピュータによるテストはコンピュータに対する親近性がテストのパフォーマンスに影響を及ぼし、これがテストの妥当性を脅かす可能性があると述べている。前述したように、本オンライン化においても、紙とオンラインとの形式の違いが、とりわけ、読解テストや漢字テストに影響を及ぼすのではないかと、懸念していた。分析の結果、J5からJ8の科目間関連で読解が文法と関連が認められないことや、読解のJレベル判定への説明力が小さいことが明らかになった。また、漢字テストについては、漢字圏をうまく識別できていないことが分かった。しかし、旧プレテにおいては、同様の分析が行われていなかったため、今回の結果がコンピュータという形式によるものか、それとも、問題項目の信頼性や妥当性によるのか、あるいは、受験者の母語背景の影響によるものでオンライン化とは独立の問題であるのか、見極められない。よって、形式が解答や得点に及ぼす影響については、継続的に分析し、今後の対策を検討するのが理想である。

4.2 レベル判定に関する課題

レベル判定の得点基準については、2010年の秋学期は、前掲の表2に示した得点で判定を行ったが、この基準が妥当か否か、確信が持てない。レベル判定後の平均点を見ると、基準とのズレが見受けられる。例えば、聴解ではJ8レベルの平均点は13.81点で、基準の最低点の14点をやや下回っている。これは、J8レベルの聴解問題が難しすぎるか、あるいは、J8レベル以下の学生がJ8に配置されたか、のいずれかによるものである。読解では、J6の平均点が25.13点であったが、これはJ6の基準とした最高点の25点を上回っている。J6相当の読解問題が易しすぎたか、あるいは、J6に配置した受講者のレベルがJ6以上であったか、のいずれかであろう。また、読解のJ8の平均点は26.29点で、J8の基準とした最低点の32点より大幅に下回っている。これは、聴解と同様に、J8レベル以下の学生がJ8に配

置されたか、あるいは、J8相当の問題項目が難しすぎたか、である。

こうした基準点と実際のレベル判定のズレが、授業を行う上で支障を来しているか否かを確認するために、授業開始後にJLCs担当教員にヒアリングを行ったところ、今回の受講者は、従来の受講者と同程度のレベルであるとの回答が大半であった。よって、今回設定した基準によるクラス配置は、ある程度、機能していると言えそうである。しかし、レベル判定の得点基準については、引き続き、試験実施後の分析や担当教員へのヒアリングを行って、継続的に検討していくべきであろう。

なお、今後、テストの問題項目を修正すれば、基準点は変更せざるを得ない。また、どのレベルを判定するのに、どの科目を優先させるべきかも、変わってくる可能性が高い。よって、レベル判定の基準を検討する前に、それぞれの問題項目を精査し、修正に時間をかけ、識別力のある問題を作成し、テストそのものの信頼性と妥当性が確認されたところで、再度、基準点を検討するというステップを踏む必要がある。

4.3 試験問題に関する課題

まず、文法テストについては、分析の結果から、信頼性や識別力において問題なく、レベル判定材料として良問であると言える。しかし、一部の問題に識別力の低い問題があるため、それらは今後差し替えが必要である。また、今回はJ1からJ4の初級を中心とした項目で、試験を作成したが、J5、J6等の中級レベル以上の文法知識についても測定できるようになることが望ましい。文法形式と意味について問うだけでなく、当該形式の持つ機能に関する語用論的な知識も測定対象とすれば、より広範なレベル判定に対応できるであろう。さらに、一文レベルだけでなく、文章の中で問う等、設問形式も検討し、理解だけでなく、産出に近いレベルで問えるような工夫も必要である。

聴解テストと読解テストについては、繰り返し述べてきたように、J6以上で得点差が小さかったことをどのように評価したら良いのか、検討が必要である。得点差の小ささが、J6からJ8までの受講者の潜在特性の差の小ささに起因するのであれば、センターにおけるJ6、J7、J8は、能力にあまり差のないクラスであるということになる。一方、もし、J6からJ8までの受講者の潜在特性に差があるのに、得点差が小さいのであれば、現在の聴解、読解の問題では、上位レベルを識別できないということになる。その場合は、問題数と問題内容の再検討が必要である。但し、検討においては、J6、J7、J8が、それぞれ何がどの程度できるレベルであるのか、に基づいて、議論する必要がある。その上で、その能力が測定できるようなテストとはどのようなテストであるか、現在のテストでその能力を測定できているのか、を吟味するべきである。

また、聴解テストと読解テストだけでJ6以上を識別するのが困難であれば、他のテストを指標として加えるのも一案である。前述したように、J5やJ6相当の文法問題を作成すれば、文法も上位レベルの判定の指標として活用できるであろう。また、漢字テストはK2からK8までの7段階を分けるために作成され、それぞれのテストの得点差が比較的大きいことから（但し、準漢字圏と非漢字圏）、漢字の試験を必須にし、漢字の得点を参照するのも一考であろう。この点も今後の課題である。

漢字テストについては、Jレベルとの相関も高く、準漢字圏、非漢字圏の識別には大変有効であることが分かった。しかし、漢字圏については、K2レベルからK8レベルまで得点がほぼ横ばいである

ことから、これをどのように考えるか、議論が必要である。また、オンラインテストによって、記述問題が出題できなくなったことが漢字圏の識別に影響しているのであれば、テストの形式や方法について検討が必要であろう。漢字圏にとって必要な漢字の知識とは何であるかを再検討し、レベル設定の方法、テストの内容、出題形式について、見直していく必要がある。

5. おわりに

本稿では、どのようにしてプレテのオンライン化を進めてきたか、テストをどのように実施したか、実施の結果、どのような課題が浮き彫りになったか、について報告した。オンライン化によって、これまで長時間かかっていた採点や得点の入力等の作業は大幅に省力化され、テスト後の分析も容易に行えるようになった。また、受講者も「いつでも」「どこからでも」受験が可能になり、利便性が高まった。これは、オンライン化導入による大きな成果であると考えられる。また、明確になった課題に取り組むことによって、今後、より精度の高いシステムが構築されていくであろう。

しかし、プレテによるレベル判定の精度を上げていくためには、本来、能力記述の明確化が前提ではないだろうか。「J3レベルとは、何を知っていて、何ができるレベルなのか」という問いに対する答えを記述する、ということである。こうした能力記述がなければ、当該レベルの知識や能力の有無を、プレテでどのようにして測っていくのかを検討することは、本来的には不可能である。プレテのオンライン化は、利便性という効果をもたらすものではあるが、同時に、センターが提供している教育内容や、センターの設定するレベルをもう一度見直す契機にもなると考える。テストの問題項目の修正やシステムの改良を進めながら、能力記述についても検討し、レベルの枠組み、レベルに合った教育内容、さらにテストが相互に連動する仕組みが構築されていくことを期待したい。

付記

テストシステムの構築や技術的な支援は、(株)インフォグラムの伊藤晃氏にご担当、ご尽力いただきました。また、予備実験の分析については、九州大学比較社会文化学府博士後期課程の麻生迪子氏にお手伝いいただきました。さらに、耐性実験の補助、およびテストシステムに関する受験者からの問い合わせには、教務補佐の仲紀子氏にご協力いただきました。ここに記して感謝申し上げます。そして、テスト問題の作成、検討、修正、システムへの入力等の全ての作業は、非常勤講師の先生方のご尽力によるものです。先生方がいらっしゃらなければ、オンライン化に着手することはできなかったと思います。日頃のご尽力に加えて、今回もテスト作りに惜しみないご協力を賜りましたことに、心から感謝の意を表します。

参考文献

Brown, J. D. (1996). *Testing in Language Programs*. New Jersey: Prentice Hall.

McNamara, T. (2000). *Language Testing*. Oxford: Oxford University Press.

大神智春・郭俊海(2010).「留学生のための日本語コース (JLC) における受講・管理オンラインシス

- テムの開発・導入とその実践』『九州大学留学生センター紀要』18, 69-74.
- 岡久登・Cha, B. (2004). 「オンラインテストにおける不正行為防止策について」『情報処理学会研究報告』2004(37), 55-59.
- 加納千恵子(2000). 「中級学習者による漢字熟語の習得上の困難点 - 韓国人学習者の場合 - 」『日本語教育方法研究会誌』7 (2), 2-5.
- 島田めぐみ(2003). 「日本語聴解テストにおける選択肢提示形式の影響」『日本語教育』119, 21-30.
- 島田めぐみ(2004). 「日本語聴解テストの項目正答率に影響を与える要因」『東京学芸大学紀要2部門』55, 39-46.
- 島田めぐみ(2006). 「日本語聴解テストにおいて難易度に影響を与える要因」『日本語教育』129, 1-10.
- 島田めぐみ・侯仁鋒(2009). 「中国語母語話者を対象とした日本語聴解テストにおける選択肢提示形式の影響」『世界の日本語教育』19, 33-48.
- 日本語教育学会調査研究第1小委員会(1998). 『日本語聴解問題の改善に関する考察 - 最終報告書 - 』
- 三國純子・小森和子・近藤安月子(2005). 「聴解における語彙知識の量的側面が内容理解に及ぼす影響 - 読解との比較から - 」『日本語教育』125, 76-85.

注

- 1) 口頭試験は、会話クラスのレベル判定として行われている対面式のテストである。オンラインテスト導入後も、この口頭試験は実施されている。
- 2) オンラインテスト失敗者は、オンラインで途中までテストを受験した者もあり、問題項目を繰り返し見ている可能性がある。そのため、分析対象としたオンラインテスト受験者やオンラインテスト紙版受験者とは受験条件が同じであるとは言い難いため、今回の分析に含めなかった。
- 3) 加納 (2000 : 3) は、韓国語をL1とする日本語学習者は「母語ではもはや漢字表記を使用していないとはいえ、音声で認識できる語彙としては、漢字熟語に慣れている」ことから、「『準漢字圏』学習者と位置付けることを提案したい」と述べている。筆者もこれに従い、韓国語L1学習者を準漢字圏として分析する。

日本語・日本文化研修コース

清水百合*

1. はじめに

九州大学留学生センターの日本語・日本文化研修コースは、海外の大学で日本語や日本文化を専攻した学部学生が1年間留学し、今後の日本研究に必要となる日本語能力の向上を図るとともに、日本の社会や文化に関する理解を深めることを目的とする短期留学コースである。

2. 概要

平成12年度から日本語・日本文化研修生は一括して留学生センターが受け入れを行っており、最近の受け入れ人数は以下の通りである。

平成16 - 17(04 - 05)年度5期生	15名	平成17 - 18(05 - 06)年度6期生	10名
平成18 - 19(06 - 07)年度7期生	21名	平成19 - 20(07 - 08)年度8期生	20名
平成20 - 21(08 - 09)年度9期生	26名	平成21 - 22(09 - 10)年度10期生	29名
平成22 - 23(10 - 11)年度11期生	29名		

以下は、平成20年度のコースの概要である。

1. 受け入れ期間 その年の10月1日から翌年の9月30日まで

2. コースの内容

- a) 必修科目 16単位 360時間 留学生センターで開講の「日本語(上級)」、「日本語・日本文化概論」、「日本語学」および「調査方法研究」など
- b) 選択必修科目 2単位 30時間 「課題研究」あるいは「調査分析」を選択
9期生までは上記の選択必修科目が課されていたが、10期生からは、選択必修科目が以下のように変更になった。課題研究4単位、調査分析2単位、文献講読1単位。
学生は、3つの中から自分に合った科目を選ぶ。課題研究、調査分析を行うためには前の学期に、ブックレポートを提出し、評価を受けること、加えて研究方法についてもレポートを提出することが義務付けられている。
- c) 選択科目 4単位 60時間 日本の社会や文化に関する学部学生向けの授業
計 22単位 450時間

3. 単位認定 本コースで履修した科目は、成績認定が行われ、所定の要件を満たすと修了証が授与される。また単位互換に応じることができる。

*九州大学留学生センター教授

3. 平成21年度の日本語・日本文化研修コース

- 1) 平成21年度前半：平成20年度後半に始まった第9期生（26名）のコースが引き続き4月から9月まで行われた。主な日程は以下の通りである。

2009年4月9日 授業開始
 5月18日 課題研究中間発表1
 7月27日 課題研究中間発表2
 8月24・25日 課題研究最終発表会

言語・教育

- | | |
|--|-------------|
| 1. 語彙量の対照的研究 | ミラン・フォンベルロ |
| 2. 日本語における外国語の利用方法 - 和製漢語とカタカナ語の分析から - | ショウライ |
| 3. 日本映画のシナリオと韓国語字幕の表現比較 | イー・スヨン |
| 4. ロシアと日本の昔話に登場した妖怪たち | イレーラ |
| 5. 中国人日本語学習者の外来語習得の実態に関する研究 | ヒョウケツ |
| 6. 外国を勉強する目的 | ミヒル・ブアヴィンクル |
| 7. 日本人の動物観 - ことわざを中心に | 黄旭君 |
| 8. チューター制度のあり方について | 黄雅利 |
| 9. 在日ベトナム人留学生の異文化適応 | ハティトゥン |

文化・社会

- | | |
|--|-----------------------|
| 10. オタク | ジュー・オクサナ |
| 11. 中国人と日本人の違い - 対人認識についての考察 | 許 曉溪 |
| 12. 飲酒実態に関する日中の大学生の比較 | 陳曉雲 |
| 13. グローバリゼーションの捉え方 | ヤコブ・ウィツェル |
| 14. ケータイ購入における TVCM の効果 | 方敏晟 |
| 15. 日・韓映画交流の現在と未来 | イム・ジヨン, ジョ・ハヨン |
| 16. 日本社会における「非属」のあり方について | ディエゴ・コミナツィーニ |
| 17. 日本における、若者のナショナリズムの意識 | チュア・マリサ |
| 18. テレビCMタイアップソングのCD売上への影響 | 林 子雍 |
| 19. 「核と被覆」副題 - 「日本の文化の収容の特性と日本人の自己表現の特徴にみる日本人のオリジナルへの認識」 | 金胤希 |
| 20. イスラームに対する日本人の認識変化 | ジャーロン・サイヌン |
| 21. カラーとカラーコーディネート | 姜せい |
| 22. 茶道の担い手と侘びの精神 | キム・ミンヒ, キム・シナ, イ・シンヨン |

前年度までは、発表は論集としてまとめられていたが、9期生からはまとめられていない。

8月25日 終了式・パーティ

2) 平成21年度後半：平成21 - 22年度コース（第10期生）は10月に29名の研修生で始まった。

10月2日 開講式

10月13日 授業開始

平成21年秋季学期時間割り(コースの必修科目のみ記載)

	月	火	水	木	金
1		上級日本語 B	日本語日本文化概論	上級日本語 D	上級日本語 D
2	上級日本語 A	上級日本語 C			
3		日本語演習	上級日本語 F 1月	日本語学	上級日本語 F 1月
4					
5		上級日本語 E 1月	上級日本語 G 1月	上級日本語 E 1月	上級日本語 G 1月

上級日本語は、上記の6科目の中から研修生が関心のある科目を4つ選択する。1月とあるのは、冬休みが終ってから週2コマで行うクラスである。科目名は以下の通りである。

上級日本語 A 「ジェネレーション Y」

上級日本語 B 「日本語総合力をつけよう」

上級日本語 C 「社会問題に見る日本社会」

上級日本語 D 「現代日本の姿」

上級日本語 E 「4コマ漫画に見る日本」

上級日本語 F 「人と社会を考える」

上級日本語 G 「映画に見る現代社会」

11月27日 見学旅行 熊本城 阿蘇 阿蘇ファームランド

12月21日から1月11日まで冬休み

2月21日 前期授業終了(ただし1月からの上級日本語は2月25日まで)

2月25日から春休み

4. 研修生の評価

1) 第9期生

9期生は、8期生にもまして多国籍化した。人数も26名と増えた。日本語の力は前年度の学生達と同じレベルでそう高くなかったが、真面目に努力し、少しずつ力を貯えていくタイプの学生が多かった。多人数のためかあるいは多国籍のためか、またリーダーとなる人が見つからなかったせいか、グループとしてどのようにまとまっていくかの方向性が見えない学生が目立った。勉強においても、クラスメートとの出来の違いが関心をひき、その違いを学ぶ格好のチャンスと思うより、クラスメート

と違って劣って見える自分をどのよう捉え、どのような努力をすればよいか分からなくなり不安になる者が多かった。しかし、これらのレベルの違いは、後半では学生一人一人がしっかりと自分の関心を追求するという良い方向に進む原動力となった。

またこの期において、課題研究を一人一テーマではなく、何人かで共同で行うやり方を導入した。その結果、一人でやるよりも広範な調査を行うことができ、またデータの分析もより客観的なものとなることも分かり、学生に合った研究方法を模索している指導教員には、選択肢の一つとなった。

2) 第10期生

10期生は、9期の11ヵ国26名よりさらに多い16ヵ国29名でスタートした。人数としては3名増えたにすぎないが、出身国の多様さに加え、両親の国際結婚により一つ以上の国の文化を持った学生が複数おり、多様さに輪を掛けた。これらの学生の「我々は異なる文化背景を持っているから、一人一人違うのは当然である」という議論の前提ともなる考え方は、他のクラスメートに大きな刺激となった。単に他の国の人と会うだけではなく、このように国をまたがり、二つの国の言語ばかりか文化も理解している人の考え方は、それまで母国では聞いたことのない個性的なもので、学生達も自分達の「国際化」を考えるきっかけとなったのである。その関心の現われは、学部の選択科目で、外国語の履修が今までにもまして増えたことである。母国語と英語、加えて日本語だけで充分だと考えていた学生達が、4ヵ国語、あるいは5ヵ国語の習得を目指した。

また、この多様性の現われは、課題研究のテーマにも影響を及ぼした。課題研究については、この10期生から、課題研究、調査分析、文献講読のうちから、選択できるようになった。

5. 第9期で行った改良

基本的に8期で始めた試みを踏襲した。その試みとは、必修の上級日本語の一部を1月から週2回行う方法である。10月来日から3か月は、足りない日本語の力をつける猶予期間を設けたわけである。この試みは、非漢字圏学習者だけでなく、漢字圏学習者にも留学生センターの多くを読んだり書いたりする授業に慣れる時間があるため、効果的であった。

また課題研究については、選択必修とし「課題研究」でも「調査分析」でもよいこととした。しかし、全員が課題研究を選択したため、実質的には第8期生と同じく、センターの日本語の教員が一人につき3～4人に研究指導を行い、論文を完成するまで指導した。

6. 日本語・日本文化研修コースの課題

受け入れ学生数の増大に伴い、1クラス29名のコース運営に加えて、29名に対する課題研究の個別指導は実質上不可能になった。そこで9期生で改革を試みたが、学生の選択に委ねたために機能しなかった。さらなる改革を必要としている。

また、日本語・日本文化研修コース生は、留学生センターに所属し、主に日本語のスキルを磨くこ

とや、日本社会・日本文化に関する見聞を広めることを目的としているが、従来のように、母国の大学で語学としての日本語を専攻し、将来母国で日本語の教師になることを目指している九州大学の留学生センターに来る学生の数は減っている。

代わりに母国の大学で社会学や心理学、経済学や政治学を専攻している学生が増えている。彼らが目指すのは、専攻の学部での知識を広めるとともに、語学としての日本語を究め、就職や大学院進学を可能にすることである。そのため、留学生センターの日本語や日本文化に関するクラスだけでは満足できず、学部の科目を多く履修したがるという傾向がさらに多くなってきた。そのような学生達は、本来日本語や日本文化に関する履修を主とする日本語・日本文化研修コース生としては、相応しくない。しかし、世界の大学では主専攻と共に副専攻も重んじる時代に入っており、これらの学生達の希望は時代の趨勢と言わざるをえない。

今後、課題研究をどのように位置付けるかと共に、日本語・日本文化研修コース自体の位置付けも考えていかなければならない。

九州大学における春季プログラムの実践

AsTW(Asean in Today's World)の概要と今後の課題

Report on the Asean in Today's World (AsTW) 2010

郭 俊 海*

高 原 芳 枝**

0. はじめに

ASEAN in Today's World (AsTW) は、本学が開発した、ASEAN 諸国の有力大学と共同で現地の大学において実施する、ASEAN+ 3 (日中韓) にフォーカスした短期国際教育プログラムである。本稿では、マヒドン大学インターナショナルカレッジ (MUIC) と共同実施した、2009年度プログラムの概要を報告し、その問題点や今後の課題について考察する。

1. 概 要

1.1 コース実施期間 (2月26日～3月13日 2週間)

九州大学と諸外国の大学の休業期間を考慮し、実施期間を2010年2月26日(金) から3月13日(土) の2週間とした。2月26日(金)～28日(日) のオリエンテーションを経て、3月1日(月) から授業を開始した。

1.2 対象と募集方法

主として ASEAN 域内の大学、日本、中国、韓国の大学の学生 (学部生と大学院生) を対象としたが、広く世界各国の大学にも募集案内を郵送で配付した。

1.3 参加者

表1は、参加者の国と大学を示したものである。12カ国・地域 20大学から51名の学生が参加した。

*九州大学留学生センター准教授

**九州大学国際交流推進室准助教

表1 参加者の国と大学

日本・中国・韓国・その他 (30名)			ASEAN 諸国 (21名)							
日 本	中 国	韓 国	イン ドネ シア	カン ボジ ア	タ イ	フィ リピン	ベ トナ ム	マ レー シア	ミ ヤン マー	ラ オ ス
19 ¹⁾	7	4	4	2	7	1	3	1	2	1
九州大学	華中科学技術大学 中国人民大学 上海国際問題研究院	Kyung Hee University Dan Kook University Ewha Womans University	University of Gadjah Mada University of Indonesia	Royal University of Agriculture Royal University of Law and Economics	Mahidol University Kasetart University Khon Kaen University	Ateneo de Manila University	Vietnam National University Hanoi	Universiti Kebangsaan Malaysia	Diplomatic School of Yangon University of Dental Medicine	National University of Laos

1.4 宿舎、参加料金と奨学金

宿舎は、MUIC 附属のホテルを、1室2名で利用した。参加料金は、九州大学の授業料59,200円と宿舎料とフィールドスタディに要する実費の68,800円とした。

九州大学と MUIC 共に参加学生に対する奨学金を提供し、九州大学は、14万円を15名の ASEAN+3 諸国（日本を除く）の学生に、6万円を5名の九州大学の学生に支給した。一方、MUIC は参加料金と渡航費相当分の奨学金を15名の参加学生に支給した。これにより、参加者51名のうち、35名が奨学金を受給することができた。

2. カリキュラムとコース概要

このプログラムは、ASEAN 研究 (ASC: ASEAN Studies Courses)、アジア言語・文化 (ALC: Asian Languages & Cultures Courses)、フィールドスタディから構成され、以下の5コースを設置した。ASC と ALC の各科目は2単位とし、参加者は4単位 (ASC 1科目 + ALC 1科目 = 2科目) を履修して、プログラムを修了する。

ASEAN 研究コース / ASEAN Studies Courses (ASC)

- ◇ ASEAN & 東アジア事情 / Current Affairs of ASEAN and East Asia
- ◇ 農業経済 & 食品安全 / Agricultural Economics and Food Safety

- ◇ 異文化コミュニケーション / Cross-Cultural Communication
 - アジア言語・文化コース / Asian Languages & Cultures Courses (ALC)
- ◇ 初級日本語 / Basic Japanese and Culture
- ◇ 初級タイ語 / Basic Thai and Culture
 - フィールドスタディ
- ◇ サメット島でのオリエンテーション
- ◇ Joe Louis Puppet Theatre (タイ伝統人形劇) 見学
- ◇ Susanlum Night Bazar 見学
- ◇ Ayuttaya & Amphawa ホームステイ
- ◇ Amphawa Night Floating Market (アユタヤ水上市場見学)
- ◇ タイ料理教室
- ◇ その他

ゲストレクチャー

アセアン事務総長特別補佐官、タームサック・チャラーンパラヌパップ (TERMSAK CHALERMPALANUPAP) 博士による特別講義「5Cs of ASEAN」

表2 時間割

ALC 8 : 50 - 11 : 50	Basic Japanese & Culture		Basic Thai & Culture
Lunch Break			
ASC 13 : 30 - 16 : 30	Current Affairs of ASEAN & East Asia	Agricultural Economics and Food Safety	Cross-Cultural Communication
Field Study, Cross-cultural Activities, etc.			

表3 アセアン研究コース科目担当教員・受講者数

科目名・講師 () 内は担当コマ数 (1コマ = 180分)	受講者数
ASEAN&東アジア事情 / Current Affairs of ASEAN and East Asia ◇Associate Professor Mark Fenwick, Faculty of Law, Kyushu University (4) ◇Dr. Dale Rorex, Social Science Division, Mahidol University International College (5)	20
異文化コミュニケーション / Cross-Cultural Communication ◇Professor Jordan Pollack, International Student Center, Kyushu University (4) Professor Ruchi Agarwal, Faculty of Social Sciences, Mahidol University (5)	18
農業経済&食品安全 / Agricultural Economics and Food Safety ◇Associate Professor Shoji Shinkai, Fukuoka Women's University (4) ◇Professor Chariya, R. Brockelman, International College of Mahidol University (5)	13

アジア研究コース科目担当教員・受講者数

科目名・講師 (担当コマ数)	受講者数
初級日本語 / Basic Japanese & Culture ◇レベル1 : Ms. Kyoko Takada, International Student Center, Kyushu University(10) ◇レベル2 : Associate Professor Guo Junhai, International Student Center, Kyushu University(10)	17 5
初級タイ語 / Basic Thai & Culture ◇Ms. Anchalee Pongpun, Humanities and Language Division, Mahidol University International College(10) ◇Ms. Arpaporn Iemubol, Humanities and Language Division, Mahidol University International College(10)	29

4. 参加者の評価

プログラム最終日に、参加者によるプログラム評価のアンケートを行った。プログラム全体、コース内容、フィールドスタディについて、五段階の基準 (5 = Excellent; 4 = Good; 3 = Fair; 2 = Poor; 1 = Very Poor) で評価させ、各質問項目について、必ずコメントを書かせるようにした。下の表は五段階評価ポイントを集計したものである。

表4 参加者による評価

AsTW as a whole		Asia Language & Culture		ASEAN Studies	
Rating	(Answers)	Rating	(Answers)	Rating	(Answers)
5	(34)	5	(39)	5	(17)
4	(10)	4	(8)	4	(17)
3	(6)	3	(1)	3	(12)
2	(1)	2	-	2	(1)
1	-	1	-	1	-
Study Trips: Frequency		Study Trips: Variety			
Rating	(Answers)	Rating	(Answers)		
5	(27)	5	(33)		
4	(16)	4	(11)		
3	(8)	3	(7)		
2	-	2	-		
1	-	1	-		

表4が示すように、「Good」や「Excellent」と評価した学生が多かったことから、アジア言語・文化コース、アセアン研究コース及び本プログラム全体に対して、ほとんどの学生が非常に満足していることが伺える。また、フィールドスタディ (頻度と内容) においても、高い評価が得られている。

ASEAN、日本理解及び異文化理解の促進

このプログラムに参加したことを通じて、ASEANの政治的・経済的情勢、歴史、文化及び食の安全など、アセアン全般にわたって理解することができた。授業では、学生たちはASEANについて自らの考えを述べる、また自国のことを紹介し他の学生の意見を聴くなどして、ASEANや自国のことについて再認識ができた。ASEAN学コースを通して、新たな発見をし、ASEANに関する理解が深まったと多くの学生が述べている。

日本人学生の自己主張能力とコミュニケーション能力の意識向上

また、多くの日本人学生が、ASEANの学生とのグループディスカッションなどを通じて、自分たちが積極的に意見を述べ、もっと英語によるコミュニケーション能力を高めなければならない、という意識が高められた。以下は、抜粋した学生のコメントの一部である。

It was an amazing experience of meeting students from SEA, also to see Thailand and to learn different things formally and informally.

It gives and inspire us by meeting with different people from different cultures & countries.

It is a great program where people (young adults) come together from different countries and learn each other cultures.

During the program, I have learnt a lot of things that cannot be taught by our teachers.

周囲の友達の意識の高さを感じ、……異文化理解を深められた。

世界情勢に関心を持てるようになった。

自分音新たな一面を発見し、成長することができた。

英語を学ぶ意欲があがった。

しかし、過密なスケジュールに対する不満の声も聞かれた。毎日、午前8時50分から午後4時半まで、授業がびっしり入っている上に、週2回程度は授業終了後、夕方や週末のフィールドスタディも用意されていた。また、授業で出される各種の課題をこなす時間も必要であり、学生が自由に使える時間は極めて限られていた。

また、宿舎としたホテルにはワイヤレスLANが設備されていたが、インターネットアクセスの不具合が多く、これに関する意見も寄せられている。学生の主なコメントをまとめると、おおむね次のとおりである。

It was an excellent program. But I think that the timing for this program is very short.

It was definitely too short.

You should reduce the schedule for learning because all participants want to have free time.

Everything is nice, except the tight schedule.

We want to have more fieldworks.

Workload should be lessened.

課題が重すぎた。

フリーな日がまったくなかった。

5. 今後の課題

日本の大学（九州大学も含む）と諸外国の大学の休業期間を考慮し、本年度は2月26日から3月16日までの2週間とした。それにもかかわらず、一部の地域の大学（たとえば、香港、マレーシア、シンガポールなど）の授業期間と重なり、これらの地域の大学からの参加者はいなかった。また、プログラムの開講期間に関しては、「短すぎる」、「3～4週間にすべきだ」との意見も参加した学生から寄せられている。期間を長くすれば滞在費や授業料及び講師の謝金などの経済的な問題や、また共同開催校の新学期と重なり教室や宿泊などの施設の利用が困難になるなどの問題も出てくる。今後も、これら学生の声を反映させつつ、共同開催校の事情を考慮しながら開催時期やコースの長さを検討していきたい。

日本人学生の参加者からは「九州大学の学生が多すぎる」との意見があった。これは、九州大学が主導で開催したプログラムなので、当然と言えば当然かもしれないが、今後、日本の他の大学の学生が多く参加するようにアピールしていきたい。

アセアンの一部の国は、奨学金がないと経済的に参加しにくい実情がある。いかに財源を確保し多くの優秀な学生を獲得できるかが課題の一つである。

<注>

1) 九州大学の中国人留学生とベルギー人留学生1名ずつを含む

九州大学におけるサマーコースの実践

2010年プログラムの概要と報告

Report on the 2010 Asia in Today's World (ATW) Program

岡崎 智 己*

高原 芳 枝**

西原 暁 子**

0. はじめに

Asia in Today's World (ATW) は、今年度10回目のプログラムを開講・実施し、39名の参加者を受入れた。これにより通算受入れ留学生は15カ国71大学394人に上る。

本稿では、2010年プログラムの概要を報告すると共に、今年度プログラムの問題点とその改善策について考察する。

1. 2010年 ATW プログラムの概要

実施期間	2010年6月28日～8月6日(6週間)
対象者	外国の高等教育機関に在籍している学部生及び大学院生で、以下の条件を満たすもの (1) 学業及び人格が優れており、原則として在籍している大学の推薦を受けた者 (2) 留学の目的及び計画が明確で、日本への留学の成果が期待できる者 (3) 日本での留学期間終了後、在籍大学において学業を継続する者 英語を母国語としない者については、TOEFL550点以上の英語能力を有する者
開講科目	1) 人文・社会科学系「アジア研究コース」全4科目(教育言語:英語) 2) 自然科学系「実験実習コース」個別対応(教育言語:主に英語) 3) 日本語(初級前半～中級後半・全6レベル6クラス)
時間割	9:30 - 12:00 日本語コース 13:00 - 14:30 アジア研究コース(1) 14:50 - 16:20 アジア研究コース(2) 13:00～ ラボ研究コース(実験実習)
奨学金	12万円/人を20名に支給

*九州大学留学生センター教授

**九州大学国際交流推進室准助教

見学旅行 (登録制)	1) 佐賀県西有田町 棚田農作業体験 (日帰り) 参加料 2,600円 2) 錦帯橋、厳島神社、広島平和記念公園 (1泊) 参加料 26,000円 3) 日本文化体験 (茶会・座禅) (半日) 参加料 各1,000円・500円
宿 舎	以下の組み合わせにより希望をとり、調整して割り当て 1) 4週間ウィークリーマンション+ 2週間ホームステイ 2) 全期間 (6週間) ウィークリーマンション 3) 4週間民間学生寮+ 2週間ホームステイ 4) 全期間 (6週間) 民間学生寮 5) 全期間 (6週間) ホームステイ
参加費	授業料 88,800円 (6単位分相当) 宿舎料 72,000円~138,600円 (宿泊形態により異なる) 見学旅行費 (登録制) 見学旅行欄参照

受講者数

2010年の応募者、並びに受講者 (= 受講許可者の内、実際にプログラムに参加した者) の国別内訳は以下のとおりである。

(単位: 人)

応募者総数	受入許可者総数	受講者総数									
58人	49人	39人	ア メ リ カ	カ ナ ダ	イ ギ リ ス	シン ガ ポ ール	韓 国	中 国	香 港	台 湾	計
			14	1	5	5	6	4	3	1	39

昨年度は深刻な世界的経済不況の影響で応募者数が減少したが、今年度は幾分持ち直し、応募者総数は昨年から10名増となった。しかしながら、これまでの実績から見ると応募者総数は減少しており、長引く経済不況と円高の影響が少なからずあるようである。

開講科目

人文・社会科学系「アジア研究コース」の開講科目と各科目の受講状況

各科目とも、授業回数は15回 (30時間相当) で、付与する単位は2単位とした。「アジア研究コース」を選択した学生は、以下に挙げる開講科目から、原則、基本的に一人2コースを選択受講している。

開講科目・授業担当	受講生数
1. Japan and the Asia-Pacific in Modern Times See Heng TEOW, National University of Singapore	27人
2. Food and Agricultural Economics in Japan and Asia-Pacific Shoji Shinkai, Fukuoka Women's University	15人

3. Cross Cultural Relations: Understanding and Dealing with Contexts Antonette Palma-Angeles, Ateneo de Manila University	28人
4. Politics, Law and Society in Asia Dimitri Vanoverbeke, Catholic University of Leuven	2人

自然科学系「実験実習コース」に申請して行われた自主研究と受入部局

6週間の期間中ほぼ毎日実験実習に従事するコースであり、付与する単位数は4単位とした。今年、「実験実習コース」を選択した学生は3名で、各自の研究課題は以下の通りである。

研究課題	
1. 心筋梗塞時に発現が上昇する G タンパク質共役型受容体のクローニングと発現	薬学部
2. Survey of research on Li-ion battery deterioration	工学部
3. The effect of chlorine dioxide on the microbiological properties, colour, Vitamin C and texture of cucumber	農学部

日本語コースの受講状況

6週間の期間中ほぼ毎日授業を行い（授業時間総計60時間）、2単位を付与・認定した。

初級 1	初級 2	初中級 1	初中級 2	中級 1	中級 2	計
12人	8人	5人	4人	6人	4人	39人

2. 応募数の動向

下の2つの図は参加料金を徴収するプログラムとした2003年度以降2010年までの応募者数（図1）と応募大学（応募者の所属大学）数（図2）の推移を所属大学の所在する地域別に示したものである。

本サマーコースは、最初の2年間（2001-2002）はUMAP Leaders Programとして、UMAP¹⁾国際事務局の補助金により実施したのち、2003年から九州大学独自の独立したプログラム（ATW）として自己資金で実施している。2003年当時、ATWは本学の国際教育事業のフロンティアプログラムであり、また、それまで20～25名であった定員を60名に増やしたことから、2003年から2006年まで、海外の大学で学生を対象に説明会を行って学生を募集した。アメリカと欧州の数カ国も訪問したが、主な訪問先は東アジアと東南アジアであった。プロモーション活動が奏功して、2003年の応募者は117名、2005年も100名を超える応募があり、そのうち約80%は東アジアと東南アジアからであった。プロモーション活動を終了した後も、2008年までは安定した応募数を保っていたが、2009年は世界経済不況と新型インフルエンザ流行の影響を受けて、応募者数は前年度の40%減となった。また、近年40名前後もしくはそれ以上を数えたシンガポール大学からの応募が半数以下に減少してきたことも影響

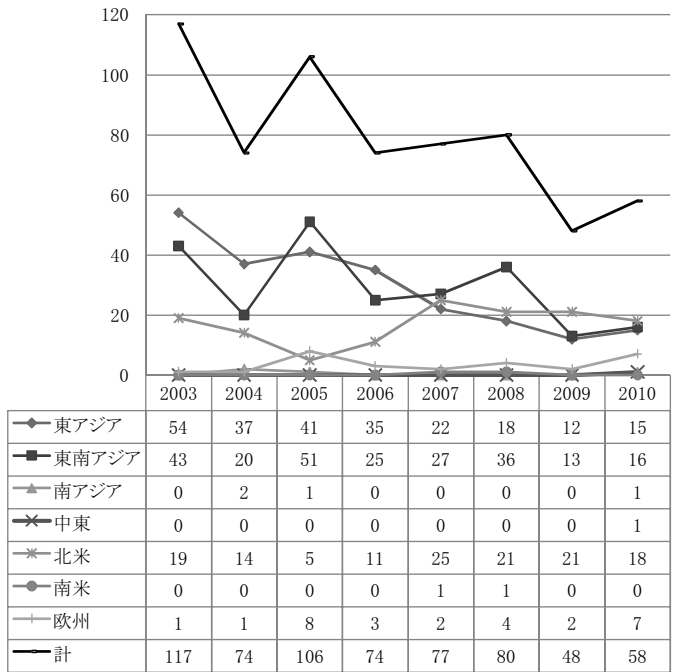


図1 年度別・地域別 応募者数

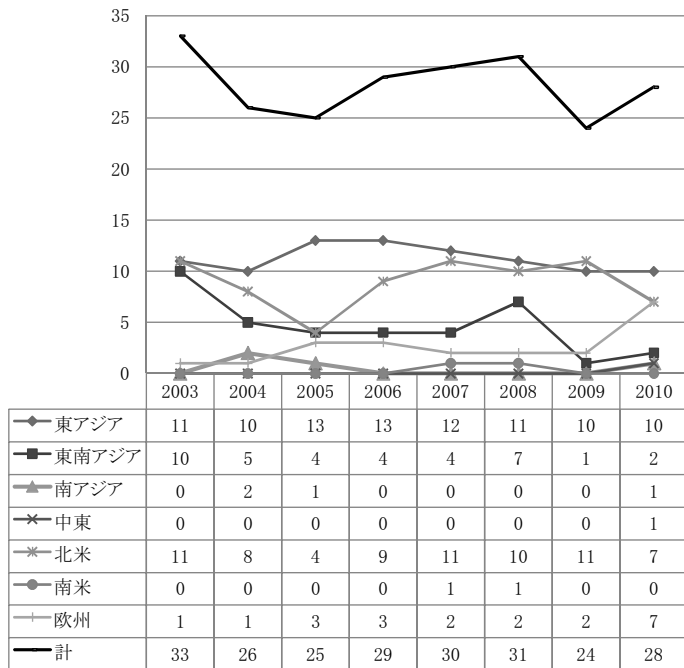


図2 年度別・地域別 応募大学数

している。従来、同大学学生の本プログラム参加を経済的に支援していた在シンガポール日系企業から奨学金が提供されなくなったことが背景にある。

東アジアと東南アジアからの応募者が減少した一方、北米からは毎年20名前後の応募数を保っており、欧州からの応募数は増加傾向にある。所属大学の地域バランスを見ると、アジアと欧米の応募者数の差は縮小しており、応募大学数においては、アジア（東アジア+東南アジア+南アジア）13大学に対し欧米14大学と、ほぼ均衡している（図2）。また、応募者総数は減少しているが、応募大学数は30前後と一定数を保っている。これは同じ大学から参加する学生が1人か、多くても2～3人ということであり、単一大学や地域のグループが形成されることなく、多様なバックグラウンドをもつ学生間の交流が促されるという結果につながっている。実際に、多様な地域と大学からやってくる同年代の参加者との交流がATWの魅力であるという参加者の意見は少なくない。

今年度の特徴として、欧州の大学が増加したことと、過去4年間実績がなかった南アジアと、これまで全く応募のなかった中東の大学に所属する学生から応募があったことが挙げられる。これら欧州と中東の今年度新規応募大学は計10大学であるが、そのうち9大学は本学と学術交流協定を締結していない。また、応募大学総数28大学のうち、新規応募大学が10大学と36%の比率を占めており、応募者数が下降する以前の2007年の水準に戻っている（表1）。ATWは、本学との交流協定の有無に関わらず、広く世界中の大学生を受け入れることを目的として開講・実施されており、新規に応募する大学が増加していることは、徐々にではあるが、ATWの認知度が向上していることを示している。

表1 新規応募大学数 / 応募大学総数

年	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010
新規 / 総数	13 / 26 (50%)	10 / 25 (40%)	12 / 29 (41%)	11 / 30 (37%)	8 / 31 (26%)	5 / 24 (21%)	10 / 28 (36%)

では、応募者、特に交流協定を持たない大学の学生は、どのようにATWの情報を得ているのだろうか。図3は、今年度ATWに参加した学生に対するアンケート調査の結果である。

インターネットでATWを知った参加者は約3割に達しており、このことからほとんどの新規応募大学の学生の情報源はインターネットであろうと考えられる。これに、以前にATWに参加した友人や兄弟からATWの評判を聞いて応募したという、いわゆる口コミによる応募者の割合を合わせると、所属する大学の国際オフィス等から提供される情報以外の情報源の利用者は約半数に及ぶ。今後、応募者数の増加を図る場合には、インターネットと口コミの積極的かつ有効な利用が鍵となるであろう。

一方、本学とは交流協定を持たない不特定多数の大学の学生が直接応募してくる場合は、応募者が協定大学の推薦を受ける場合とは異なり、所属大学の保証がないので、受入者の選考には慎重を期さなければならない。応募者の学業成績と留学に対する意志・意識を注意深く審査して受入者を決定することが、本プログラムの質保証につながると考える。

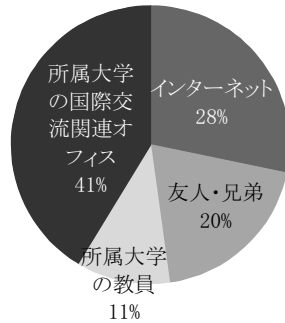


図3 情報源 (2010調査)

3. ATW プログラムに対する評価と今後の課題

参加者による開講科目とプログラム全般の評価

- ・プログラムの総合的な評価 (有効回答者数：39人)

	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数	27人	12人	0人	0人	0人

- ・「アジア研究コース」について (有効回答者数：36人)

	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数	14人	19人	3人	0人	0人

- ・「ラボ研究コース」について (有効回答者数：3人)

	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数	2人	0人	0人	1人	0人

- ・「日本語コース」について (有効回答者数：36人)

	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数	20人	14人	2人	0人	0人

- ・「日本語クラス」と「アジア研究/ラボ研究」とのバランスについて (有効回答者数：39人)

	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数	10人	24人	5人	0人	0人

総合評価は参加者全員 (39名) が“大変によい”または“よい”と回答しており、参加者の満足度が高かったことは、プログラム運営者として喜ばしいことである。

自由記述で参加者から寄せられた意見・コメントは概ね良好であったが、今後のプログラム運営上、

検討の余地があると思われたものとして、実施期間と授業時間についての意見に触れておく。これは、毎日授業が午後2時30分までである上に宿題が出され、更にラボ研究では毎日遅くまで研究室で実習するので、観光や仲間との交流などに自由に使える時間があまり取れなかったことに関するもので、プログラムの実施期間を延長して、代わりに週当たり授業時間数を減らしてはどうかというものである。ATWに参加する学生は皆、日本に興味があり、日本を知りたいと思ってやってくるのであるから、日本で様々なものに接し、自ら体験し、また多くの人に出会いたいという欲求は強い。そのような欲求を6週間という限られた時間で満たすには、時間が足りないという意見である。毎日びっしり授業を詰め込むのではなく、授業日を週に4日程度として学生の自由時間を増やすことが、解決策として考えられる。

しかしながら、プログラム実施期間を延長するためには、日本語及びアジア研究コースの担当教員が、その期間対応できるか、本学授業期間中に実施するATWのための教室を確保できるか、滞在期間の延長による宿泊費の上昇が応募者数に影響しないか等、検討すべき要素がいくつもある。

その他

ホームステイ体験の充実と日本人学生によるチューター活動

サマーコースはUMAP Leaders Programとして開始した当初より、宿泊先の選択肢としてホームステイを用意している。一般の家庭での宿泊体験を希望する学生は多く、例年参加者の8～9割がホームステイを希望・選択する。

また、本学学生の中から希望者を募り、滞在中の生活全般をサポートするボランティアチューターとして、留学生に1対1で配置している。

以下は今年度の参加学生によるホームステイとチューターに対する評価である。

参加者によるホームステイとチューターに対する評価

・ホームステイに関する評価（有効回答者数：31人）

立地	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数	7	17	6	1	0

設備	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数	20	11	0	0	0

待遇	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数	29	1	1	0	0

全般	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数	28	3	0	0	0

・チューターに対する評価（有効回答者数：39人）

チューター プログラム	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数	29	9	1	0	0

担当 チューター	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数	25	7	5	2	0

今年度は30名がホームステイを希望した。内訳は11名が6週間のホームステイ、19名が後半2週間のホームステイである。例年のことながら、ホストファミリーを申し出てくださる一般家庭は決して多くなく、応募締切間近になってホストファミリー申込み家庭数がようやく必要家庭数を上回った。学生、ホストファミリー双方から提出された調書に基づき両者の組み合わせを行うが、この組み合わせではトラブル発生の可能性をできるだけ低く抑えるため、プログラム開始当初より次の事項を特に重視し、両者の希望に沿えるようにしている。

（ホストファミリー側の希望）

1. 受入学生の男・女の希望
2. 食材制限のある学生の受け入れの可否
3. 日本語初心者の受け入れの可否

（留学生側の希望）

4. 喫煙家族同居の場合の可否
5. ペットが飼育されていることに関する可否
6. 幼児がいることに関する可否

組み合わせ時の調書各項目の取り扱いは、2005、2006年度報告に記載しており、ここでは詳細は省略するが、上記項目4～6はいずれも過去にトラブルが生じた例があるため、項目1～3同様、出来る限り希望を容れた組み合わせを行うようにしている。ホストファミリーへの応募家庭が少ない場合など、いたしかた無く希望を叶えられないケースもあるが、その場合は本人に許容範囲を再度確認するなどして、事前の了解を得る努力をしている。選択肢が広がれば、予想されるトラブルも回避可能であるため、安定的且つトラブルの少ないホームステイプログラム運営のためには、十分な数のホストファミリーの確保がやはり最重要課題である。

チューターに対する満足度は例年概ね高いが、1対1で配置するため、頻繁にチューターと会って交流を楽しむ留学生がいる一方で、中にはチューターが学業等で忙しく十分に接触できないケース、もしくは留学生仲間との交流にウエートを置き、担当チューターと積極的に交流しないケースもある。そのような場合に留学生、チューター双方ができるだけ疎外感を感じないですむよう、全チューターを大きなグループとして組織し、全留学生と交流する機会がもてるようにしている。チューターの中にリーダー、サブリーダーを置き、留学生との1対1の対応以外に、チューター企画による全体イベント（観光、見物やパーティーなど）を行い、担当チューターが対応できない場合には、他のチューター

ターがカバーするという体制である。このため、チューターのなかでも時間に余裕のある者、多くの留学生との交流を熱心に希望する者は、自分の担当留学生以外にもさまざまな留学生と積極的に交流活動に取り組んだ。そのうちの一人のチューターに関しては、留学生が帰国後、わざわざオフィスに対して当該チューターの献身ぶりを賞賛するメールを送ってきたほどであった。

チューターがプログラムに大きく貢献しうることを、その経験とともに次の年度のチューター希望者に伝えていくことが、留学生、チューター双方の満足度をさらに高めてゆく助けとなる。数年前より数名分のチューター体験談を ATW のホームページに掲載しているが、献身的な活動を行ったチューターの手記は年度毎に出来る限り収集し、有効活用したい。

<注>

- 1) UMAP (University Mobility in Asia and the Pacific : アジア太平洋大学交流機構) は、アジア太平洋地域における高等教育機関間の学生・教職員の交流促進を目的として、1991年にオーストラリア大学協会の提唱により設立された。

Unexpected Japan—Early Impressions of Sojourning Students

Jordan I. Pollack*

Japan predictably surprises newcomers—tourists, diplomats, missionaries, immigrants, business people, and students, among others—to its shores. It does so predictably in different ways: through the energetic production of cultural novelty (*harajuku* and “cool biz” fashions, cuisine fusions, *manga/anime* inventiveness, J-Pop genre evolution, advertisement and TV humor, etc.), spoken of now as exemplary of Japan’s soft power; through the presumed constant but factually less-than-uniform enactment of culturally signature forms (bowing, wearing of *kimono*, use of chopsticks, etc.), rather disappointing to some; through prompting realization of the effective everyday insignificance of the traditional, externally marketed (hence romanticized) symbols of cultural distinction (*geisha*, cherry blossoms, Mt. Fuji, *sumō*); and, just as importantly, through the unexpected sheer banality and transcultural familiarity of its quotidian social and material life. Japan surprises newcomers because it both exceeds and falls short of their anticipations, whatever their source and legitimacy. Of course so much could be said for newcomers to most places. But for exchange students, who have chosen their study destination with some model of host country history and conditions in mind, and with some ambition to make that host country (its people and cultures) relevant to their future, surprises may uniquely delight and dismay.

This report, an exercise in ethnographic illustration, presents assorted authentic responses exemplifying intercultural notice-taking and sense-making when host country conditions turn out to be, upon arrival, somewhat other than as projected. What follows is a compiling of representative expressions of surprise, registered more or less strongly, by exchange students who participated in Kyushu University’s Japan in Today’s World program (JTW)¹ spanning a five-year period (fall 2005 through summer 2010). Reactions to the unexpected were elicited in class discussions and solicited systematically as written reflections on assigned readings and observation tasks required for two courses taught annually by the author as part of JTW’s core curriculum. The courses—one focused on adjustment issues and strategies, and the other on cultural patterns and history—enrolled between 25 and 35 students each.² Encounters with Japanese, particularly with their eating and dressing habits, with their patterned behavior in time and space, and with their customary communicative styles, including nonverbal body language, are productive in international students especially, given their age-specific intentionality, of new modes and levels of awareness, understanding, and evaluation. Engagements with similarities and differences in conduct, to the degree that these surprise, will likely disturb taken-for-granted views and upset stereotypes, displacing complacency

* International Student Center, Kyushu University

with efforts to rework interpretations. International education seeks precisely this outcome, as part of the broader objective of developing interculturally competent individuals (Deardorff, 2009) equipped suitably for successful functioning in a densely interconnected, “flattening” (Friedman, 2005) world.

An earlier report (Pollack, 2009) discussed various motivations which students articulated in their applications to the JTW program. These announced or implied expectations that would position participants, as newcomers, for surprise in their first exposures to Japanese lifeways. The same students share below some their earliest impressions, reactions both positive and negative, offering valuable insight into how sojourners on academic exchange interpret Japan—a Japan they did not entirely expect. Comments are assembled which address several areas of initial, salient intercultural experience: dress and appearance; food-shopping and dining; body language; and the interpersonal meanings and management of space and time. Though chosen non-randomly for their suggestiveness, the selected remarks, reproduced verbatim or slightly edited to assure grammaticality and clarity,³ are nonetheless fairly reflective of a much larger body of opinion voiced by a much larger population of students. Collectively they provide self-disclosed experience and judgment revealing presumptions and biases useful to know for their mediating role—useful to advisors, administrators, and instructors responsible for supporting student academic and practical adjustment as well as fostering their well-being and cultural appreciation in general; but useful also to anyone interested in the generation of Japan-focused sentiments as stimulated by first encounters with local practices.

On Dress and Appearance

In this section, students comment on Japanese fashion and current beautification practices, often raising comparisons with standards and customary behavior at home. Markers of age, gender, style, formality, conformity, and modesty are among the signifiers noted for their unexpectedness or difference.

UK, female: As for men’s fashion, I haven’t noticed such a big difference. Sometimes I am bit surprised by the girl-like bags that some boys [carry]. I don’t know whether to include the dark suits that are worn *en masse* by most Japanese men, in fashion. But they represent a big part of the population and apart from the weekends one won’t see these people wear anything else. This is a quite a big difference with Europe....

US, female: How women are dressed--I already noticed it on my first day in Japan. At the airport, I was thinking, “O my God, I am so underdressed, they must think I am a poor girl.” Clothing is everything in Japan: a sign for social status, profession and character. That’s probably why the Japanese are often referred as shopaholic, especially if cell phones are counted as an accessory of dress.

France, female: I think it started the day I arrived, because it was almost a reflex to compare France and Japan... it’s almost a game: find the differences. About girl’s clothes, the first thing I noticed is that even if the skirts are very short, girls never show their arms. The tops always have long or middle sleeves. In France, it is the contrary.

Girls show their arms but they almost [never] wear short skirts. [T]he girl who wants to wear a short skirt in France is immediately considered more like a prostitute than like a normal girl...I would like to understand why the arms are hidden, if it's to prevent the skin from getting tanned or if it is something else.

Philippines, female: I remember someone saying to me that the Japanese people don't care about clothes. Whatever you wear, as long as it's decent enough, as long as you don't go around wearing nothing, people won't care. The Japanese, he added, are not as vain as the Filipinos when it comes to dressing up. And so I came to Japan, wearing an ordinary pair of jeans, an ordinary shirt, and an ordinary pair of shoes, and I instantly felt out of place. [Downtown Fukuoka], going there for the first time, is like stepping into a fashion magazine, or something greater. People in boots, scarves, layered clothes, heavy make-up, colored hair: everyone looked the same! I wanted to laugh, as it [was] still summer that time, the temperature [was] scorching hot, and here I [was] seeing people in boots and scarves. Women, generally, have colored hair, and wear heavy make-up, matching their flashy clothes and expensive shoes/boots. And I thought it ends there. I was surprised that men are as equally vain. They all look perfect, so perfect that it seems silly. As for me, I look plain, far too plain, that I really felt out of place....

Germany, male: Clothing definitely depends on the daytime and especially the situation... Of course, some of the clothes were different from Europe, but they were more or less the same. However, [quite] remarkable were women with umbrellas to protect from the sun and sometimes with tiny fans when I arrived...in September. Unfortunately I could not see any *kimono*.

France, male: Japanese men seem quite to enjoy wearing headgear. [M]any of them wear caps, which is also widespread in western countries, but also all sorts of hats we don't often see in our countries. Japanese seem to be in a fashion with hats, which are often seen in the streets, on the head of many young men. Moreover, I also noticed that contrary to at least in France..., Japanese young men are not fond of hair gel. Even if [at] night [downtown], [when] some of them have quite excessive hair [styles], they don't seem to [use] that much hair gel to [achieve their look].

China, male: One interesting thing...current [with] Japanese clothing is that male students carry reticules (bags). The truth is, they don't think [of them as] women's-style bags. At least in my country, no males carry this kind of bag. Young males carry backpacks or handbags (for men), or carry no bag [at all]. Actually, young males in China don't often carry bags, unless they go to school. But in Japan, I was shocked: almost all the male students carry all kinds of reticules (made of leather, coarse cloth, etc.) Maybe it's the uniformity that they are learning from elementary school, so male and female students carry the same bags. As long as everybody carries reticules, it's not weird for male students [to do so].

Korea, Male: [Downtown,] contrary to my expectations, most women look alike. Most of the girls my age wore long, knit short skirts, boots, and knitted hats...I thought Japanese girls were fashion-conscious...After enough observing, however, I recognized they were following the fashion but had distinct personal style. For example, most girls wore boots but each boot was totally different. A certain girl wore strangely colorful boots. It is unimaginable to wear that kind of boot in Korea.

US, female: I ran into a [women's clothing] store...It was...pink, to say the least, and inside were a multitude of frilly

dresses, lace blouses, frilly shorts, pink coats with fur stoles around them, and an odd assortment of ridiculous accessories. The staff resembled something out of a magazine ad—they all looked exactly alike. Blonde hair, curled at the ends and twisted up into an almost sixties-style bouffant, with short skirts and frills all over the place. It seemed to be a requirement for working there, or at least the dress code, because they were alike all over, including their long, decorative fake fingernails. That was the biggest shock for me, but wandering around...a bit more, I found [much the same]. Thinking about what I saw, it seems like the more girlish and cute fashion is, the more popular it is.

Philippines, female: A stroll [downtown] was a step into Barbie World—everything revolved around hair, makeup, and clothes. The whole stretch was a giant catwalk where both men and women strut their pieces of art. Next to the Japanese, adorned in accessories, color, and trimmings, I looked like I had just gotten out of bed.

US, male: The...thing I noticed about clothing for men is that it is very homogenous. I don't want to get into the stereotype that Japan is a homogenous mix of people because living in Japan for only one month has definitely showed me otherwise. I do notice that men don't dress very colorfully. It is usually dark or light and I mean dark as in black and light as in white. The colors are usually under those two categories. Rarely do I see a bright green shirt on a Japanese person. I like blue, and I have a lot of blue shirts. Every time I would wear a blue shirt, I would notice I'm one of a few men wearing it. In America this is not the case. I see blue, green, yellow, pink, red, orange, etc. on men all the time.

Taiwan, female: On average, I think girls/women in Japan dress much [better] than those in my country. Although most people dress pretty simply, everyone possesses their own style. This is [despite] the fact that Japanese girls have a strong sense of fashion and...more or less follow the [current] vogue...Japanese girls' dressing [seeks] "simplicity." It is rare to see someone with large, floral, or gay patterns...[and] Japanese prefer plain colors. Also, dark colors are most popular.

Thailand, female: Japanese dressing style is always unique, based on the idea of keeping simple but looking elegant as they always wear suits in [dark] colors such as navy blue or black. Most of the office women wear only one or two pieces of jewelry, [usually] earrings. The interesting thing for me is Japanese hairstyle, which tends to look cute but natural, even if they have just come out of the [salon]. In Thailand, when working age women have their hair cut, they usually expect their hairstyle to look neat, so everyone will notice...they... just had their hair cut.

UK, female: For the most part, women's clothing that I have seen in public does not differ significantly from English dress. I do think however that the proportion of the people in the street who are smartly or at least tidily dressed is higher than in the UK—people at home often seem to not care about dressing scruffily, especially if they are just going to the supermarket. Another observation is that women are quite concerned about covering up against the sun, for example I have seen people wearing long gloves to cover their arms and hands while out walking, and sun visors and so on.

Sweden, male: Japanese clothing is very different from the clothing that I am used to in Sweden. I mean, maybe not different as in they have brands here that we don't have at home..., but more like how [clothes] are worn. There is a lot of group thinking here, and you see groups of similarly dressed people when you walk about in the

city. The [most obvious] example...is of course students that have to wear the same school uniform. Walking together in a group, they really stand out to me, mainly because we don't have school uniforms in Sweden.

Singapore, male: The...thing that really got me thinking was the dressing of...younger generation females. Many... tend to wear stockings and super miniskirts and even revealing clothing, and in Japanese society, these are simply treated as being fashionable. On the contrary, in many other countries, if a female were to dress as such, she would most probably be mistaken for a prostitute. [Also,] many...Japanese males...tend to wear many layers of clothes... at least two layers of clothes on at any time and no matter how hot it [gets], they would never remove the outer layer. I come from Singapore and even I sometimes feel that the weather is really hot [in Fukuoka], and I generally only wear one layer of clothing everyday; yet I keep seeing Japanese all covered up with thick clothing under the hot sun. This really got me wondering...they would rather go hot then to forsake the image that they are presenting to others.

US, female: I love to try to analyze women's fashion in Japan — it is probably the one thing that I've noticed most since I've arrived. When I got here, I thought "Wow, girls can wear ANYTHING so long as they pair it with a hot pair of shoes, a cool jacket, and either a scarf, hat, or large bag."

China, male: Women in Japan like hats, especially elder ladies. This is totally different from China. I seldom see elder ladies wearing hats in China. This may correspond to "fashion" but I guess Japanese elders enjoy more social life than Chinese, [because older] Japanese [are] still in good health, [and] physically...can do a lot of things; [also,] Japanese are rich and money lengthens their social life.

South Korea, female: I easily found people with luxury brands such as Louis Vitton and Channel on the streets in Japan. I was so surprised that possessing luxury brand products is so common in Japan, especially for young people, even though I had heard that Japan...has the biggest demand for luxury brands in the world...[M]y Japanese friend... said that young people like her...are so familiar with those brands because their parents...gave luxury bags or shoes to them to show their wealth when they were younger, [when] Japanese economic conditions [were better]. Even though economic conditions [have worsened], they still remember the luxury brands, love them, and try to get them.

US, male: One of the most striking aspects of Japanese clothing I have noticed, in terms of differences to my home culture, is that of hats. [On] Japanese television, we came across...an advertising segment for different kinds of hats. It seemed strange...In the United States, hats are only worn for very special occasions, by younger men, or for sun protection purposes. However, after spending a few days walking around the streets of Japan, this show made a lot more sense. Many women and men here of all ages here wear a variety of hats, [and] it seems to be older women that sport the largest amount of headgear.... This practice...might be indicative of the generally more publicly formal nature of Japanese attire.

US, female: I had NO idea that there was so much intricacy involved in Kimono wearing! That there are different styles for married vs. single women, different styles for the seasons, and even for ages too! Wow!

China, female: Boots, high heels, died and curled hair, skirts [are] key [elements] of Japanese fashion. Even in

the summer, Japanese girls wear [lined], fluffy boots. Compared to Chinese girls, Japanese girls are more girly looking. There are [many] more girls wearing skirts in Japan than in China. And they are more likely to present as typical females. In China, unisex style is appreciated by many girls. And I think generally speaking, Japanese girls care [about] clothing and outer appearance more than Chinese girls. Very few girls wear sports or casual clothes. Most girls wear makeup every day.

France, female: The first thing I noticed is about sleeveless t-shirts or camisoles. Indeed, I have never seen a Japanese woman wearing these and as I am used to wearing only this kind of t-shirt, I was very embarrassed. So I was asking myself why Japanese women do not want to wear them even if...the temperature is very hot [much] of the year. [A] Japanese woman [told me] she thought...it was because Japanese women are probably too [modest]. I found this...very weird because I saw a lot of Japanese women wearing very short shorts. Such different cultures...Japanese women may [freely] show their legs but they do not want to show their arms. This is the opposite in France.

South Korea, female: When I came to Japan, I was moved [to see] Japanese people wear *kimono*...[They do so] for special events such as anniversaries, birthdays, graduation, [attending] *hanabi* (fireworks), and weddings. In Korea, we have also a traditional [dress] called *hanbok*. But these days, nobody wears it, [except to a] wedding or funeral. But that is mandatory. Our costume is as beautiful as *kimono*, but it's uncomfortable. That's why nobody wears it. But... in Japan, everybody really wants to wear [*kimono*] even it is uncomfortable...to [preserve] their culture and history. I think we have to learn that kind of thinking.

Singapore, female: In a world where T-shirts have their own exclusive brands, and from a country where everyone has a staple of at least 10 of the aforementioned fashion basic if not more, it was to my astonishment that I realized that Japanese women did not, in fact, wear T-shirts as everyday apparel. From the streets, to the shopping malls, to the classroom, I observe the painful death of what I'd assumed would be an underpinning of the very invention of clothing itself, now relegated to mere sportswear and pajamas. Tall boots, knee-length skirts, and layers of long tank tops or chic shrugs seem to be the order of the day here. In my jeans, my track shoes, and of course, my T-shirts, a persistent, nagging feeling in the corner of my mind informs me of possibly having been transported back (or possibly forward) into a different era.... I might as well be wearing a sign around my neck that reads, "Foreigner."

Belgium, male: All the male people I have ever known to wear make-up were actors, singers, Goths, or Japanese... Where I come from, going to the gym for body toning is the only sacrifice made to look appealing... One of my first thoughts in Japan actually was, oh my god, the guys are so "gay" here! And prolonged stays in Japan have only strengthened that insight. Not that I have a big problem with guys spending a lot of time and money on how they look; I see it more as an effect of Japanese society... all that wealth has caused the free time industry to flourish. And, instead of preparing themselves as future workers..., young men now lose themselves in a world of going out, *pachinko*, and looking good to score with girls. Girls are being taught to dislike body hair, and as an effect, men will start getting rid of body hair to remain attractive.

Belgium, female: In my experience, the differences between Japan's and Europe's view towards male beauty is very different. When I was talking to Japanese girls about Western boys, they confirmed...that they dislike hairy men

very much. While there is a certain aversion towards too hairy men in Western countries as well, the Japanese ideal of *tsurutsuru* males is not shared by Western women. It is not considered to be very manly if you don't have hair in certain areas. On the contrary, the lacking of body hair is a sign of immaturity, associated with boyishness and therefore almost the opposite of manly. The ideal man is supposed to be manly, and grown out of his boyish features. The last thing Western women want is to play the role of the mother of their partners. Boyishness is therefore not attractive at all...I was really surprised to read that...*binan* (美男, young, handsome men)...have makeup bags..., but also that their bags contain more products than those of most girls I know, and that they were not reluctant to show them....

China, female: When I first stepped into this land, I was immediately shocked after coming across a bunch of men who wore makeup. What's astonishing is not only that Japanese men wear makeup, but that most of them make themselves up in a quite "feminine" way! One of the most [noticeable examples] is the way they trim their eyebrows, usually to a very thin and slender [line], which under the traditional criterion is almost the same as women's. Back in China, it is an obvious signal which indicates your unusual sexualorientation if a man wears makeup and looks or behaves in a feminine way. People would assume that "he is too beautiful and too soft to be straight." One of the strict [sex identity markers] is one's eyebrows. [Traditionally in] China, men's eyebrows [should] be thick and black...to differentiate themselves from women.

On Dining and Food Shopping

Students reveal the saliency of eating-related concerns during the initial weeks following their arrival in Japan through remarks, made frequently, on the experiences of shopping for food, dining at restaurants, sampling Japanese cuisine, discovering table etiquette, and the like. The exotic, the humorous, the perplexing, and the unglamorous all find representation as noteworthy.

Germany, male: The most special thing [about] JUSCO [a large shopping center/mall complex] is that they [employ] male cashiers. This is the first time I've seen male cashiers...And the other thing is that you will discover that all who are doing food promotion are females. I think that's because females feel closer when they are talking to people of the same sex. In addition, it's an interesting finding that it is always the woman who is paying at the cashier if couples or families [are shopping together]. And the man is always waiting for the woman [while] the woman is packing. I think this fulfills the role expectations of the society. [In addition,] there are discounts every day in... all Japanese supermarkets. They will start to discount fresh foods made in the morning at 7 p.m. at night and there will be discounts at 9 p.m. on food made after 4 p.m. in the day. And you would discover that everybody is waiting for the discounts and that some popular foods...soon disappear after this discount goes into effect.

Singapore, male: [T]he Japanese treat...grocery shopping as a kind of family outing or even an enjoyable activity. For families it seem[s] like a bonding session where the entire family would enjoy themselves while casually chatting and choosing the specific foods that they wanted. Whilst for the individuals, I realized that even for them, they could take up to over an hour just pushing their carts around and going through the aisles again and again as though they were enjoying themselves...I also realized that most...were at least around their thirties, thus it would seem that this 'activity' was generally confined to the upper-aged class. This 'phenomenon' seems a little different from

Singapore where most people seem to be constantly hurrying through their lives and grocery shopping is more of a laborious activity that is mandatory rather than a leisurely one.

Belgium, female: When I first went to JUSCO to do my grocery-shopping, the culture shock I experienced was not that big at all. I think it was the various [types of background] music, each annoying in its own particular way, that [caught] my attention...What I didn't notice the first time, was now almost hitting me in the face. The Japanese people tend to do their groceries in a very relaxed way. They look carefully at each item, and they don't seem to know what they want to buy, but want to get inspired by the quality and the price of the products they will find that day. Where I come from, doing the groceries is not considered to be a fun activity, for which you have to [spend a long time]. On the contrary, most...people seem eager to break their personal record and want to get to the registers as fast as possible. They know where all the products are, and only go to an aisle when they have to buy something there.

China, female: [S]ome discoveries [at the food market]: How much do they buy? Usually one or two baskets [of items]. So I think that they do shopping daily,..which is quite different from western people. What do they buy? Most...buy...food like milk or bread. I find that people here quite like tasty-looking bread, compared with Chinese people, because Japanese buy a lot!...How about the service? Excellent! Employees here are so polite, patient and hard working. If they are not able to help you, they will try to find [someone else] to help you. In China, supermarket employees usually tell you to [look for someone] else or [to just] help yourself, even when they are not busy. What else? In China, we [must bring our own] shopping bags or pay for plastic bags, while in JUSCO (maybe the whole Japan?) plastic bags are free! [Also,] in China there are always some guys who look serious [at the front doors]...of the supermarket. Their job is to prevent people from lifting goods without paying [for them]. But in JUSCO, there are no such guys. All the shoppers are regarded as [honest], or maybe there are some other reasons. Who can tell me?

Sweden, male: [F]ocus on the sounds used in shopping...Most westerners will agree that in their countries the music that is played inside stores is often either radio or "easy going" music. Soft, classical works that encourage a relaxing shopping tour. The shock then is to enter the JUSCO store and find a hectic piece of classical music...repeating in a roughly 30-second loop. With the Japanese penchant for measuring, I'm sure this choice in music is well thought out and documented, but as a foreigner it is startling to hear a background sound that leads one's thought more towards a stampede of elephants than a some mellow grocery shopping. It may be due to a wish to have the customers rush through their routines and thus for the store to have a greater circulation of people, though such a strategy seems highly improbable...[T]he voice used by female store attendants, particularly those who give out free samples... is a high-pitched nasal sound perfect for being heard over the din or talking and with drawn out vowels in the ends of words...This type of tone can also be noticed at the cashier. Ask the person there a harmless question while paying and pay attention to the way they answer your question and the way that they state the amount of money you presented and the amount of change you will receive. It is quite the difference I can assure you.

United States, female: The first time I entered a supermarket in Japan, I was both amazed and delighted to discover exactly what I expected to find - aisle after aisle of grocery items, loud packages with strange lettering, and authentic Japanese consumers. I was so intrigued, in fact, that I felt compelled to film the experience (with special attention to the deli and seafood items), blatantly revealing my foreign roots and lack of exposure to any form of Japanese life.

However, after a second trip, I realized that apart from its miniature buggies, toy store tunes and array of mysterious foods, the supermarket itself was a very unglamorous and familiar concept.

Sweden, male: [And as for eating] living sea food, I'll go as far as raw fish any day, albeit a bit reluctantly, but food that's more or less served alive? I think that's one of the things that will have to wait for some kind of "lets-do-crazy-Japanese-stuff-before-we-go-home-week" before I try it. Just the thought of trying to eat a living baby octopus makes a small shiver go down my spine.

Singapore, male: the Japanese have such a large variety of food but yet the foods are seemingly still organized in a really nice manner such that each main type of food will still have subsets and different flavors. Like for example, if we just look at *temaki*, it is a specific type of food yet it still has many different types to it, like the *ume-shiso maki*, *natto maki*, *negi-toro maki*, etc. This aspect can almost be seen in all the Japanese foods... This is such a unique thing for me as in my country and my travels, the food [is] generally not grouped like Japanese food. [F]or example, if you wanted a 'wonton noodle' it would not have that many special varieties and types...I was also fascinated at the [large] number of rules that we [should] observe while eating a meal. It was like each specific type of food [has] a special method of eating it and we actually [have] to have the skill or the knowledge to be able to eat it properly. Some examples would be that we are supposed to put the entire piece of *sushi* in our mouth and not take a bite of it and leave half of it out; or needing to know the difference between *shoyu*, *tentsuyu* and *miso* soup and not actually drinking the wrong one.

Belgium, female: Among the many features of the Japanese dining culture, there is one that I have found to be annoying sometimes, namely the custom of splitting the bill equally over the persons sitting at one table. I think it is clear that there can be big differences in the proportions that people eat, and even more in the drinks they choose to drink. It is hard to control how much money you will spend, as it depends on the drinking and eating habits of those sitting next to you. I can't seem to get the logic of paying more than you have consumed, while the Japanese don't ever seem to be bothered by this.

Philippines, male: [M]ost other cultures, I suspect, would reject raw meat and live creatures as legitimate forms of food for civilized society. How come [Japanese] don't make this distinction?...I find that there is playfulness and an open-mindedness with which the Japanese approach foreign food. I thought *ramen* was a Japanese dish and was surprised to see it [referred to as] "Chinese noodles." They've played with the concept of Pizza and ice cream, embracing the practice of innovation.

China, female: Japanese people are encouraged to slurp loudly when they eat noodles and soup, while Chinese regard [this] as an impolite way which shows that this person is poor and [too] eager for food. Besides, Chinese usually eat soup [with a] spoon while Japanese do not...The great variety of food impressed me...Actually I feel confused when I face so many kinds of soy sauce and *miso* especially when I want to buy [these].

Poland, male: I can admit now that before...my knowledge of Japanese food was quite poor. I knew about ramen, a few kinds of sushi and sashimi and something about tempura. But when I [learned] what you can actually put in a soup, on a stick (*yakitori*) or on a block of rice (*sushi*), I was truly amazed...One more thing is also worth mentioning. The Japanese people really know how to use their limited resources and know how to prepare anything that

comes out of the sea (or even lives on land—for example, salamander). And we Europeans throw away so many things! And a last word about the whole etiquette. Only in Japan must you be careful with every move that you make in a restaurant and even with how you hold the chopsticks, but at the same time you can *slurp* (I still can't get over it) and drink soup straight from the bowl! Confusing, isn't it?

Sweden, male: The dinner is something of a holistic experience where each piece is supposed to complement the other (or in the example of *sushi*, each piece is a meal in itself, hence the “rinsing” of the taste buds between each course). The use of chopsticks has also had its effects on Japanese eating. In (I would dare bet) almost every western country, drinking your soup or broth directly from the bowl is considered bad manners, while “slurping” your pasta is outright rude. But considering the length of *udon* and *soba*, combined with the inability to twirl it up like one can if one uses a fork, it is understandable that the practice of eating “loudly” came to be prevalent and cordial. There may also be an element where the loud eating shows that you think the food is so good that you forsake manners, thus paradoxically showing manners by being loud,...although this is pure speculation.

England, female: When our meals came out, they did not all come at the same time, with [my friends'] arriving a little before mine.... In England, generally every meal comes at the same time, even if you are in a big group.

Philippines, female: Traditionally, we eat using our bare hands, with one of our feet perched high on the chair (which is considered to be rude and improper in other countries). Japanese people, however, eat with *ohashi*, or chopsticks, seated neatly and trimly on the *tatami*. We eat quite noisily, the messier and noisier the better, with all the talking, gossiping, laughter and practically everything happening over dinner or almost every meal (as we...eat so many times throughout the day). Noise and babbling, on the other hand, seem rude here in Japan, especially while eating, or while in front of the food. They all seem to be prim and proper while dining, pouring *ocha* or *sake* into each other's cup, talking only ever so lightly, laughing ever so softly, and moving ever so gently. Loud babblings and inappropriate movements never EVER happen in front of a Japanese dining table, except only during *nomikais*, or drinking parties, where everyone gets too drunk to care about these rules, much less conform to these things.

Germany, female: At home it is not allowed to lift the soup plate or to make loud sounds while eating the noodles and drinking the soup. In Japan it seems to be normal make sounds and especially when it is very delicious. While I was watching [at a noodle shop] I had the feeling that they eat their soups very fast. And they always drink tea or water. I hardly see any Japanese drink anything else. When drinking it also seems so be allowed to make sounds. Some of them seem to love their drink so much that at every gulp they make happy sounds like ‘mmh’.

England, female: One of the nicest things I've found so far about eating in Japan is the free water—in England, if you ask for water, you are generally given bottled mineral water that you have to pay for, and if you ask for tap water, you are generally made to feel guilty and mean about it.

France, male: At a *yatai*, the customers sit down on a bench, [facing] the cook (very often a man), and ask him for dishes. Except when the customer [first] comes in, and the cook welcomes her/him with a “*Irasshaimassei*,” and waits for the order, he will never again ask you what you want. You will have to ask directly and by yourself, even if it often means you will have to disturb the cook while he is doing something else. Finally when you have had

enough, just ask for “*o kaikei*” and pay the bill in cash, you won’t receive any bill or note. [Once] an older customer began speaking with me; he was roughly in his forties or fifties, looking like a high-ranking salary man. The man [invited] me to take food from the dishes he had ordered for himself. I was a little bit embarrassed and did not know exactly what to do. So I [took] food off his plate just once, [though] waiting [to be asked] to do it again. He also offered me beer and [filled] my glass every time it was empty, never letting me...do so by myself. At the end of the dinner, he paid...for me, even though I tried to make him understand that I wanted to pay my [own] note. But my Japanese skills are not so good, and [by] the time I gathered the [right] words in my head, the bill was paid. I was quite embarrassed and did not know how to take it: do I owe him something? Did [this meal] establish a kind of debt relationship, as if he would be “hierarchically” ahead?

United States, female: When I walked into the small restaurant, it was like entering another world. It was simply furnished, [with] six dark brown, low[-set] tables surrounded by dark blue pillows and plain walls. No furniture or sound attracted my attention; everything was held in simplicity. Although it was crowded and narrow, there was a silence inside, by which I was strongly impressed. Suddenly I felt a little bit uncomfortable. I was worrying about making mistakes and disturbing the other guests...

Poland, female: In the *ramen* shop I was quite shocked when we entered to hear all the shouting staff, including the chefs (as the place had an open kitchen). [It] was noisy,...mostly caused by the staff yelling “thank you” and “welcome” and some other phrases that I didn’t understand. However, they seemed like robots without any emotion when they were doing that, so it didn’t make me feel any more welcomed as if they didn’t say anything [at all]. I guess this place is not very suitable for couples wanting to enjoy a romantic dinner, which would also explain the speed of people eating there. Some people who arrived after us...finished and left before we put down our chopsticks.

Taiwan, female: It is quite interesting to observe the way people eat *ramen*, even though *ramen* is Chinese noodles and the way of eating should not be so different from Japanese and me. The first thing I notice is that Japanese... drink beer, sake, or other kind of alcohol when they eat *ramen*, even in the daytime. I understand this might result from some long-established habits; nonetheless it is still unusual for me to see the alcohol accompanying Chinese noodles. Next you will find some annoying noises coming from people’s slurping. In my country, we are trained not to make sounds [as much as possible] when having a meal. Slurping might cause you to be considered impolite and vulgar in Taiwan, while in Japan slurping is totally acceptable... When they are about to finish the meal, they would pick up the bowl and drain the soup without [using] a spoon...is that people sometimes order rice or “*gyouza*” (dumpling) as “side dishes.” This is odd to me because noodles, rice, or *gyouza* all are main foods in my country—it should be enough to order [just] one of them as your meal.

Belgium, female: It is very difficult to keep the eating rules in mind when you are in a restaurant in Japan, because you learn from your mother what to do while eating and compared to Japan the eating rules in my country are very different. For example in Japan you cannot blow your nose when you are at the table, but in my country it isn’t considered impolite to do that. When I was with my home stay family and set the table, the plates had to be in a certain arrangement, which I did not know. After finishing my dinner all the plates from my family were in the same order as they were in the beginning. Also when you get plain white rice in a bowl you cannot put sauce on it because it has to stay white. That is what they told me, but I don’t know the reason why it has to stay white. I think this is

strange, because the rice is so dry without any sauce. But you have to put the sauce on a separate plate.

Hong Kong, male: I had lunch with a [Japanese student in the student canteen]. We chatted about my life in Japan and finished our lunch [rather quickly]. After that, we picked everything up and returned [dishes] to the counter [and trash to the garbage cans]. To be honest, I was a little bit surprised at first that every Japanese student would [do this unflinchingly]...not breaking the rule. In Hong Kong, we would just finish our meal and leave the [dishes and] trash on the table, waiting for [a cafeteria] worker to pick up [after us]. I've never see even one student in my own university pick up his/her dishes and trash after meal.

On Body Language, Including Bowing

Students below voice sentiments on a variety of topics related to facial and body expression which have given them pause. Home country experience and customary behavior again serves as comparative backdrop for observations on hand and finger gesticulation, hitting, head movement, bowing, and more.

Germany, male: What I observed about Japanese is that they like to smile when they don't know how to answer your question or how to solve a problem, or maybe when they don't want to answer a question. They won't [say] anything, but instead they give you a smile. And you will never get what they want to express to you.

South Korea, female: If I want to say "I don't...," "I am not...," or "no..." in Japanese, I raise my hand in front of my face [palm outwards, fingers straightened] and wave it back and forth. It's really funny because in Korea this gesture means [something] "smells bad."

Sweden, male: One thing I have noticed...is the use of nodding as a signifier that something is understood. The same seems to be the case when something is agreed upon. When something is understood or agreed upon, often... the Japanese say "So...So...So..." and nod once for each "so," or even more. This of course ends up in a lot of nodding. This might be seen as a gesture that is the same in most countries...but what I would like to point out is the number of nods given. If I were to nod at understanding something, I would probably nod once perhaps twice whereas what I would refer to as the standard "so-so-so" comes with at least three nods. You will definitely see a difference in speed if you look at it. Another, perhaps more obvious, gesture is the scratching of the back [of the head]. This generally occurs when the person is faced with something he or she cannot answer or [agree to and] that comes with some inconvenience. The...gesture as such more or less conveys a feeling of inconvenience or unease. Before I came to Japan I would have interpreted the gesture as an [indecisive] "hmmm."

Singapore, male: Tilting one's head slightly away from the speaker while covering one's mouth with one's hand and raising the other hand towards the speaker and limply wave it around. It's hard to describe but my...Japanese teacher does it a lot whenever she laughs hard in class. It's as if she's saying "oh, that's too much, I can't help but laugh."

United States, female: I have noticed that Japanese cross their hands or arms into an "X" to express *damei* [indicated "bad" or "wrong" or "not permitted or possible"]—[to foreigners and] even to other native speakers. When

I first arrived here, I thought this was an unusually strong gesture for the Japanese. [Also]...girls seem to gesture more obviously than boys—particularly if there are boys around them. Often girls convey surprise—they will cover their mouths, draw back their shoulders, put a hand over their chest, and/or open their eyes exaggeratedly wide. Girls also typically express more excitement than boys—with clapping, mild hopping, and giggling.

Hong Kong, female: One personal experience of mine is buying snacks in a small stall...As I am not too good with speaking Japanese, I use hand symbols to indicate the number of pieces I want. When counting with only one hand in Hong Kong, the number six is indicated by the same symbol as “phone call,” holding up only the thumb and the little finger while [tucking] in the others [against the palm]...[When] I have used the symbol for number six,...however, the sales [assistant] seems to have no idea [at all] what this gesture means; that was when I finally recognize that the counting symbols which I have internalized so well [are]...not universal.

China, female: Japanese are always smiling owing to politeness and when they are really happy, they will open [their] eyes widely and sometimes [also their] mouth. Some...gesture with hands and arms, [though] seldom with feet. Usually there are no hip or waist [movements]. When Japanese are angry, they will [stay] silent and [keep] their body still...Japanese used hands when they are talking. And I saw that between lovers there were some intimate touching. On the [street], girls do not hold hands....[This] is quite different from China. My [Japanese friend] said that she never holds hands with her mother, and girls only hold hands [while] in elementary school... In China, it is [normal] for girls even in high school [to hold] hands to convey and reinforce their [closeness]. Another reason is practical—there are too many people in China; if you do not hold hands with your friends in the street, maybe [in the] next second you [may lose] and have to [look for] them in a sea of people.

South Korea, female: I realized that people scratch their heads when they seem to be in trouble finding things or answers. I was surprised because I noticed it many times in such a short time...One common thing was that [it was always] guys—I never saw girls do it. [I saw] that it seemed OK to [tap or slap someone’s] head as punishment. In Korea, hitting one’s head is considered humiliating, even if it’s [just] joking. However, I saw my home-stay father do it to his children and I was quite surprised. At lunch, he [slapped] one kid’s head for starting eating [before others]. At dinner, he spanked one on the head for the same reason. [My] friends...said they’ve seen the same... [Later] I was talking with one of my Japanese friends. We were making fun of each other, making jokes and when he got embarrassed, he slapped my head just like my home-stay father did. If I didn’t [know this habit of] hitting heads, I would’ve been so surprised and [felt bad] but because I [did], I was alright.

England, female: When you see people in the streets having a conversation they tend to be quite reserved with their hand gestures. Comparing this to home, where people are often emphasizing what they are saying with their hands, it seems to me that these people are showing lack of interest, but rather it is just their way. They often just stand with their hands down by their sides.

France, male: Nodding. This could be seen as an attenuated form of bowing, involving only the head, but in fact it is used much more often, as when talking. It is common in Japanese, when your interlocutor is speaking, to show signs of your agreement or your comprehension with little words or proto-words like “hai,” “uun,” “mmh,” and expressions like “sou desu ne” or “sou desu ka,” often coming with a little nod. Funny detail: this can also be seen when a Japanese is speaking on his or her mobile phone, even though [the other person cannot be seen]! It is so

embedded that it becomes a communication tool at the same level as language.

Germany, female: In the elementary school where we were, I could see something that is really facetious behavior for me. To [communicate to] another girl that you can see her underpants, the children clapped their hands once (“*pan*”), showed the [V-fingered] “peace” sign (“*tsu*”), and after that the sign for “*maru*” [meaning “zero” or “o”, the objective case marker], and then they [cupped] their hand above the eyes for “*mieru*” [to see].

Taiwan, female: Like Taiwanese, many Japanese women cover their mouths while laughing. By doing this you make yourself more elegant, and at the same time, you wouldn’t laugh so loud. However, I find Japanese women not only cover their mouth but sometimes even cover their nose and lower their heads to prevent their face [form] being seen. Another interesting gesture is that, when Japanese want to indicate themselves, they would point at [their] own nose...Usually in Taiwan we don’t do that. It [is] a gesture exclusively used by children.

Belgium, female: The first thing I noticed the Japanese people do is that when they talk about themselves they point with their finger to their nose, while I would point to my heart or chest. Another gesture is when Japanese beckon people, they use the hand with the palm down and they wave their [fingers] from the outside to the inside. For us western people it means “go away”, because we [instead] use our hand with the palm up and wave it from the outside to the inside. So the first time somebody did that with me I didn’t know what to do and just stayed where I was... Japanese people, when they are with their friends, don’t look really close [at each other] and don’t hold each other’s hands or walk arm-in-arm. Also...you can show your attentiveness and concentration by closing your eyes and nodding your head up and down, but in western countries that would mean you are not interested.

England, female: To my surprise, paper-scissors-stone is widely used here (e.g., by children to make a decision), although it’s called *jan-ken-pon*, and the way it’s played is slightly different from what I am used to. I’ve noticed that on television, gestures are quite exaggerated, (e.g., people seeming to actually fall over in surprise)... Gestures seem to be a preferred way to show emotion, without necessarily saying anything aloud. Meanwhile, in real life, people generally seem to keep their hands and legs near to their body; they do not wave their hands about or stick their legs out when they are sitting on a chair. I think I need to try harder to follow the Japanese example in this, as I gesture a lot when I talk, drawing shapes in the air and so on, and the Japanese must think I am very uncontrolled.

Philippines, female: Japanese do not really use their hands much when talking. I must say that they aren’t very lively story-tellers actually. I would assume that they would think of foreigners as [very] animated, *genki* —with all the facial expressions and grand hand movements even when telling the simplest stories. When thinking, Japanese [often will] turn [their] head sideways, furrow their eyebrows, and breathe a little heavily, plus put one hand on their hip, and the other near their face. I notice this “routine” so many times here that I clearly observed this pattern. The smallest problems, or the littlest bit of detail, with Japanese doing the things mentioned above, would seem the biggest and most complicated things to be solved. It is funny, but at least doing this would show that they are indeed concerned with the problem, and that they are thinking so hard to solve it one way or another... [Differences] even through these littlest details of gesturing show that the Japanese have indeed a very different culture from all the others in the world. Clearly, Japan IS the twilight zone for me.

Hong Kong, male: When making an apology or asking someone for help, the Japanese people will join their two palms together in front of their faces and say “*gomen*” or “*onégai*.” In more serious or formal [situations], people will bow to express their apology or gratitude. This is different from in Hong Kong, as there is no gesture when saying thanks. Also, when we say “no” to someone else, in Hong Kong we will put our hand, palm forward, in front of us [and gesture] as if [pushing] something away, while in Japan [for this], people usually cross their arms in front of them.

Belgium, male: I have to point out what a [Japanese friend] said a few weeks ago. If he explains something to a foreigner, he always uses arm and hand gestures, while if he talks to a Japanese person, he will not do that. In Belgium we have a lot of gestures. A funny example is that if you show your pinky finger, it means [when ordering drinks] “one beer,” and you can only use it in a bar. On the other hand, in Japan it means “girlfriend.”

United States, male: Postures also vary quite a bit between Japan and the United States. In a business situation in the United States, such as a personal introduction or a...briefing, it is extremely important for one to maintain eye contact with superiors, remain upright with shoulders square, and at least seem confident. These behaviors help establish one as straightforward, honest, and capable. In Japan, people seem to try to make themselves smaller in the presence of a superior or a customer, and shrink even more when [making] an apology. A western-style boldness of posture would likely be seen as haughty in the Japanese business realm.

Hong Kong, female: One thing that I'd realized since I got to Japan was the fact that Japanese people don't tend to have a lot of facial expressions when they talk, and I imagine it'd be terribly hard to for a foreigner who doesn't understand Japanese to make out what a Japanese person is trying to say or express. Perhaps it is a form of displaying social maturity?

Sweden, male: One common thing is that in Japan it is important to nod your head as you listen to someone in order to confirm that you're [in fact] listening and, foremost, understand him or her. This might be a common feature to... Sweden as well; however, in Japan eye contact is not sought to the same extent, which makes the whole nodding part a little bit of a different experience here.

United States, female: Coming to Japan, one of the first things that struck me was the silence. This seemed odd considering the fact that we live in a city, people here obviously are communicating constantly, and there is always the ambient background music. However, in addition to the softer speaking voices that seem to prevail in the public sphere, it came to me after a while that the silence that was bothering me was that of gestures. People here tend to use more subtle ways of physical communication, although as someone who does not speak the language well, gestures can turn out to convey a lot.

South Korea, female: when I saw a Japanese comedian hit the back of a guest's head on a popular TV program and then the guest smiled still, I was really embarrassed. In Korea, striking on the back of someone's head is very rude...and it is common to become angry after it happens, so I couldn't understand why it is okay in Japan. It is enough to drive someone crazy in Korean society. Later, I heard this...is a sign of familiarity in Japan.

England, male: The way Japanese stand and walk compared to people in England is quite different. In Japan when

you walk past somebody they tend to look away from you and keep their heads down. They definitely try not to make eye contact. In England when people, particularly men, cross paths, they keep their heads up high and stand up tall. In a way it is a display of masculinity; if one man looks down or away he might be seen as weaker than the other, or intimidated by him. But maybe in Japan not making eye contact is a way of showing that you respect others and a way of telling people that you are not going to invade their personal space. In the west someone who does not make eye contact might be seen as distrustful.

South Korea, female: When one Japanese man [concluded] a phone call, he said good-bye and bowed to his mobile phone. Without [actually] facing him, he bowed to the [person with whom he was talking]. I'm very surprised at that behavior.

United States, male: In any given day in Japan, I must see people bow at least a dozen times. This is quite different from the US and makes me feel a little uncomfortable. However, for the most part I have noticed that the people that bow are salesman or some sort of employee at whatever establishment I am at/near.... I have seen other, off-the-clock people bow as well, though decidedly less often.

Sweden, male: The bowing occurs a bit less frequently, however more naturally, than I had expected before coming to Japan. Further, when you see bowing, it is normally a very slight bow. Normally when coming to school or the laboratory I do not see many, if any, people bowing deeply when saying "good morning." The most common times when people bow are those involved in public service or when someone is apologizing for something. It is interesting to see that when you go to a store or a hotel there are one or more employees with the only task of greeting customers or guests by bowing. I can understand this has roots in old traditions and you feel honoured, but it must be tiresome for the employees performing these tasks. I would not find it less welcoming without this greeting, however maybe a little bit less Japanese. On the other side I feel it is natural to bow slightly when making new acquaintances here in Japan regardless of [whether] the person is superior or inferior to you. This might be a substitute for the normal handshake for me. It also feels more natural to bow to someone that helps you with something. So summing it up I might bow more than I see others do. Maybe I do not see it clearly since I imagined the bowing to occur more often and more deeply than I, now that I am [here], find it actually does.

South Korea, female: Coming from a country where bowing is very natural and habitual, I [have] felt Japanese young people don't bow as often as Koreans do. In Korea, one or two year's difference in age between two persons is important in relationships until you...become intimate. For instance, being the youngest among Koreans in [the] JTW program, I bowed [slightly]...to everyone else at first. Now ...I found out that one or two year's difference isn't that important in Japan, and that young people don't bow as often. I wonder if this is a part of [the] changing culture among young Japanese...or [a] cultural difference between Korea and Japan. [Regarding] waiters and waitresses... [t]heir 90-degree bow makes me uncomfortable.

France, male: Even though bowing is an important characteristic of Japanese culture, I cannot say I have seen so many people bowing so far except from store or hotel employees who are lightly bowing while saying "*irrashaimase*," which I find embarrassing because I never know how to react, and I would feel too bad ignoring them, so I just smile...I do not have many occasion to bow in my daily life, either, although I sometimes feel like it might be appropriate, but I really do not know so I end up not bowing and when I am sure I have an occasion I still

hesitate and end up strongly nodding. I would feel really stupid bowing--it would be like if I were just [dumbly] imitating them because I do not really "mean" the bow.

United States, female: I have been paying attention to bowing since I arrived in Japan, mostly because I find it a bit embarrassing, at least when I am the recipient of it. Because I come from a culture where bowing is literally only seen in movies, I find it quite difficult to accept someone bowing to me and putting me in a position of reverence. It just makes me feel awkward, and I'm not sure I will ever get used to it. In fact, I almost always try to bow back, or at least incline my head in return, even though I know it's not supposed to work like that (in the retail world, anyway.)

Poland, female: Bowing is an important part of Japanese culture and looks like it won't disappear like some other traditional features of Japanese life. I first experienced bowing in my judo classes when we were greeting our sensei on the beginning and end of the classes. It really makes one feel different then just saying hello or thank you. However, still it seems to me a little bit cold not even shaking the hands on the point of meeting but I guess it is just a matter of getting used to.

China, male: Japanese don't bow a [much] as I imagined. Bowing only occurs on some occasions. On the right occasions to bow, they will bow a lot. And on many occasions, people just bend slightly. When I went to [visit] my host family, there was no bowing. We only bowed to each other when we said goodbye. I think that Japanese...will bow according to how you bow. They will return your slight bow with a slight bow, and if you bow deeply, they will do so. When I said thank you and goodbye to my host family, I bowed slightly to them. And they bowed slightly to me. Young people seldom bow to each other. Even at the first time they see each other. The Japanese style of greeting is not often used by young people. But if one [should bow] to the other, probably the other will bow, too.

South Korea, male: Bowing culture in Japan is pretty similar to what we have in Korea. If we meet someone for the first time, we normally bow to each other rather than shake hands.... [W]e have...been trained in bowing and even the employees of Korean companies are taught to bow in [the] proper way. The bowing culture in Japan seems, however, somewhat more strict than...in Korea. I...often see many Japanese who keep bowing when they introduced themselves to someone whom they haven't met before. They usually bow 2-3 times when they say the short sentence "*hajime mashite, dozo yoroshiku onegaishimasu,*" which is slightly different from Koreans, who usually bow only once when they start the conversation.

England, male: Now I know that there are many different ways to bow and that this depends on situation and social status...One thing that I have noticed is that supermarket workers bow when they leave or enter the back room or store room of the shop. I don't know why they do, but it is interesting nonetheless. In less formal situations, like when friends greet one another, the bow is much quicker and not as deep; it is almost a nod of the head. In England I always nod my head at people or sometimes wink at them, so I feel at home with this practice...When a professor walks past a Japanese student, the student stops walking and bows very deeply to show respect. The professor usually does not stop and gives only a slight nod of acknowledgement. At home I am only slightly more polite to my teachers than I am to my friends, so this is something I need to get used to.

United States, female: I guess for some people the standard of bowing in everyday life is not strange, because it is a part of their own culture as well, but for me, this ritual of constant bowing is quite different. In America, people don't really bow to anyone else, at all. Coming from that, to a culture where bowing is a must in almost any human interaction takes a lot of getting used to. It does, however, really open my eyes to certain aspects of social exchanges. From friends seeing each other after a long while, to the salespeople in the stores, there are so many different ways to bow...I think one of the cutest and funniest things about this bowing ritual is something I've seen multiple times...on the bus. The bus will pull up to a stop where there are [two] old ladies standing [and] together talking. One...will have to get onto the bus, and so they say their quick goodbyes; then the one lady gets on the bus ...gets her ticket, [and] turns back to her friend, and bows to say goodbye... and then her friend bows back to acknowledge the other bow. Then, the lady on the bus reciprocates again by bowing back, and so on and so forth, until the bus is far enough away [when] neither lady can see each other any [longer]. It is so strange to sit back and watch this happening, and every time I just ask myself whether it will ever end....

Singapore, female: Before coming to Japan, it had never occurred to me that there were so many intricacies with the how and why and way of bowing. On some unconscious level, I knew that the deeper the bow, the more polite, but that was about it. Since coming to Japan, I realize that I've been bowing just about 45 degrees to everyone as an automatic gesture of greeting and in a spirit of vague apology (since most of the time, I can't really grasp the rapid flow of Japanese coming my way). I've gotten every reaction, from studied indifference to outright alarm and effusive apologizing in return...Many young people...seem to be assuming a far more casual attitude towards bowing. I rarely see young women bowing, and I see young men bowing even less, with perhaps the exception of a particularly enthusiastic employee....

Germany, male: Although I knew about Japanese greeting rituals before I came here, I was quite surprised how important a part of daily life bowing still is. In fact, I think the Japanese do bow more often than the Germans shake hands, which is to say, quite a lot. They bow when they greet, when they thank, when they seek forgiveness, when they say farewell, and on many more particular occasions. I can hardly imagine a more multifunctional gesture. For me, this is the second time in my life that I have to learn an entirely new set of salutations (the first time being military service)...

China, male: It is always difficult for foreigners to figure out how to bow. One thing is clear—that it's unnecessary to bow when you communicate with young Japanese people. (It seems that Japanese are facing the problem of losing tradition, too.) However, on [certain] occasions bowing is necessary and important...Once I saw [my host family mother] bow to her son's teacher seven times. Actually, they were both bowing to each other and neither of them wanted to stop before the other, so they just kept bowing to each other. I'd never seen people bowing to each other in this way. It might be really exhausting to be Japanese. But it's a good way to prevent people from [developing] arthritis.

On Meanings and Management of Space and Time

How Japanese occupy and organize, and thereby manipulate, the dimensions of space and time—hence much of their social and material life—is, not surprisingly, a stimulus to active student discussion,

too, for the many contrasts with culture-at-home they encounter. Rules specifying the contours of orderliness—boundaries, proximity, access, privacy, intimacy, scheduling, visibility, tempo, punctuality, synchrony, and much more—render every place and moment a complex ecology of signs that, in their difference, disorient, sometimes estrange, and intrigue.

United States, female: Personal space is quite strange in Japan—that is, it tends to contradict itself. People...tend to avoid moments where hugging and personal hugging is involved (movement in the intimate zone), but they accept touching and bumping in this area when it involves a heavily crowded bus or train. It is interesting because this goes against common logic. [My Japanese friend and I] recently...were strolling around the Yahoo! Dome when we spotted, of course, Kentucky Fried Chicken's Colonel Sanders in a Santa Claus suit. I [had] told my parents about the phenomenon of KFC for Christmas, and I wanted to take a picture with the figure. It was mid-day, and there weren't many customers lingering around, but the employees inside the store could see me, and I was overly conscious of their presence. Eventually, my [friend] convinced me to take the picture, but only after several patrons had entered the restaurant and distracted the workers. I thought it was strange that she was less concerned about their opinions than I was. [B]ut it is still strange to me that I would be more anxious about the way that people were seeing me than she would be. Of course, as a foreigner, I feel as though I am scrutinized more closely, but I was a bit shocked at my friend's attitude, because she said she'd take the picture even if people were standing all over the place.

Philippines, female: I just met my conversation partner a couple of weeks ago. I was quite intimidated by her the first time I met her. I really felt the distance between us. But on our next meeting, I was quite surprised when she asked me to come to her house. As I have read, Japanese people rarely invite someone to their homes, much less invite someone they barely know.

China, male: Japanese don't like to be too close to each other. They try their best to be polite, in order to create a good atmosphere for themselves, but the main reason is that they are conveying the signals that they prefer to maintain distance from each other.

Taiwan, female: because Japanese don't pour out what they are thinking or how they feel to you, the gap between "*tatema*" [public behavior] and "*honne*" [private thoughts and feelings] makes it hard to get close with them and [so] Japanese are considered insincere. Similarly, although...Japanese rarely invite friends to their [home] because houses are too small...for entertainment, the desire to keep "*ma*" [intervals] between people is another important reason. I [always] heard that it might take years (especially for a foreigner like us) to become really close with Japanese.

Sweden, male: As far as I've noticed, Japanese generally seems to be reluctant to sit down next to any foreign males [on the bus or train]. A friend of mine who also noticed the reluctance to sit down next to other people actually had a Japanese guy sit next to him once...[but] as soon as another seat was empty, the guy literally dashed towards it. I don't know if that could still be considered observing personal space or if that should rather be called [something else]... Sitting next to foreign girls seems to be okay, though...Japanese people seem to have less of a problem with sitting next to Japanese people, but even so a lot of people will prefer to stand, even when a seat is totally free.

Whether this is because they want to leave the seats open for people who they perceive need them more or if they don't want to risk someone sitting down next to them, I can't really tell. Generally it's safe to claim that there is a lot more standing in Japan than in Sweden.

China, male: Generally, Japanese pay attention to the personal space, while in China, due to the huge population, personal space does not matter. Of course this differs in the center of large city like Shanghai, it is impossible to keep distance from other people and the situation is totally different at the bank because nobody wants others to know about his [financial circumstances]. In Hong Kong, things are better, maybe because the general education level is higher. But HK still has a large population, so during the rush hour it is also terrible. In Japan, well, things are quite different. Japanese people prefer to [keep] a certain distance, for their own good and also not to [disturb] other people. For example, people in a queue always keep a distance from each other, and no one will jump the queue. While in china, the queue in most cases is quite crowded and jumping the queue is not that rare. If you walk on the [street] in Japan and someone is...cleaning [the sidewalk], he will stop even you still have five meters [to pass through where he is working]...Japanese [also] are careful about their [loudness]. They will try to [contain] their voice only within their own [immediate] space and they will cover their mouth and limit the direction the voice goes. That is also to respect other people's space. [Regarding behavior on public buses,] the biggest difference between Japanese...and Chinese...is [in speaking] volume. [Buses] in Japan are really quiet; sometimes only the sound of motor [can be heard]. If someone is talking loudly, [it's] probably a foreigner. [I've had] to get use to that. In China, buses are not only [for] transportation but also [serve as] chatting rooms.

United States, female: I've noticed that the Japanese are surprisingly both distant *and* close with regards to personal space. I find both forms of "space" standards different from those in the U.S., where the same amount of distance is kept in almost all situations (excluding those that are intimate). [At the] supermarket, ...shopping mall, and on public transport buses,...the Japanese are both physically and communicatively distant with strangers—they seem to prefer to leave at least five feet or so of physical space between themselves and others, if it's possible to do so; if that is not an option, say within a crowded area, then they will go so far as to actually bump hips or slide shoulders with someone often acknowledging neither the "accidental" connection nor the other person. (In the States, it is rude to touch a stranger in any way without offering a small apology.) On the other hand, ...when I speak to a Japanese stranger (e.g., asking for help), he or she will usually move quite close to my face when speaking—something with which I am neither familiar nor comfortable (it is simply not done in the U.S.)! Although many of my Japanese friends speak close to me, I am surprised to find strangers do the same.

Singapore, male: [When I was out observing,] it was really curious that many Japanese couples did not seem to show affection towards their counterparts when they were just walking or standing around. [I]t was actually a rare occurrence that I happened to see any even holding hands. Initially I felt that it was maybe because these couples were not really couples yet but just on dates, but after a little more 'in-depth' observation, I realized that these couples would actually get closer to each other when they were seated down (for dinner) or even playing a game in the arcade etc. ...[Maybe specific activities give these couples...an "official" reason to be closer to each other in a society where they [are] expected to not be too close together in terms of space.

France, male: I noticed something quite radically different here from France—[public behavior] of couples, and more specifically young couples. The astonishing thing is that [although] I have been many times in public areas

such as [campus], of course, but also department stores and [downtown], I seldom can identify couples. That is because they behave radically differently than we are used to doing in western countries. It is said...that traditionally the wife had to walk several meters behind the husband, but this custom can hardly be seen nowadays. However, there are still some leftovers: in Japan, couples do not usually embrace or kiss passionately in public as they [do] in western countries. They look like [they want to keep their distance as long as they can be seen by other people. In France it is common to see young couples on a bench or on the grass cuddling each other...Here sometimes one can detect hand contact but rarely more. I think this is rather a public behavior, and does not indicate a real distance or "*hedatari*" between the man and the woman.

South Korea, female: As I got on a subway in Fukuoka, I discovered many Japanese people usually fold their own newspaper into 4 parts when they read it on a subway or a bus not to bother others who sit side-by-side. Also, I found that Japanese people seem to turn down their voices while they talk to each other in a bus or eat dinner with family members in a restaurant. The most remarkable thing is that many Japanese people do not raise their voices [when using] cell phones in public places. They just use them to send text messages and to watch TV. Although they will call on the phone, their voices are not loud. I think not to distract others [from their] concerns is regarded as the most significant feature in Japanese culture. Thus, they seem to respect other people's rights and personal spaces in a public place.

Belgium, female: [My homestay family] lived outside of the city, so...in a house and not in a small apartment like a lot of families in the cities. This house is, according to some people, big, but for me it was small because my own house is much bigger and has more [yard] space for a garden. The house [here] is surrounded by lots of houses. When I went outside to the back garden, [just five meters further]...was another house; and when I went...in front, there was only a very small street between the house and another. And on the left and right sides of the house there were houses...also very close. So at night when I was sleeping sometimes I could...hear every conversation the neighbors were having...I think the positioning of the houses is very strange...In my country...I think we have much more privacy than in Japan, because the houses are positioned further away. I never hear the conversations of my neighbors. So why are houses [here] so close to each other?

France, female: Concerning the way of using spaces, Japan and France are quite different. Coming to Fukuoka, it was the first time in my life seeing so [many] big buildings on one street... I was looking around me all the time... trying to figure out [the size of the] buildings until my neck started to hurt. It is kind of amazing to find so many people and buildings in one small space. Because the space available in France is twice the space available in Japan, but the Japanese population is twice the French population...The houses are also different, the way to [dispose of] garbage, etc...In France there is a lot of wasting of space. In Japan, every single centimeter is used, even in a garbage bag. Escalators are also amazing, people always place themselves on the left side to leave some space for people in a hurry on the right.

South Korea, male: [At a *ramen* restaurant, where people eat in individual booths]. When I went to this restaurant with my Japanese friends, they told me that you have to "talk" with *ramen*. [At] first, I couldn't understand this, but after [entering] the restaurant, I understood the meaning...[It] looked like a library study hall. In Korea, I have never seen this type of restaurant...In Korea, nobody wants to eat meals alone; we try to find people [with whom] to eat meals together. If someone eats lunch alone, most people think that he is a lonely person. For this reason,

most Korean restaurants have [tables with seats for] four people or over. Why do Japanese have this weird seating? [T]wo main reasons. First, Japanese do not [find] great meaning eating meals with many people... Second, they made this system for...efficiency of space. Through this seating system, [a restaurant] can [serve] more people and get more money.

Philippines, female: Being a *gaijin* [foreigner] in Japan caused me to be self-conscious to an extreme level. The words, “You are being observed” remains imprinted in my mind. Bus rides in Japan completely stunned me with [their] peaceful aura; passengers on the bus were completely silent as they got on and off the vehicle. I was reminded of the situation back home; buses and jeepneys did not offer the same silence at all. It’s not that Filipinos aren’t self-disciplined; we just follow different cultural conventions. While riding the bus in Japan, I always make it a point to lower my voice when I speak or to be on the safer side, not say a word at all.

Germany, female: That the preservation of personal space is very important in Japan probably cannot be seen at first view. But it becomes clear, when you think about all the peculiarities of the Japanese. Japanese bow [their] head instead of shaking hands [in salutations,] to keep each other in an appropriate distance. They also do not [make] small talk with utter strangers in restaurants or trains, like it is common in some areas in Germany. Moreover Japanese generally do not gaze at strangers [overtly], even if someone’s behavior is inappropriate. By the way, I also do not think that are many cases of [bottlenecks and slowdowns due to] rubberneckers in Japan. But rubbernecking is a frequent phenomenon in Germany and causes traffic jams or accidents on highways.

Germany, male: Scale. Every morning I enter my tiny bathroom and think, why am I so big? In this case I am partly wrong, because the right question is: Why is everything so small? Things in Japan are indeed smaller than I expected. It starts every morning. I enter my bathroom, enter the overcrowded bus to University with its small seats, and [see] the small cars with extra-small engines...One remarkable thing, I think, is the structure of shopping malls, especially supermarkets. In JUSCO, for example, there is no separation between the departments; you [can] move smoothly [from one] to another one, but you cannot pay [for] your cosmetics in the liquor section, for example. Of course, [sales] clerks get nervous if you try to do that. With regard to shop structure I also noticed differences in security matters. In Europe supermarkets in a mall are usually separated by fences or walls; you cannot leave a shop without passing a cashier and sometimes security guards. In JUSCO you can even get things “behind” the cashier and nobody stands in front of the exit to look if you have paid or not—you just walk out with your bags and “JUSCO stickers” on bigger things. If you go [there] very often and you know people shopping there..., the social consequences of shoplifting would be devastating.

France, male: I don’t know why but it seems that there is not a well-thought-out town planning [approach] in Fukuoka. All buildings seem to grow according to [immediate] needs, one following another, without take the coherence of global architecture into consideration. In my opinion, it makes Fukuoka ugly and charmless, as all [such] cities which want to grow too fast.

South Korea, female: Koreans are usually noted to have faster tempo and rhythm and I tend to move especially rapidly at most instances. Tolerating the slow pace of Japan is a bit hard.

South Korea, male: A few decades ago, when Korea had not become “cultured” yet, we Koreans were often

denounced by westerners for not being punctual. The notorious “Korean time” was pointed out as one of the worst customs; [it] prevented us from becoming a developed country and thus was considered as a problem that had to be overcome eventually. In comparison...Japan is the country of punctual, efficient individualism...different from unpunctual and definitely relationship-oriented Koreans.

France, female: when I speak with Japanese people, I noticed that they do not end a conversation until it comes to a natural end. Sometimes, they have to go to class or somewhere else, but they just wait for me to end what I was saying.

Sweden, male: American music (Western music in general) is harmonic which means that several notes are played at the same time, and all together create a harmony. On the other hand, Japanese style music is tonal, which means that you play one note at a time. Moreover, Japanese traditional music is usually slow, and sometimes in order to reinforce the “power” of each note, a long period can separate them. The process of taking a decision (for example a business decision) can be related to this. As it is said, the Japanese process of reaching consensus requires much more time than decision-making in America: like in music, Japanese take a long time to think, and only on one thing at a time, to make it a 100 per cent efficient. Of course this cultural difference often leads to misunderstandings in both [directions]....

Germany, male: Back home, I have a certain reputation for being late. Thus, before I came to Japan, many people, especially family members, told me: “You will have trouble in Japan, they are so punctual.” Since I never had heard anything to the contrary, I was inclined to believe that. However, since coming here, I have been subjected to a disproportionate amount of what I can only describe as idle and useless waiting. I have waited in cars, train stations, hotels, reception rooms, offices any number of other places more or less suitable for waiting. Of course, you sometimes also have to wait in Germany, but a) this is less often and b) you mostly have a sense that you are waiting for *something*, whereas in Japan, it feels you are just waiting, frozen in a little time capsule without aim or purpose.

China, male: Generally, Japanese cherish time and their time tables are very accurate. But I still remember the first several days after I came to Japan, [when] I always went to the bus stop casually and...waited like when I was in China...Then I found there a time table [posted] on a board. [Could] I trust the time table? [Would] the bus come on time? At first I always had doubts,...but I found that the time tables are really accurate and [that] the error [margin] is always less than four minutes and most of the time less than two minutes. Hah! Unbelievable!...Japanese like to make schedules loooooong before things happen. Again, unbelievable! I know it is impossible in China.

South Korea, female: For my life as a foreigner in Fukuoka, I have to check on the opening times and the closing times of places such as the bank, post office, and city hall. It is quite interesting to compare the official opening time of each place with Korea. When I heard...that many banks in Japan are just open until 3 p.m., I thought it is too early for many people..., as every bank in Korea closes at 4:30 p.m. The post office in Japan closes at 9 p.m., whereas in Korea it closes at 5 p.m. When the [mailman] dropped by my room to deliver parcels, I looked at my watch to see the time that I got them. It was eight o'clock in the night!

England, female: My stay here in Japan has been one big observation [exercise], and the majority of the things observed are to do with rituals that mark a beginning [of some event or activity].... One of the things that I have

noticed frequently in more everyday situations is, when we sit down for lunch, even if it is in an informal situation, the Japanese that we eat with all say “*itadakimasu*” before they eat even one mouthful. They also will often wait until everyone they are with is ready before saying it. This is in contrast to home, where in the canteen, everyone just begins when they feel like it, not bothering sometimes to wait for the others in the group.

France, female: People are in the street anytime of the day. For me, Japan is never asleep. I had big problems with it at first. I couldn’t sleep because of the lights and the noise. The sunset and sunrise are also very different from the one I knew before. It was quite surprising to find out that the sun was rising at 5:00 in the morning. And finding out that at night it was [setting] at 5:00 in the afternoon was also a surprise...The kids are in parks very early...in October, they were playing baseball from 8:00 a.m.!...People are on time for dates. My Japanese friends always send messages on my mobile even if they are just 10 minutes late. Night is interesting because people are using it for free time. They go for walks with their dogs, they fish.... The first time I saw a man on a bridge at night fishing, I thought he was crazy, but when I saw that it was the same on all bridges, I understood it was not an association of crazy fishermen meeting at night but just that night was time for [leisure and] spare time activities.

China, male: Why do many Japanese students fill out their extracurricular schedules by taking part-time jobs, joining in a number of club activities and studying in libraries, while staying up late just for meaningless all-night chats on phones, [reading] monotonous *manga* or novels, and [visiting] websites filled with boring anecdotes? In Japanese minds, their time can be divided into two types: one for [themselves], and one for others. [The latter] usually relates to form (*kata* in Japanese), and that’s what Japanese make much of in their work. Japanese like to have small schedule books on which they will write down their...work schedule in minute detail, but you seldom see someone writes down his bath time or net-surfing time in their schedule book. Also, it is said that in Japan, time on the job is a measure of loyalty to the organization. So you’ll see some Japanese businessmen spontaneously extend their work hours even if there’s no extra pay (and even if there’s no need for them to stay at the office), but that sends out the signal that they would like to sacrifice their own time to the organization. [Time for others] also works for social dealings. When I was invited to take dinner with my club members after a club activity, I couldn’t refuse them even though I had planned to cook the tofu whose “use-by” date was that day. The point is that [this] time system is based on relationships with people around you. To [maintain] the relationships that you want, you must know how to arrange your time schedule according to others’ needs. Life is performance! Now you can imagine [what] tiring lives are Japanese leading. After [a whole] day’s work (performance), they can finally have their own time. So [the reason] why Japanese students always stay up late is that they want to wipe [away] their tiredness by enjoying their own time. It seems like wasting time by doing useless things, but it can really be a relief to them.

Searle (1998) importantly reminds scholars to keep separate in their ruminations 1) how people *think or feel* about the world and 2) how the world *is in fact*, regardless of how people think or feel about it. The first category concerns epistemology, or the possibilities and limits of how we can know things about the world, and subdivides into *epistemic subjectivity* (perception, opinion, attitude, value assessment, preference, and the like) and *epistemic objectivity* (justified true judgment, assertion, belief, or understanding). The second category addresses ontology--what exists in the world--and has its own, if parallel,

subcategories of *ontological subjectivity* (matters of mind, consciousness, or intentionality) and *ontological objectivity* (matters of the extra-mental world, the various historically real states of affairs and courses of events with which we are caught up). Such distinctions usefully permit the presumptive classification of students' verbal reactions during their first weeks in a culturally unfamiliar place as *both* epistemologically (because untested and conjectural) and ontologically (because still referentially uncertain) subjective. Students simply have not been relocated long enough to establish the objectivity of their generalizations in either sense, though they may not hesitate to formulate and assert them, as amply demonstrated above. Presumptively as well, this situation will change over time as they become more skillful observers such that their initial claims will gain evidential support or give way to more factual ones.

Recognizing the likelihood of this maturation sequence, JTW instructors urge students in their earliest days to suspend judgment if possible (more easily advised than achieved) when confronting things in Japan that surprise them, at least until better prepared to identify criteria (for identification and evaluation) that should apply. In particular, students are coached, with respect to what strikes them as ambiguous, indistinct, novel, or unexpected, routinely to take account of the *context* of interpretation, considering the historical and cultural circumstances that facilitate and/or validate judgment; to be patient, open to learning, circumspect, and humble in the gradual process of building contextual expertise; to respect the role of expectations in biasing the perception and appraisal of events and conditions; and therefore constantly to practice reflexivity, monitoring and correcting their own conduct in striving for greater intercultural competence, resolving questions of local meaning (the identity of social rules, intent of individual and group actions, and so on) with reference to situational cues and the occasional deliberate shifting of perspective. Such adjustment stances, now numbering among the essential recommendations of international education advisors, enhance the student sojourner's prospects for successful (effective, appropriate), initial adaptation to alien settings.

References

- Deardorff, Darla K., ed. 2009. *The Sage Handbook of Intercultural Competence*. Thousand Oaks, CA: SAGE Publications.
- Friedman, Thomas. 2005. *The World Is Flat: A Brief History of the 21st Century*. New York: Farrar, Straus and Giroux.
- Pollack, Jordan I. 2009. "Why They Come to Japan—Aspirations of JTW Participants," *Kyushu University International Student Center Research Bulletin*, February, No. 17.
- _____. 2007. "Building Competency Through Study Abroad—The JTW Experience," *Kyushu University International Student Center Research Bulletin*, February, No. 15.
- Searle, John R. 1998. *Mind, Language, and Society: Philosophy in the Real World*. New York: Basic Books.

Note

- 1 Established at Kyushu University in 1994, JTW is a short-term (one- or two-semester), comprehensive, living-learning program for international students, mostly undergraduates. It offers a rigorous Japanese studies curriculum including language training at all levels, with an assortment of co- and extra-curricular activities that provide substantial exposure to cultural practices as well as occasions to meet people. Core course instruction is in English. See Pollack (2007) for an extended discussion of program design and intended learning outcomes.

- 2 JTW students, mostly third- or fourth-year undergraduates, come primarily from Kyushu University partner institutions in Australasia (Australia, China, Indonesia, Hong Kong, Philippines, Singapore, South Korea, Taiwan, Thailand), Europe (Belgium, England, France, Germany, Iceland, Sweden), and North and South America (Canada, Chile, and the US), with each broad region contributing roughly one third of the participant total. For a current listing of universities, see <http://www.isc.kyushu-u.ac.jp/jtw/admissions/admissions.htm>.
- 3 While JTW is an English-based program, and all participants must demonstrate a minimum level of English proficiency for admission, not all are native speakers, a reality occasionally revealed in presented work.

2009年度 九州大学留学生センター・留学生指導部門報告

スカリー 悦子*

白土 悟**

高松 里**

1. はじめに

2009年(5月1日現在)の全国の留学生数は、132,720人と過去最高となった。また、九州大学の留学生数も、1,509人(同時期)となったがこれも過去最高であり、全国で5番目に留学生の多い大学となった。

九州大学留学生指導部門は、これらの留学生および留学生に関わる教職員・学生を対象として、様々な活動を行っている。留学生指導部門の活動は、相談過津等、教育活動、授業、研究、学内協力講座・委員会、社会連携、である。

九州大学は、福岡市西部の伊都キャンパスへ移転を行っており、すでに工学部・府は移転し、従来六本松キャンパスで行われてきた全学教育も2009年4月から伊都で始まった。また、比較社会文化学府も4月に移転した。留学生センターの移転はまだ先のことであるが、伊都キャンパスにも相談室を設けて相談活動を行っている。

伊都キャンパスには、学生宿舎「ドミトリー」(日本人と留学生の混住)があるが、すぐ隣に「ドミトリー」もオープンした。留学生も日本人学生も徐々に西部地域に移動をしている。伊都キャンパスへの支援がこれからの中心となっていく。

2. 相談活動

(1) 相談室および担当者

九州大学は、上述したように、2009年度から六本松キャンパスが伊都キャンパスに統合されたが、箱崎キャンパス、病院(馬出)キャンパス、筑紫キャンパス、大橋キャンパス、別府キャンパス、に分散している。

留学生センターは、センター本館がある箱崎キャンパスと伊都キャンパスに相談室を設けている。箱崎キャンパスではほぼ毎日、伊都キャンパスでは、週2回の相談活動を行っている。

*九州大学留学生センター教授

**九州大学留学生センター准教授

また、国際交流会館(留学生宿舎)は、香椎浜会館(270室)と井尻会館(59室)があるが、業務が民間委託されたため、香椎浜会館での相談は2008年6月で終了となった。とは言え、留学生が来日して最初の6ヶ月を過ごす国際交流会館では、オリエンテーションや様々な行事が行われるため、指導部門との関わりは大きい。

これらのキャンパスや宿舎に対して、指導部門の3人の教員はそれぞれ分担して相談活動を行った。箱崎キャンパスには留学生センターがあり、ここには3人の教員室がある。そのため、活動の中心は箱崎キャンパスとなっているが、伊都は白土と高松が、国際交流会館はスカリーが主に担当している。

(2) 来談状況

相談室における相談件数は表1の通りである。ここでいう相談件数には、数分で済むような簡単な情報提供は含まれていない。相談件数は、1,011件(延べ数。昨年度は874件)であった。

「留学生からの相談」は391件(昨年度は436件)であった。最も件数が多いのは、「宿舎問題」であり、特に「国際交流会館」に関連する相談が多かった(135件)。留学生数が増加し、入居希望者が増えるに伴い、会館での入居期間は短縮されつつある。現在では原則6ヶ月という短期間になっている。このため、会館への入・退去の相談の他、新しいアパートを捜すことなどについての相談が多い。また会館サポーター(留学生と日本人学生)からの相談、あるいはサポーターに対するコンサルテーションの機会もある。

その他、「入学進学関係」(67件)、「各留学生会」(34件)、「教育制度・内容」(26件)などが多かった。「各留学生会」とは、主に九州大学留学生会と九州大学ムスリム学生会であるが、ムスリム学生会が積極的に講演会などを開き、地域住民との交流を図ろうとしていたため、それに関する相談が多かった。

「その他の外国人からの相談」(計83件、昨年度は51件)とは、九州大学の留学生ではないが、これから九州大学を受験する外国人や、訪問研究員などからの相談である。

「日本人からの相談」(計537件、昨年度は387件)であるが、「学生」に関しては九州大学国際親善会の学生からの相談に加えて、一般学生からの留学生に関する相談、あるいは本人の留学希望などの相談があった。九州大学国際親善会は、ここ数年メンバーが増え、また活動が広範囲にわたっている(日本人からの相談に分類しているが、実際には、この会には留学生も少なからず存在している)。「教職員」は、留学生の勉学や研究室での適応に関するコンサルテーションが多かった。その他、外部団体(国際交流関係団体、警察、マスコミ等)からの情報提供依頼やイベントの講師依頼などが多かった。

府3コマ、大学院共通1コマ)4コマ、留学生センター1コマを担当した。その他、1回のみ担当した授業などもある。

表2 担当授業 (2009年度)

	前 期	後 期
学部(全学教育)	文系コア科目「教育学」(火曜日5限、スカリー) 総合科目「日本事情」(水曜日5限、高松) 総合科目「大学とは何か」(水曜日4限、1回、白土)	文系コア科目「心理学」(火曜日4限、高松) 総合科目「日本事情」(水曜日5限、白土) 少人数セミナー「留学生交流論」(金曜日5限、白土)
大学院 (人間環境学府)	「留学生教育政策論」(金6限、白土)	「留学生アドバイジング論」(集中、白土) 「異文化適応論」(集中、高松)
大学院 (大学院共通科目)		国際性領域「Intercultural Communication」 (火曜日3限、スカリー)
留学生センター	日本語研修コース「日本人との会話」(1回、高松)	日韓共同理工系学部留学生予備教育「日本事情」(木曜日3限、スカリー・白土・高松) 日本語研修コース「日本人との会話」(1回、高松)

全学教育

[前期]

全学教育については2コマを開講した。総合科目「日本事情(高松)」、文系コア科目「教育学(スカリー)」である。その他、総合科目「大学とは何か(白土)」が1回行われた。

[後期]

全学教育については、3コマを開講した。総合科目「日本事情(白土)」、文系コア科目および「心理学(高松)」、少人数セミナー「留学生交流論(白土)」である。

大学院

人間環境学府教育システム専攻において、前期に、「留学生教育政策論(白土)」、後期に「留学生アドバイジング論(白土)」「異文化適応論(高松)」を開講した。前期は金曜日6限、後期は集中講義で実施された。

大学院共通教育科目として、後期に「Intercultural Communication(スカリー)」を開講した。

留学生センター

日韓理工系学部留学生予備教育コースの学生に対して、後期に週1回の「日本事情」を開講した。日本の文化・習慣およびカルチャーショックについての講義、日本人学生を交えて入学後の生活について話し合った(スカリー、白土、高松)。

また、日本語研修コース(半年間集中日本語)の学生に対して、前期と後期に1回ずつ、「日本事情」を行った(高松)。この授業には、日本人学生をゲストとして招き、実際に話をしてもらうとい

うものである。

(3) その他

21世紀プログラム学生の卒論指導を行った（高松、指導担当教員として）。

4. 留学生に対する支援システムの形成

(1) チューターへの支援

学部チューター

2005年4月から始めた、学部留学生1年生を対象とした「チューター幹旋」は、その後も継続し、2009年度も同様に行われた。これは、学部1年生の留学生は、自分でチューターを見つけることは難しく、チューターが決まるのが5月以降になることが多かったためである。チューターが必要なのは入学直後であるため、留学生センター（高松）、伊都地区学生サービス係、九州大学国際親善会が協力して、日本人学生（一部先輩留学生）のチューター希望者を登録し、幹旋するものである。また、上記のような新入留学生とチューターの両方を対象とするオリエンテーションを今年度も実施した。

大学院チューター

2009年3月26日（水）のチューター説明会（留学生課主催）にて講演を行った（高松）。

(2) 初期適応支援（4月と10月）

本年度も、初期適応支援を行った。来日したばかりの留学生の多くは、国際交流会館（香椎浜と井尻の2カ所の国際交流会館と伊都ドミトリー）に入居する。

24時間以上かけて来日する留学生もあり、疲れ切って会館に到着する。巨大な荷物を数個持つてくることがよくあり、荷物を部屋に運ぶだけでも重労働である。また食事をし、夜寝る道具（会館には備え付けの布団や枕はない）を確保しなくてはならない。さらに 母国に連絡をしたいが国際電話やインターネットはどこで使えるのか、指導教員と会いたい大学までどうやって行ったらいいのか、など着いたばかりでまだ言葉もよくわからない留学生にとって、やらなければならないことは多い。

新入留学生への支援活動は、1993年から開始したもののだが、現在では九州大学国際親善会の学生がシフトを組んで、4月と10月の最初の1週間、毎日朝から夕方まで受付カウンターを作って対応している。また、香椎浜会館においては、会館チューターが中心となって支援活動を展開した。

その他、社会人ボランティア団体（そら）によって「市内ツアー」などが実施され、留学生が日本社会に適応しやすいように支援している。

(3) 学生団体に対する顧問としての指導・助言

留学生指導部門の教員は以下のような留学生の団体や、学生サークルの顧問となっている。様々な活動や要望に対して助言を行った。

九州大学留学生会 (KUFSA=Kyushu University Foreign Student Association)

九大に所属する全留学生を代表する会である。4月に「スポンサーミーティング」が行われ、1年間の活動について、地域の支援団体と共に検討を行った。その他、バスハイク、スポーツ大会、年末の国際親善パーティなどを実施した。

九州大学ムスリム学生会 (KUMSA=Kyusyu University Muslim Student Association)

ムスリム学生会は、九大に所属するイスラム教留学生の団体である。

イスラムセミナー等を実施し、日本人学生および地域住民の理解を得る努力をしている。なお、モスクが九州大学箱崎キャンパスのすぐ近くに完成し、礼拝などはそこで行われるようになった。

4月にイスラムウィーク（主催：九大ムスリム学生会、協力：国際親善会、留学生センター）が行われた。

4月19日(月)10:00~15:00 伊都ウエスト二号館二階ロビーにてパネル展示

4月20日(火)10:00~15:00 伊都センターゾーン二号館一階ピロティにてパネル展示

4月22日(木)23日(金)10:00~13:00 箱崎国際ホールロビーにてパネル展示

4月24日(土)10:00~15:00 箱崎国際ホールロビーにて、講演および「イスラムフードフェスティバル」

九州大学国際親善会 (KUIFA=Kyushu University International Friendship Association)

毎年の活動としては、2月の「受験生案内」、4月と10月の「新入留学生支援」、5月に行われるシンガポール大学との交換プログラムの「Inter Link FUKUOKA」、11月の「九大祭への出店」などを行った。また、従来から箱崎地区で毎週木曜日に「コーヒーアワー」が開かれてきたが、それに加えて伊都地区では、毎週火曜日に「全学コーヒーアワー」(センターゾーン)、毎週金曜日に「糸島コーヒーアワー」(ウェストゾーン)を行っている。

(4) ボランティア団体の指導・助言

「福岡フレンドリークラブ」の活動への助言 (白土)

九州大学には家族同伴の留学生が約400人いる。400人近くの夫人たちやその子どもたちの生活支援が大きな課題になっている。福岡フレンドリークラブは地域の日本婦人で構成される団体であり、会員数は約35人、九州大学教員の夫人も参加している。留学生夫人との交流と支援を目的に、毎週水曜日に留学生センター分室にて活動している。

活動は、留学生夫人向けの日本語授業 (毎週12:30~14:20) および交流会 (月1回14:30~16:30) である。

これらの活動を通じて親しくなった留学生夫人たちの生活上の相談にも応じている。20年近い活動が評価されて、福岡県留学生交流推進会議により表彰された。

「九州大学留学生サポートネットワーク そら」の活動への助言 (高松)

そら は、社会人を中心としているが、九大の学生 (留学生) や他大学の学生も参加しているボランティア団体である。主な活動としては、新入留学生を対象とした4月と10月の市内ツアー、井尻

国際交流会館における「日本語交流」、引っ越しや運搬の手伝い、イベントの企画、その他日本語会話パートナーなどを行っている。

本年度も8月に新人募集を行い、9月に説明会と研修会を行い、10月からの新入生支援に向けて準備を行った。

年1回の総会その他、月1回の定例会（木曜日午後7時～8時半）、作業ミーティング（その他の木曜日午後7時～8時半）を、留学生センター分室にて行っている。

5. 研究活動

(1) 著書・論文・報告

【2009年】

- ・高松里「留学生と友達になりたい日本人学生のための留学生超入門2009年度版」、九州大学留学生センター、2009年
- ・高松里編著「サポート・グループの実践と展開」（金剛出版）、2009年10月
- ・高松里「サポート・グループ、セルフヘルプ・グループの立場から」集団精神療法、25(2)、225-229、2009年

【2010年】

- ・スカリー悦子・白土悟・高松里「2008年度九州大学留学生センター・留学生指導部門報告」九州大学留学生センター紀要第18号、131-140.
- ・2007年度トヨタ財団研究助成報告書『福岡における国際的拠点都市形成に関する研究 - 留学生を中心とした海外高度人材の集積』（研究代表者 白土悟）2010年1月、1-264頁
- ・白土悟「中国の改革開放前期における公費派遣政策の展開について」『九州大学留学生センター紀要』第18号、2010年3月、1-44頁
- ・白土悟『現代中国における留学政策に関する研究 - 知識人政策との関連を中心に』2010年1月、1-455頁
- ・高松里「人は語るべきことを語っているのだろうか？」人間性心理学研究、27(1,2)、97-102、2010年
- ・(財)福岡国際交流協会「平成21年度福岡都市圏における留学生実態調査 - 報告書 -」、(財)福岡国際交流協会発行（高松が調査協力、報告書執筆）

(2) 学会活動

【2009年】

- ・5月24日(日)：日本学生相談学会にて個人発表。高松里「学生にとって異文化とはどういうものなのか？」日本学生相談学会第27回大会発表論文集、87（津田塾大学）
- ・5月31日(日)：異文化間教育学会にて個人発表。高松里・平井達也「異文化体験は語り得るのか？」異文化間教育学会第30回大会発表論文集、160-161。（東京芸術大学）

- ・ 5月31日(日)：異文化間教育学会にて個人発表。高松里・平井達也・高木ひとみ「ミネソタ大学における留学生支援と日本の大学への応用」異文化間教育学会第30回大会発表論文集、114-115。(東京芸術大学)
- ・ 8月28日(金)：日本人間性心理学会にて個人発表。村久保雅孝・平井達也・井内かおる・高松里・都能美智代・吉川麻衣子「スロー・エンカウンター・グループの継続開催から見えてきた物語」日本人間性心理学会第28回大会発表論文集、116-117。(法政大学)
- ・ 8月29日(土)：日本人間性心理学会にて学会賞受賞記念講演。高松里「人は語るべきことを語っているのだろうか」日本人間性心理学会第28回大会発表論文集、34。(法政大学)
- ・ 8月29日(土)：日本人間性心理学会にて個人発表。中村ゆかり・高松里・村久保雅孝「スロー・エンカウンター・グループがもたらす「穏やかな所属感」の活用について」日本人間性心理学会第28回大会発表論文集、136-137。(法政大学)
- ・ 8月30日(日)：日本人間性心理学会にてワークショップ実施。高松里・平井達也「“私”の働き方研究」入門 日本人間性心理学会第28回大会発表論文集、22。(法政大学)
- ・ 10月11日(日)：日本社会心理学会・日本グループ・ダイナミクス学会合同大会にてワークショップ実施。伊藤隆・中地展生・高松里・今川民雄「不登校の子どもを持つ保護者へのグループ・アプローチ」日本社会心理学会第50回大会日本グループ・ダイナミクス学会第56回大会合同大会プログラム(大阪大学)

(3) 研究活動

【2009年】

- ・ 4月11日(土)・12日(日)：「働き方セミナー イン 庵治」(高松、香川県)
- ・ 4月19日(日)：「ミドルエイジのためのライフプランニングセミナー (8月)」実施準備会議 (高松、福岡市)
- ・ 4月25日(土)：「スロー・エンカウンター・グループ in 沖縄(5月)」実施準備会議 (高松、福岡市)
- ・ 5月8日(金)～11日(月)：ワークショップ「スロー・エンカウンター・グループ in 沖縄」(高松、今帰仁村)
- ・ 5月11日(月)～16日(土)：トヨタ財団研究・韓国出張 (白土)
- ・ 5月16日(土)17日(日)：「九重エンカウンター・グループ (2008年12月実施) 検討会」(高松、福岡市)
- ・ 5月22日(金)：多文化間カウンセリング研究会 (高松、九大、19:00～)
- ・ 6月6日(土)：トヨタ財団助成研究会 (九州大学、白土)
- ・ 6月26日(金)：多文化間カウンセリング研究会 (九州大学、高松)
- ・ 6月27・28日(土・日)：日本比較教育学会 (東京学芸大学、白土)
- ・ 7月17日(金)：多文化間カウンセリング研究会 (高松、九大)
- ・ 7月29日(水)～8月5日(水)：科研により中国調査実施 (白土)
- ・ 8月17日(月)：米国大学にて一週間留学生についての調査 (スカリー)

- ・ 7月3日(金) : 国土交通省海の中道海浜公園 UD 検討委員会 (白土)
- ・ 7月28日(火) : 福岡国際交流協会依頼により姉妹都市広州の学生の伊都キャンパス案内 (白土)
- ・ 9月24日(木) : 学生修学・生活相談セミナー : 於伊都キャンパス (白土)
- ・ 9月25日(金) : 多文化間カウンセリング研究会 (高松、九大)
- ・ 10月13日(火) : 日中大学留学交流・福岡フォーラム (白土)
- ・ 10月23日(金) : 多文化間カウンセリング研究会 (高松、九大)
- ・ 11月27日(金) : 多文化間カウンセリング研究会 (九大、高松)
- ・ 12月19日(土) ~ 23日(水) : 「九重エンカウンター・グループ」(大分県、高松)
- ・ 12月23日(水) : 「CMI ワークショップ (2010年2月実施予定)」準備委員会 (福岡、高松)
- ・ 12月26日(土) : 「スロー・エンカウンター・グループ in 沖縄 (2010年5月実施予定)」準備委員会 (福岡、高松)

【2010年】

- ・ 1月9日(土)・10日(日) : 人間関係研究会スタッフミーティング (奈良、高松)
- ・ 1月22日(金) : 多文化間カウンセリング研究会 (九大、高松)
- ・ 2月27日(土)・28日(日) : ワークショップ「ミドルエイジを生きる」(講師として参加、福岡市、高松)
- ・ 3月7日(日) : 「当事者研究ワークショップ」(主催 : 高松、九大西新プラザ)
- ・ 3月16日(火)・17日(水) : 新潟大学国際センター FD 講演「留学生の生活支援の方法について」(白土)
- ・ 3月29日(月) : 留学生センター FD 「グローバル30について」(白土、高松)

6. 学内協力講座・委員会・その他

【2009年】

- ・ 4月9日(木) : 学生委員会 (白土)
- ・ 4月22日(水) : 人間環境学研究院・学府教授会 (白土)
- ・ 5月21日(木) : 九大学研都市外国人研究者・留学生生活環境調査委員会 (白土)
- ・ 5月27日(水) : 人間環境学研究院・学府教授会 (白土)
- ・ 6月24日(水) : 人間環境学研究院・学府教授会 (白土)
- ・ 9月5日(土) : 人間環境学府修士課程 (社会人) 入学試験 (白土)
- ・ 9月7日(月)・8日(火) : 人間環境学府修士課程 (一般) 入学試験 (白土)
- ・ 11月2日(月) : ITP (若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム) ワークショップにて講演「海外での研究と生活」(伊都キャンパス、高松)
- ・ 11月12日(木) : 学生委員会 (白土)
- ・ 12月7日(月) : ITP プログラム外部評価委員会 (工学府、高松)

【2010年】

- ・ 1月7日(木)：学生委員会 (白土)
- ・ 1月29日(金)：高等教育センター会議 (スカリー)
- ・ 2月4日(木)・5日(金)：人間環境学府修士課程・一般入試および外国人特別入試 (白土)
- ・ 2月18日(木)：人間環境学府博士後期課程入試 (白土)
- ・ 2月12日(金)：学生委員会 (白土)
- ・ 2月22日(月)：G30生活支援部会 (白土)
- ・ 3月2日(火)：海外留学危機管理セミナー (於：西新プラザ、白土)
- ・ 3月8日(月)：高等教育開発推進センター委員会 (スカリー)
- ・ 3月10日(水)：学生委員会 (白土)
- ・ 3月26日(金)：留学生センター委員会 (スカリー)

7. 社会連携

【2009年】

- ・ 4月2日(木)：福岡大学にて講演「異文化ストレスとその対処法」(高松、新入留学生対象)
- ・ 4月15日(水)：福岡フレンドリークラブ初会合・前期活動計画 (白土)
- ・ 5月20日(水)：東警察署協議会 (白土)
- ・ 6月11日(木)：大分県人権同和対策講演会「外国人の人権」(大分市、高松)
- ・ 7月3日(金)：国土交通省海の中道海浜公園 UD 検討委員会 (白土)
- ・ 7月28日(火)：福岡国際交流協会依頼により姉妹都市広州の学生の伊都キャンパス案内 (白土)
- ・ 10月21日(水)：佐賀新聞社にて講演「メンタルヘルスについて考えよう」(高松、佐賀市)
- ・ 10月31日(土)：糸島地区ボランティア研修会にて講演「心を豊かにするボランティア活動の魅力とは」(高松、糸島地区ボランティア派遣事業運営委員会主催)
- ・ 11月21日(土)：福岡県人権啓発情報センター県民講座2009にて講演「日本ってどんな社会？」(福岡市、高松)
- ・ 12月3日(木)：「留学生生活実態調査」打ち合わせ (九大、高松)
- ・ 12月4日(金)：外務省の元留学生招致事業にて莫少民氏(中国・広州)来福時の接遇 (白土)
- ・ 12月19日(土)：九州留学生問題フォーラム講演会、シャリフル・イスラム「バングラディッシュ留学生による母国スラム教育の支援」(白土)
- ・ 12月21日(月)：日本学生支援機構「留学交流」編集協力者会議 (於：駒場留学生会館、白土)

【2010年】

- ・ 1月15日(金)：国土交通省海ノ中道海浜公園 UD 検討委員会 (白土)
- ・ 2月19日(金)：国土交通省海ノ中道海浜公園 UD 委員会(白土)
- ・ 2月22日(月)：佐賀県自殺対策庁内連絡会にて講演「中高年の自殺対策を進めるために」(佐賀県)

庁、高松)

- ・ 3月3日(水)：九州留学生問題フォーラム会議 (白土)
- ・ 3月4日(木)：九州大学学術研究都市まちづくりシンポジウム (於：福岡市産学連携交流センター、パネリスト、白土)
- ・ 3月6日(土)：久留米ゼミナール日本語教師養成課程にて講演「留学生のメンタルヘルスについて」(久留米、高松)
- ・ 3月13日(土)：「自死遺族ケアの基本を学ぶ研修会」にて講演「セルフヘルプ・グループとサポート・グループの立ち上げと運営課題」(広島市、高松)

8. その他

【2009年】

- ・ 4月24日(金)：東京大学留学生センター大西先生が来福。臨床心理士資格認定協会における研究の一環として (高松)
- ・ 8月10日(月)：門倉正美教授(横浜国立大学留学生センター) 来訪、意見交換 (高松)
- ・ 12月2日(水)：教育学部同窓会会計監査 (九大、高松)

【2010年】

- ・ 1月19日(火)：韓国金烏工科大学の国際交流関係者の接遇 (白土)

執 筆 者

(執筆順)

白 土 悟	九州大学留学生センター准教授
吉 川 裕 子	九州大学留学生センター准教授
菊 池 富美子	九州大学留学生センター助教
山 田 明 子	九州大学留学生センター助教
大 神 智 春	九州大学留学生センター准教授
清 水 百 合	九州大学留学生センター教授
鹿 島 英 一	九州大学留学生センター教授
小 森 和 子	九州大学留学生センター講師
郭 俊 海	九州大学留学生センター准教授
高 原 芳 枝	九州大学国際交流推進室准助教
岡 崎 智 己	九州大学留学生センター教授
西 原 暁 子	九州大学国際交流推進室准助教
Jordan Pollack	九州大学留学生センター教授
スカリー 悦子	九州大学留学生センター教授
高 松 里	九州大学留学生センター准教授

編 集 委 員

(50音順)

今 井 亮 一	九州大学留学生センター准教授 imryoichi@isc.kyushu-u.ac.jp
清 水 百 合	九州大学留学生センター教授

九州大学留学生センター紀要 第19号

発行日 2011年3月 発行

編集・発行 九州大学留学生センター
〒812 8581 福岡市東区箱崎6 10 1
☎092 642 2142

印刷・製本 城島印刷株式会社
〒810 0012 福岡市中央区白金2 9 6
T E L 092 531 7102
F A X 092 524 4411